

尾道大學附屬圖書館

下垣內文庫目錄

尾道大学附属図書館

下垣内文庫目録

A Catalog of the Shimogouchi Collection of Japanese Rare Books
in Onomichi University Library

下垣内文庫研究会 ©



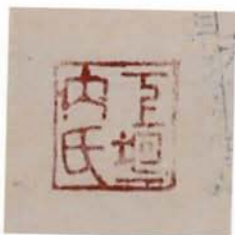
梅室(雪雄) 秋興「夕かぜは」(一枚摺24)



三石七回忌追善(三車編)「梅にわれ」(一枚摺91)



升六夏興「瓜島や」(一枚摺15)



(下垣内氏)



(一無文庫)

下垣内氏蔵書印



鳳朗 自画賛「雲雀にも貸されぬ春はあらし山」(軸装39)

秋は月夜に
 水たけてまどろくをもちて
 嗚花をさかして石にたたく
 花の口をわけて入る花は
 夜は月をまわして入る花は
 秋の月夜に
 水たけてまどろくをもちて
 嗚花をさかして石にたたく
 花の口をわけて入る花は
 夜は月をまわして入る花は

秋の月夜に
 水たけてまどろくをもちて
 嗚花をさかして石にたたく
 花の口をわけて入る花は
 夜は月をまわして入る花は
 秋の月夜に
 水たけてまどろくをもちて
 嗚花をさかして石にたたく
 花の口をわけて入る花は
 夜は月をまわして入る花は

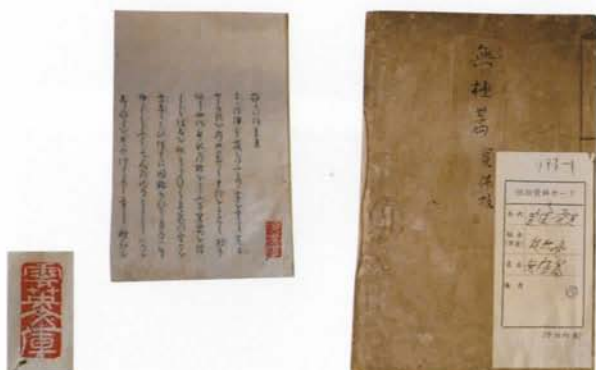
秋の月夜に
 水たけてまどろくをもちて
 嗚花をさかして石にたたく
 花の口をわけて入る花は
 夜は月をまわして入る花は
 秋の月夜に
 水たけてまどろくをもちて
 嗚花をさかして石にたたく
 花の口をわけて入る花は
 夜は月をまわして入る花は

秋の月夜に
 水たけてまどろくをもちて
 嗚花をさかして石にたたく
 花の口をわけて入る花は
 夜は月をまわして入る花は
 秋の月夜に
 水たけてまどろくをもちて
 嗚花をさかして石にたたく
 花の口をわけて入る花は
 夜は月をまわして入る花は

木玉発句・加友点「吉書いはふまこととしも筆字哉」など五十句（一枚物186）



俳家古今墨蹟（書冊11）



箆の伊達集（書冊31）

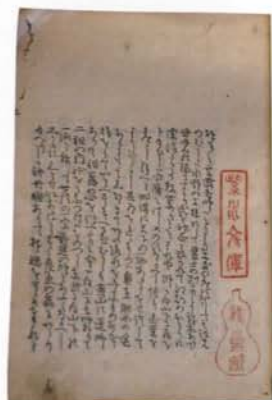
無極篇（書冊26）



花供養 (書冊82~89)



はなひ草 (書冊456)



梅香炉 (書冊101)



美濃派歳旦帖（書冊520～）



点取帖（書冊601～610）



桃青短冊「款冬の」

贗物にみられる筆の迷いも、いやらしさもない。架蔵の短冊(現在、柿衛文庫蔵)と文字の位置・大ききまで同じである。芭蕉が二枚書いて同じになることは考えにくい。弟子が師の文字を何回も書いているうちに、そっくりに書けたものが残ったのではなかろうか。これだけでは真贋は決められない。(岡田利兵衛氏)

この短冊は紙が悪い。このような短冊で人に書いて差し上げることはできない。これは芭蕉が誰かに書いて上げたときの下書きではなかろうか。(富山奏氏)

この字の格調の高さは芭蕉のものと思う。
(下垣内和人氏)



曾良短冊



立圃短冊



東鶴短冊
(西鶴の孫)



近吉短冊
(重頼の子)

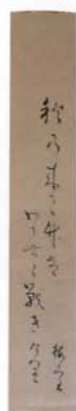


重頼短冊



着虬短冊

みち彦短冊



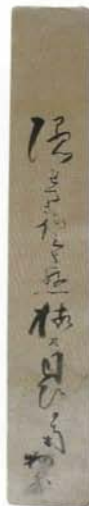
梅室短冊



梅臣(尾道の俳人)短冊



風律短冊



物外(尾道済法寺住職)短冊



松本幸四郎、市川高麗蔵口上
(その他 U01)



谷村橋八
(その他 U08)



東海道名所 品川 (その他 U23)



「草臥て」(その他 U22)

尾道大学附属図書館

下垣内しもごうち文庫目録

刊行に寄せて

尾道大学副学長

尾道大学附属図書館館長

榎林 滉二

尾道大学附属図書館には、一つの大切な宝がある。二〇〇三年八月から二〇〇四年六月にかけて、下垣内和人氏から寄贈を受けた近世俳諧資料群である。

下垣内和人氏は呉市にお生まれになり、一九五四年尾道短期大学国文科を卒業され、その後、日本大学文学部を卒業、呉市立中学校の教諭などを経て、広島文教女子大学教授になられ、一九九六年退職されている。その間、孜孜として近世文学、とりわけ近世芸備地方の俳諧について研究を続けられ、『芸備俳諧史の研究』（一九七四年、赤尾照文堂）、『近世中国俳壇史―研究と資料―』（一九九二年、和泉書院）などの秀抜な業績をあげておられる。

ご寄贈を受けた資料は、氏が長年、こつこつと収集された、江戸時代から明治時代にかけての俳諧資料で、版本、写本、書状、摺物、扇面、軸装、短冊など、合計三〇〇〇点を超えている。地方俳壇資料は多く散逸していくもので、これだけ大部に揃ったものはなかなかなく、また今後もあることはないだろうと思われ、その価値は計りしれないものがある。

これらについては、下垣内氏による大略の目録があつたが、その詳細な内容目録の作成は、斯界においても多く求められていた。これら資料群の全容解明と内容目録について、二〇〇七年から二〇〇九年までの三年間、次記の五人の研究者により、嘗々と調査・検討の上、作成されてきた。そして、それらがようやく整理され、今回目録発刊のはこびとなった。一つの宝庫が開かれた思いで、今後、本文庫の活用等に期待されるものは大きい。

本目録の刊行に当たつて、貴重な資料群をご寄贈下さつた下垣内和人氏に改めて心より御礼申し上げます。あわせて、これらの整理と目録作成にご尽力下さつた、湘北短期大学准教授・伊藤善隆氏、早稲田大学非常勤講師・金子俊之氏、金城学院大学教授・神作研一氏、和洋女子大学教授・佐藤勝明氏、更には全体のコーディネート、総括等に当たられた本学教授・藤沢毅氏に衷心敬仰の意を表し、ただただ御礼申しあげる次第である。

なお、本目録の刊行に当たつては、二〇〇九年度尾道大学学長裁量研究費の助成を得た。これも記して御礼申しあげる。

二〇一〇年三月吉日

| | | |
|------|-----------|-----|
| II | 俳諧一枚摺編 | 150 |
| III | 書状編 | 176 |
| IV | 一枚物編 | 183 |
| V | 扇面編 | 207 |
| VI | 軸物編 | 210 |
| VII | 短冊編 | 215 |
| VIII | その他 | 328 |
| | 「書冊編」書名索引 | (1) |

論文

- 「梁塵秘抄にあらわれた巖島について」(尾道短期大学国文学会『国文学報』5、一九六二年三月)
- 「阿賀地方に伝わる『くどき』について」(尾道短期大学国文学会『国文学報』6、一九六三年五月)
- 「巖島をばみ島とや見る」について」(『実践国語教育』280、一九六三年七月)
- 「多賀庵三世玄蛙について」(尾道短期大学国文学会『国文学報』7、一九六四年三月)
- 「三原の俳人倚松について」(『芸備地方史研究』54、一九六五年二月)
- 「近世芸備地方の俳諧―蕉門野坡流―」(『芸備地方史研究』62・63、一九六六年十一月)
- 「梅臣宛書状」(尾道短期大学国文学会『国文学報』12、一九六九年三月)
- 「岩室家俳諧資料」(『芸備地方史研究』80、一九七〇年五月)
- 「翻刻『里の春』東吹撰」(『近世文芸稿』17、一九七三年二月)
- 「尾道の俳諧」(尾道短期大学国文学会『国文学報』16、一九七三年二月)
- 「中国地方における貞門の俳諧」(尾道短期大学国文学会『国文学報』18、一九七五年三月)
- 「中国地方における談林の俳諧」(『文部省科学研究費補助金《奨励研究B》報告書』、一九七七年二月)
- 「飯田篤老とその別号」(『大阪俳文学研究会会報』13、一九七九年二月)
- 「風律著『月華篇』(翻刻)」(『近世文芸稿』26、一九八一年二月)
- 「地方における俳書出版―近世後期、芸備地方とその周辺―」(『連歌俳諧研究』64、一九八三年一月)
- 「中国地方における蕉風俳諧の伝播」(『文教国文学』13、一九八三年六月)
- 「中国地方における蕉風俳諧の受け入れ」(『文教国文学』14、一九八四年二月)

- 「風律の俳文・俳論と漢詩文」(三迫初男博士占稀記念論攷『漢語・漢文の世界』、一九八四年五月)
- 「中国地方における蕉風俳諧の定着―蕉門野坡流・その一―」(『文教国文学』15、一九八四年九月)
- 「中国地方における蕉風俳諧の定着―蕉門野坡流・その二―」(『文教国文学』16、一九八五年一月)
- 「中国地方における蕉風俳諧の定着―美濃派・その一―」(『文教国文学』17、一九八五年九月)
- 「中国地方における蕉風俳諧の定着―美濃派・その二―」(『文教国文学』18、一九八六年一月)
- 「中国地方における蕉風俳諧の定着―美濃派・その三―」(『文教国文学』19、一九八六年一〇月)
- 「中国地方における蕉風俳諧の定着―淡々流・その一―」(『文教国文学』20、一九八七年一〇月)
- 「中国地方における蕉風俳諧の定着―淡々流・その二―」(『文教国文学』21、一九八八年三月)
- 「中国地方における蕉風俳諧の展開―各派の交流―」(『文教国文学』22、一九八八年六月)
- 「歳日集の変遷―地方に於ける歳日集と年刊句集―」
- (『広島文教女子大学紀要』23 人文・社会科学編、一九八八年二月)
- 「中国地方における蕉風俳諧の展開―俳諧活動・その一―」(『文教国文学』23、一九八九年三月)
- 「中国地方における蕉風俳諧の展開―俳諧活動・その二―」(『文教国文学』24、一九八九年二月)
- 「芸備地方における雑俳」(広島公文書館『紀要』13、一九九〇年三月)
- 「中国地方における蕉風俳諧の展開―俳諧活動・その三―」(『文教国文学』25、一九九〇年七月)
- 「翻刻『千句塚』」(『文教国文学』26、一九九一年三月)
- 「近世秀句鑑賞・12月『軽み』と『取り合わせ』」(『俳句研究』59・12、一九九二年二月)
- 「翻刻『俳諧二見貝』(その一)」(『文教国文学』29、一九九二年七月)

- 「俳諧資料の書誌―中国地方の一例」〔『文教国文学』30、一九九三年七月〕
- 「翻刻『俳諧二見貝』(その二)」〔『文教国文学』31、一九九四年六月〕
- 「翻刻『俳諧二見貝』(その三)」〔『文教国文学』32、一九九四年二月〕
- 「翻刻『俳諧二見貝』(その四)」〔『文教国文学』33、一九九五年一〇月〕
- 「石見俳壇史」(『石見俳諧資料集』2、一九九五年二月)
- 「翻刻『萍日記』」〔『文教国文学』35・36、一九九七年二月〕
- 「翻刻『萍日記二編』」〔『文教国文学』38・39、一九九八年三月〕
- 「中国・四国の俳壇―蕉風俳諧史」〔『解釈と鑑賞』804、一九九八年五月〕
- 「翻刻『奉納花桜一千吟集』」〔『鯉城往来』1、一九九八年一〇月〕
- 「翻刻『萍日記二編』」〔『鯉城往来』2、一九九九年一〇月〕
- 「俳諧行脚の構図―近世後期・中国地方の一例」〔『鯉城往来』3、二〇〇〇年一〇月〕
- 「翻刻『合歡雨集二編』」〔『鯉城往来』4、二〇〇一年二月〕
- 「続・可部の俳諧―両延神社・福王子の奉納額」〔『文教国文学』45、二〇〇一年九月〕
- 「安芸地方の俳諧一枚摺」〔『江戸文学』25、二〇〇二年六月〕
- 「翻刻『伝ふ梅』」〔『鯉城往来』5、二〇〇二年二月〕
- 「つのはふ石見―歌枕と俳枕」〔『文教国文学』48、二〇〇三年九月〕
- 「翻刻『道のしをり』」〔『鯉城往来』6、二〇〇三年二月〕
- 「翻刻『いなばやま』」〔『鯉城往来』7、二〇〇四年二月〕

「安芸地方の俳諧一枚摺」〔『文学』6・2、二〇〇五年三月〕

「翻刻『四季混雑集』」〔『鯉城往来』8、二〇〇五年二月〕

「翻刻『春興龜廻尾山 中編』」〔『鯉城往来』9、二〇〇六年二月〕

その他(分担執筆・項目執筆・書評等)

「中国俳諧史」〔『俳句講座』第十卷、一九七〇年、明治書院〕

「現在最古の芭蕉評点卷ほか二点―梅翁・幽山・桃青の新資料―」〔壇上正孝氏と共同発表〕

〔『連歌俳諧研究』50、一九七六年二月〕

「『伊勢踊』撰集の一資料と幽山評点百韻」卷一武蔵国岩付住『木玉』追考―〔壇上正孝氏と共同発表〕

〔『連歌俳諧研究』52、一九七七年一月〕

「『十八番諸職之句合』解題と翻刻―立圃俳諧資料考(二)―」〔米谷巖氏、壇上正孝氏と共同発表〕

〔『近世文芸稿』24、一九七八年九月〕

「志田野坡」〔芭蕉の弟子達〕、一九八二年、雄山閣〕

「栗本軒貞国」ほか項目執筆〔『広島県大百科事典』、一九八二年、中国新聞社〕

「篤老」ほか項目執筆〔『日本古典文学大辞典』、一九八三年、岩波書店〕

「横山邦治編『読本の世界』」〔『文教国文学』18、一九八六年一月〕

「赤羽学編『柴橋付、柳本正興・里蝶全句』」〔『岡大國文論稿』15、一九八七年三月〕

「音戸の瀬戸」ほか項目執筆〔『大歳時記』、一九八九年、集英社〕

「多賀庵風律」(『江戸時代人づくり風土記 広島』、一九九一年、農文協)

「鯉城往来雑纂」(鯉城往来の会の一員として)(『文教国文学』35・36、一九九七年二月)

「鯉城往来雑纂(二)」(十三)(広島近世文学研究会の一員として)

(『鯉城往来』1・12、一九九八年一月～二〇〇九年二月)

下垣内文庫の俳書

神作 研一

縁あつてこのほど、下垣内文庫全三〇九三点のうち書冊編六四七点の目録編集に携わつた。俳書は好きだが、しかし専門家ではなく、また中国地方の郷土史に通じているわけでもないので非力は自明のことながら、ここにその概要をかいつまんで紹介し、以て解題に代える。俳諧一枚摺ほかに関しては、伊藤善隆による解題(Ⅱ)「下垣内文庫の特色——近世後期俳諧における非冊子資料の意義——」を併せ参照願いたい。

一、俳壇研究のこと

和歌史は、歌壇史と歌論史と歌風史それぞれの研究を有機的に総合して大成される¹⁾という。後二者に関しては早くから成果が発表されてきたのに対して、前者すなわち歌壇史研究は、戦後特に一九五〇年代半ば頃からようやく盛んになり、およそ一〇年を経た一九六五年前後になって単行本が相次いで刊行されるとともに総括や批判も出現した。批判の応酬とその研究史の意味については、最近、井上宗雄に詳論がある²⁾のでこ

ここでは省略するが、要するに歌壇史研究は、文学性の有無に拘らず歌人集団や流派の構造を説明する際に避けては通れぬものであり、歴史学と同様の方法で、厳密な史料批判に基づいて実証的に行われるべきものだというのである。歌壇史研究に対する方法論的自覚は、こうしてこの頃から和歌研究者共通の認識になっていった。

翻つて俳諧史研究はどうであろうか。

俳論史と俳風史の研究に比べると、俳壇史研究の始発は(和歌史研究における歌壇史研究の場合と同様に)やや遅く、単行本(研究書)の刊行は一九七〇年代の終わりにまで下るようだ(桜井武次郎『元禄の大坂俳壇』一九七九年、前田書店)。大内初夫の『近世九州俳壇史の研究』(九州大学出版会)は一九八三年、雲英末雄の『元禄京都俳壇研究』(勉誠社)は一九八五年の刊行であり、以後、野田千平『近世東海俳壇の研究』(一九九一年、新典社)、下垣内和人『近世中国俳壇史』(一九九二年、和泉書院)、楠元六男『享保期江戸俳壇』(一九九二年、新典社)ほか、直近の佐藤勝明『芭蕉と京都俳壇』(二〇〇六年、丸木書店)、服部直子『尾張俳壇致』(二〇〇六年、清文堂出版)まで、陸続と単著が公刊されて現在に至る。

俳壇史研究はこうして、歌壇史研究の隆盛から一〇年余を経て多岐に亘る成果を齎してきたが、今はそれが、文学性の有無に拘らず俳人集団や流派の構造を説明する際に避けては通れぬものであり、厳密な史料批判に基づいて実証的に行われてきたという事実を重く見たい。つまり、歌壇史研究がいわゆる歌書の網羅的調査とともに進められてきたのと同様に、俳壇史研究もまた、俳書そのものの追究を軸として進展してきたのであった。

さて、下垣内文庫の特徴をひとこと言い表せば、それは研究者のコレクションであり、江戸時代の中国

俳壇史研究のためのコレクションである、ということだ。俳壇史研究を実証的に進めるための、研究資源としてのコレクションである。いわゆる「善本稀書」(作品としてではなく、典籍として内容・形式ともに優れている本のこと)³⁾の類は見当たらないが、むしろ文庫の総体からこそ大きな意味が附与されている。

二、全体像と特徴

ではまず全体像を見渡すために、本「目録」の分類に基づいて、分類綱目ごとの書目点数を掲げてみよう。

| | | | |
|------|--|---------|------|
| I 文学 | | 1 和歌 | 1点 |
| | | 2 連歌 | 2点 |
| | | 3 俳諧 | |
| | | ① 総記 | 13点 |
| | | ② 和漢俳諧 | 2点 |
| | | ③ 撰集 | 367点 |
| | | ④ 家集 | 13点 |
| | | ⑤ 連句 | 22点 |
| | | ⑥ 紀行・俳文 | 19点 |
| | | ⑦ 俳論 | 16点 |
| | | ⑧ 作法 | 62点 |

⑨歳旦帖 69点

⑩点取帖 27点

⑪絵俳書 3点

4 雑俳・川柳 30点

II 芸術 1 書画・絵本 1点

全六四七点。そもそも分類は厳密を期し難く、過誤のあることを恐れるが、概要を掴むには十分であろう。

俳書のうち半数以上を占めるのは撰集で、中には種々の中国俳書が含まれる(『国書総目録』に未載か、もし

くは伝本稀少の書物も少なくない)。広島藩に出仕した飯田利矩こと篤老(蘭更門)の追善集 185 五月雨集(上)や、

広島多賀庵の年刊句集やまかつら(139-144)、長門吉田の紫石一三回忌追善集 151 塚のおもかげ、文台開きの賀

集である周防俳書 157 つたふかせ、出雲の一步二五回忌ならびに桃流七回忌追善集 170 めぐるながれ(171も同書)、

石見の一洞三回忌追善集 271 手向草等々は、既に下垣内自身による翻印紹介(5)が備わる。雲英末雄旧蔵の二点

—— 31 箴の伊達集と 90 ひさこ苗 —— や、北田紫水旧蔵の 101 梅香炉が存することも記しておこう。

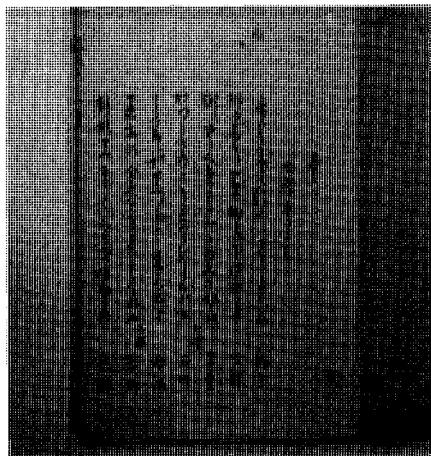
また、歳旦帖が六九点、点取帖が二七点見られることにも留意したい。518 除元は享保一六年(一七三一)刊

と比較的早い時期のもの(大坂、嶮口屋太兵衛版)。519 歳旦帖以下には四〇点以上もの美濃派の歳旦帖が並ぶ。

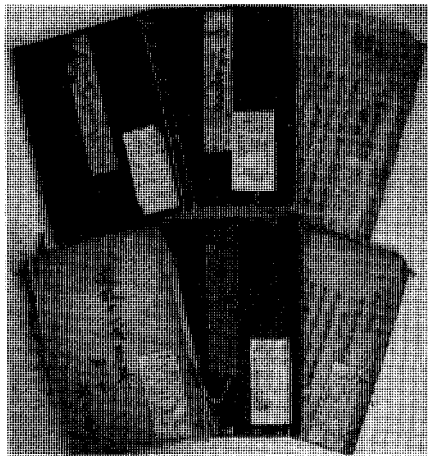
その大半が、緑色や丹色などの綴じ糸を遺した原装であることも好ましい。点取帖のうち、601 以下 610 までの

一〇点は、すべて枳型本で泥間(まにあい)似合布目地の料紙にしたためられたもの。雑俳・川柳の中には、美作の雑俳

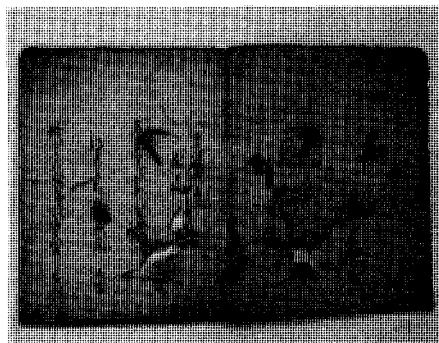
書 640 田井邑大明神奉納句・植月椿木林大明神奉納句や 641 雑俳楽巻翁評など、中国地方の雑俳書も見出される。



90 ひさこ苗



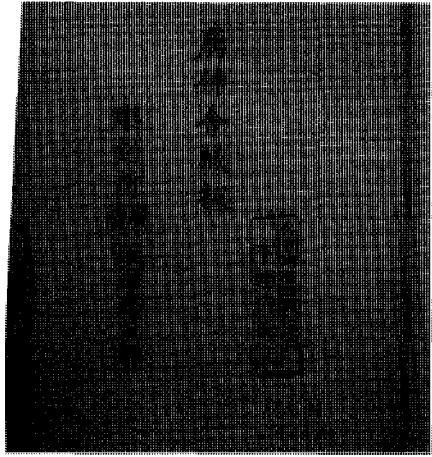
139~144 やまかつら



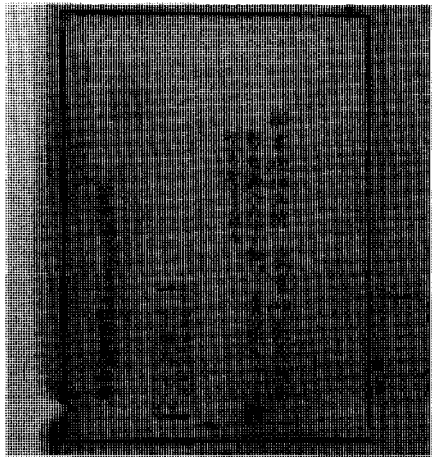
518 除元



170 めくるなかれ



207 四町集



146 草の蔓

ついで、俳書の刊本に限り、その刊行年次を大まかに眺めてみよう(印年ではなく刊年を基準とした。無刊記本は時期を推定した上で算入)。

| | | |
|------|--------------------|------|
| 江戸初期 | 慶長八年〜寛永(一六〇三〜一六四三) | 0点 |
| 江戸前期 | 正保〜元禄(一六四四〜一七〇三) | 16点 |
| 江戸中期 | 宝永〜天明(一七〇四〜一七八八) | 122点 |
| 江戸後期 | 寛政〜天保(一七八九〜一八四三) | 289点 |
| 幕末 | 弘化〜慶応(一八四四〜一八六七) | 139点 |

元禄以前のいわゆる古俳書は一六点、正保二年奥刊の占版456はなひ草、それに19さるみの、20句兄弟、21泊船集などがある。江戸中期刊行の俳書二二二点は各領域にまたがるが、多くを占めるのは撰集と歳旦帖類

だ。江戸後期から幕末にかけても引き続き大量の撰集が刊行されており、この期の俳諧盛行のさまが改めて思量される。

さらに、俳書刊本を、版元の地域別に見てみよう。京、大坂、江戸の三都それぞれにおける刊行が多いこと、京の橋屋治兵衛版が目立つことなどというのは当然として、少数ながら広島版が存するのですべて掲げておく。

○ 141 しまやまかつら——坂田保兵衛

○ 207 四町集——坂田忠五郎

○ 146 草の蔓、395 はわけの風——世並屋伊兵衛

○ 150 其袋集、158 雅奏、558 文化一三年歳旦——嶋屋彦兵衛

四肆のうち、坂田忠五郎のみ『改訂増補近世書林版元総覧』に出ない(坂田保兵衛の縁者か)。146 草の蔓には「御書物仕立所」と見えるので、世並屋伊兵衛は板木彫刻も行ったらしい。岡山版も一点確認されるが(577 春興亀廻尾山の版元は中嶋屋益吉)、こちらは製本所。いずれも「田舎版」ではなく、いわゆる「地方版」と見なすべきものだ。

なお、下垣内和人の蔵書印としては「一無／文庫」「下垣／内氏」の二類が確認できる(口絵 iv 頁参照)。ところで、下垣内文庫の書冊には同書の、しかも端本が極めて多い。これはおそらく研究資料として(端本であることを厭わず)折々に購入していったことと深く関わるのであろう。目録本文においては、この実態に配慮して、存巻状況を特に丁寧^①に記述した。

また、請求番号の付し方が甚だ実用的、便宜的であることも付記しておきたい。すなわち、請求番号の三

桁の数字は、刊年もしくは書写年の西暦(下三桁)にほかならない(「0」は刊年・書写年不明のもの)。このようなところにも、研究のために折々に資料を求め、同時にそれを効率良く整理しておきたいとの心性が窺知されよう。

三、書冊編目録の編纂方法

これまで一般に、俳書の目録というのは、多くは編年体で作成されてきた。綿屋然り、柿衛然り。それは、俳書刊行の実態と推移を知る上ですこぶる有効な方法だが、このたびの目録では、文庫の全体像や性格を窺うためにあえて分類目録を試みた。分類に際しては、「内閣文庫分類」⁽¹⁰⁾と、最新の研究成果である『日本古典籍分類表(試案)』⁽¹¹⁾とを参照し、なお文庫の特性を睨んで適宜勘案して定めた。

記述方法について。

まず主方針としては、目録事項(棒目録部分)と書誌事項(解題部分)。*以下)から成る、いわゆる「ケンブリッジ大学方式」⁽¹²⁾を採用した。限られた紙幅の中では、やはりこの方法こそが最も有効だと考えるからだ。また、刊本に関しては、可能な限り「刊・印・修」を用いて表記するよう心掛けたことも特記しておきたい。従来、俳書の目録は編年体で作成されることが多かったから、かえって俳書の刊・印・修の問題の追究は、他の領域に比べて遅れてしまった憾みがある。⁽¹³⁾本目録の記載が、この方面の検討の端緒ともなればと願っている。

細かいところでは、本文庫が俳書のコレクションであり、俳書には通例内題を欠くものが多いことに鑑み

て外題(原題簽に限る)を以て書名としたこと、俳壇史研究を見据えて序跋者を洩らさず記述したこと、書名に訓みを付したこと、存巻状況に留意したこと、などである。

実は下垣内文庫の目録は、既に氏自身によって、折々に作成、公表されてきた¹⁴⁾。それらを参照し多くのことを学び得たからこそ、短時日のうちにこのような目録を編むことができた。深い学恩を蒙ったことに、いま改めて深甚の謝意を表したい。

*

*

下垣内文庫は今後、江戸時代における中国俳壇史研究のみならず、この地方の文化史的研究にも大きく寄与してゆく可能性を秘めている。ついては、学生・院生はもちろんのこと、市の財産として本文庫の存在を市民の皆さんにももっと広く知ってほしい。展示会や講演会の開催などを通じて、この豊かな俳書コレクションに大いに学んでほしいと念じている。

注

- (1) 福田秀一「歌論及び歌論史の研究について」(『中世和歌史の研究』一九七二年、角川書店)。
- (2) 井上宗雄「歌壇史研究について」(『中世歌壇と歌人伝の研究』所収、二〇〇七年、笠間書院)。なお、最新刊の『関西例会一〇〇回の歩みと和歌文学研究の動向』(いずみブックレット6、和歌文学会関西例会編、二〇〇九年 一二月、和泉書院)にも、パネリストのひとりである井上宗雄による歌壇史研究についての発言がある。
- (3) 『日本古典籍書誌学辞典』(一九九九年、岩波書店)「善本」の項(片桐洋一執筆)。
- (4) 以下、下垣内文庫所蔵資料の引用に際しては、通し番号と書名() は削除を以て掲出する。
- (5) 下垣内和人編『近世芸備地方の俳諧』全一五集(一九六四・二〇〇三年、私家版)、同『芸備俳諧資料集』全三

巻・付「作者名索引」一卷（一九八六・八九年、広島文教女子大学地域文化研究所）、同『近世中国俳壇史 研究と資料』（一九九二年、和泉書院）。

(6) 日本書誌学大系、井上隆明編、青裳堂書店、一九九八刊。矢島玄亮『徳川時代出版者出版物集覧』正統（一九七六年、万葉堂書店）などの諸書にも未載。

(7) 『日本古典籍書誌学辞典』（一九九九年、岩波書店）「田舎版」「地方版」の項（両項とも中野三敏執筆）。

(8) 『綿屋文庫連歌俳諧書目録』第一・第二（天理図書館編、一九五四・一九八六年、天理大学出版部）。

(9) 『柿衛文庫日録 書冊編』（柿衛文庫編、一九九〇年、八木書店）。

(10) 『改訂内閣文庫国書分類目録』（一九七四・七六年、国立公文書館内閣文庫）における分類。

(11) 二〇〇八年、人間文化研究機構 国文学研究資料館分類研究会。

(12) 林望・ピーター・コーニツキー編『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録』（一九九〇年、八木書店）における目録記述の方法。同様の方針に従って目録の記述を試みたものに、神作研一編『金城学院大学図書館所蔵日本古典籍分類目録』（金城学院大学論集（国文学編）四四号別冊、二〇〇二年三月）、神作研一・加藤乃枝編『蘆庵文庫蔵書目録』（日本書誌学大系『蘆庵文庫目録と資料』蘆庵文庫研究会編、二〇〇九年、青裳堂書店）ほかがある。

(13) 雲英末雄の講演「俳書の刊・印・修」（二〇〇八年一月二日、東海近世文学学会）は、この問題に鋭く切り込んだ最初のもの。版種の多い『日本歳時記』（貞享五年刊）を例に挙げるなどして俳書万般に関する種々の知見を披瀝されたが、活字化の前に急逝された。

(14) 『架蔵俳諧資料目録』（下垣内和人編『近世芸術地方の俳諧』第二集所載、一九八一年、私家版）、『同（追加分）』（同一四集所載、一九八九年）、『同（再追加分）』（同一五集所載、二〇〇三年）には、刊写合わせて六八八点の書冊を収載する。

下垣内文庫の特色

——近世後期俳諧における非冊子資料の意義——

伊藤 善隆

はじめに

尾道大学附属図書館に寄贈された下垣内文庫の特色の一つとして、一枚摺や書簡、画賛、扇面、といった俳書(冊子)以外の俳諧資料を豊富に蒐集していることがあげられる。とくに、近世後期の資料が豊富であるが、従来の研究において、こうした俳諧資料が重要視されることは、じつはあまりなかったと言つてよい。

それは何故か。その最大の原因は、ひとつひとつの資料が、じつに片々たるものであるからである。書籍に比べれば、まとまりも、とりとめもないものである。しかも、図書館での整理・保存・閲覧、いずれをとつても不便であることは言うまでもない。そうした事情で、従来、こうした資料は、あまり積極的に注目もされず、利用もされず、したがつて蒐集もされてこなかったのだと考えられる。

したがつて、下垣内文庫のように、一個人の努力でこれだけのものが集められたという壮挙に対しては、十二分に敬意が払われるべきである。そもそも、当たり前のことであるが、こうした非冊子の俳諧資料に価

値がないなどということは、ない。個々の資料はたしかに片々たるものであるが、近世後期から幕末、さらには明治旧派の俳諧を具体的に検証するためには、どうしても必要不可欠な資料である。従来顧みられることが少なかったのは、こうした資料は、ある程度の量をまとめて調査する必要があるにも関わらず、そのある程度の量を所蔵する図書館や博物館、美術館が少なく、だからといって個人で集めようとしても、そう簡単に集められるものではないからである。

もし、昨今ますます芭蕉・蕪村といった有名俳人たちの研究が緻密になっていくことに比べ、近世後期の俳諧の研究はなかなか進まない、と言う人がいるとしたら、その原因の一つは、まさにこうした資料に対する調査が不十分であるからだと言及することができよう。そこで、近世後期俳壇の特色とこうした非冊子資料の意義について、以下、簡単ではあるが解説を加えてみたい。

一 近世後期の俳諧——「俳諧の大衆化」と「俳人ネットワークの形成」——

近世後期から幕末・明治期の俳諧は、いわゆる「月並調」と貶められ、低い評価しか与えられていない。たしかに低俗な面があったことは否めないが、しかし反面では俳諧が社会のあらゆる階層の人々へと行き渡った時代でもあった。この時代の特徴として指摘されることに、「俳諧の大衆化」と「俳人ネットワークの形成」と言われる現象がある。

まず、「俳諧の大衆化」と呼ばれる現象であるが、これは、「月並句合」の流行に象徴的である。

月並句合とは、毎月不特定多数の人々から投句を募集するもので、主催者が題(四季の詞による)を出し、

応募者は句作して入花料（一句につき八文から二〇文程度）を添えて投句する。題は通常一年分が出されてお
り、応募者は示された期日までに取次所を経て投句する。投句された句は宗匠の許へ送られ、宗匠は選句し
て発表（開卷）する。高点者には景品を出し、入選句を並べた摺物（丁摺・返草）を作成して応募者に送付する。
すなわち、雑俳や狂歌と同様の方法をとるものである。もちろん、入花料の総額から、景品代や摺物の費
用など、一連の経費を差し引いたものが主催者や宗匠の収入となった。また、毎月の催しとは別に、奉額や
奉燈あるいは立机披露などの機会に、一回限りで行われることもあった。天保期にはこれが大流行し、毎月
の催しの場合は数千句、一回限りの催しの場合には、万数千句が集まったという。しかも、このような催し
が三都を中心にいくつも行われていたのであるから、俳諧の大衆化の有様を具体的に想像することができよ
う。

つぎに、「俳人ネットワークの形成」といわれる現象であるが、これは、たとえば、化政期以降に出版さ
れた俳書や俳諧一枚摺をみればよく理解できる。すなわち、地方俳人が制作・出版したものであっても、三
都の有名宗匠たちの発句が並んでいることがしばしばある。また、「文音」などいう前書に続けて、他の地
方の俳人たちの句が並んでいることも、そう珍しいことではない。

それが可能だったのは、たとえ一座する機会が全くないような遠方の俳人たち同士であっても、文通によ
って句や俳書を遣り取りすることが日常的に行われていたからである。当時の俳人たちにとっては、手紙の
遣り取りを通じて全国の俳人たちと交遊を持つことそれ自体が大きな楽しみであった。とくに、近世後期に
なると俳諧一枚摺が盛んに制作されるようになるのは、こうした近世後期の「俳人ネットワーク」があつた
からこそである。

以上のような近世後期の俳壇の状況を踏まえ、以下では、下垣内文庫に集められた資料に即して、それぞれの意義について具体的に触れておきたい。

二 俳諧一枚摺

俳諧一枚摺とは、文字通り一枚の用紙に印刷された摺物のことである。商品として売買される錦絵や瓦版とは異なり、俳人の仲間内で配られたり交換されたりする非売品であった。そのため、正月の歳旦三つ物や歳旦吟、大小曆、春興や秋興、あるいは慶事や改号の披露、亡人の追善など、挨拶や告知を目的として作成されたものが多い。

多くの場合、句だけでなく画が加えられており、本格的な美しいものから簡略なカット風のものまで様々である。また、画題も絵師もいろいろで、宗匠や個人が各自の趣味で作成しているので、型にとらわれていない斬新なデザインのものもあって面白い。

大きさは、奉書紙(いわゆる大奉書、縦約三九cm×横約五五cm)の全紙(浮世絵でいう大倍判)、その1/2(大判)、1/4(中判)、1/8(八ツ切判)、横に半裁したもの(長判)、横に1/4に裁ったもの、色紙大(角判)、葉書大、極小のものもある。

また、書肆や彫師の名前が入ったものや印が押されているものもある。このことから、一枚摺が店頭での売物ではないが、顧客の注文に応じて書肆や彫師が作成に携わっていたことがわかる。

さて、俳諧一枚摺の初めは、元禄一五年(一七〇二)に、嵐雪らの歳旦句を一枚摺にしたもの(これには挿

絵はない)であるとされる。本格的に定着したのは、つづく宝永から享保期(一七〇四〜一七三六)にかけてである。この時期に、すでに挿絵を一、二色摺にしたものがあるが、明和から安永、天明期(一七六四〜一七八三)になると、多色摺の摺物が一般的となった。寛政から文化・文政期(一七八九〜一八三〇)以降、俳諧の大衆化にともなって一枚摺は広範囲に受け入れられてゆく。幕末期には細かい字で多数の句を載せたものもあり、たった一枚であっても、その情報量はゆうに俳書一冊に匹敵するほどである。明治期になっても制作は続けられ、戦前までその伝統は続いた。

下垣内文庫には、近世後期から明治初期にかけての摺物が多数所蔵されているが、月並句舎の募句チラシや返草を除いて、俳諧一枚摺は一、二〇点ほどにもなる。そのうちもつとも古いものは、宝暦頃のものかと推定される「梅郊冬興」(一枚摺1)である。梅郊は越後新発田藩主溝口直温の俳号。汚損があり、状態が悪いことが惜しまれるが、色摺の俳諧一枚摺としては比較的初期のものとして貴重である。なお、下垣内文庫の俳諧一枚摺、とくに芸備地方の俳諧一枚摺に關しては、下垣内和人「安芸地方の俳諧一枚摺」(『江戸文学』25号 二〇〇二年六月、ペリかん社)、同「安芸地方の俳諧一枚摺」(『文学』第六卷第二号 二〇〇五年三月、岩波書店)を参照されたい。

三 募句チラシ

俳書への人集や月並句合への投句を促す摺物を、「募句チラシ」と呼んでいる。下垣内文庫では寛政九年(一七九七)に長月庵若翁が「月供養の小集」を企画した際の募句チラシ(一枚摺3)が残っているのが古い例

である。

また、安政六年（一八五九）に菊守園が『槻弓集』（一六編）を出版した際の募句チラシ（一枚摺87）は、入木改刻の跡が判る事例として面白い。すなわち、『槻弓集』は菊守園の歳旦集で毎年同じ名称で出版されていたため、募句チラシの版木は毎年同じものを使い回しにしていたらしく、「中年」の「申」と「未とし」の「未」、それに「十六編」の「十六」の部分に、それぞれ入木改刻の痕跡が観察される。

月並句合や奉額句合の典型的な募句チラシとしては、嘉永四年（一八五二）の八千坊其山撰「天満宮奉納月並発句合」募句チラシ（一枚摺54）や、安政六年（一八五九）の公成・眠居撰「洛東祇園社／備前児島八幡宮両社永代奉額発句合」募句チラシ（一枚摺89・一枚摺90）、幕末頃のものと考えられる芭蕉堂公成評・播磨西坡副評「年浪春秋選」募句チラシ（一枚摺117）、同じく芭蕉堂公成評・播磨鳴々副評「年浪春秋選」募句チラシ（一枚摺118）、などが所蔵されている。なお、こうした募句チラシには、高ポイントの作者に与えられる景品を予告したものがああり、どのようなものが供されていたのかが具体的に分かる。たとえば、芭蕉堂公成評・播磨鳴々副評「年浪春秋選」の場合、その景品は、「俳諧増山ノ井 全二冊」、「古今仮名遣 全一冊」といった書籍、また「ブリキ提重壺箱入」や「ブリキ葉茶入箱入」、「新模様更紗帛一ツ」といった実用品、さらには「抜句認短冊」といった記念品的なもので構成されていたことが分かり興味深い。

四 書状

近世後期の俳人の書状の特徴は、それ以前の俳人の書状に比べて、内容や書式が類型化したことにある。

これは先に述べたような俳壇の状況を反映しており、たとえ遠方に居住するため俳席を同じくしたことがない俳人同士であつても、書状で句の遣り取りをして交遊を榮しむことが一般化したためである。いわば、それ以前の俳人たちの書状が、様々な用事や必要性に因つて（そのついでに句を記すことがあつたとしても）遣り取りするものだったことに比べて、近世後期の俳人たちの書状は、句を遣り取りすることそれ自体がその目的となつたのである。

すなわち、この時期の俳人の典型的な本文は、簡単な挨拶の文言に続き、新板の俳書や摺物を送る旨の用件が記され、最後は「あなた様も是非近作をお聞かせ下さい」といった意味の言葉で締めくくられる。そして、その本文に続けて、追伸のような形で自作の句を五、六句書き並べ、「あなた様の評をお聞かせ下さい」といった意味の言葉を添えてある場合が多い。

こうした書状を貰つた側は、句を記した部分を書状本文から切断し、点を掛けて返送したようである。あるいは控えや現物を手許に残して置いて、その句を白らが編集する俳書や摺物に入集させたい。そうした遣り取りが日常的に行われたため、近世後期の俳諧資料には切断された書状や句を書き付けた紙切れが多く残るのである。よく誤解されているようだが、茶掛にしたり古筆手鑑に貼り込んだりするために切断されたわけではない。

下垣内文庫には、八〇点を超える近世俳人の書状が集められている。本目録の書状編には「断簡」もしくは「断簡か」と注記してあるものが多いが、これは以上のような事情による。また、一枚物編の中にも「書状断簡か」としたものがあつたが、これも同様である。

五 短冊

短冊の魅力は、作者その人の筆跡でその作品を鑑賞する点にある。それぞれの作者に固有の躍動感や、それぞれの時代に流行した書風や料紙の様式美を直接感得できる点が、短冊の大きな魅力である。

短冊の標準となる寸法は、おおむね縦一尺二寸(約三六・四cm)、横二寸(約六・一cm)程度である。料紙の紙質は鳥の子(斐紙)が多いが、他にも楮紙、絹本、あるいは杉板を用いることもある。

短冊は、もともと和歌を書くための料紙として古く鎌倉時代後期頃から普及した。はじめは「白短冊」と呼ばれる無地の紙(素紙)であったが、室町時代になると青および紫の色で雲形文様を灑いた打曇紙が普及し、やがてそれが標準となった。また、染紙や墨流しの料紙を用いたり、金泥や銀泥で下絵を描いたり、雲母摺や筆彩等を組み合わせた豪華な装飾短冊もあるが、こうしたものを「好ミ短冊」と呼ぶこともある。

俳人の短冊も、和歌と同様に打曇が基本であるが、色彩や意匠にいろいろな工夫がなされた装飾料紙もあって、バラエティに富んで面白い。ただし、近世後期になると料紙に泥を多く含んだ粗悪品も出まわるようになり、幕末には概して安手のものが多い。

そして、短冊には、じつは俳書の版下の筆者を特定するための筆跡のサンプルとして利用できるという研究上実用的な側面もある。とくに、下垣内文庫の短冊は、芸備地方の俳人の短冊を中心に、近世後期の諸家の筆跡をよく揃えており、研究資料として貴重である。また、同一俳人の短冊を複数所蔵していることも、下垣内文庫の短冊収集の特徴としてあげることができる。

六 その他の筆跡資料 —— 軸装・扇面・一枚物など ——

下垣内文庫には、先述した書状と短冊以外にも、俳人の筆跡資料として、約五〇〇点の軸装された画賛や短冊類、約三〇〇点の扇面、約二〇〇点の一枚物(懐紙その他)が所蔵されている。

その中で、比較的まとまったものとしては、約三〇〇点の三節(歳日句・春興句・歳暮句を記したもの)と両節(歳日句と歳暮句を記したもの)の懐紙があることが注目される。また、点印譜「梧亭点式」(一枚物58)や俳書配付先に関する書付と思われる「尾道百韻配冊」(一枚物214)など、俳人たちの活動の細部をうかがうことのできる資料も興味深い。

さらには、貞門時代の「木玉発句・加友点 吉書いはふまことにとしも筆字哉 など五十句」(一枚物186)や、談林時代の「幽山点卷 百韻 軒を遶るてんてきは是菖にあり」(一枚物190)のような、近世前期の貴重な筆跡資料が所蔵されていることも注目される(下垣内和人・檀上正孝「『伊勢踊』撰集の一資料と幽山評点百韻一卷―武蔵国岩付住「木玉」追考―」『連歌俳諧研究』52 一九七七年一月)参照)。しかし、何といつても、やはり近世後期の俳人たちの筆跡資料が豊富であることが下垣内文庫の特色である。

ところで、先に触れた短冊もそうであるが、近世後期の俳人たちの筆跡資料が、それ以前の俳人たちの筆跡資料に比べて豊富に残っているのは何故であろうか。それは、たんに時代が現在に近いからという理由だけではない。やはり当時の俳壇の状況を反映しての現象である。つまり、「俳諧の大衆化」と「俳人ネットワークの形成」によって、俳人たちの筆跡に寄せる興味・需要が飛躍的に増えた結果でもあるのだ。書状の遣り取りを通じてお互いの筆跡(書状だけでなく短冊なども)をやりとりすることはもちろんであるが、地方

の俳人たちが三都の有名宗匠たちの短冊や軸物などの入手を求めることも多かった。月次句合の景品として、宗匠たちの掛物や短冊が多く供されてもいた。また、高点句の抜書を清書したものが景品とされることもあった。たとえば、下垣内文庫に所蔵される橘中庵評の「安政四丁巳年如月上旬 一三連臨時卷」抜句集(魚鳶画・風景図)(一枚物33)は、そうした抜書の清書の事例として貴重である。需要と供給の飛躍的な増大の結果として、近世後期の俳人たちの筆跡資料は比較的豊富に残されることになったのである。

おわりに

以上、下垣内文庫に所蔵される非冊子資料の意義について概観した。はじめにふれたように、こうした近世後期の俳諧資料は、従来はあまり注目されてこなかった。しかし、近世後期から幕末・明治期の俳諧をただ「月並調」と貶めるだけでなく、その文化的な意義を正當に評価するためには、こうした資料の分析によって、「俳諧の大衆化」と「俳人ネットワークの形成」という現象の具体相を明らかにしていく必要がある。したがって、下垣内文庫が尾道大学附属図書館に収蔵、公開されたことの意義は大きい。近世後期俳諧のエッセンスを理解するために、下垣内文庫の俳諧資料群は今後も重要な役割を果たすことになるだろう。

下垣内文庫とその調査

佐藤 勝明

尾道大学附属図書館に蔵される下垣内文庫は、俳文学者下垣内和人の俳書を中心としたコレクションである。版本を中心に、写本もまじえ、短冊・刷物・書簡などを加えて、その総数は約三〇〇〇点。このたび縁あつて、本目録を作るための調査に従事した立場から、その経緯や感想などを記すことにしたい。

そもそものきっかけは、この蔵書が一括して尾道大学に寄贈されたのを受け、小生たちの恩師である早稲田大学教授（当時）雲英末雄が、近世文学を専攻する尾道大学教授藤沢毅に目録作成を懇願したことにある。それが、主として扱う地域や時代はやや異なるものの、同じく近世俳諧を専攻分野とし、俳書のコレクターとして広く知られる、下垣内・雲英両人の、長年にわたる親交に基づくものであることは、いうまでもない。その相談がなされている場にいたこともあり、調査と目録作成のメンバーとして、藤沢とともに雲英が非常に勤で上智大学に出講していた折の教え子である神作研一、早稲田での弟子にあたる伊藤善隆・金子俊之と小生とが、この作業に加わることに決まる。記憶に誤りがなければ、それは、二〇〇七年六月の近世文学会春季大会の折のことであつた。

第一回目の調査は、同年八月一日から三日まで。まずは全体像を大づかみに確認した後、書冊に関しては

主として藤沢・神作・佐藤、その他のものは伊藤が原稿作成にあたることや、刊行時期とそれまでの予定などを決める。藤沢・神作・佐藤は、下垣内作成の仮目録(神作稿「解題(Ⅰ)」を参照)の番号にほぼ従い、さっそく書冊の書誌的調査を開始。伊藤と金子は、自宅での作業ができるよう、仮目録の後ろから書冊の撮影に入る。この年は書冊全体の半分近い作業が終わり、藤沢らは夏中をかけて書誌的情報をデータとして入力。第二回目は、二〇〇八年八月一日から三日までで、昨年度の作業を続けると同時に、伊藤らは書冊以外の撮影に取りかかる。藤沢らはやはり夏中にデータ入力を終え、疑問点を多く残しながらも、三人のデータを合わせた「下垣内文庫俳書仮目録」ができる。第三回目は、二〇〇九年八月三日から五日まで。原本にあたって疑問点を解決しながら、神作を中心に、書冊に関する原稿化を進めると同時に、書冊以外のものに関する編集方針を決め、撮影の状態がよくないものの撮り直しなどを行う。日程を終えた段階で、書冊に関する部分の原稿化は約半分まで。原稿の作成は、やはり原本を横に置きながらでないとうまくいかないことから、急遽、第四回目として、藤沢・神作・伊藤の三人による作業が、同年一〇月八日から一〇日にかけて行われた。これにより、神作を中心に進められた書冊に関する原稿化が完成。書冊以外のものについても、ほぼ見通しが立ち、帰宅後に伊藤が原稿化を完遂。これらと並行して、すでに決めておいた割り振りに従い、解題等の執筆に入る。また、奈良女子大学大学院生畑中さやか(金城学院大学文学部卒)の協力で、書冊に関する索引もでき、一月中旬に全作業が終了となったわけである。

先に記した通り、本目録の作成は、雲英末雄の発案になるものであった。実際に同文庫のコレクションを一覧することを楽しみにしていた雲英は、公務のため第一回目の調査には不参加。翌年を期していたものの、二〇〇八年の三月から体調を崩し、その後は闘病生活に入ったため、第二回目も参加できず、同年一〇月六

日に鬼籍に入られてしまったのは、何とも無念といわざるをえない。ところで、「解題(一)」にも触れられているように、下垣内文庫には、雲英文庫の旧蔵書が二冊あり、まさに両人の親しい関係をよく伝えるものとなっている。二〇〇九年五月一日、下垣内は、その中の一冊、六雅編『筇の伊達集』(宝暦二年序・跋)の翻刻を知友らに配布。添えられた手紙に、「杖の伊達』は、故雲英末雄氏からいただいたものです。：雲英氏が逝去された今、なんとか雲英氏のご好意にこたえたいと思い、ワープロ原稿をそのままコピーしてお届けいたします」とあり、俳書の収集と研究を通じて深めてこられた友情のほどが察せられ、胸に迫るものがある。なお、同書は、備中連島の六雅が母の追善集として編んだもので、中国地方の俳人が広く入集するほか、浮風・諸九らの句も見え、野坡系俳諧の浸透などを知る上でも重要な一冊。同じ雲英文庫蔵本による翻刻が、田坂英俊編『備後俳諧資料集』第九集(一九九八年、私家版)にも収められており、今後の活用が期待される。

今回、下垣内文庫の調査を行って最も強く感じたことは、その蔵書群が、好家的な興味に基づくコレクションではなく、まさに研究のための資料にほかならないという、あたりまえといえはあたりまえ過ぎることであった。すなわち、自身の蔵書が、三原市立中央図書館ほかの蔵書と有機的に結びついて、『芸備俳諧資料集』I~III(一九八六・八八年、溪水社)などを生んだのであるし、そうした資料群を基にすること、『芸備俳諧史の研究』(一九八八年、赤尾照文堂)や『近世中国俳壇史』(一九九二年、和泉書院)などの大きな仕事が成し遂げられていったことが、本当によく納得される文庫なのである。筆者自身の関心でいえば、中国地方は、野坡による「芭蕉没後のへかるみ」の伝播が象徴的に達成された地域として重要であり、俳壇的な展開がほぼ解明されたことの上に立って、そこで行われたへかるみの内実が問題にされるべき段階

を迎えていると考えられる。その際、下垣内文庫が重要な役割を果たすことは必定で、中でも、点取帖・歳旦帖や刷物などの分析・検討は、今後に大きな期待が寄せられるものといつて間違ひなからう。「やまかつら』『つき弓集』など年刊句集的なものも同断で、その実態の解明を通じて、俳諧史理解に新たな地平が築かれるであろうことも、容易に予想される。これらは、量的に有る程度まとまった形で目の前に置かなければ、見通しをつけることが難しく、その意味でも、下垣内文庫や三原市立中央図書館などの資料を総合的に視野に入れ、研究していくことが望まれるわけである。また、類題句集や季寄せ類、さらに『をだまき』その他の、いうならば、比較的よくある俳書が多数集まっていることも、下垣内文庫の特色の一つで、複数の同一書を蔵している例も少なくない。「よくある」と思われている書は、そう思われているがために軽視されがちで、いざ必要に迫られてあわてるといふことも、またよくあることであろう。貴重書ばかりでなく、一般的な書も俳諧研究には大きな意味をもつのであり、『○○』なら少なくともどこそこそこそこそこにはある、といった情報を蓄えておくことも、何かの折に威力を発揮するに違ひない。その点でも、下垣内文庫の目録がここに上梓されることの意味は、決して小さくないと考える次第である。

以上、蕪雑な感想ながら、下垣内文庫の調査にあたった一人として、同文庫の資料群がもつ意義を、思いつくままに綴ってみた。この上は、目録の出来をきっかけに、下垣内文庫が広く活用され、その資料が俳諧研究のさらなる進展に寄与することを、強く願うばかりである。

*下垣内文庫調査の旅費には、平成二一八二〇年度科学研究費補助金(基盤研究)「炭俵」「別座敷」

の分析による「かるみ」の研究」の一部を使用した。なお、この研究成果報告書(二〇〇九年三月)に「下垣内文庫俳諧書仮目録」を掲載した。

下垣内和人先生と下垣内文庫

藤沢 毅

二〇〇三年八月から二〇〇四年六月にかけて、下垣内和人氏より貴重な近世俳諧資料を尾道大学に寄贈していただきました。

下垣内和人先生とは、前任校である広島文教女子大学において初めてお会いしました。一九九六年、ちょうど赴任した私と入れ違いで、先生は退任され、非常勤講師としてお勤めであつたのです。当時、文教女子大学では、下垣内先生のご所蔵の近世俳人の書簡を判読していくという研究会(後の広島近世文学研究会)があり、文教女子大学の教員や広島近辺在住の近世文学研究者が月に一度集まつておりました。「奉存候(ぞんじたてまつりそうろう)」や「御座候(ござそうろう)」など、極端なくずしがなされる書体は、こういった書簡の判読に初めてあたる私にはまるで見当がつかず、たいへん困惑した覚えがあります。そのような折、下垣内先生は温かく、未熟な私にこつそりと指導してくださいました。それから一四年が過ぎようとしております。私の判読能力はあまり向上していませんが、曲がりなりににもこうした資料を扱うことができるようになったのは下垣内先生のおかげであると感謝しております。

呉市にある下垣内先生のご自宅にお邪魔したことも何度かあります。阿賀にお住まいになっていた頃は、

その茶室が以前大工の修行をされていた先生の手作りであることに驚かされました。現在は神山みやまという所で奥様とお二人で二棟にお住まいなのですが、その家も先生の手によるものでした(以前作られていた一棟の隣にさらに一棟作られたのだそうです)。お邪魔すると、先生は嬉しそうに「最近はこのおもちやを作っているんです」とおっしゃり、電池や磁力を利用して回転したり上下したりする色々な工作玩具を見せてくれます。本当に器用で、また科学に造詣が深いのです。さまざまな分野にご興味を寄せられ、楽しんで取り組まれるお姿には感服いたします。

私が尾道大学に転任して間もなく、下垣内先生よりご所蔵の俳諧資料を寄贈したいとお申し出を受けました。先生は尾道大学の前身である尾道短期大学を卒業されており、また、四年制として新たに開学した尾道大学に日本文学科があることから、寄贈先をお考えになったかと拝察します。しかし、このような貴重な、かつたくさん資料の寄贈を受けることは、嬉しくもあり、恐れ多くもありました。何より、俳諧を専門としない私にとっては、どのように整理し、どのように活用していったらよいか、わからなかつたのです。

案の定というのも変ですが、しばらく私はこの貴重な資料を扱いかねておりました。大学の広報として資料の一部を紹介はするものの、自分の力不足を理由にその価値を公に伝える方法を思いあぐねていたので。そんな折、早稲田大学の雲英末雄先生から、早急目録を作ることが肝要であると叱責を受け(実際には雲英先生ご自身は直接厳しい言い方をされることはなかつたのですが、近世の研究者仲間にごぼされていたようです)、また、見かねた伊藤善隆氏、金子俊之氏、神作研一氏、佐藤勝明氏らが目録作成のお手伝いを申し出てくださり、この目録作りが始まりました。雲英先生は、下垣内先生と親しくおつき合いをする研究者仲間であり、俳諧資料の貸借や、時には交換なども行われていたそうです。雲英先生自身もこの文庫の調査と

目録作成に対し大いにお心を寄せていただいたのですが、たいへん残念なことに、ご病氣となり、二〇〇八年一〇月六日、ご逝去されてしまわれました。目録の刊行が間に合わなかったことが本当に悔やまれます。

このたび寄贈を受けた資料は、下垣内先生が長年収集された芸備地方を中心とした、江戸から明治時代にかけての俳諧資料です。芸備地方の俳諧コレクションとしてこれだけ揃ったものではなく、学術資料的価値は計りしれません。資料を繙くと、江戸時代の地方俳人たちの息吹を感じることができ、江戸や京・大坂だけでなく、俳諧という文化が地方にも浸透していたことがわかります。刷物の中には、錦絵と呼ばれる多色刷りのものもあり、その美しさを鑑賞することもできます。

これらの資料は、下垣内先生が長期間に渉り独自に収集されてきたものです。その収集方法も、地方の古書店や骨董品店を巡り、少しずつながら着実に集められたものです。骨董屋さんと仲良くなるために余計なものも購入されたという話を伺ったことがあります。こういった地方の俳諧資料は散逸してしまっただけのものも多く、まとまった形で市場に出ることはほとんどありません。それだけにこのコレクションがどれだけ貴重なものか、おわかりいただけるのではないのでしょうか。

このたび、多くの皆様の協力を仰ぎながら目録を刊行することができました。今後は、この目録をもととして、尾道大学の学生に、また学外の研究者に下垣内文庫の貴重な資料を活用していただけるかと存じます。また、私自身のことを述べることとなりますが、今回の調査で私の俳諧資料に対する力不足を強く感じました。ご覧になるとおわかりのように、特に短冊につきましては、判読ができなかった箇所が多々あり、判読してはいても誤読している可能性も残ります。今後のさらなる精査修正が必要でしょう。この目録発刊をもつて下垣内文庫の調査研究を終了するのではなく、むしろこれを出発点として、より詳しい内容の検討、ま

たさらに広げてこの地方の俳諧の研究にも取り組んでいきたいと思っております。

最後となりますが、目録作成にご協力を賜りました、故雲英先生、伊藤氏、金子氏、神作氏、佐藤氏、書冊編の索引を作成してくださいました畑中さやか氏に對し、心より感謝申し上げます。また、目録の発刊に際し、尾道大学より学長裁量特別研究費を受けたこと、図書館の司書の方にお世話になったことにも厚く感謝申し上げます。

そして、何よりもこのようなすばらしい資料をご寄贈して下さった下垣内先生に、衷心よりの感謝を申し上げます。先生はこの三月十九日に傘寿を迎えられました。本目録を祝冊として捧げたいと思います。

尾道大学附属図書館

下垣内文庫目録しもごうち

目録凡例

一、本目録は、尾道大学附属図書館に所蔵される下垣内和入氏旧蔵の俳諧関係書群「下垣内文庫」の目録である(全三〇九三点)。

〈構成〉

一、本目録は、I書冊編(六四七点)、II俳諧一枚摺編(一五二点)、III書状編(八六点)、IV一枚物編(二二四点)、V扇面編(三二点)、VI軸物編(四九点)、VII短冊編(二八六八点)、VIIIその他(四六六点)の八部から成る。

〈分類・配列〉

一、「書冊編」の分類は、原則として、『改訂内閣文庫国書分類目録』(一九七四・七六年、国立公文書館内閣文庫)と『日本古典籍分類表(試案)』(二〇〇八年、人間文化研究機構 国文学研究資料館分類研究会)を参照しつつも、なお文庫の特性を適宜勘案して定めた。分類綱目内の配列はおおむね成立年代順としたが、同類書は可能な限りまとめて掲出した。

一、「俳諧一枚摺編」は、分類せずにおおむね年次順に並べた。年次未詳のものについては刊行年次を推定し、適宜該当箇所に取り入れた。

一、「書状編」は分類せず、配列は差出人の五十音順に拠った。

一、「一枚物編」は分類せず、筆者俳号の五十音順に拠った(俳号でないものと筆者不明のものは末尾にまと

めた。

一、「扇面編」は分類せず、筆者併号の五十音順に拠った(併号でないものと筆者不明のものは末尾にまとめた)。

一、「軸物編」は分類せず、筆者併号の五十音順に拠った(筆者不明のものは末尾にまとめた)。

二、「短冊編」は、分類せずに作者の読みによって五十音順に並べた(作者不明のものは末尾にまとめた)。
なお、作者名は、原則的に漢字の音読みでとったが、平仮名表記のものはそのまま、また以下のものは例外的に訓読み、あるいは訓読みを交えた読みでとった。

大江丸(おおえまる) 小夜秋(さよあき) 重頼(しげより) 多喜彦(たきひこ)

太計彦(たけひこ) 近吉(ちかよし) 千代道(ちよみち) 津奈女(つなめ)

と岐占(ときこ) 登世(とせ) 外海(とみ) はま藻(はまも)

み木雄(みきお) 三千雄(みちを) みち彦(みちひこ) 三平(みつひら)

三津平(みつひら) 峰(みね)

一、「その他」には、浮世絵など摺物で右に属しないものを分類番号順に並べた。

〈記載事項〉

一、「書冊編」における記載事項は、目録事項と書誌事項から構成される。その主方針は次の通り。

1 目録事項は、通し番号・書名・書名の読み・巻数・編著者名等・刊写年・刊写者・書型・冊数・請求番号から成る。

2 書誌事項は*以下に掲出し、主に、存巻状況、序跋者、別名、蔵書印(名家に限る)を適宜掲出した。

3 書名は、原則として外題(原題簽)に拠る。ただし外題を欠くものについては、文献の性格に応じて、内題・封面題・序題・扉題などから適宜採り、その旨を()内に注記した。冠称(角書)は、へくにくるんだ。

4 巻数は、全二巻の場合に限り、表記を省略した。

5 編著者名は、通行のものに統一した。文献に応じて、校訂者・画者等を記したものもある。

6 刊年は、可能な限り「刊・印・修」を用いて表記するように努めた。

7 書写年は、明確なそれが不明の場合には、「〔江戸後期〕写」の如く、推定年代を表記した(刊本もこれに準じた)。

8 刊行者は、二肆までを採る。三肆以上の場合には連名の末行をあげ、その末尾に連名の総数を記した(ただし、封面・広告等によつて主版元が推定できる場合はこの限りではない)。

9 刊行者の所在地は、「皇都」「平安」等は「京」に、「江都」「東武」等は「江戸」に、「浪華」「撰陽」等は「太坂(大阪)」に、「尾府」「尾張」等は「名古屋」にそれぞれ統一し、他はおおむね記載のままを採った。

10 文献に応じて、蔵版者を明記したものもある。

11 書型は、「大」(大本)・「半」(半紙本)・「中」(中本)・「小」(小本)・「枡」(枡型本)・「横」(横本)などと記した(以上、袋綴じ本)。

12 合冊されているものには、冊数の前に「合」を付した。

一、「俳諧一枚摺編」における記載事項は、適宜その内容に応じて表題を付け、種別(俳諧一枚摺・募句チラ

シ・返草・引札・書袋など）・大きさ・函架番号の順に必要な事項を摘録した。配列は成立年代順に拠つた。正確な年次の不明なものは、おおよその年代を推定して配列した。また、必要に応じて「*」を付し備考を記した。

一、「書状編」は、差出人・宛名・日付・函架番号の順に必要な事項を摘録した。また、必要に応じて「*」を付し備考を記した。

一、「一枚物編」は、適宜その内容に応じて表題(筆者、種別、内容)・函架番号の順に必要な事項を摘録した。また、必要に応じて「*」を付し備考を記した。

一、「扇面編」は、適宜その内容に応じて表題(筆者、種別、内容)・函架番号の順に必要な事項を摘録した。また、必要に応じて「*」を付し備考を記した。

一、「軸物編」における記載事項は、適宜その内容に応じて表題(筆者、種別、内容)・函架番号の順に必要な事項を摘録した。また、必要に応じて「*」を付し備考を記した。

一、「短冊編」における記載事項は、発句(または和歌など、それに類するもの)・作者名・詞書など、の順に記した。発句の中の難読箇所は「□」とした。

一、「その他」における記載事項は、画題(資料中に記されているもののみ)・発句(資料中に記されている場合)・画師名(資料中に記されているもののみ)を採録した。

その他

一、文字は原則として通行の字体に従ったが、一部必要に応じて若干の異体字を用いた場合がある。

一、漢数字は、書名や引用部を除き、「一〇(イチゼロ)方式」にて示した。

一、適宜わたくしに濁点を付した。

一、*以下の書誌事項における「/」は、改行を示す。

一、虫損等による判読不能箇所は□で示した。

一、著録者による推定事項には「 」を付した。

一、「短冊編」に限り、踊り字はすべて開き、現行の文字とした。また、見せ消ちの形で修正が施されている場合は、修正後の文字を《 》で囲み、元の文字の下あるいは右に示した。あきらかな誤字・誤記と思われる場合は、正しい文字を（ ）に入れ、元の文字の下に示した。

一、こんにちの人権意識に照らして不適切と思われる表現についても、原資料の歴史的な背景と意義に鑑みて、そのままとした。

一、「書冊編」の末尾には、「書冊編書名索引」を付した。

一、書誌調査は、一〇〇七年から二〇〇九年にかけて年に一、二回のペースで実施された。調査者は、伊藤善隆・金子俊之・神作研・佐藤勝明・藤沢毅の五名である。

一、文献調査の際に著録されたカードに基づいて、伊藤・神作・佐藤・藤沢の四名がデータ入力を担当した。
一、「書冊編」については神作が、「俳諧一枚摺編」「書状編」「一枚物編」「扇面編」「軸物編」については伊藤が、「短冊編」「その他」については藤沢が、それぞれ目録本文を作成し、校正はすべて藤沢が担当した。

一、文献調査ならびに目録の編集にあたっては、故雲英末雄氏の助言を得た。

I 書冊編

書冊編 目次

I 文学

| | | |
|---------|-------|-----|
| 1 和歌 | | 48 |
| 2 連歌 | | 48 |
| 3 俳諧 | | 48 |
| ① 総記 | | 49 |
| ② 和漢俳諧 | | 51 |
| ③ 撰集 | | 51 |
| ④ 家集 | | 110 |
| ⑤ 連句 | | 112 |
| ⑥ 紀行・俳文 | | 115 |
| ⑦ 俳論 | | 118 |

II 芸術

| | | |
|---------|-------|-----|
| 1 書画・絵本 | | 149 |
| 4 雑俳・川柳 | | 144 |
| ⑪ 絵俳書 | | 143 |
| ⑩ 点取帖 | | 140 |
| ⑨ 歳旦帖 | | 131 |
| ⑧ 作法 | | 121 |

書冊目録

I 文学

1 和歌

1 八雲御抄(やくもみしよう)

六卷 順徳院著

[江戸前期]刊(無刊記)

大七冊 0 / 1 1 3

*印記「鹿兒島／県立図／書館蔵／書之印」。

2 連歌

2 源意千句(げんいせんく)

源意独吟、一条兼良点 [江戸後期]写

半一冊 0 / 6 6

3 誹諧手爾於葉(はいかいてにおは)

宗牧・宗養著

寛延四年写(倒珍舎佳方)

大一冊 7 5 1 / 1

*天文二四年奥。

3 俳諧

①総記

4 続俳家奇人談(ぞくはいかきじんだん)

三卷 玄玄一編、寥松校 天保三年刊・後印(江戸、丁字屋平兵衛)

大三冊 832/2

*校者序、鶯笠跋。*絵入(淡彩刷)。*丁字屋平兵衛ノ広告ヲ付ス。

5 続俳家奇人談(内題)(ぞくはいかきじんだん)

玄玄一編、寥松校 天保三年刊・弘化三年印(江戸、丁字屋平兵衛)

大一冊 846/4

*存卷下。鶯笠跋。*絵入(淡彩刷)。

6 俳諧人名録(はいかいじんめいろく)

惟草編 弘化三年跋刊(江戸、中屋徳兵衛)

中一冊 846/3

*二編・存卷下。*董亭昌義跋、鳳朗跋。

7 [俳人肖像画句集](仮題)(はいじんしょうざうがくしゅう)

[江戸後期]刊(京、近江屋利助)

半一冊 0/64

*蛸壺主人序。*絵入。*表紙欠。

8 歌俳百人撰(内題)(かはいひやくにんせん)

二卷 海寿編 [江戸後期]写

大合一冊 0/71

9 [新編歌俳百人撰](しんぺんかはいひやくにんせん)

柳下亭種員編、歌川豊国画 嘉永二年刊(無書肆名)

中一冊 849/8

*自序。*絵入。

- 10 俳人百家撰(はいじんひゃつかせん)
 緑亭川柳輯、雄斎国輝画 安政二年刊(江戸、甘泉堂)
 *自序。*刊記二八「嘉永八乙卯歳次」トアリ。*絵人(淡彩刷)。
 中一冊 855/1
- 11 俳家古今墨蹟(扉題)(はいかここんぼくせき)
 二卷 鳥吟編 嘉永五年序刊(江戸、須原屋源助)
 *由誓序、西馬跋。*金海堂蔵板。
 中二冊 852/4
- 12 諸国翁墳記(扉題)(しょこくおうふんき)
 義仲寺編 [江戸後期]刊(義仲寺蔵板)
 半一冊 0/45
- 13 新成復古/日夜重宝 俳席両面鑑(内題)
 (しんせいふつこにちやちようほうはいせきりようめんかがみ)
 伊吹山蔭編、青隱物初校、上嶋勝蔵画 [天保頃]刊(無刊記)
 折一帖 0/49
 *両面刷一鋪(絵図入)。
- 14 俳諧画譜集(はいかいがふしゅう)
 五岳・五川編 天保七年序刊・明治印(東京、博文館蔵板)
 中一冊 836/3
 *存卷上。*五岳序。
- 15 賀嶋毘沙門殿奉額(かしまびしゃもんでんほうがく)
 [江戸後期]写
 大仮一冊 0/9
- 16 雑書(ざっしょ)

江沢若水

〔江戸後期〕写

大仮一冊 0 / 148

②和漢俳諧・字書

17 眠寤集(序題)(みんごしゅう)

二卷 宮川道達編

〔天和二年〕刊〔無刊記〕

小合一冊 0 / 91

*村田通信序、白序。*内題「眠寤集双吟漢和千句」。

18 眠寤集和語対類(跋題)(みんごしゅうわごついるい)

宮川道達編

天和二年刊(京、亀屋半左衛門・永原屋孫兵衛)

小一冊 682 / 1

*存卷下。*白跋。

③撰集

19 さるみの(さるみの)

去来・凡兆編

〔元禄四年〕刊(京、井筒屋庄兵衛)

半一冊 0 / 77

*存卷五。*文章跋。

20 句兄弟(くきょうだい)

其角編

〔元禄七年〕刊(刊記欠)

半一冊 694 / 1

*存卷中。

21 泊船集(内題)(はくせんしゅう)

- 風国編
元禄二一年刊(京、井筒屋庄兵衛)
*自序。
半一冊
698/1
- 22 柿表紙(かきびょうし)
吾仲編
〔江戸後期〕写
*存卷中。*刊本ノ写シ。
半一冊
0/69
- 23 〔誹ノ諧〕一陽(はいかいちよう)
大径(大圭)編
享保三年序刊(京、柏屋安兵衛)
*言水序、吟花堂跋。*大径ノ立机記念集。
半一冊
718/1
- 24 誹諧草むすび(はいかいくさむすび)
隆志編
享保一四年序刊(京、木村市郎兵衛)
*自序。*絵入。
半一冊
729/1
- 25 〔如月田〕よきさらぎだ
竿秋編
〔享保一七年序〕刊(刊記欠)
*存卷中。*呉洋序、釣雪跋。
半一冊
732/1
- 26 無極篇(むきよくへん)
徒然庵編
寛保三年序刊(無刊記)
*自序。*外題下「寛保板」。*本文青刷。
小一冊
743/1
- 27 花供養(はななくよう)

廬元坊編

〔寛保三年跋〕刊〔京、橘屋治兵衛〕

半五冊 743/2

*存卷一・二・四・六。

28 硯のいかた(内題)(すずりのいかだ)

丹志編

宝曆五年刊(江戸、万屋清兵衛)

半一冊 755/1

*存卷下。*台簾跋。

29 月華篇(げつかへん)

風律編

〔江戸中期〕写

大一冊 760/1

*外題ハ後書ナリ。*宝曆一〇年奥。

30 続安達太良根(封面題)(ぞくあだたらね)

淡々編

宝曆一一年序刊(刊記欠)

半一冊 761/1

*存卷上。*自序、水元其梁序。

31 筈の伊達集(内題)(つえのだてしゅう)

六雅編

宝曆一一年跋刊(京、額田正三郎)

半一冊 761/2

*自序、湖白庵跋。*額田正三郎ノ「蕉門野坡流誹諧書目録」ヲ付ス。

*印記「雲／英」「雲英文庫」(雲英末雄)。

32 朱白集(しゅはくしゅう)

浮風・暮雨編

宝曆一二年序刊(刊記欠)

半一冊 762/1

*存卷上。*杏雨序、倚松序、浮風・暮雨序。

33 その行脚(そのあんぎゃ)

諸九尼編

宝曆一三年序刊(刊記欠)

半一冊

7 6 3 / 4

*存卷上。*杏雨序。

34 古今俳諧明題集(ここんはいかいめいだいしゅう)

五卷 涼岱編

宝曆一三年序刊(江戸、須原屋市兵衛・京、井筒屋庄兵衛)

半合四冊

7 6 3 / 2

*卷三・四合冊。*藤原伯洲序、自序。*編者(吸露庵)蔵板。*広告ヲ付ス。

35 古今俳諧明題集(ここんはいかいめいだいしゅう)

涼岱編

宝曆一三年序刊(刊記欠)

半二冊

7 6 3 / 3

*存卷一・二。*藤原伯洲序、自序。*編者(吸露庵)蔵板。*取り合ワセ本。

36 誹諧師走囊(序題)(はいかいしわすぶくろ)

正月堂(梅門)著

宝曆一四年序刊(京、井筒屋庄兵衛・大坂、塩屋平助)

半一冊

7 6 4 / 1

*西戎の閑人序、正月堂跋。

37 俳諧一切経(はいかいいつさいきょう)

[江戸後期]写

中一冊

0 / 1 1 1

*存卷二。

38 夏日五歌偈(なつのはごかせん)

[江戸後期]写

半一冊

0 / 1 3 4

- 39 俳諧百一集(序題)(はいかいひやくいちしゅう)
康工編 [江戸後期] 写 大仮一冊 0 / 1 2 8
- 40 松落葉集(まつのおちばしゅう)
杉葉編 明和五年序刊(無刊記) 半一冊 7 6 8 / 2
- 41 松落葉集(まつのおちばしゅう)
杉葉編 *宗朗序、自序、風律跋。 *絵入。
明和五年序刊・昭和印(無刊記) 半一冊 7 6 8 / 3
- 42 しつほく題(しつぽくだい)
其勇編 *宗朗序、自序、風律跋。 *絵入。
明和九年序刊(京・橘屋治兵衛) 半一冊 7 7 2 / 2
- 43 誹諧つくし集(内題)(はいかいつくししゅう)
聴雨編 [江戸中期] 写 半一冊 7 7 3 / 1
- 44 俳諧七部集(はいかいしちぶしゅう)
二卷 柳居編、子周校 安永三年刊(京、井筒庄兵衛等五肆)
*安永二年自序。 *刊本ノ写シ。 小二冊 7 7 4 / 3
- 45 俳諧七部集(はいかいしちぶしゅう)
*水母散人〔塙保己二〕序。 *大鵬館主人跋。

柳居編、子周校 (安永三年) 刊・後印(刊記欠)

小一冊 0/92

*存卷上。*水母散人(塙保己一)序。

46 俳諧七部集(はいかいしちぶしゅう)

柳居編、子周校 (安永三年) 刊・後印(刊記欠)

小一冊 0/97

*存卷上。*水母散人(塙保己一)序。

47 〔俳諧七部集〕(はいかいしちぶしゅう)

柳居編、子周校 (安永三年) 刊・後印(京、西村市郎右衛門)

小一冊 774/4

*存卷下。*大鵬館主人跋。*載文堂(西村市郎右衛門)ノ「蕉門俳書目録」ヲ付ス。

48 〔俳諧七部集〕(はいかいしちぶしゅう)

二卷 柳居編、子周校 (安永三年) 刊・文化五年印(京、浦井徳右衛門等三軒)

小二冊 808/2

*二卷。*水母散人(塙保己一)序、大鵬館主人跋。*諧仙堂ノ「俳諧書籍目録」ヲ付ス。

49 俳諧七部集(はいかいしちぶしゅう)

柳居編、子周校 (安永三年) 刊・(文化五年) 印(刊記欠)

小一冊 808/4

*存卷上。*水母散人(塙保己一)序。

50 〔俳諧七部集〕(はいかいしちぶしゅう)

柳居編、子周校 (安永三年) 刊・文化五年印(京、浦井徳右衛門等三軒)

小一冊 808/3

*存卷下。*大鵬館主人跋。*諧仙堂ノ「俳諧書籍目録」ヲ付ス。

- 51 〔俳諧七部集〕（はいかいしちぶしゅう）
 柳居編、子周校 〔安永三年〕刊・文化五年印（京、浦井徳右衛門等三軒）
 *存巻下。*大鵬館主人跋。*諧仙堂ノ「俳諧書籍目録」ヲ付ス。 小一冊 808/5
- 52 俳諧七部集（はいかいしちぶしゅう）
 柳居編 〔江戸中期〕刊〔刊記欠〕 小一冊 774/5
- 53 俳諧七部集（はいかいしちぶしゅう）
 *『阿羅野』『炭俵』ノミ存。*大鵬館主人跋。*安永三年刊本トハ別版ナリ。
 柳居編 〔江戸後期〕刊（京、井筒屋庄兵衛） 半一冊 0/94
- 54 類題発句集（るいだいほつくしゅう）
 蝶夢編 〔安永三年〕刊〔刊記欠〕 中四冊 774/1
- 55 類題発句集（内題）（るいだいほつくしゅう）
 蝶夢編 〔安永三年〕刊〔刊記欠〕 中三冊 774/2
 *存春・秋・冬部。*自序。
- 56 類題発句集（るいだいほつくしゅう）
 蝶夢編 〔安永三年〕刊〔刊記欠〕 中二冊 774/7
 *存春・夏部。*自序。

57 類題発句集(内題)(るいだいほつくしゅう)

蝶夢編

〔安永三年〕刊(刊記欠)

中一冊

774/6

*存春部。*自序。

58 類題発句集(るいだいほつくしゅう)

蝶夢編

〔安永三年〕刊(刊記欠)

中一冊

774/10

*存夏部。*自序。

59 類題発句集(るいだいほつくしゅう)

蝶夢編

〔安永三年〕刊(京、橋屋治兵衛等四肆)

中一冊

774/8

*存雑部。*自序。

60 名所方角集(内題)(めいしよほうがくしゅう)

素外編

安永四年跋刊(江戸、西村源六・須原屋市兵衛)

小一冊

775/1

*存卷下。*妍齋津富跋。

*須原屋市兵衛ノ藏板目錄ヲ付ス。奥ニハ素外ノ著述目錄アリ。

61 名所方角集(内題)(めいしよほうがくしゅう)

素外編

安永四年跋刊(江戸、西村源六・須原屋市兵衛)

小一冊

775/2

*存卷下。*妍齋津富跋。

*須原屋市兵衛ノ藏板目錄ヲ付ス。奥ニハ素外ノ著述目錄アリ。

62 十三興(じゅうさんきょう)

二卷 一鼠編

安永六年刊(大坂、石原茂兵衛)

半合一冊

777/1

*麦水序、楮冠散人跋。

- 63 新虚栗集(内題)(しんみなしぐりしゅう)
二卷 麦水編 (安永六年)刊(無刊記)
*「附言みなし栗の訳」(麦水)ヲ付ス。
半合二冊 776/1
- 64 俳諧古今句鑑(内題)(はいかいここんくかがみ)
素外編 (安永六年跋)刊(刊記欠)
*存秋部。
小二冊 0/103
- 65 俳諧古今句鑑(内題)(はいかいここんくかがみ)
素外編 (安永六年跋)刊(刊記欠)
*存冬部。*常木丹跋。
小二冊 777/2
- 66 三万椿(序題)(みまつばき)
安永七年序刊(無刊記)
半一冊 778/1
- 67 俳諧既望笠(内題)(はいかいいざよいがさ)
菊文撰 安永八年刊(無刊記)
*封面題「天満宮/御霊宮 奉納四季発句集」。*朶輝序、鈴丁東序。
半一冊 779/1
- 68 桜のゆるし(さくらゆるし)
五卷 百茶編 天明二年序刊(京、橘屋治兵衛)
*傘狂序、何戎坊跋。
半五冊 782/1

69 十二日行(じゅうににちこう)

遷之編 [江戸後期] 写

半一冊 784/1

*自序。*天明四年序刊本ノ写シ。

70 奉扇会(ほうせんえ)

沂風編 天明五年刊(京、橘屋治兵衛)

半一冊 785/1

71 〈誹／諧〉故人五百題(封面題)(はいかいこじんごひやくだい)

松露庵編、亀足・瓜州校 天明七年序刊(刊記欠)

小一冊 787/1

*存卷上。*亀足序。

72 〈誹／諧〉故人五百題(封面題)(はいかいこじんごひやくだい)

松露庵編、亀足・瓜州校 天明七年序刊(刊記欠)

小一冊 787/3

*存卷上。*亀足序。

73 〈誹／諧〉故人五百題(はいかいこじんごひやくだい)

松露庵編、亀足・瓜州校 天明七年序刊(刊記欠)

小一冊 787/2

*存卷上。*亀足序。

74 故人五百題(こじんごひやくだい)

松露庵編、亀足・瓜州校 天明七年序刊・天保一〇年印(江戸、英文蔵)

小一冊 839/4

*存卷下。*瓜州跋。

75 袖の風集(そでのかぜしゅう)

- 六蛙・字仙撰 寛政一二年写(垂柳園主人) 半一冊 799/6
- *扉題「東行吟」。*天明八年刊本ノ写シ。
- 76 池のむかし(いけのむかし) 寛政元年刊(京、橘屋治兵衛) 半一冊 789/1
- 柳昌編
- *存卷下。*外題ハ後書ナリ。*傘狂跋。
- 77 道のしをり(みちのしおり) 寛政二年序刊(京、橘屋治兵衛) 半一冊 790/1
- (松後編)
- *盧甫序。
- 78 冴月集(さげつしゅう) 寛政二年跋刊(京、橘屋治兵衛) 半一冊 790/2
- 李英編
- *存卷下。*東葵跋。
- 79 里の春(内題)(さとのはる) 寛政四年刊(大坂、小刀屋六兵衛・曆屋太郎右衛門) 半一冊 792/2
- 東吹編
- 80 新類題発句集(しんるいだいほつくしゅう) 寛政五年刊(京、井筒屋庄兵衛・橘屋治兵衛) 中三冊 793/2/1
- 蝶夢編
- *存春・秋・雑部。*自序。*「蝶夢叟書述目録」ヲ付ス。
- 81 新類題発句集(しんるいだいほつくしゅう)

蝶夢編

〔寛政五年〕刊〔刊記欠〕

中一冊 793 / 2 / 2

*存夏部。

82 花供養(はなくよう)

蘭更編

寛政五年序刊(京、菊舎太兵衛)

半一冊 793 / 1

*幡水序。

83 花供養(はなくよう)

蘭更編

寛政八年序刊(芭蕉堂藏板)

半一冊 796 / 1

*蒼虬序。

84 花供養集(内題)(はなくようしゅう)

芭蕉堂編

天保三年序刊(京、菊屋平兵衛)

半一冊 832 / 1

*里童序。

85 花供養(はなくよう)

蒼虬編

天保四年序刊(京、菊屋平兵衛)

半一冊 833 / 3

*北馬序。

86 花供養(はなくよう)

九起編

天保一三年序刊(京、近江屋利助)

半一冊 842 / 4

*楚蕉序。 *書肆名ハ墨印ヲ押捺セリ。

87 花供養(はなくよう)

- (二巻 九起編 天保一四年刊(無書肆名) 半二冊 843/6
 *鳳兮序、孤山序、淡亭序、霞村序、閑雲序、史也跋。
- 88 花供養(はなぐよう)
 (九起編 天保一五年刊(無書肆名) 半一冊 844/8
 *鷺洲序、子邁序。
- 89 花供養集(はなぐようしゅう)
 公成編 [幕末] 刊(無刊記) 小一冊 0/98
 *初編。*自序。
- 90 ひさこ苗(ひさこなえ)
 六合編 寛政五年跋刊(京、橘屋治兵衛) 半一冊 793/4
 *存卷下。*自跋。*印記「雲英」(雲英末雄)。
- 91 はるのをと(はるのおと)
 白黛編 寛政七年刊(京、菊屋太兵衛) 半一冊 795/2
- 92 散はな(ちるはな)
 玉屑編 寛政七年序刊(京、菊舎太兵衛) 半一冊 795/1
 *成美序、蘭更跋。*縦細本。
- 93 尾華うつし(おばなうつし)
 田東庵編 寛政七年序刊(京、菊舎太兵衛) 半一冊 795/3

* 重厚序、闌更跋。 * 「田東庵著述目録」ヲ付ス。

94 俳諧発句題葉集(はいかいほつくくだいようしゅう)

升六編

寛政一二年刊(京、菊屋太兵衛等五肆)

小三冊

799/5

* 存秋・冬・雑部。

95 俳諧発句題葉集(はいかいほつくくだいようしゅう)

升六編

〔寛政一二年〕刊〔刊記欠〕

小一冊

799/1

* 存冬部。

96 俳諧十家類題集(内題)(はいかいじつかるいだいしゅう)

八千坊編校

寛政一二年刊(大坂、塩屋忠兵衛等六肆)

半四冊

799/2

* 存春・夏・冬・雑部。 * 自序。

97 俳諧十家類題集(はいかいじつかるいだいしゅう)

八千坊編校

寛政一二年刊(大坂、塩屋忠兵衛等六肆)

半一冊

799/3

* 存雑部。

98 〔俳諧／発句〕新五子稿(はいかいほつくしんごしこう)

二卷 嘉会室亨編

寛政一二年刊(大坂、奈良屋長兵衛・奈良屋為三郎)

* 不木序、自序。

小二冊

799/4

99 〔俳諧／発句〕新五子稿(はいかいほつくしんごしこう)

嘉会室亨編

〔寛政一二年〕刊・天保二年印(大坂、前川文栄堂・岡田種玉堂)

- 100 *存卷上。*不木序、自序。
夏の首途(内題)(なつのかどぞ)
三卷 白寿坊著 [江戸後期]写
*寛政一二年成。
中合一冊 800/1
- 101 [梅香炉](うめこうろ)
一之等編 [寛政一二年]刊[刊記欠]
半一冊 798/2
- 102 手向水(内題)(たむけみず)
*存卷上。*印記「龍巢藏」、「紫水文庫」(北田紫水)。
寛政一二年序刊[刊記欠]
半一冊 800/2
- 103 俳諧田毎の日(はいかいたごとのひ)
山奴編 享和二年刊(江戸、大和田安兵衛・衆星閣甚助)
小一冊 802/4
*外題ハ後書ナリ。*桃隣序、徳布跋。*角丸屋甚助ノ蔵板目錄ヲ付ス。
- 104 [俳諧田ごとの日](はいかいたごとのひ)
山奴編 享和二年刊(江戸、大和田安兵衛・衆星閣甚助)
小一冊 802/2
*桃隣序、徳布跋。*印記「二宮/文庫」。
- 105 いほのいぬ(いおのいぬ)
野雀等編 享和三年刊(無刊記)
半一冊 803/1

- 106 続七部集(ぞくしちぶしゅう) *存巻下。
二巻 蘭更編 享和三年刊(京、筒井庄兵衛等三肆ノ諧仙堂蔵板) 小二冊 795/4
*自序。
- 107 続七部集(ぞくしちぶしゅう)
二巻 蘭更編 享和三年刊(京、浦井徳右衛門) 小二冊 803/3
*自序。
- 108 続七部集(ぞくしちぶしゅう)
蘭更編 享和三年刊(京、浦井徳右衛門) 小二冊 0/123
*存巻下。
- 109 〔続七部集〕(ぞくしちぶしゅう)
蘭更編 享和三年刊・後印(京、浦井五二郎) 小二冊 803/2
*存巻下。
- 110 はまびさし(はまびさし)
存古・麦阿編 〔文化元年〕刊(刊記欠) 半一冊 0/41
*存巻上。 土朗序。
- 111 かさしくさ(かさしくさ)
車大編 文化二年序刊(京、勝田喜右衛門・勝田善助) 中一冊 805/1

- * 拳遠序、蒼虬跋。
 112 〈追／善〉月の別(ついでんつきのみわかれ)
 貫里編 文化四年刊(京、橋屋治兵衛)
 * 秋化坊序。
 半一冊 807/6
 113 たゝひくさ(たたびぐさ)
 来相編 文化四年序刊(無刊記)
 * 自序。
 半一冊 805/2
 114 発句類聚(内題)(ほつくるいじゅう)
 二卷 了輔編、寥松刪定 文化四年序刊(江戸、英文蔵)
 * 寥松序、完来跋。
 中二冊 807/4
 115 発句類聚(内題)(ほつくるいじゅう)
 二卷 了輔編、寥松刪定 文化四年序刊(江戸、英文蔵)
 * 寥松序、完来跋。* 封面題「俳諧発句類聚」。
 中二冊 807/5
 116 発句類聚(内題)(ほつくるいじゅう)
 了輔編、寥松刪定 文化四年序刊(刊記欠)
 * 存卷上。* 寥松序。* 封面題「俳諧発句類聚」。
 中一冊 807/2
 117 くさ摘(くさつみ)
 車大編 文化四年奥刊(平安、勝田善助)
 半一冊 807/1

- 118 くさ摘(くさつみ)
車大編
文化六年奥刊(京、勝田善助)
半一冊
8 0 9 / 2
- 119 くさ摘(くさつみ)
車大編
文化一二年奥刊(京、勝田善助)
半一冊
8 1 4 / 3
- 120 くさ摘(くさつみ)
車大編
文化一三年奥刊(京、勝田善助)
半一冊
8 1 6 / 1
- 121 金蘭集(きんらんしゅう)
米彦編
文化五年序刊(刊記欠)
中一冊
8 0 8 / 1
- 122 〔誹／諧〕奇淵七部集(はいかいきえんしちぶしゅう)
奇淵編
文化六年序刊(刊記欠)
小二冊
8 0 9 / 1
- 123 〔奇淵七部集〕(きえんしちぶしゅう)
奇淵編
文化六年序刊(刊記欠)
小二冊
8 0 9 / 3
- 124 反故供養(内題)(ほごくよう)
*存卷上。*自序。*別名「西国七部集」。
路宅編
文化七年奥刊(京、菊舎太兵衛)
半一冊
8 1 0 / 1
- 125 径回花日記(けいかいかにつき)

- 蘇杖坊編
文化七年奥刊(無刊記)
半一冊 8 1 0 / 2
- *彫工、広井秀峯(江戸)。
126 士朗七部集(しろうしちぶしゅう)
桐栖編、枇杷園社中校
文化八年刊(江戸、大和田忠助等六肆)
特小一冊 8 1 1 / 3
*存卷下。
- 127 士朗七部集(内題)(しろうしちぶしゅう)
桐栖編、枇杷園社中校
文化八年刊(江戸、大和田忠助等六肆)
特小一冊 8 1 1 / 8
*存卷下。
- 128 時雨会(しぐれえ)
仙風編
文化八年刊(京、橘屋治兵衛)
半一冊 8 1 1 / 4
- 129 いさなとり(いさなとり)
鯨牙編
文化八年序刊(無刊記)
半一冊 8 1 1 / 9
*士朗序、普天跋。
- 130 追善陽炎集(ついぜんかげろうしゅう)
風廬坊編
文化八年序刊(刊記欠)
半一冊 8 1 1 / 1
*存卷上。
- 131 追善陽炎集(ついぜんかげろうしゅう)
風廬坊編
文化八年序刊(刊記欠)
半一冊 8 1 1 / 2

*存卷上。

132 八千集(はっせんしゅう)

五竹庵編

〔文化九年〕刊(無刊記)

半一冊

8 1 2 / 7

*八日閑人序、八千坊跋。

133 十かえりの花(とかえりのはな)

可律坊編

文化九年序刊(京、橋屋治兵衛)

半一冊

8 1 2 / 4

*無名序。

134 花市会(はなのいちえ)

花屋庵編

文化九年序刊(無刊記)

半一冊

8 1 2 / 2

*方水序。

135 花市会(はなのいちえ)

奇淵編

文化一一年刊(無刊記)

半一冊

8 1 4 / 6

*桃序序、嵐亭序。

136 〔花市会〕(はなのいちえ)

花屋裏編

文化一二年刊(無刊記)

半一冊

8 1 5 / 5

137 〔花市会〕(はなのいちえ)

花屋裏編

文化一三年刊(無刊記)

半一冊

8 1 6 / 3

*弓雄序。*絵入。

- | | | | | |
|-----|------------------------------------|------------------|-----|-----------|
| 138 | 〔花市会〕(はなのいちえ) 花屋裏編 *弓雄序。*絵入。 | 文化二三年刊(無刊記) | 半一冊 | 8 1 6 / 4 |
| 139 | やまかつら(やまかづら) 玄蛙編 | 文化一〇年刊(無刊記) | 半一冊 | 8 1 3 / 3 |
| 140 | やまかつら(やまかづら) 玄蛙編 | 文化一一年刊(無刊記) | 半一冊 | 8 1 4 / 7 |
| 141 | 〔やまかつら〕(やまかづら) 筵史編 | 文政一〇年刊(広島、坂田保兵衛) | 半一冊 | 8 2 7 / 3 |
| 142 | 〔やまかつら〕(やまかづら) 筵史編 | 文政一一年刊(広島、坂田保兵衛) | 半一冊 | 8 2 8 / 5 |
| 143 | やまかつら(やまかづら) 筵史編 | 文政二二年刊(広島、坂田保兵衛) | 半一冊 | 8 2 9 / 7 |
| 144 | やまかつら(やまかづら) 筵史編 | 天保一五年刊(広島、坂田) | 半一冊 | 8 4 4 / 9 |
| 145 | 常盤樹(ときわぎ) 茂良編 *武西厓序。 | 文化一〇年序刊(京、勝田善助) | 半一冊 | 8 1 3 / 2 |

- 146 草の蔓(くさのつる)
篤老・梨雪編
文化一〇年序刊(広島、世並屋伊兵衛)
半一冊
8 1 3 / 6
- 147 誹諧董艸集(内題)(はいかいすみれぐさしゅう)
志桃撰、六隠校
文化一二年刊(京、備後屋金七等二肆)
中一冊
8 1 3 / 1
- 148 いたひさし(いたびさし)
塊翁編
文化一二年序刊(無刊記)
半一冊
8 1 4 / 2
- 149 かゝみ草(序中題)(かがみぐさ)
不転編
文化一二年序刊(無刊記)
半一冊
8 1 4 / 4
- 150 其袋集(そのふくろしゅう)
二卷 筵史編
文化一二年序刊(広島、嶋屋彦兵衛)
半二冊
8 1 4 / 5
- 151 塚のおもかげ(つかのおもかげ)
吉田連編
文化一二年序刊(京、橘屋治兵衛)
半一冊
8 1 5 / 1
- *雨耕序。
*玄蛙序、自跋。
*一もと庵序。

- 152 〈四季／発句〉 詞花集(しきほつくしかしゅう)
 来耙編 文化一二年序刊(大坂、塩屋忠兵衛) 横一冊 815/2
 *俳諧堂序。*塩屋忠兵衛ノ「和書俳諧書目録」ヲ付ス。
- 153 追善残花集(ついぜんざんかしゅう)
 白寿坊編 文化一二年序刊(京、橘屋治兵衛) 半八冊 815/4
 *存卷一・三・五・一〇。*自序。
- 154 〈古今／俳諧〉 四季類題集(ここんはいかいしきるいだいしゅう)
 三卷 井眉庵編 文化一二年序刊(大坂、塩屋弥七・塩屋忠兵衛) 中三冊 815/6
 *葛坡山人序。
- 155 つたふかせ(つたうかせ)
 只吹編 文化一三年序刊(京、橘屋治兵衛) 半一冊 815/9
 *有時庵序、雪香園跋。
- 156 花の下蔭(はなのしたかげ)
 足馬等編 文化一三年序刊(大坂、松井忠蔵) 半一冊 816/2
 *吾萍序、五竹庵のおきな跋。
- 157 夢のあした(ゆめのあした)
 筵史編 文化一四年奥刊(無刊記) 半一冊 818/1
 *鳥巢主人序。

158 雅奏(がそう)

和切編

文政元年刊(広島、広岡彦兵衛)

半一冊

8 1 8 / 2

*素台序。

159 綵燕神仙少□□(さいえんしんせんしょう□□)

梅翁編

文政二年刊(堺、菊舎太四郎)

半一冊

8 1 9 / 2

*絵入(淡彩刷)。

160 俳諧新五百題(はいかいしんごひゃくだい)

二卷 護物編

文政二年序刊(江戸、英文蔵)

中二冊

8 1 9 / 1

*孤山序。

161 藻屑集(もくずしゅう)

隣兪編

文政三年刊(刊記欠)

半一冊

8 2 0 / 3

*存巻中。

162 男さうし(おとこそうし)

何丸編

〔文政三年〕刊(無刊記)

半一冊

0 / 1 1 6

*初編。*大田南畝(遠桜山人)序、抱儀序、自序。*内題「俳諧男草紙」。

163 みとせ栗(みとせぐり)

文政三年序刊(刊記欠)

小一冊

8 2 0 / 1

*存巻上。*晋本鵬序。

- 164 類題真砂集(序中題)(るいだいまさごしゅう)
井眉庵編 文政三年序刊(刊記欠) 小一冊 820/2
*存卷上。*此角序。
- 165 古今/俳諧) 四季類題真砂集(ごこんはいかいしきるいだいまさごしゅう)
井眉庵撰 [文政三年序] 刊(大坂、井筒屋栄藏等五肆) 小一冊 0/46
*存卷下。
- 166 合歡雨(序中題)(ねむのあめ)
篤老撰、鳳郎・路宅校 文政五年序刊(六六堂藏板) 半一冊 822/11
*二編。*方乎序。
- 167 二葉塚集(ひととはづかしゅう)
子琴編 文政六年刊(京、橘屋治兵衛) 半一冊 823/1
*自序。
- 168 俳諧発句題叢(はいかいほつくだいそう)
四卷 太筈編 文政六年刊(江戸、上総屋利兵衛・上総屋惣兵衛)
*梅室雪雄序、一具夢南跋。 中四冊 823/6
- 169 俳諧発句題叢(はいかいほつくだいそう)
太筈編 [文政六年] 刊(刊記欠) 中一冊 823/5
*存春部。

170 めぐるなかれ(封面題)(めぐるながれ)

幽雅・花亭編 文政六年序刊(京、橋屋治兵衛)

半一冊 8 2 3 / 2

*固有 序、徐風庵跋。

171 めぐるなかれ(封面題)(めぐるながれ)

幽雅・花亭編 文政六年序刊(京、橋屋治兵衛)

半一冊 8 2 3 / 3

*固有 序、徐風庵跋。

172 わらかふし(わらかぶし)

南勢吟社編 文政六年奥刊(京、菊屋平兵衛)

半一冊 8 2 3 / 4

*長嶺序。

173 新藻屑集(しんもくずしゅう)

隣兪編 (江戸後期) 写

半一冊 8 2 4 / 1

*存卷上。 *文政七年成。

174 士朗統七部集(しろうぞくしちぶしゅう)

菊太郎・其成編 (文政七年) 刊(刊記欠)

特小一冊 0 / 8 7

*存卷中。

175 士朗統七部集(しろうぞくしちぶしゅう)

菊太郎・其成編 (文政七年) 刊(刊記欠)

特小一冊 0 / 8 8

*存卷中。

- 176 ねむのやものかたり(ねむのやものがたり)
 玄蛙編
 〔文政七年〕刊(無刊記)
 半一冊 0/52
- 177 誹諧新曠野集(内題)(はいかいしんあらのしゅう)
 三卷 寛山編
 文政七年序刊(無刊記)
 半合一冊 824/2
- 178 いなはやま(いなばやま)
 寸風編
 文政七年跋刊(京、橘屋治兵衛)
 半一冊 824/3
- 179 かれの会(かれのえ)
 *宇橋跋。
 奇淵編
 文政八年刊(無刊記)
 半一冊 825/4
- 180 枇杷園類題発句集(びわえんるいだいほつくしゅう)
 二卷 五道・梅間編
 文政八年刊(名古屋、永楽屋東四郎)
 小二冊 825/2
- 181 枇杷園七部集(びわえんしちぶしゅう)
 *内題「類題士朗發句集」。*五道序、梅間序、庭雅跋。*梅花園藏板。
 士朗著
 〔文政八年序〕刊(刊記欠)
 小二冊 0/130
- 182 枇杷園七部集(びわえんしちぶしゅう)
 *初編・存卷下。

| | | | | |
|-----|--|---------------|-----|--------------------|
| 188 | 十かえり(とかえり) 梅間編 | 文政一〇年序刊(無刊記) | 半一冊 | 8 2 7 / 2 |
| 187 | 俳諧一葉集(はいかいいちようしゅう) 仏兮・湖中編、由誓校 *前編・存卷一・三・五。*湖中序。 *前編・存卷二・四、後編・存卷三・四。 | (文政一〇年)刊(刊記欠) | 中五冊 | 0 / 9 3 |
| 186 | 俳諧一葉集(はいかいいちようしゅう) 仏兮・湖中編、由誓校 *素白序、鳳郎跋、杏坪跋。 | (文政一〇年)刊(刊記欠) | 中四冊 | 8 2 7 / 1 |
| 185 | 五月雨集(さみだれしゅう) 素白・鳳郎編 *素白序、鳳郎跋、杏坪跋。 | 文政九年序刊(無刊記) | 半一冊 | 8 2 6 / 2 |
| 184 | たまくしけ集(たまくしげしゅう) 于明編 *寥松序。 | 文政九年刊(無刊記) | 半一冊 | 8 2 6 / 1 |
| 183 | 俳諧発句古今撰(はいかいはつここんせん) 二卷 蟹守編 *存四編。 | 文政八年序刊(無刊記) | 中二冊 | 8 2 5 / 5 |
| | 士朗著 | (文政八年序)刊(刊記欠) | 小一冊 | 0 / 1 2 2 |

- 189 近來／風体 俳諧蓼の花(きんらいふうていはいかいたではな)
井眉庵編 文政二年序刊(無刊記) 小一冊 828/1
* 桃鳥序、自序。
* 茶外序。
- 190 俳諧千題集(はいかいせんだいしゅう)
田喜庵編 文政二年序刊(刊記欠) 中二冊 828/2
* 存卷上・中。* 四喜庵主人序。* 巢枝堂藏板。
- 191 梅のしるへ(序中題)(うめのしるへ)
松生編、政里・左琴校 文政二年跋刊(無刊記) 横一冊 828/4
* 鶴翁髯山人序、奇松跋。
- 192 〔雲けふり〕(くものけぶり)
蘭香編 文政二年跋刊(京、菊屋平兵衛) 半一冊 828/6
* 申齋序、蘭香跋。
- 193 かえるとし(かえるとし)
暁鳥編 文政二年写(暁鳥) 中一冊 829/11
* 存卷下。
- 194 俳諧故人続五百題(はいかいこじんぞくごひゃくだい)
二卷 一具編 文政二年序刊(江戸、萬笈堂・桂林堂) 小二冊 829/3

| | | | |
|-----|---|-----|--------|
| 195 | <p>*一具序、大虚栗庵序。</p> <p>俳諧故人続五百題(はいかいこじんぞくごひやくだい)</p> <p>一具編</p> <p>文政一二年序刊(江戸、萬笈堂・桂林堂)</p> | 小一冊 | 829/10 |
| 196 | <p>*存卷上。*一具序、大虚栗庵序。</p> <p>晚台七部集(きょうたいしちぶしゅう)</p> <p>二卷 庭雅編</p> <p>文政一二年序刊(江戸、英文蔵)</p> | 小二冊 | 829/2 |
| 197 | <p>いなづか(いなづか)</p> <p>稚篁編</p> <p>文政一二年序刊(無刊記)</p> | 半一冊 | 829/4 |
| 198 | <p>*みち彦序、護物序、もと風跋。</p> <p>齡の華(よわいのはな)</p> <p>聴吹編</p> <p>文政一二年序刊(京、橘屋治兵衛)</p> | 半一冊 | 829/5 |
| 199 | <p>*静々居(伽月)序。</p> <p>雪人集(ゆきのひとしゅう)</p> <p>雪丸編</p> <p>文政一三年序刊(刊記欠)</p> | 半一冊 | 830/2 |
| 200 | <p>*存卷上。*十丈園序。</p> <p>茶の実(ちやのみ)</p> <p>茶田編</p> <p>文政一三年跋刊(無刊記)</p> | 半一冊 | 830/1 |

- 201 〔追／善〕ちる花集〔扉題〕（ついでせんちるはなしゆう）
 吾省編
 〔文政頃〕刊（京、橘屋治兵衛）
 半一冊 0 / 4
 *楓下跋。
- 202 雲雀塚集（ひばりづかしゆう）
 梨雪編
 天保元年序刊（京、菊屋平兵衛）
 半一冊 8 3 0 / 3
 *玄蛙序、梨雪跋。
- 203 いはひ草（いらいぐさ）
 鳳郎編
 天保二年刊（無刊記）
 半一冊 8 3 1 / 3
 *自跋。
- 204 海内千家集（かいだいせんかしゆう）
 夙也・六英編
 天保二年序刊（刊記欠）
 大一冊 8 3 1 / 1
 *存卷上。*方竹序。
- 205 ねむの家吟草（ねむのやぎんそう）
 筵史・素白編
 天保二年跋刊（無刊記）
 半一冊 8 3 0 / 4
 *素白序、筵史跋。
- 206 発句新葉集（ほつくしんようしゆう）
 二卷 鸞太編
 天保三年刊（京、橘屋治兵衛）
 小二冊 8 3 2 / 3

- 207 四町集(内題)(よまちしゅう) * 鸞求序。
 三蔦編 天保三年序刊(広島、坂田忠五郎)
 * 鶯笠序、玄蛙序、和切序、梅室跋。* 屈伸舎藏板。
- 208 <俳/諧> 花実発句集(はいかいかじつほくくしゅう)
 長成編 天保三年序刊(刊記欠)
 * 存春・冬部。* 自序、南井序。
- 209 花実集附録(内題)(かじつしゅうふろく)
 長成編 [天保三年序] 刊(無刊記)
- 210 時雨会(しぐれえ)
 閑斎編 天保四年刊(京、橋屋治兵衛)
- 211 両食集(りょうじくしゅう)
 奇淵編 天保四年序刊(大坂、棉亭)
 * 自序。
- 212 三年振集(内題)(みとせぶりしゅう)
 林曹編 [天保四年序] 刊(刊記欠)
 * 存卷一。* 表紙欠。
- 213 青棠芳余(せいとうほうよ)

青塙編 天保四年跋刊(無刊記)

半一冊 833/1

*存卷下。*鷗嶼守邨約跋。

214 俳諧十万発句集(はいかいじゅうまんほつくしゅう)

(四卷 涼谷編、一具校 天保四年跋刊(無刊記))

中四冊 833/6

*初編。*梅室序、無名跋。

215 ゆきおれ集(封面題)(ゆきおれしゅう)

萍化坊撰、文松編 天保五年刊(京、橋屋治兵衛)

半一冊 834/2

216 〈追/悼〉南無仏(扉題)(ついとうなむぼとけ)

聴松庵撰、琴車編 天保五年刊(京、橋屋治兵衛)

半一冊 834/4

217 〈俳/諧〉流行発句集(はいかりゅうこうほつくしゅう)

長成編 (天保五年)刊(刊記欠)

中一冊 0/40

*存冬部。

218 俳諧十二律(はいかいじゅうにりつ)

五卷 史千編 天保五年序刊(無刊記)

半五冊 834/1

*鶴峰序、源蒼芳跋、一肖序。

乙二七部集(おつにしちぶしゅう)

乙二著、一具・布席編 (天保六年)刊(江戸、英文蔵)

小一冊 0/50

*存卷下。*布席跋。*英文蔵ノ俳書目録ヲ付ス。

| | | | | |
|-----|-------------------------------|---------------|-----|-----------|
| 220 | 雪のわかれ(扉題)(ゆきのわかれ) | | | |
| | 牛哥編 | 天保六年序刊(無刊記) | 半一冊 | 8 3 5 / 2 |
| | *竹二坊追善集。 | | | |
| 221 | 藍川集(らんせんしゅう) | | | |
| | 藍川舎編 | 天保六年奥刊(藍川社蔵板) | 半一冊 | 8 3 5 / 1 |
| | *二編。*蒼虬序。 | | | |
| 222 | 〈俳／諧〉発句名家集(はいかいほつくめいかしゅう) | | | |
| | 二卷 文和編 | 天保七年刊(書賈三五郎) | 小二冊 | 8 3 6 / 2 |
| 223 | 年毎集(序中題)(としごとしゅう) | | | |
| | 杜鷺編 | 天保七年刊(無刊記) | 半一冊 | 8 3 6 / 5 |
| | *富川序。 | | | |
| 224 | 年毎集(序中題)(としごとしゅう) | | | |
| | 杜鷺 | 天保八年序刊(無刊記) | 半一冊 | 8 3 7 / 3 |
| | *丈翠序。 | | | |
| 225 | としごと集(としごとしゅう) | | | |
| | 杜鷺編 | 天保一二年刊(無刊記) | 半一冊 | 8 4 1 / 5 |
| | *琴亭序。 | | | |
| 226 | 〈俳諧／発句〉新題葉集(はいかいほつくしんだいようしゅう) | | | |

- 227 松隣編、林曹校 〔天保七年〕刊〔刊記欠〕
 *存春・夏・秋部。*梅室序。
 〔俳諧／発句〕新題葉集(はいかいほつくしんだいようしゅう)
 中一冊 0 / 3 3
- 228 松隣編、林曹校 〔天保七年〕刊〔刊記欠〕
 *存夏部。
 俳諧発句新題葉集(内題)(はいかいほつくしんだいようしゅう)
 松隣編、林曹校 〔天保七年〕刊〔刊記欠〕
 中一冊 0 / 1 3 2
- 229 きさらぎ集(きさらぎしゅう)
 *存夏部。
 洒入編 天保七年跋刊(無刊記)
 半一冊 8 3 6 / 1
- 230 俳諧今七部集(はいかいいましちぶしゅう)
 *自序、三蔦跋。
 二卷 庚年編 天保八年序刊(江戸、万笈堂)
 小二冊 8 3 7 / 2
- 231 俳諧今七部集(はいかいいましちぶしゅう)
 *幸舎序、自序、一兆跋。
 庚年編 〔天保八年序〕刊・嘉永六年修(江戸、野村新兵衛等三肆)
 小二冊 8 5 3 / 4
- 232 〔俳諧／発句〕はつくさ集(はいかいはつくはつくさしゅう)
 *存卷下。*一兆跋。

- 233 四卷 蟻州編 天保九年刊(京、野田治兵衛等七肆)
*千草序。
- 俳諧四国集(内題)(はいかいしこくしゅう)
椎亭柴叟編、梅左校 [天保九年]刊(刊記欠)
*存冬部。 中一冊 0/36
- 234 今人発句集(こんじんほつくしゅう)
二卷 禾木園編 天保九年序刊(江戸、須原屋茂兵衛・岡田屋嘉七)
*松園序。 横二冊 838/2
- 235 桂花園/半百忌 追善(けいかえんはんひゃつきついでん)
為興等編 天保一〇年刊(無刊記) 横一冊 839/5
- 236 花の栄(はなのさかえ)
松風軒編 天保一二年刊(京、橋屋治兵衛) 半一冊 840/1
- 237 香語山集(かごやましゅう)
春俗編 天保一二年序刊(無刊記) 半一冊 840/2
- 238 発句万題集(ほつくまんたいしゅう)
四卷 庚年編、東溟校 天保一二年刊(江戸、英大助等一二肆)
*一具序、由誓跋。*英大助ノ広告ヲ付ス。 中四冊 841/8
- 239 俳諧 今人五百題(はいかいこんじんごひゃくだい)

- 東溟輯、千輅校
〔天保二年〕刊〔刊記欠〕
*存春・夏部。*梅橋序。
- 240 〈俳／諧〉今人五百題(はいかいこんじんごひやくだい)
東溟輯、千輅校
〔天保二年〕刊〔刊記欠〕
*存秋・冬部。
- 241 続今人五百題(内題)(ぞくこんじんごひやくだい)
為山・久次編
弘化二年刊(江戸、英文蔵)
*存秋・冬部。*一具跋。
- 242 〈俳／諧〉今人五百題(はいかいこんじんごひやくだい)
四卷 為山編
嘉永五年序刊(江戸、英文蔵)
*三編。*為山序。
- 243 〈俳／諧〉今人五百題(はいかいこんじんごひやくだい)
為山編
〔嘉永五年序〕刊(江戸、英文蔵)
*三編。*存夏・秋・冬部。*為山序。
- 244 〈はい／かい〉玉のひかり(はいかいたまのひかり)
道旧著、季隆編
天保一二年奥刊(編者蔵版)
*天翁序。*遠藤亀之輔彫。
- 245 出雲三五十員(いずもさんごじゅういん)

小一冊 841/11

小一冊 841/6

小一冊 845/3

小四冊 852/2

小三冊 852/3

中一冊 841/2

| | | | |
|-----|---|-----|-------------|
| 246 | 遅楽庵監定、汀柳撰、固有補 天保一四年刊(京、橘屋治兵衛) *撰者序、横山藍齋跋。 雪の戸集(ゆきのとしゅう) | 半一冊 | 8 4 3 / 1 0 |
| 247 | 遅楽庵監定、汀柳撰、白巳補、琴留編 天保一四年刊(京、橘屋治兵衛) 花せんふ(はなせんぶ) | 半一冊 | 8 4 3 / 1 1 |
| 248 | 有節編 天保一四年刊(京、近江屋利助) 京蕎麦(きょうそば) | 半一冊 | 8 4 3 / 3 |
| 249 | 麦慰舎社中編 天保一四年刊(京、近江屋利助) *梅室序。 雲煙集(うんえんしゅう) | 半一冊 | 8 4 3 / 4 |
| 250 | (祭魚編) 天保一四年刊(枯魚堂社中蔵板) *金菜序。 露しくれ(つゆしくれ) | 半一冊 | 8 4 3 / 5 |
| 251 | 観流亭門人編 天保一四年序刊(無刊記) *専之序。 偕美編 天保一四年序刊(京、近江屋利助) *自序。 ふるさと草(ふるさとぐさ) | 半一冊 | 8 4 3 / 1 7 |

- 252 暇のはれ(いとまのはれ)
 娛水編
 *自序。
 天保一四年序刊(京、橘屋治兵衛)
 半一冊 (8 4 3 / 9)
- 253 今様類題集(いまようるいだいしゅう)
 二卷
 *梅室序。
 天保一五年刊(大坂、文淵閣)
 小二冊 (8 4 4 / 1)
- 254 旅のひとつ(たびのひとつ)
 風外編
 天保一五年刊(無刊記)
 半一冊 (8 4 4 / 1 2)
- 255 たたひとつ(ただひとつ)
 二卷 金波編
 天保一五年刊(無刊記)
 半合一冊 (8 4 4 / 2)
- 256 おひさらへ(おいさらえ)
 *内題「月影集」。*松什序、由誓跋。
 桃五編
 天保一五年刊(京、菊屋平兵衛)
 半一冊 (8 4 4 / 5)
- 257 雪華集(ゆきのはなしゅう)
 素光編
 *存卷下。*梅室跋。
 天保一五年刊(京、菊屋平兵衛)
 半一冊 (8 4 4 / 7)
- 258 としなみしふ(としなみしゅう)
 *蒼俗序。

- 259 逸淵編 天保一五年序刊(無刊記)
 *逸淵序。
 ひとつくり(ひとつくり)
 涼莎編 天保一五年序刊(無刊記)
 *梅室序。
- 260 立机集(りつきしゅう)
 五律編 [天保頃] 刊(京、近江屋又七)
- 261 俳かい漫画(はいかいまんが)
 為永春水 [天保頃] 刊(無刊記)
- 262 蕉門俳諧類題集(内題)(しょうもんはいかいいるいだいしゅう)
 *自序、秋光庵主人序。
 [江戸後期] 写
- 263 花の葉集抜句(はなのしべしゅうぬきく)
 *表紙欠。
 [江戸後期] 写
- 264 〔誹／諧〕法の近道(はいかいのりのちかみち)
 如紅編 [江戸後期] 写
- 265 四季発句控(扉題)(しきほつくひかえ)
 横一冊 0 / 3 1

- 266 奇淵坊撰 〔江戸後期〕写
 十丈園筆記(内題)(じゅうじ、ようえんひつき)
 天然居士著、幡蓼牙校 〔江戸後期〕写
 *存卷二。*末尾欠。
- 267 〔佚題俳書〕(仮題)(いつだいはいしよ)
 〔江戸後期〕写
 半一冊 0 / 18
- 268 〔佚題俳書〕(仮題)(いつだいはいしよ)
 百茶編カ 〔江戸後期〕写
 半一冊 0 / 135
- 269 笠の露集(かさのつゆしゅう)
 栄圃著 〔江戸後期〕刊(刊記欠)
 半一冊 0 / 110
 *存卷上。
- 270 〔望月孤月追善集〕(仮題)(もちつきこげつついぜんしゅう)
 〔江戸後期〕刊(無刊記)
 中仮一冊 0 / 16
- 271 〔手向草〕(たむけぐさ)
 玄蛙編 〔江戸後期〕刊(無刊記)
 半一冊 0 / 7
 *井眉序。
- 272 俳諧夫木集(内題)(はいかいふぼくしゅう)
 溪斎編 〔江戸後期〕刊(刊記欠)
 中一冊 0 / 63

*存卷上。

273 山廻寿集(やまのことぶきしゅう)

竹隣編

[江戸後期] 刊(京、橋屋治兵衛)

半一冊 0/68

274 天満宮正月々浪(内題)(てんまんぐうしゅうがつつきなみ)

八千坊撰

[江戸後期] 刊(無刊記)

小一冊 0/20

275 [佚題俳書](いつだいはいしょ)

桃五編

[江戸後期] 刊(京、近江屋利助)

半一冊 0/39

276 をりそへ集(おりそえしゅう)

芋丈編

弘化二年刊(京、近江屋利助)

半一冊 844/3

*封面ニ魁屋印アリ。*中川禄序、有節跋。

277 <俳諧/発句> 続大洋集(はいかいほつくぞくたいようしゅう)

三卷 八千房編

弘化二年刊(大坂、野田屋元三郎)

中三冊 845/1

278 <流行/発句> 花楓一調(りゅうこうほつくかふういつちょう)

二卷 三千坊編

弘化二年刊(大坂、筑後屋武兵衛)

中二冊 845/5

*二編。*鵬雲序。

279 つきゆみ集(つきゆみしゅう)

見外編

弘化二年序刊

半一冊 845/4

*三編。*大鵬序。

- 280 つきゆみ集(つきゆみしゅう)
見外編 嘉永元年刊(無刊記)
*六編。 半一冊 848/3
- 281 つき弓集(つきゆみしゅう)
見外編 安政二年序刊(無刊記)
*一一編。 *日置秀実序、呉由跋。 半一冊 855/10
- 282 <名家/発句>一掬集(めいかほつくいつきくしゅう)
由誓編 弘化二年跋刊(大坂、河内屋茂兵衛)
*方円序、白跋。 中一冊 845/2/1
- 283 <名家/発句>一掬集(めいかほつくいつきくしゅう)
由誓編 弘化二年跋刊(大坂、河内屋茂兵衛)
*方円序、由誓跋。 中一冊 845/2/2
- 284 月下稿(げっかこう)
孤月編 弘化三年刊(無刊記)
月下稿(げっかこう) 半一冊 846/1
- 285 類題発句真葛集(るいだいほつくまくずしゅう)
九起編 弘化三年刊(京、近江屋利助)
*存春・夏・冬部。 *九起序。 中三冊 846/2
- 286 <俳/諧>今人題林集(はいかいこんじんだいりんしゅう)

- 292 芳新集(ほうしんしゅう)
 *五編。*万像序。
- 291 芳新集(ほうしんしゅう)
 有節編
 *三編。*玉繩序。
 嘉永三年序刊(京、近江屋利助)
 半一冊 850/12
- 290 芳新集(ほうしんしゅう)
 有節編
 *五編。*島一鷗序。
 弘化四年刊(京、近江屋利助)
 半一冊 847/12
- 289 芦の芽立集(あしのめだちしゅう)
 井左編
 *二編。*白序。
 弘化四年刊(大坂、河内屋佐助)
 小合一冊 847/11
- 288 芦浪集(あしなみしゅう)
 花屋庵撰、自在庵校
 *虚白序。
 弘化三年序刊(無刊記)
 横一冊 846/6
- 287 〔四季／発句〕類題花筏集(しきほつくるいだいはないかだしゅう)
 四卷 鷺秋編、素信校
 *以兄序、兎州序。
 〔弘化三年〕刊(大坂、文栄堂)
 中合一冊 0/48
- 二卷 碓嶺編
 弘化三年刊(江戸、播磨屋勝五郎)
 中二冊 846/5

- 293 有節編
〔嘉永四年〕刊(京、近江屋利助) 半一冊 0 / 8 1
*六編。
- 293 芳新集(ほうしんしゅう)
〔嘉永四年〕刊(京、近江屋利助) 半一冊 8 5 1 / 9
有節編
- 294 四季の華(しきのはな)
〔嘉永四年〕刊(京、橋屋治兵衛) 半一冊 8 4 7 / 1 3
*六編。
雨橋等編
- 295 俳諧新古今(はいかいしんこきん)
〔嘉永四年〕刊(大坂、筑後屋武兵衛) 中二冊 8 4 7 / 1 5
*曲齋序。
水月撰
- 296 近世俳諧十家類題集(内題)(きんせいはいかいじじつかるいだいしゅう)
〔嘉永四年〕刊(江戸、英大助) 中一冊 8 4 7 / 4
祖郷編
*存秋・冬部。
- 297 華ひより(はなびより)
〔弘化四年〕刊(京、橋屋治兵衛) 半一冊 8 4 7 / 5
其舟編
*汀柳序。
- 298 すかみの(すがみの)

- 304 まとあかり(まどあかり)
*梅室序。
- 303 類題発句三休集(るいだいほつくさんたいしゅう)
四卷 応泉編
弘化五年刊(京、舛屋勘兵衛)
*梅室序。
- 302 類題発句三休集(るいだいほつくさんたいしゅう)
四卷 応泉編
弘化五年刊(京、舛屋勘兵衛)
*存花・鳥・風・月部。 *五翠序。
- 301 俳諧早苗集(はいかいさなえしゅう)
井肩庵編
弘化四年序刊(刊記欠)
中四冊 847/7
- 300 〈追／善〉雪仏集(ついでんゆきぼとけしゅう)
西武連中編
弘化四年序刊(無刊記)
半一冊 847/6
*専之序。
- 299 このとき集(このときしゅう)
杜陵編
弘化四年序刊(京、近江屋利助)
半一冊 847/10
*梅室序。
- 鷺眠編
弘化四年序刊(無刊記)
半一冊 847/1
*内題「菅蓑集」。*西馬序、為山跋。

- 月坡編 嘉永元年刊(京、菊屋平兵衛) 半一冊 848/4
 *梅室序。
- 305 伊予すだれ(いよすだれ)
 樵柯編 嘉永元年刊(京、菊屋喜兵衛) 半一冊 848/7
 *樵柯序。
- 306 澁海苔集(内題)(すきのりしゅう)
 得蕪編 嘉永元年序刊(無刊記) 中一冊 848/8
 *為山序。
- 307 俳諧年月草(はいかいとしつきぐさ)
 杉雨編 嘉永二年刊(江戸、須原屋茂兵衛) 中一冊 849/6
 *初編。*杉台序、松什序。
- 308 今人名家類題句集(内題)(こんじんめいかるいだいくしゅう)
 祖郷編 嘉永二年刊(江戸、万笈堂) 中一冊 849/7
 *一具序、花外序。
- 309 俳諧 嘉永五百題(はいかいかえいごひやくだい)
 菊朗編 嘉永二年刊(江戸、青雲堂) 小一冊 849/11
 *存春・夏部。*一具序。
- 310 俳諧 嘉永五百題(封面題)(はいかいかえいごひやくだい)

- 316 菊朗編 嘉永二年刊(江戸、青雲堂)
*存春・夏部。*一具序。
小一冊 849/14
- 311 嘉永五百題発句集(内題)(かえいごひやくくだいほつくしゅう)
菊朗編 [嘉永二年]刊(江戸、青雲堂)
*存秋・冬部。
小一冊 0/136
- 312 類題発句百川集(るいだいほつくひやくせんしゅう)
四卷 芹舎編、飄齋校 嘉永二年刊(大坂、河内屋喜兵衛等八肆)
*初編。*青霞序、校者附言、其翠跋。
中四冊 849/4
- 313 類題発句百川集(るいだいほつくひやくせんしゅう)
芹舎編、飄齋校 [嘉永二年]刊(刊記欠)
*初編。*存春部。*青霞序。
中一冊 848/2
- 314 類題彩花集(るいだいさいかしゅう)
車大編、桃室校 嘉永二年序刊(大坂、宝文堂)
*存卷一。*桃室序。
中一冊 849/9
- 315 類題詞花発句集(内題)(るいだいしかほつくしゅう)
光林編 嘉永二年序刊(大坂、伊予屋善兵衛等六肆)
*花屋主人序。
横一冊 849/1
- 316 類題詞花発句集(内題)(るいだいしかほつくしゅう)

- 317 光林編 嘉永二年序刊(大坂、伊予屋善兵衛等六肆) 横一冊 849/12
 *花屋主人序。
 類題詞花発句集(内題)(るいだいしかほつくしゅう)
 光林編 嘉永二年序刊(大坂、伊予屋善兵衛等六肆) 横一冊 849/2
 *花屋主人序。
- 318 光林編 嘉永二年序刊(大坂、伊予屋善兵衛等六肆) 横一冊 849/3
 類題詞花発句集(内題)(るいだいしかほつくしゅう)
 光林編
 *花屋主人序。
- 319 光林編 嘉永四年序刊(大坂、伊予屋善兵衛等六肆) 横一冊 851/2
 類題詞花発句集(内題)(るいだいしかほつくしゅう)
 光林編
 *二編。*鶯宿序。*園井庵藏板。
- 320 光林編 嘉永四年序刊(大坂、伊予屋善兵衛等六肆) 横一冊 851/8
 類題詞花発句集(内題)(るいだいしかほつくしゅう)
 光林編
 *二編。*鶯宿序。*園井庵藏板。
- 321 光林編 嘉永六年序刊(大坂、伊予屋善兵衛等一四肆) 横一冊 853/1
 詞花類題発句集(内題)(しかるいだいほつくしゅう)
 光林編
 *三編。*鼎左序。
- 322 華の手向(はなのたむけ)

左川社中編

嘉永二年跋刊(京、橋屋治兵衛)

半一冊 849/15

*雪裡序、松雲跋。

323 人日の賀筵(内題)(じんじつのがえん)

可水・五禽編、柳齋・和光補 嘉永三年刊(京、近江屋利助)

半一冊 850/1

324 〈俳／諧〉近世六百題(はいかいきんせいろうびやくだい)

二卷 以兄編 嘉永三年刊(京、竹岡文祐)

小二冊 850/10

*以兄序、永好序。

325 〈俳諧／正風〉題林発句集(はいかいしょうふうだいらんほつくしゅう)

由誓編 嘉永三年刊(伊勢、嵩山堂)

中三冊 850/11

*存春・夏・秋部。*松什序。

326 〈俳諧／正風〉題林発句集(はいかいしょうふうだいらんほつくしゅう)

由誓編 嘉永三年刊(伊勢、嵩山堂)

小二冊 850/6

*存春・夏・冬部。*松什序。

327 今人千題発句集(こんじんせんたいほつくしゅう)

四卷 梅室編 嘉永三年刊(大坂、河内屋茂兵衛)

中四冊 850/5

*梅室序、田和跋。

328 このはな集(このはなしゅう)

二卷 花屋庵撰、桂花庵・自在庵校 嘉永三年刊(大阪、塩屋忠兵衛・塩屋弥七)

- 329 清哦集(せいがしゅう) *初編・二編。*自在庵序。
 芹舎編 嘉永三年刊(京、君水社蔵版) 横二冊 850/7
- 330 草結び(序中題)(くさむすび)
 *初編。*瓢齋序。
 凍洞等編 嘉永三年序刊(京、菊屋平兵衛) 半一冊 850/13
- 331 新撰発句集(しんせんほつくしゅう)
 *存春部。*柴川序。
 春泉編 嘉永三年序刊(大坂、田中宋栄堂) 小一冊 850/4
- 332 みつあかり(みずあかり)
 *梅室序、碩水跋。
 碩水編 嘉永三年跋刊(無刊記) 半一冊 850/8
- 333 浪花五百題(なにわごひゃくだい)
 *存卷下。
 鼎左編 嘉永四年刊(大坂、塩屋忠兵衛等五肆) 横一冊 851/5
- 334 浪華五百題集(内題)(なにわごひゃくだいしゅう)
 鼎左編 [嘉永四年]刊・[安政二年]印(無刊記) 横一冊 855/13

335 〈俳／諧〉題英発句集(はいかいだいせいほつくしゅう)
*存卷上。*鼎左序。
四卷 梅室編 嘉永四年序刊(堺、具足屋重兵衛)
中四冊 851/1

336 新花兎(しんはなうさぎ)
*釣玄序。
五卷 天来編 嘉永四年序刊(大坂、塩屋忠兵衛・塩屋弥七)
中五冊 851/3

337 富貴集(ふうきしゅう)
*天来序、眉年跋。*絵入(淡彩刷)。
棉亭編 嘉永四年序刊(大坂、棉亭国広)
半一冊 851/4

338 筐の柳(かたみのやなぎ)
*梅室序。*絵入(淡彩刷)。
敬止編 嘉永五年刊(京、橘屋治兵衛)
中一冊 852/11

339 〈俳／諧〉近世五百題(はいかいきんせいごひやくだい)
鳥吟編 嘉永五年刊(江戸、青雲堂)
*存卷上。*西馬序。
小一冊 852/6

340 近世五百題集(きんせいごひやくだいしゅう)
鳥吟編 [嘉永五年]刊(楓川堂)
*存卷上。*万古序。
中一冊 0/82

- 341 俳諧百家類題集(内題)(はいかいひやつかるいだいしゅう)
 祖郷撰、護民校 嘉永五年刊(江戸、英文蔵等一〇肆)
 *存秋・冬部。 中一冊 852/9
- 342 何を種(序中題)(なにをたね)
 蒼山編 嘉永五年刊(京、近江屋利助)
 *自序。 半一冊 852/8
- 343 累葉集(序中題)(るいようしゅう)
 槐庵編 嘉永五年序刊(刊記欠)
 *梅室序。 半一冊 852/12
- 344 流行百家発句集(内題)(りゅうこうひやつかほつくしゅう)
 百古編 嘉永五年序刊(江戸、千鐘房)
 *存卷上。*為山序、瓢々齋序。 中一冊 852/5
- 345 たま川(たまがわ)
 五木庵編 [嘉永六年]刊(無刊記)
 若葉光(わかばのひかり) 中一冊 0/99
- 346 序仏編 嘉永六年序刊(無刊記)
 *自序。 半一冊 853/6
- 347 東西集(とうざいしゅう)

- 雪簾編
嘉永六年序刊(無刊記)
半一冊 853/2
- *逸淵序、細木跋。
- 348 東西集(とうざいしゅう)
碩水編
安政二年刊(無刊記)
半一冊 855/6
- *四編。*奥二「嘉永八卯のとし」トアリ。
- 349 東西集(とうざいしゅう)
碩水編
〔安政四年〕刊(無刊記)
半一冊 857/7
- *六編。
- 350 東西集(とうざいしゅう)
碩水編
〔安政四年〕刊(無刊記)
半一冊 857/8
- *六編。
- 351 類題発句方田集(内題)(るいだいほつくほうえんしゅう)
梅室著、鶯宿編、光林校 安政二年刊(大坂、河内屋源七郎等八肆)
横一冊 855/3
- *自序。
- 352 類題発句小雨集(内題)(るいだいほつくこさめしゅう)
艾園著、山朗校
〔安政二年〕刊(大坂、河内屋茂兵衛)
中一冊 0/125
- *存春部。*樋口良斎序、丈翠序。
- 353 〈名／家〉発句五千題(めいかほつくごせんだい)

- 365 364 363 362 361 360
- 相応軒編
*九起序。
安政四年序刊(京、近江屋利助)
半一冊 857/5
- さむしろ(さむしろ)
楓千編
*内題「小筵日記」。
*芹舎序。
安政三年刊(京、近江屋利助)
半一冊 856/3
- 蓬萊集(ほうらいしゅう)
故厓編
*蘭陵序。
安政二年刊(書肆名欠)
半一冊 856/5
- まつのはれ(まつのはれ)
鶴僊編
安政二年序刊(京、橘屋治兵衛)
半一冊 856/2
- *鷺仙序。
山東日記(さんとうにつき)
赤甫編
安政四年刊(無刊記)
半一冊 857/2
- *為山序。
日和虹(ひよりにじ)
知風編
〔安政四年〕刊(無刊記)
半一冊 857/10
- *而后序。*卷首二陰刻(青刷)一葉アリ。
はすの露(はすのつゆ)

- 烏舟編
安政四年序刊(京、近江屋利助)
半一冊 857/6
- * 里童序。* 絵入。
穂長集(序題)(ほながしゅう)
琴堂編
安政四年序刊(無刊記)
半一冊 857/1
- * 枕山序、西馬跋。
こほれうめ(こぼれうめ)
葵白・蒼湖編
安政四年序刊(無刊記)
半一冊 857/9
- * 西阿弥序。
起々集(おきおきしゅう)
鶴盟舎編
安政五年序刊(無刊記)
半一冊 858/11
- * 無名序。
369 俳／諧 安政五百題(はいかいあんせいごひやくだい)
墨芳編
〔安政五年序〕刊(江戸、英文蔵)
小二冊 0/133
- * 存巻下。
370 文久六百題(ぶんききゅうろつびやくだい)
氷壺編
〔文久二年〕刊(無刊記)
中一冊 0/108
- * 存秋・冬部。
371 年浪春秋選(としなみしゅんじゅうせん)

公成編

〔文久三年〕刊〔無刊記〕

中仮一冊 0 / 117

372 〈俳／諧〉文久千三百題(はいかいぶんきゆうせんさんびやくだい)

芳草撰、草甫校

文久四年刊(江戸、文苑閣蔵版)

中一冊 864 / 1

*存春部。*嶺隱道人序。

373 越のやま桜(内題)(こしのやまざくら)

芳草編

慶応元年序刊〔無刊記〕

折一帖 865 / 1

*喜遊序。*絵入。

374 〈俳／諧〉慶応六百題(はいかいけいおうろつびやくだい)

二卷 確嶺編

慶応二年刊(東都、万笈閣)

小二冊 866 / 3

*抱義序。

375 〈俳／諧〉慶応六百題(はいかいけいおうろつびやくだい)

確嶺編

〔慶応二年〕刊〔刊記欠〕

小一冊 866 / 5

*存卷上。*抱義序。

376 〈発／句〉花の井集(ほつくはなのいしゅう)

二卷 有節撰、平安社徒校 慶応二年刊(平安、松屋久兵衛)

中二冊 866 / 1

*五仲庵老人序。

377 〈発／句〉花の井集(ほつくはなのいしゅう)

有節撰、平安社徒校 〔慶応二年〕刊〔大坂〕、小川蓬原堂

中一冊 0 / 43

- 378 存卷上。*文海序。
 ありがたいそ集(ありがたいそしゅう)
 (碩水編)
 *碩水序。
 慶応二年序刊(無刊記)
 半一冊 866/2
- 379 青梅集(扉題)(おうめしゅう)
 (介居編)
 *嵐牛序。
 慶応二年序刊(無刊記)
 半一冊 866/4
- 380 寢覚月(ねざめのつき)
 中和亭社中編
 *嵐牛序。
 慶応三年刊(京、橋屋治兵衛)
 半一冊 867/1
- 381 春の水(はるのみず)
 又甫編
 (慶応四年)刊(書肆名欠)
 中一冊 868/1
- 382 花紅葉集(はなもみじしゅう)
 *酔雨跋。
 幕末 刊(大坂、塩屋弥七・塩屋忠兵衛)
 中一冊 0/42
- 383 鵬雲撰
 (題分/発句)一掬集(だいわけほつくいきくしゅう)
 黙池編
 (幕末)刊(刊記欠)
 中一冊 0/100
- 384 *存二編冬部。
 開晴(かいせい)

非僊人編

明治二年刊(無刊記)

半一冊

869/1

*文寿坊序。

385 卯辰巳午集(扉題)(うたつみうましゅう)

柳後編

[明治]写

中一冊

867/2

④家集

386 芭蕉句選(ばしょうくせん)

華雀編

文化元年写(蘭陵)

半一冊

804/3

*外題ハ後書ナリ。*白序。

387 諸九尼句集(しよきゆうにくしゅう)

諸九尼著、竹兩ほか編

[天明六年]刊(刊記欠)

半一冊

786/1

*存卷上(卷首ニ落丁アリ)。

388 掌中麦林舎乙由発句集(内題)(しようちゅうばくりんしゃおつゆうほつくしゅう)

乙由著

[江戸中期]刊(無刊記)

特小合一冊

0/59

*護物編『掌中新五百題』(初編・三編)ヲ合綴。

389 梧亭句叢(ごていこそう)

凡十編

文政八年序刊(無刊記)

半一冊

825/6

*篤老序、不二老人跋。

- 390 梅室家集(内題)(ばいしつかしゅう)
 二卷 梅室著、林曹校 天保一〇年刊(大坂、加賀屋善威)
 *虚白序、通流跋。 中二冊 839/2
- 391 梅室家集(内題)(ばいしつかしゅう)
 二卷 梅室著、林曹校 天保一〇年刊(大坂、加賀屋善威)
 *虚白序、通流跋。 中二冊 839/3
- 392 梅室〔家集〕(ばいしつかしゅう)
 梅室著、門人校 〔江戸後期〕写
 *存卷下。 中仮一冊 0/142
- 393 対塔庵蒼虬句集(たいとうあんそうきゅうくしゅう)
 蒼虬著、門人校 天保一〇年刊(無刊記)
 *存秋・冬部。 半一冊 839/6
- 394 〔増補／掌中〕蒼虬発句集(そうほしゅうちゅうそうきゅうほつくしゅう)
 梅室編 嘉永五年跋刊(無刊記)
 *梅室序、大夢跋。 小一冊 852/1
- 395 はわけの風(内題)(はわけのかぜ)
 和切著、霞卜校 天保一三年跋刊(広島、世並屋伊兵衛・大坂、塩屋忠兵衛)
 *表紙欠。*維石序、校者跋。*洗耳堂蔵版。 半一冊 842/5

396 発句集(ほつくしゅう)

一笑庵真光著

〔江戸後期〕写

横一冊 0/60

397 〔俳／諧〕一茶発句集(はいかいいっさほつくしゅう)

二卷 墨芳編

嘉永元年刊(信濃、葛屋伴五郎等三肆)

小二冊 848/6

*一具序、桜園主人序。

398 道のとり草(みちのとりくさ)

貞玉著

〔文久四年〕写〔自筆〕

横一冊 864/6

⑤連句

399 芭蕉翁誹諧集(内題)(はしゅうおうはいかいしゅう)

蝶夢編

天明六年刊(京、井筒屋莊兵衛・橘屋治兵衛)

半一冊 786/2

*存卷上。*自序。

400 〔佚題俳書〕(いつだいはいしよ)

〔江戸中期〕刊〔無刊記〕

横一冊 0/86

401 芭蕉袖草紙(はしゅうそぞうし)

三卷 奇淵編

文化八年刊〔無刊記〕

横三冊 811/5

402 芭蕉袖草紙(はしゅうそぞうし)

奇淵編

文化八年刊(大坂、藤屋善七等一五肆)

横一冊 811/6

*存発句部。

403 芭蕉袖草紙(ばしょうそでそうし)

奇淵編

文化八年刊(無刊記)

横一冊 811/10

*存卷下。

404 芭蕉翁附合集評注(内題)(ばしょうおうつけあいひょうちゅう)

雪簫編

文化一二年刊(大阪、河内屋嘉七)

小一冊 815/7

*存卷下。

405 梅室附合集(ばいしつつけあいしゅう)

二卷 菊所編

文政一一年跋刊(江戸、金華堂)

中二冊 828/3

*八朶序、世南跋。

406 [矢上連拔句集](やがみれんぬきくしゅう)

矢上連著

[文政頃]写

半一冊 0/67

407 附合双玉集(つけあいそうぎよくしゅう)

二卷 梅室等

天保四年序刊(大阪、塩屋忠兵衛等三肆)

中二冊 833/5

*比良城序。

408 今人付合集(こんじんつけあいしゅう)

三卷 禾木園編

天保一一年刊(江戸、英文蔵)

横三冊 840/4

*瑞園賀淳序。

- 409 誹諧之連哥二百韻(はいかいのれんがにひゃくいん)
 春庭独吟 [天保二二年]写〔自筆〕
 横仮一冊 841/10
- 410 方四俳諧集(ほうえんはいかいしゅう)
 四卷 卓丈編 天保二二年刊(大坂、伊丹屋善兵衛)
 中四冊 840/3
 *山蔭跋。
- 411 方四俳諧集(ほうえんはいかいしゅう)
 卓丈編 天保二二年刊(大坂、伊丹屋善兵衛)
 中一冊 0/107
 *存卷下。*山蔭跋。
- 412 [四季混雑集](しきこんざつしゅう)
 青池等著 [天保頃]写
 横一冊 0/75
- 413 [桐序千句](とうじよせんく)
 桐序独吟 [江戸後期]写
 半一冊 0/76
- 414 蒼虬翁俳諧集(内題)(そうきゅうおうはいかいしゅう)
 二卷 梅通編 弘化四年刊(和歌山、帯屋伊兵衛等四肆)
 半合一冊 847/14
 *芹舎序、梅通序。
- 415 蒼虬翁俳諧集(そうきゅうおうはいかいしゅう)
 梅通編 弘化四年写(沢水園芹舎)
 横一冊 847/2
 *刊本ノ写シ。

416 蒼虬翁俳諧集(そうきゅうおうはいかいしゅう)

梅通編
〔明治〕写

大一冊 847/8

*刊本ノ写シ。

417 槐窓俳諧集(かいそうはいかいしゅう)

槐窓悠々社中撰、少哉・荷了校 嘉永五年刊(書肆名欠)

横一冊 852/10

418 あしまふね(あしまふね)

碑山・桃下・芹舎・奇鼎 嘉永六年刊(京、橘屋久兵衛)

半一冊 853/3

*内題「百韻」。*印記「楽山文/庫之記」。

419 たけうま(たけうま)

曲川編
〔嘉永以後〕刊(無刊記)

半一冊 0/38

420 かつしか五哥仙(かつしかごかせん)

松朗編
文久四年刊(書肆名欠)

半一冊 864/2

⑥紀行・俳文

421 移芭蕉辞(ばしょうをうつすことば)

芭蕉著
寛政一〇年写(玉浦漁翁)

特大一冊 798/1

*表紙欠。

422 〔おくのほそ道〕(おくのほそみち)

芭蕉

文政五年刊(京、浦井徳右衛門等三肆)

半冊 822/12

*存巻下。 *棕窓跋。 *絵入。 *黒川友三郎彫。

423 俳諧発願文(はいかいほつがんもん)

支考編

正徳五年序刊(京、たち花屋治兵衛)

半一冊 715/1

*自序。

424 発願文註釈(ほつがんもんちゅうしゃく)

支考編、曲斎注

嘉永六年刊(京、橋屋治兵衛)

853/0

*袋ノミ存。

425 本朝文鑑(ほんちちょうぶんかん)

支考編

享保二年序刊(刊記欠)

大三冊 717/2

*存巻一・二之三・四之五。 *自序。

426 和漢文操(わかんぶんそう)

支考編

享保一二年刊(京、橋屋治兵衛)

大六冊 727/1

*存巻一・三・七。 *吾仲序、自序。

427 [桃の首途](もものかどで)

廬元坊編

[享保一三年]刊(刊記欠)

半一冊 728/8

*存巻中。

428 藤の首途(ふじのかどで)

- 廬元坊編
〔享保一六年〕刊(京、橋屋治兵衛)
半二冊 731/1
*存卷中・卷下。
- 429 芙蓉文集(ふようぶんしゅう)
耳得編、蓼太校
〔宝曆一三年序〕刊(京、井筒屋庄兵衛・江戸、辻村五兵衛)
中一冊 763/1
*存卷下。*校者跋。
- 430 紙魚日記(しみにつき)
風律著
明和元年奥刊(京、額田正三郎)
半一冊 764/2
- 431 鳳巾の晴(いかのはれ)
*額田正三郎ノ「蕉門野坡流誹諧書目録」ヲ付ス。
以哉坊編
安永三年序刊(刊記欠)
半二冊 0/120
*存卷七・八。*五竹坊序。
- 432 鳳巾の晴(いかのはれ)
以哉坊編
安永三年序刊(刊記欠)
半一冊 0/37
- 433 鶉衣(うずらごろも)
*存一卷(経廻之部七)。
也有著、六林・大田南畝編(天明八年)刊(刊記欠)
半一冊 0/78
*高編・存卷上。*巴人序。
- 434 篤老園自撰句帖初編誹文之部(内題)(とくろうえんじせんくじょうしよへんはいぶんのぶ)

- 二卷 篤老編、鶴居等校 文政二年奥刊(無書肆名)
 *坂井積序。 大二冊 8 1 9 / 3
- 435 新編俳諧文集(しんぺんはいかいぶんしゅう)
 二卷 蟹守編 文政三年序刊(無刊記)
 *夏雲序、鶯笠序。 半二冊 8 2 0 / 5
- 436 [萍日記](うきくさにつき)
 玄蛙編 [文政六年]刊(無刊記)
 *三編。 半一冊 8 2 3 / 7
- 437 雨後行(うごこう)
 芝鳳著 [江戸後期]写
 大一冊 0 / 6 1
- 438 ふたのこゑ(ふたのこえ)
 *「温古集」ヲ付ス。
 何笠著 [江戸後期]写
 半一冊 0 / 6 2
- 439 [梅通俳文](仮題)(ばいつうはいぶん)
 梅通著 [江戸後期]写
 大仮一冊 0 / 8
- 440 ⑦ 併論
 去来抄(きよらいししょう)

- 去来著
 文化元年写(文里)
 半四冊
 804/1
 *存卷二・五。
- 441 露川責(ろせんぜめ)
 支考著
 〔江戸後期〕写
 半一冊
 0/85
- *別名「口状」。
- 442 俳諧秘伝ちか道集(はいかいひでんちかみちしゅう)
 飛良編
 明和五年刊(京、中西卯兵衛・田中庄兵衛)
 小一冊
 768/1
 *存卷下。*古音跋。
- 443 水の音(みずのおと)
 飛来堂編
 〔江戸後期〕写
 特小一冊
 0/73
 *仏頂和尚序。
- 444 〔佚題俳論書〕(佚題)(いつだいはいろんしよ)
 享和元年写
 半一冊
 801/1
- 445 〔佚題俳論書〕(佚題)(いつだいはいろんしよ)
 〔江戸後期〕写
 大一冊
 0/106
 *山李坊〔青蘿〕序。
- 446 〔佚題俳論書〕(佚題)(いつだいはいろんしよ)
 〔江戸後期〕写
 大一冊
 0/7

447 俳諧古集之弁(はいかいこしゅうのべん)

遅日庵(杜哉)著 [寛政五年序] 刊(京、橘屋治兵衛)

半一冊 793/3

*桂華仙跋。

448 俳諧道乃使(内題)(はいかいみちのつかい)

三卷 月居著 享和二年刊(京、菊舎太兵衛)

小合一冊 802/3

自序、瑞馬序。「員外」ヲ付ス。*菊屋太兵衛ノ「蕉門俳諧書目録」ヲ付ス。

449 俳諧寂菜(はいかいさびしおり)

白雄著、拙堂補 [文化九年] 刊(江戸、英文蔵)

半一冊 0/109

存卷下。「俳諧寂菜員外」ヲ付ス。*英文蔵ノ蔵板目録ヲ付ス。

450 俳諧寂菜(はいかいさびしおり)

白雄著、拙堂補 [文化九年] 刊(江戸、英文蔵)

半一冊 812/3

存卷下。「俳諧寂菜員外」ヲ付ス。*英文蔵ノ蔵板目録ヲ付ス。

451 俳諧寂菜(はいかいさびしおり)

三卷 白雄著、拙堂補 [文化九年] 刊・嘉永六年修(江戸、野村新兵衛) 半二冊 853/5

如泥斎〔富小路貞直〕序、大窪詩仏序、西村定雅序。「俳諧寂菜員外」ヲ付ス。

452 俳諧七草(はいかいななくさ)

天来編 天保一二年刊(大阪、塩屋〔弥七〕等五肆) 半一冊 841/3

*弄瓦軒序、春秋園序、如春庵跋。*春秋園蔵版。

453 俳諧春の田(内題)(はいかいはるのた)

岡目峰奎(おかめはちもぐ)著、ひさ友団好校 天保二二年刊(夏冬堂藏版)

*存卷下。*左平次跋。

半一冊 841/4

454 自詠闇燭弁(じえいやみのともしびべん)

序仏著 嘉永二年写(自筆)

大坂一冊 849/13

455 蕉門通鑑(しょうもんつがん)

曲斎著 安政二年序刊(京、橘屋治兵衛)

折一帖 855/12

*自序。

⑧作法

456 ◻◻◻ はなひ草(はなひぐさ)

立圃著 正保二年奥刊(無刊記)

小一冊 645/1

*自序、破蓋子〔烏丸光広〕跋。

457 誹諧重宝摺火打(目録題)(はいかいちようほうすりひうち)

如泉編 元禄五年序刊(江戸、秋田屋十兵衛等三肆)

横一冊 812/5

*自序、信徳跋。

458 <合/類> 誹諧寄垣諸抄大成(内題)(ごうるいはいかいよせがきしよしょうたいせい)

鷺水編 元禄八年刊(京、柏屋四郎兵衛等三肆)

小一冊 695/1

*自序、信徳跋。

459 [誹諧をたまき] (はいかいおだまき)

竹亭著

元禄一〇年刊(京、新井弥兵衛)

小一冊

697 / 1

*和及跋。

460 [誹諧をたまき] (はいかいおだまき)

竹亭著

元禄一〇年刊(京、新井弥兵衛)

小一冊

0 / 127

*和及跋。

461 俳諧をたまき綱目大成(目録題) (はいかいおだまきこうもくたいせい)

竹亭著、拳堂補

[元禄一六年] 刊(無刊記)

小一冊

0 / 126

*自序、補者序、和及跋、雲鼓跋。*封面題「新版/改正」をたまき大成。封面ハ青刷。

462 俳諧をたまき綱目大成(目録題) (はいかいおだまきこうもくたいせい)

竹亭著、拳堂補

[元禄一六年] 刊(無刊記)

小一冊

0 / 53

*自序、補者序、和及跋、雲鼓跋。

463 俳諧をたまき綱目大成(目録題) (はいかいおだまきこうもくたいせい)

竹亭著、拳堂補

[元禄一六年] 刊・後修(無刊記)

小一冊

0 / 54

*自序、補者序、和及跋、雲鼓跋。

464 俳諧をたまき綱目大成(目録題) (はいかいおだまきこうもくたいせい)

竹亭著、拳堂補

[元禄一六年] 刊・後修(無刊記)

小一冊

0 / 72

- 465 * 自序、補者序、和及跋、雲鼓跋。
俳諧をたまき綱目大成(目錄題)(はいかいおだまきこうもくたいせい)
竹亭著、拳堂補 (〔元禄一六年〕刊・通修(無刊記)) 小一冊 0/55
* 自序、補者序、和及跋、雲鼓跋。
- 466 俳諧をたまき綱目大成(目錄題)(はいかいおだまきこうもくたいせい)
竹亭著、拳堂補 (〔元禄一六年〕刊・通修(無刊記)) 小一冊 0/101
* 自序、補者序、和及跋、雲鼓跋。 * 封面題「新版/改正」をたまき大成。
- 467 改板をたまき(はいはんおだまき)
竹亭著、拳堂補 安永一〇年刊(京、田中庄兵衛) 小一冊 781/1
* 和及跋、暮四跋。
- 468 俳諧通俗誌(内題)(はいかいつうぞくし)
胤矩著 享保二年序刊(刊記欠) 横一冊 717/1
* 存卷上。 * 才麿序。印記「伊予今治城下/報命舎藏書/広瀬清左衛門」。
- 469 俳諧通俗志(内題)(はいかいつうぞくし)
胤矩著 (享保二年序) 刊(大坂、油屋与兵衛等四肆) 横一冊 0/95
* 存卷下。 * 自跋。
- 470 俳諧古今抄(はいかいかいここんしょう)
五卷 支考編 享保一五年跋刊(京、野田治兵衛) 半五冊 730/1

- 471 俳諧古今抄(はいかいここんしよう) *自序跋。
支考編 享保一五年跋刊(刊記欠) 半四冊 0 / 1
- 472 俳諧古今抄(はいかいここんしよう) *存卷上・中。 *自序跋。
支考編 [江戸後期] 写 大合二冊 0 / 7.9
- 473 〔四季詞寄／いろは分〕俳諧曲尺(内題)(しきことばよせいろはわけはいかいまがりかね) *存卷二・五。 *自跋。 *刊本ノ写シ。
明和八年序刊・天保一二年修(大坂・塩屋忠兵衛) 小一冊 8 4 1 / 9
- 474 俳諧附合小かゝみ(内題)(はいかいつけあいこかがみ) *千代尼序。
牛家著、蓼太編 安永四年刊(書肆名欠) 小一冊 7 7 5 / 3
- 475 俳諧あすならふ(はいかいあすならう) *自序、編者跋。
吾山編、不二亭井来義・春雷堂建朱映校、未央刪補 [安永八年] 刊・後印(刊記欠) 小一冊 0 / 1 2 1
- 476 俳諧あすならふ(はいかいあすならう) *存卷上。 *自序。
俳諧あすならふ(はいかいあすならう) 小一冊 0 / 1 2 1

吾山編、不二亭井来義・春雷堂建朱映校、未央刪補

〔安永八年〕刊・後印〔刊記欠〕

小二冊 0 / 124

*存卷上。*自序。

477 俳諧あすならふ(はいかいあすなろう)

二卷 吾山編 不二亭井来義・春雷堂建朱映校、未央刪補

〔安永八年〕刊・文化一四年印(大坂、河内屋太助等四肆)

小二冊 817 / 2

478 俳諧あすならふ(はいかいあすなろう)

二卷 吾山編、不二亭井来義・春雷堂建朱映校、未央刪補

〔安永八年〕刊・嘉永三年印(大阪、河内屋太郎) 小二冊 850 / 3

*吾山序、未央跋、吾中跋。

479 俳諧四季部類大成(凡例題)(はいかいしきぶるいたいせい)

二柳著、蘭更校 〔安永九年〕刊(江戸、鶴屋喜右衛門)

特小一冊 0 / 119

480 俳諧四季部類大成(凡例題)(はいかいしきぶるいたいせい)

二柳著、蘭更校 〔安永九年〕刊(江戸、鶴屋喜右衛門)

特小一冊 0 / 84

481 俳諧四季部類大成(凡例題)(はいかいしきぶるいたいせい)

二柳著、蘭更校・花屋庵再訂〔安永九年〕刊・後印(大坂、塩屋忠兵衛)

特小一冊 0 / 56

482 〔俳／諧〕四季部類(はいかいしきぶるい)

483 二柳著、闌更校・花屋庵再訂〔安永九年〕刊・後印〔大坂、塩屋忠兵衛〕 特小一冊 0/57
俳諧四季部類大成〔凡例題〕〔はいかいしきぶるいたいせい〕

二柳著、闌更校、花屋庵再訂〔安永九年〕刊・後印〔無刊記〕 特小一冊 0/89

484 俳諧二見貝〔はいかいふたみのかい〕

松宇編、松後監定、素文補 安永九年刊〔京、橋屋治兵衛〕 横一冊 780/1

*監定者序。

485 俳諧二見貝〔はいかいふたみのかい〕

松宇編、松後監定、素文補 安永九年刊〔京、橋屋治兵衛〕 横一冊 780/9

*監定者序。

486 俳諧二見貝〔内題〕〔はいかいふたみのかい〕

松後監定、松雨撰、素文補、嘘吹訂 安永九年刊・天保二年修〔京、橋屋治兵衛〕

*松後序。

横一冊 841/1

487 華実年浪草〔かじつとしなみぐさ〕

龐文著 天明三年刊〔大坂、河内屋太助等八肆〕 半三冊 783/1

*卷四下欠。*井上金峨序、自序、蓼太序、蝶夢跋。*著者藏板。

488 華実年浪草〔かじつとしなみぐさ〕

龐文著 〔天明三年〕刊〔刊記欠〕 半二冊 783/3

*存卷七上・一〇。

489 華実年浪草(かじつとしなみぐさ)

籠文著

〔天明三年〕刊・〔天保一二年〕印〔刊記欠〕

半一四冊 841/7

*存卷一・一一。*井上金峨序、自序、蓼太序、蝶夢跋。

490 華実年浪草(柱刻題)(かじつとしなみぐさ)

籠文著

〔天明三年〕刊・天保一二年印(大坂、堺屋新兵衛等七肆)

*存卷一二。

半一冊 0/139

491 腰扇(序中題)(こしおうぎ)

駝岳編

寛政一〇年刊・天保一三年修(大坂、塩屋忠兵衛・塩屋弥七)

*麻斎序、自序。

横一冊 842/1

492 腰扇(序中題)(こしおうぎ)

駝岳編

寛政一〇年刊・天保一三年修(大坂、塩屋忠兵衛・塩屋弥七)

*麻斎序、自序。

横一冊 842/3

493 腰扇(序中題)(こしおうぎ)

駝岳編

寛政一〇年刊・天保一三年修(大坂、塩屋忠兵衛・塩屋弥七)

*麻斎序、自序。

横一冊 842/2

494 腰扇(序中題)(こしおうぎ)

駝岳編

寛政一〇年刊・天保一三年修(大坂、塩屋忠兵衛・塩屋弥七)

*麻斎序、自序。

横一冊 842/6

495 へ(四季) / 詞林〔こしあ〕ふき(しきしりんこしおうぎ)

駝岳編 [寛政一〇年] 刊・天保一四年修(大坂、塩屋忠兵衛・塩屋弥七)

*麻斎序、自序。 横一冊 803/2

496 俳諧袖かゞみ(はいかいそでかがみ)

寸長編 享和二年序刊(江戸、英平吉) 特小一冊 802/1

*英信堂主人序、芦中跋。 *英平吉ノ藏板目錄ヲ付ス。

497 俳諧歳時記(はいかいさいじき)

二卷 馬琴編 享和三年刊(名古屋、永楽屋東四郎等三肆) 横二冊 803/4

*風月庵序、自序、あま彦跋。

498 俳諧歳時記(はいかいさいじき)

馬琴編 享和三年刊(名古屋、永楽屋東四郎等三肆) 横一冊 803/8

*存卷下。 *あま彦跋。

499 俳諧歳時記(はいかいさいじき)

二卷 馬琴編 享和三年刊・後印(大坂、河内屋太助等四肆) 横二冊 803/5

*風月庵序、自序、あま彦跋。

500 俳諧歳時記(内題)(はいかいさいじき)

馬琴編 享和三年刊・後印(刊記欠) 横一冊 803/7

*存卷上。 *風月庵序、自序。

501 〈増補／改正〉 俳諧歳時記葉草(ぞうほかいせいはいかいさいじきしおりぐさ)

五卷 馬琴編、藍亭青藍増補 嘉永四年刊・明治印(大坂・河内屋利助)

横五冊 851/6

*青藍序。

502 俳諧歳時記葉草(はいかいさいじきしおりぐさ)

馬琴編、藍亭青藍増補 [嘉永四年]刊(刊記欠)

横一冊 0/83

*存夏部。

503 〈季寄／註解〉 改正月令博物筌(きよせちゆうかいせいがつりようはくぶつせん)

洞齋編 [文化五年]刊(刊記欠)

横一三冊 0/58

*存一三卷。

504 改正月令博物筌(封面題)(かいせいがつりようはくぶつせん)

洞齋編 [文化五年]刊(刊記欠)

横一三冊 0/145

*存一三卷。

505 改正月令博物筌(封面題)(かいせいがつりようはくぶつせん)

洞齋編 [文化五年]刊(刊記欠)

横三冊 0/112

*存三卷。

506 改正月令博物筌(封面題)(かいせいがつりようはくぶつせん)

洞齋編 [文化五年]刊(刊記欠)

横一冊 0/6

*存卷一。 *外題「俳諧大意並口伝」(後補書題簽)。

- 507 俳諧山分衣(はいかいやまわけごろも)
石弓編 文化一〇年刊(江戸、西村源六等三肆) 中二冊 813/5
*木僊序。
- 508 俳諧恋のしをり(はいかいこいのしおり)
北元編 文化一三年刊・天保一五年印(江戸、英大助) 小一冊 844/13
*存卷下。*完来跋、自跋。
- 509 〈俳／諧〉季引席用集(はいかいきびきせきしょうしゅう)
二卷 存義遺稿、素月再稿、蘭山校 文政元年序刊(江戸、須原屋伊八) 横二冊 818/3
*蘭山序。
- 510 〈節／用〉木の葉かご(内題)(せつようこのはかご)
二世牛文庵編 文政八年刊(江戸、須原屋伊八) 横一冊 825/1
*風松序、二世牛文庵跋。
- 511 〈節／用〉木の葉かご(内題)(せつようこのはかご)
二世牛文庵編 文政八年刊(江戸、須原屋伊八) 横一冊 825/8
*風松序、二世牛文庵跋。
- 512 俳諧手桃灯(内題)(はいかいてちようちん)
貞山著 天保六年刊(江戸、万笈堂) 小一冊 835/3
封面題「掌／中」手桃灯。「万笈堂藏板俳書目録」ヲ付ス。

513 俳諧手桃灯(内題)(はいかいてちようちん)

貞山著 (天保六年) 刊・元治二年印(江戸、森屋治兵衛)

小一冊 865/2

封面題「(掌/中)手桃灯」。「万笈堂藏板俳書目録」ヲ付ス。

514 増補四季部類大全(目録題)(ぞうほしきふるいたいぜん)

鼎左著、拳一校 嘉永四年序刊(大坂、塩屋忠兵衛)

小一冊 851/7

*自序。*塩屋忠兵衛ノ広告ヲ付ス。

515 増補四季部類大全(目録題)(ぞうほしきふるいたいぜん)

鼎左著、拳一校 嘉永四年序刊(大坂、塩屋忠兵衛)

小一冊 851/10

*自序。*塩屋忠兵衛ノ広告ヲ付ス。

516 (増/補)四季部類大全(ぞうほしきふるいたいぜん)

鼎左著、拳一校 嘉永四年序刊(大坂、塩屋忠兵衛)

小一冊 868/2

*自序。*塩屋忠兵衛ノ広告ヲ付ス。

517 増補四季部類大全(目録題)(ぞうほしきふるいたいぜん)

鼎左著、拳一校 嘉永四年序刊(大坂、塩屋忠兵衛)

小一冊 868/3

*自序。*塩屋忠兵衛ノ広告ヲ付ス。

⑨歳日帖

518 除元(じよげん)

519 〔歳旦帖〕(さいたんじょう)
*外題ハ後書ナリ。

享保一六年刊(大坂、嵯口屋太兵衛)

枡一冊 731/2

宝曆三年刊(無刊記)

横一冊 753/1

*絵入。

520 下総(しもうさ)

和永ほか

明和八年刊(京、橘治)

横一冊 771/1

521 紀陽(きよう)

葛山下連中

安永三年刊(京、橘治)

横一冊 774/11

522 白山下(はくさんか)

玄武坊ほか

安永三年刊(刊記欠)

横一冊 774/9

*存一丁ノミ。

523 歳旦(さいたん)

下総連中

安永五年刊(刊記欠)

横一冊 776/2

524 歳旦(さいたん)

東武四谷連中

安永六年刊(京、橘治)

横一冊 777/6

525 東都(とうと)

一窓下連中

安永六年刊(京、橘治)

横一冊 777/3

| | | | | |
|-----|-----------------------|-------------|-----|---------------------|
| 526 | 佐倉(さくら) | 安永六年刊(京、橘治) | 横一册 | 7 7 7 / 4 |
| 527 | 下総佐倉弥勒連 佐倉(さくら) | 安永六年刊(京、橘治) | 横一册 | 7 7 7 / 5 |
| 528 | 下総佐倉婦人連 白山下(はくさんか) | 安永六年刊(京、橘治) | 横一册 | 7 7 7 / 7 |
| 529 | 玄武坊ほか 白山下(はくさんか) | 安永六年刊(京、橘治) | 横一册 | 7 7 7 / 8 |
| 530 | 玄武坊ほか 白山下(はくさんか) | 安永六年刊(京、橘治) | 横一册 | 7 7 7 / 9 |
| 531 | 甲陽郡内小浪連 白山下(はくさんか) | 安永六年刊(京、橘治) | 横一册 | 7 7 7 / 10 |
| 532 | 下総久能連 白山下(はくさんか) | 安永六年刊(京、橘治) | 横一册 | 7 7 7 / 11 |
| 533 | 東武吉見連 白山下(はくさんか) | 安永八年刊(京、橘治) | 横一册 | 7 7 9 / 2 |
| 534 | 下総佐倉弥勒 白山下(はくさんか) | 安永八年刊(京、橘治) | 横一册 | 7 7 9 / 3 |
| | 武州吉見 | | | |

| | | | | | |
|-----|--------------------|-------|--------------|-----|--------------------|
| 543 | 東都(とうと) | 一窓下連中 | 安永一〇年刊(京、橘治) | 横一冊 | 7 8 1 / 2 |
| 542 | 東武駒郊 白山下(はくさんか) | | 安永九年刊(京、橘治) | 横一冊 | 7 8 0 / 8 |
| 541 | 東武吉見 白山下(はくさんか) | | 安永九年刊(京、橘治) | 横一冊 | 7 8 0 / 7 |
| 540 | 武州手駄 白山下(はくさんか) | | 安永九年刊(京、橘治) | 横一冊 | 7 8 0 / 6 |
| 539 | 下総久能 白山下(はくさんか) | | 安永九年刊(京、橘治) | 横一冊 | 7 8 0 / 5 |
| 538 | 下総弥勒 白山下(はくさんか) | | 安永九年刊(京、橘治) | 横一冊 | 7 8 0 / 4 |
| 537 | 下総佐倉 白山下(はくさんか) | | 安永九年刊(京、橘治) | 横一冊 | 7 8 0 / 3 |
| 536 | 駒谷 白山下(はくさんか) | | 安永九年刊(京、橘治) | 横一冊 | 7 8 0 / 2 |
| 535 | 東武駒谷 白山下(はくさんか) | | 安永八年刊(京、橘治) | 横一冊 | 7 7 9 / 4 |

| | | | | |
|-----|-------------------------------|--------------|-----|--------------------|
| 544 | 白山下(はくさんか) 梧下庵 | 安永一〇年刊(京、橘治) | 横一冊 | 7 8 1 / 3 |
| 545 | 白山下(はくさんか) 東武駒谷 | 安永一〇年刊(京、橘治) | 横一冊 | 7 8 1 / 4 |
| 546 | 白山下(はくさんか) 富士前連 | 天明二年刊(京、橘治) | 横一冊 | 7 8 2 / 2 |
| 547 | 白山下(はくさんか) 鍛冶橋連 | 天明二年刊(京、橘治) | 横一冊 | 7 8 2 / 3 |
| 548 | 白山下(はくさんか) 遊林舎文鳥ほか | 天明二年刊(京、橘治) | 横一冊 | 7 8 2 / 4 |
| 549 | 白山下(はくさんか) 下総臼井 *存一丁ノミ。 | 天明二年刊(刊記欠) | 横一冊 | 7 8 2 / 5 |
| 550 | 白山下(はくさんか) 下総久能 | 天明二年刊(刊記欠) | 横一冊 | 7 8 2 / 6 |
| 551 | 歳旦(さいたん) 六合編 | 天明三年刊(無刊記) | 半一冊 | 7 8 3 / 2 |
| 552 | 白山下(はくさんか) | | | |

- 553 〔享和三年歳旦〕(きょうわさんねんさいたん)
〔江戸中期〕刊(京、橘治)
享和三年刊(刊記欠)
半一冊 8 0 3 / 6
横一冊 0 / 1 0 4
- 554 〔青陽帖〕(せいようじょう)
*後欠。
八千坊編
文化九年刊(無刊記)
半一冊 8 2 6 / 3
- 555 〔文化十年歳旦〕(ぶんかじゅうねんさいたん)
筵史編
文化一〇年刊(無刊記)
半一冊 8 1 3 / 4
- 556 〔青陽帖〕(せいようじょう)
八千房編
文化一一年刊(大坂、松井忠蔵)
半一冊 8 1 4 / 1
- 557 梅のあした(うめのあした)
*絵入。
応字編
文化一二年刊(京、橘治)
半一冊 8 1 5 / 3
- 558 〔文化一三年歳旦〕(ぶんかじゅうさんねんさいたん)
筵史編
*文化一二年春興。*奥ニ「洛陽橘治刀」ノ朱文長方印ヲ押捺。
文化一三年刊(広島、嶋屋彦兵衛)
半一冊 8 1 6 / 5
- 559 〔青陽帖〕(せいようじょう)
八千房編
文政三年刊(大坂、松井忠蔵)
半一冊 8 2 0 / 4

- 560 〔春帖集〕(しゅんじょうしゅう)
麻中編
文政三年奥刊(無刊記)
半一冊
8 2 0 / 6
- 561 北筑太宰府(ほくちくだざいふ)
文政四年刊(京、橋二)
横一冊
8 2 1 / 1
- 562 越後関(えちごせき)
桂車堂連
文政四年刊(京、橋二)
横一冊
8 2 1 / 2
- 563 春帖集(しゅんじょうしゅう)
互融坊ほか
文政五年刊(京、橋二)
横一冊
8 2 2 / 1
- 564 美濃(みの)
大井
文政五年刊(京、橋二)
横一冊
8 2 2 / 2
- 565 〔歳旦帖留〕(さいたんじょうとめ)
西肥吉田陶丘連
文政五年刊(京、橋二)
横合一冊
8 2 2 / 3
- 566 〔歳旦帖〕(さいたんじょう)
* 西肥多久・西肥佐嘉・南越福城内・西濃沢田連ノ歳旦帖ヲ合綴。
筑前博多
文政五年刊(京、橋治)
横一冊
8 2 2 / 4
- 567 西肥(さいひ)
佐嘉城東連
文政五年刊(京、橋二)
横一冊
8 2 2 / 5
- 568 西肥(さいひ)

| | | | | |
|-----|---|------------------|-----|-------------|
| 576 | 春興龜廼尾山(しゅんききょうかめのおやま) | 天保五年刊(無刊記) | 半一冊 | 8 3 4 / 3 |
| 575 | 〔青陽帖〕(せいようじょう) 八千房編 | | | |
| 574 | 桃花春帖(とうかしゅんじょう) 孤月編、〔渡辺寧山〕画 * 絵入。 | 〔文政頃〕刊(刊記欠) | 半一冊 | 0 / 4 7 |
| 573 | 〔青陽帖〕(せいようじょう) 八千房編 | 〔文政八年〕刊(大阪、松井忠蔵) | 半一冊 | 8 2 5 / 3 |
| 572 | 花のあまり(跋中題)(はなのあまり) 子琴編 * 烏強序、白跋。 | 文政五年序刊(京、橋屋治兵衛) | 半一冊 | 8 2 2 / 1 0 |
| 571 | 〔越／陽〕福井(えつようふくい) 葵由ほか | 文政五年刊(京、橘治) | 横一冊 | 8 2 2 / 9 |
| 570 | 越後(えちご) 新潟二七庵連 | 文政五年刊(京、橘二) | 横一冊 | 8 2 2 / 8 |
| 569 | 越後(えちご) 中之島連 | 文政五年刊(京、橘二) | 横一冊 | 8 2 2 / 6 |
| | 佐嘉連 | 文政五年刊(京、橘治) | 横一冊 | 8 2 2 / 7 |

- 唐樹園亀嶺編
天保八年刊(大阪、扇屋利助)
半一冊 837/1
*存巻中。*八千坊序、謙齋跋。
- 577 春興亀廻尾山(しゅんきょうかめのおやま)
唐樹園亀嶺編
天保九年刊(備前岡山、中嶋屋益吉・大阪、扇屋利助)
半一冊 838/1
*存巻下。*貞璵序、孔鼎跋。
- 578 歳旦集(さいたんしゅう)
八千房編
天保一〇年刊(無刊記)
半一冊 839/1
- 579 周府(しゅうふ)
花の浦桂花園連
天保一四年刊(京、橘治)
横一冊 843/8
- 580 荅の寿(つばみのことぶき)
〔江戸後期〕刊(京、吉甚)
横仮一冊 0/34
- 581 〔歳旦帖〕(仮題)(さいたんじょう)
〔江戸後期〕刊(無刊記)
半仮一冊 ナシ
*刊記ハ「京三条ノ寺町西 吉甚梓」ノ朱文長方印ヲ押捺。
- 582 防州(ぼうしゅう)
以木編
弘化二年刊(京、橘治)
横一冊 845/7
- 583 春牒(しゅんちよう)
幻遊庵編
弘化四年刊(無刊記)
半一冊 847/3

584 桃花花陰稿(とうかかいかう)

孤月編

嘉永元年刊(無刊記)

半一冊

848/1

* 絵入(淡彩刷)。

585 春牒(しゅんちよう)

幻遊庵編

嘉永二年刊(無刊記)

半合二冊

849/5

586 [安政三年歳旦](あんせいさんねんさいたん)

安政三年刊(無刊記)

半一冊

856/1

* 絵入。

⑩点取帖

587 <奉/納>四季発句合(内題)(ほうのうしきほつくあわせ)

玄蛙点

文化二二年写

横一冊

815/8

588 月次混題句合(扉題)(つきなみこんだいくあわせ)

兔明評

文政二二年写(能勢常輔)

半一冊

829/6

589 [貞瓊選諸家評高点句集](ていよせんしよかひようこうてんくしゅう)

貞瓊撰

文政二二年刊(無刊記)

横一冊

829/1

590 誹諧の写(はいかいのうつし)

梅園等評

文政二三年写(梅花)

大一冊

830/6

*内題「近江八幡宮奉納五百集」。

- 591 〔誹／諧〕 寛の水(はいかいかげいのみず)
不及等点 天保七年写 半一冊 836/4
- 592 流憩堂評月次句合(内題)(りゅうけいどうひょうつきなみくあわせ)
流憩堂 〔江戸後期〕写 半一冊 0/10
- 593 奉納拔萃(ほうのうばっすい)
華洞仙等点 〔江戸後期〕写 大一冊 0/90
- 594 〔点取歌仙〕(てんとりかせん)
鳥速点 〔江戸後期〕写 大仮一冊 0/117
- 595 誹諧のほ句(はいかいはく)
菊年点 〔江戸後期〕写 中仮一冊 0/118(1)
- 596 〔点取帖〕(仮題)(てんとりじょう)
水月点 〔江戸後期〕写 大仮一冊 0/131
- 597 〔点取帖〕(仮題)(てんとりじょう)
橘中庵点 〔江戸後期〕写 大仮一冊 0/114
- 598 〔点取帖〕(仮題)(てんとりじょう)
橘中庵点 〔江戸後期〕写 横仮一冊 0/115
- 599 〔点取帖〕(仮題)(てんとりじょう)

| | | | | | |
|-----|--------------------|------|---------|-----|---------|
| 608 | 〔点取帖〕(仮題)(てんとりじょう) | 井眉庵点 | 〔江戸後期〕写 | 枡一帖 | 0 / 27 |
| 607 | 〔点取帖〕(仮題)(てんとりじょう) | 残夢楼点 | 〔江戸後期〕写 | 枡一帖 | 0 / 26 |
| 606 | 〔点取帖〕(仮題)(てんとりじょう) | 月夜庵点 | 〔江戸後期〕写 | 枡一帖 | 0 / 25 |
| 605 | 〔点取帖〕(仮題)(てんとりじょう) | 月夜庵点 | 〔江戸後期〕写 | 枡一帖 | 0 / 24 |
| 604 | 〔点取帖〕(仮題)(てんとりじょう) | 月夜庵点 | 〔江戸後期〕写 | 枡一帖 | 0 / 23 |
| 603 | 〔点取帖〕(仮題)(てんとりじょう) | 月夜庵点 | 〔江戸後期〕写 | 枡一帖 | 0 / 22 |
| 602 | 〔点取帖〕(仮題)(てんとりじょう) | 大黒庵点 | 〔江戸後期〕写 | 枡一帖 | 0 / 21 |
| 601 | 〔点取帖〕(仮題)(てんとりじょう) | 長月庵点 | 〔江戸後期〕写 | 半一帖 | 0 / 144 |
| 600 | 〔点取帖〕(仮題)(てんとりじょう) | 浩々園点 | 〔江戸後期〕写 | 大一册 | 0 / 143 |

些庵点

〔江戸後期〕写

枡一帖

0 / 2 8

609 〔点取帖〕〔仮題〕〔てんとりじょう〕

梅園点

〔江戸後期〕写

枡一帖

0 / 2 9

610 〔点取帖〕〔仮題〕〔てんとりじょう〕

梅園点

〔江戸後期〕写

枡一帖

0 / 3 0

611 〔点取帖〕〔仮題〕〔てんとりじょう〕

向晴庵点

〔江戸後期〕写

横仮一冊

0 / 8 0

612 〔点取帖〕〔仮題〕〔てんとりじょう〕

点者未詳

〔江戸後期〕写

大仮五冊

0 / 1 1 5 1 5

613 〔点取帖〕〔仮題〕〔てんとりじょう〕

点者未詳

〔江戸後期〕写

半一冊

0 / 9 6

㊦ 絵俳書

614 諸州百富士〔しよしゅうひやくふじ〕

河村眠雪編・画

〔江戸後期〕写

大一冊

0 / 7 4

* 絵入。* 刊本ノ写シ。

615 〔佚題絵俳書〕〔仮題〕〔いつだいえはいしよ〕

- 616 霞彩画
〔江戸後期〕刊〔無刊記〕
〔伏題絵俳書〕〔仮題〕〔いつだいえばいしよ〕
〔江戸後期〕刊〔無刊記〕
半一冊 0 / 1 3 8
* 『桃家春帖』ノ零本カ。
- 4 雑俳・川柳
617 青簾(あおすだれ)
隆志編
〔江戸中期〕刊〔梅林堂〕
小一冊 0 / 2
* 延享元年成。
- 618 俳諧川柳(はいかいせんりゅう)
軽素編
宝曆七年刊(江戸、須原屋太兵衛・京、井筒屋庄兵衛)
半一冊 7 5 7 / 1
* 自序。* 絵入。
- 619 燕都枝折(えどしおり)
紀逸編
宝曆一〇年刊(無書肆名)
小一冊 7 6 0 / 2
* 四編。* 碑明序。
- 620 〔誹風柳多留〕(はいふうやなぎだる)
皇陵軒可有編
明和九年序刊(江戸、花屋久次郎)
小一冊 7 7 2 / 1
* 七編。* 自序。* 花屋久次郎ノ目錄ヲ付ス。

- 621 誹／風 柳多留(はいふうやなぎだる)
 呉陵軒可有編 (江戸後期) 刊(江戸、花屋久治郎)
 小一冊 0 / 118②
 *編次未詳(タダシ可有ノ編ユエ、二三編以内ト推定サレル)。
- 622 誹風柳多留(はいふうやなぎだる)
 文日編 文化四年序刊(無刊記)
 小一冊 807 / 3
 *三七編。*官裏序。
- 623 誹風柳多留(はいふうやなぎだる)
 文化九年序刊(江戸、花屋久治郎)
 小一冊 812 / 6
- 624 柳多留(尾題)(やなぎだる)
 *六一編。*菅裡序。
 風松編、萱子補 文政八年序刊(無刊記)
 小一冊 825 / 7
- 625 類題折句集(内題)(るいだいおりくしゅう)
 *八八編。*補者序。
 萩風撰 寛政四年序刊(大坂、和泉屋卯兵衛)
 横一冊 792 / 1
 *自序。*和泉屋卯兵衛ノ目録ヲ付ス。
- 626 笠／附 小柴垣(内題)(かさづけこしばがき)
 一樹撰 文化元年序刊(大坂、塩屋平助)
 横一冊 804 / 2
 *序題「俳諧小柴垣」。*有蚊序。

- 627 〈笠／附〉小柴垣(内題)(かさづけこしばがき)
 一樹撰
 文化元年序刊(大坂、塩屋平助)
 *序題「俳諧小柴垣」。*有蚊序。
- 628 〔誹諧臈〕(はいかいけい)
 南山撰
 *南山序。
 文化八年序刊(江戸、花屋久治郎)
- 629 冠付虫目鏡(内題)(かむりづけむしめがね)
 馬宥撰
 *井庵序。
 文化九年刊(大坂、塩屋平助)
- 630 滑稽発句類題集(こっけいほつくるいだいしゅう)
 二卷 金太楼編
 文化一四年序刊(大坂、河内屋茂兵衛等一〇肆)
 *初編。*自序。*絵入。
- 631 滑稽発句類題集(こっけいほつくるいだいしゅう)
 金太楼編
 文化一四年序刊(刊記欠)
 *初編・存卷上。*自序。*絵入。
- 632 滑稽発句類題集(こっけいほつくるいだいしゅう)
 二卷 金太楼編
 文化一四年序刊・天保二年印(梅薫楼藏板)
 *初編。*自序。*絵入。

横一冊 804/3

中一冊 811/7

横一冊 812/1

中二冊 817/3

中一冊 817/1

中二冊 831/4

633 滑稽発句類題集(こっけいほっくろいだいしゅう)

金太楼編

天保三年写(大江貞一)

中二冊 832/4

*存卷中・下。*乗清序。*刊本ノ写シ。

634 神事行灯(扉題)(しんじあんどん)

乗清編、大石真虎画

文政一二年序刊(名古屋、永楽屋東四郎)

半一冊 829/8

*乗清序。*紅梅園藏板。*絵入(彩色刷)。

635 神事行灯(扉題)(しんじあんどん)

乗清編、大石真虎画

文政一二年序刊(名古屋、永楽屋東四郎)

半一冊 829/9

*乗清序。*紅梅園藏板。*絵入(彩色刷)。

636 〈誹／風〉たねふくへ(はいふうたねふくべ)

益亭編

天保一五年刊(江戸、三友堂益亭等三肆)

中一冊 844/10

*三集。*益亭序。*摺付表紙。*絵入。

637 教訓柳樽(きょうくんやなぎだる)

五岳編

天保一五年刊(大坂、河内屋茂兵衛等三肆)

中一冊 844/11

*六編。*五岳序。*摺付表紙。*絵入(淡彩刷)。

638 類題柳の露(るいだいやなぎのつゆ)

〔江戸後期〕刊(無刊記)

中一冊 0/146

*初編。

639 風のかをり(かぜのかおり)

竹川居編 弘化二年刊(河内、編者蔵板)

中一冊 845/6

*梅洲序。

640 田井邑大明神奉納句・植月椿木林大明神奉納句

(たいむらだいみょうじんほうのうく・うえづきつばきばやしだいみょうじんほうのうく)

一秀編

弘化四年写

半一冊 847/9

641 雑誹楽卷翁評(ざっぱいらくかんおうひょう)

一秀

嘉永元年写

半一冊 848/5

642 肥後清正公大奉納写(ひごきよまさこうだいほうのうのうつし)

嘉永二年写(花洞仙)

大仮一冊 849/10

643 画口合瓢之蔓(えぐちあいふくべのつる)

湖童撰、松川半山画

[嘉永三年]刊(刊記欠)

半一冊 850/2

*存卷上。*広瀬旭莊題、晝鐘成序。*絵入(淡彩刷)。

644 <粹家/必読> 珍々叢書(すいかひつどくちんちんそうしよ)

史友編

安政二年序刊(無刊記)

中二冊 855/2

*四集。*柱題「梅柳吾妻振 初篇」。*自序。*絵入。

645 俳諧牛の角文字(はいかいうしのつのもじ)

雀巢編

安政三年写

半一冊 856/7

646

*存卷下。*扉題「奉納卷下」。

金毘羅社永代奉納(こんぴらじゃえいたいほうのう)

一鳳

〔幕末〕写

大一冊

852/7

II 芸術

1 書画・絵本

647

絵本御伽種(えほんおとぎのたね)

西川祐代画

〔江戸中期〕刊(刊記欠)

半一冊

0/147

*存卷下。*絵入。

Ⅱ 俳諧一枚摺編

俳諧一枚摺目録

1 梅郊冬興「花も憎む」・画者不明、落葉図

俳諧一枚摺

39.0×51.0

一枚摺② 8 3 9 0

* 梅里・花千・夏庵・沾山・社麦ら。宝曆頃。汚損あり。

2 十二庵秋興「角力とりを」

俳諧一枚摺

16.1×15.3

一枚摺② 9 6 1 8

* 保考・芝田・芝川・山話。「彫工松三〇〇」。〔乙卯のとし〕(寛政七年)。

3 長月庵若翁「月供養の小集」

募句チラシ

15.2×21.5

一枚摺① 8 2 5 4

* 「寛政九年丁巳七月」。

4 風紫秋興「月見るや」・画者不明、文台図

俳諧一枚摺

19.6×44.0

一枚摺② 8 3 3 5

* 「良夜」。劣人・環・柏舎ら。「丁巳秋」(寛政九年)。

5 闌更病中吟「花の雪も」

俳諧一枚摺

19.1×25.9

一枚摺② 8983

* 鹿古・秋屋・後楽・苧涯。「桃林堂」(朱印)。「むまの暮春」(寛政十年か)。

6 風紫春興「春風や」

俳諧一枚摺

18.2×25.0

一枚摺② 8962

* 紫江・安元ら。寛政頃。

7 土芝夏興「竹の子は」

俳諧一枚摺(試し刷り)

32.4×42.5

一枚摺② 8294

* 「夏日雜興」。花申・五冲ら。越前奉書の包紙に刷ったもの。寛政頃。

8 土芝夏興「竹の子も」

俳諧一枚摺

16.4×23.0

一枚摺② 8957

* 「夏日雜興」。花申・五冲ら。寛政頃。

9 六合春興「かたみこせ」

俳諧一枚摺

18.7×25.6

一枚摺② 8968

* 「人日」。相太・可由ら。「酉のとし」。寛政一三年以前。

10 六合秋興「唐がらし」

俳諧一枚摺

18.9×25.5

一枚摺② 8967

*計口・白夜・田禾ら。享和二年以前。

11 雨の屋組・古雅良史庵・玄蛙ら夏興「朝々や」

俳諧一枚摺(袋付) (本紙)35.0×48.7' (袋)17.6×8.5

一枚摺②83302

*袋題「五月晴」。「戊辰とし五月」(文化五年)。

12 若翁冬興「関伽棚や」

俳諧一枚摺 (本紙)16.3×22.0

一枚摺②83333

*計口・白夜・呂郷。「たつの冬」(文化五年か)。

13 篤老稻荷社再建披露「雪つむや」・雪塘画、植物図

俳諧一枚摺 (本紙)39.0×52.0

一枚摺②9643

*甘古・梅仏・菟史・夏雲・梧来ら。「刀其成」。「文化八年」。

14 渭虹夏興「大学に」・石斎画、人物図

俳諧一枚摺 (本紙)18.2×24.6' (袋)19.4×6.6

一枚摺②8943

*袋題「壬申 四とき草 春夏」。長斎・好我・釣月・可登利ら。文化九年。

15 升六夏興「瓜島や」・益之画、蔓草図

俳諧一枚摺(袋付) (本紙)18.3×51.8' (袋)18.8×13.1

一枚摺②8317

*袋題「うし洗 はなや」。「六月三日」。「菊舎梓」。可盈・春哉・梅鳥ら。文化一〇年以前。

16 土方歳旦「黄鳥の」・梅窓画、□図

俳諧一枚摺(袋付) (本紙)21.0×58.9' (袋)17.0×10.2

一枚摺②8320

* 「甲戌之春」(文化二年)。文衣・甘古・玄蛙ら。「寫彦粹」。袋題「春海」。

17 李朝春興「春寒き」・竹堂画、農民図

俳諧一枚摺

17.2×43.2

一枚摺② 8326

* 湖秋・浮草・祐昌・瓦全ら。「備後福山」。文化一四年以前。

18 可電夏興「夕蟬や」・南溟画、杜鵑図

俳諧一枚摺(袋付)

(本紙) 19.0×25.2 (袋) 19.1×12.7

一枚摺② 8949

* 袋題「若葉あはせ」。万籟・篤老ら。「菊舎刀」(朱印)。二枚組(松葉で留める)。文化頃。

19 晋万羽春興「鬼面の」・土卵画、楸に日の出図

俳諧一枚摺

35.8×26.1

一枚摺② 8958

* 南塘・若水ら。備後三次連中。文化頃。

20 篤老春興「神の手の」・玉画、鶴図

俳諧一枚摺(袋付)

(本紙) 19.5×26.2 (袋) 17.1×8.8

一枚摺② 8946

* 袋題「淡雪の小酒盛」。佳又・筵史ら。「倉橋連」。「廣嶋坂田刀」(朱印)。文化頃。

21 芭蕉堂蒼虬春興「透間なく」

俳諧一枚摺(袋付)

(本紙) 21.0×27.7 (袋) 20.8×7.0

一枚摺② 8940

* 袋題「春興」。村之・万籟・風子・若人・篤老ら。「勝田」(朱印)。文化頃。

22 羅風夏興「螢火の」・画者不明、鷹の羽に松葉図

俳諧一枚摺

19.7×26.3

一枚摺② 8972

*阿声・雨柏・花江・丁嘉・石鏡。文化頃。

23 于明算賀披露「月華に」・栗□画、梅が枝に扇画

俳諧一枚摺

35.6×51.0

一枚摺② 8 4 0 7

*五十の賀。脱負・月江。文化頃。汚損あり。

24 梅室(雪雄)秋興「夕かぜは」・□画、花卉に蜻蛉図

俳諧一枚摺

38.2×51.3

一枚摺② 8 3 7 3

*尚舒・其来・米彦・士朗・琴州・奇淵・葦笠・六轡・蒼虬・月居・岳輅・八重菊。「菊舎梓」(朱印)。文化頃。

25 李山米寿披露「米のいはひ」・南岳画、松図

俳諧一枚摺

38.6×26.6

一枚摺② 8 4 2 2

*文政七年。

26 雪雄歳旦「椿おちて」

俳諧一枚摺

9.6×12.7

一枚摺② 8 9 6 6

*「其一 菱」。篤老・得雨・馬泉。文政頃。

27 ゆきを歳旦「蓬菜に」

俳諧一枚摺

9.5×12.8

一枚摺② 8 9 6 5

*「其二 菱」。春涯・方乎・来青。文政頃。

28 (月次三題宜麦評)

返草

17.9×45.2

一枚摺① 8 2 5 7

* 断簡。文政頃。

29 [月次三題宜麦評]

返草

18.0×11.5

一枚摺① 8 2 6 3

* 断簡。文政頃。

30 [月次三題宜麦評]

返草

17.9×11.5

一枚摺① 8 2 6 4

* 断簡。文政頃。

31 五雲・天山・富竹催 [月次三題宜麦評開卷]

返草

18.2×31.6

一枚摺① 8 2 5 9

* 文政頃。

32 五雲・天山・富竹催 [月次三題宜麦評七月八月開卷]

返草

17.4×21.2

一枚摺① 8 2 6 0

* 文政頃。

33 五雲・富竹・燕甫・天山催 [月次三題宜麦評十一月開卷]

返草

18.1×8.9

一枚摺① 8 2 6 5

* 断簡。文政頃。

34 五雲・富竹・燕甫・天山催 [月次三題宜麦評十月開卷]

返草

17.8×21.6

一枚摺① 8 2 6 2

* 文政頃。

35 五雲・富竹・天山催「月次三題宜麦評七月開卷」

返草

17.9×21.7

一枚摺① 8 2 6 1

* 文政頃。

36 五雲・富竹・天山催「月並三題宜麦評六月開卷」

返草

17.9×8.8

一枚摺① 8 2 5 6

* 断簡。文政頃。

37 奇淵夏興「ほとゝぎす」

俳諧一枚摺

9.6×11.2

一枚摺② 9 6 2 2

* 可省・来稻・楚山・蓬宇ら。文政頃。汚損あり(二枚に切断されている)。

38 来稻夏興「尾のはしも」

俳諧一枚摺

12.8×25.1

一枚摺② 8 9 9 0

* 奇淵・沙王・宝雨。文政頃。

39 花屋庵「花市会 松風会」

募句チラシ

15.7×18.0

一枚摺① 8 2 5 5

* 「兩集たゝひ草書林より御披露仕候」(『たゝひ草』は天保五年刊)。

40 あや輔春興「おだやかな」・橘園画、人物図

俳諧一枚摺

20.0×27.9

一枚摺② 8 9 5 4

* 芹翁・蕉舟・三秀・春玉ら。天保頃。

41 梧庵夏興「貰はれて」

俳諧一枚摺

32.1×21.6

一枚摺② 8 9 9 1

* 弦斎・澄月ら。天保頃。

42 守三夏興「野仏の」・文輝画、茄子図

俳諧一枚摺

18.2×15.9

一枚摺② 8 9 7 1

* 「午の夏」。李谷・歌笛ら。天保頃。スレあり。

43 対雪庵花樵婦披露「事のなき」・半山画、蛤図

俳諧一枚摺

12.6×51.4

一枚摺② 8 3 5 7

* 淀・伏見から鳴海までの旅の句。天保頃。

44 大耳春興「元日や」・公雲画、干柿図

俳諧一枚摺

17.3×17.3

一枚摺② 8 9 7 3

* 二畳庵・九竹園・一鷗亭・邑雄・松荷ら。天保頃。

45 杜鷺夏興「人込を」・画者不明、水辺図

俳諧一枚摺

18.6×12.2

一枚摺② 8 9 7 9

* 不二・雄波・鳳朗・魯風・杜鷺ら。天保頃。汚れあり。

46 二畳庵歳旦「書ぞめや」・巖泉画、小鼓に鈴図

俳諧一枚摺

19.3×25.6

一枚摺② 8 9 7 7

*芝風・松宇・其雀ら。「卯の春」。天保頃。

47 二疊庵春興「淀川の」・霞居画、鳥籠に小禽図

俳諧一枚摺

19.0×18.1

一枚摺② 8 9 8 8

*可水・松岳・椎の本ら。天保頃。

48 風羅堂(守三)春興「水すくふ」・□園画、水辺春景図

俳諧一枚摺

31.7×39.6

一枚摺② 8 4 2 6

*月士・聴洋ら。画師落款「超」。天保頃。汚損あり。

49 風羅堂春興「梅さくる」・□斎画、雀図

俳諧一枚摺

19.3×25.5

一枚摺② 8 9 8 6

*年足・秋山・一声ら。「□の春」。天保頃。カスレあり。

50 松風軒齋雨春興「雪に照る」・画者不明、手桶に梅が枝図

俳諧一枚摺

18.5×49.5

一枚摺② 8 9 9 4

*可留・棧霞・白渚・柿邑・為一。「丙午春頌」(弘化三年)。

51 南楠歳旦「よその夜の」

俳諧一枚摺

9.8×12.8

一枚摺② 8 9 8 2

*一重ら。「丁未歳」(弘化四年)。梅の花をあしらった枠で囲む。汚損あり。

52 岱年春興「初虹や」

俳諧一枚摺

9.7×12.6

一枚摺② 8 9 8 5

*霞山。「己酉年」(嘉永二年)。カスレあり。

53 南々歳旦「日ゆるみ」・画者未詳、鼠図

俳諧一枚摺

12.6×12.8

一枚摺② 8 2 9 8

*一鯉・一重。「辛亥歳」(嘉永四年)。

54 八千坊其山選「天満宮奉納月並発句合」

募句チラシ

15.7×27.9

一枚摺① 8 2 3 6

*「辛亥年」(嘉永四年)。

55 肥後蘇山下如意屈連歳旦「嘉永四亥のとし」

俳諧一枚摺

33.2×46.2

一枚摺② 8 4 3 2

*「京橘治刀」。

56 猿蓑庵碩水「東西集」

募句チラシ

15.8×22.5

一枚摺① 8 2 5 1

*『東西集』初編は嘉永五年刊。

57 周防東三井連歳旦「嘉永五子とし」

俳諧一枚摺

15.6×41.9

一枚摺② 8 4 3 8

*「京橘治刀」。

58 梅室・為山・錢屋十左衛門・月坡「文通所」

引札

16.4×9.5

一枚摺① 8 2 4 8

*嘉永五年以前。

59 蓬葎春興「芽を持て」・龍洲画、親子爪揚図

俳諧一枚摺

37.8×25.3

一枚摺② 8 3 3 3

*立左・如石・鼎左ら。嘉永五年以前。

60 大必ら四季発句「遊山気や」・峻章画、蕨図・月峯画、瓢箪図

俳諧一枚摺(袋付)

(本紙) 39.0×53.2 (袋) 19.5×13.5

一枚摺② 8 3 3 9

*袋題「雲根」。鶯村・史白・松隠ら。嘉永五年以前。

61 周防三井連歳旦「寅春興」

俳諧一枚摺

15.4×42.0

一枚摺② 8 3 5 3

*「橘二刀」。嘉永七年。

62 西肥小印志「春興」

俳諧一枚摺

16.3×43.7

一枚摺② 8 2 8 5

*「嘉永七寅とし」、「サカ中文刀」。

63 鼎左秋興「月さすや」・直光画、秋草に鷹図

俳諧一枚摺

36.5×51.2

一枚摺② 9 6 3 4

*蘭操・梅圃・倚松・多よめ・等栽・得蕪ら。嘉永頃。

64 一晝春興「ふる年を」・友□画、手鞠図

俳諧一枚摺

21.0×18.1

一枚摺② 8 9 7 5

*梅通・碧洞・沢知。嘉永頃。

65 素玉夏興「世わたりや」・太六画、煙草盆に团扇図

俳諧一枚摺

37.8×17.2

一枚摺② 8 3 5 0

*素玉が備中笠岡の太六を訪問した折の摺物。五嶺・柳居・一瓢・淡亭ら。嘉永頃。

66 木居春興「御通りの」・鶯群画、山葵図

俳諧一枚摺

19.0×24.7

一枚摺② 8 9 5 5

*鼎左・甘古ら。嘉永頃。

67 梅園冬興「分杭の」・鳳巢画、火鉢に团扇図

俳諧一枚摺

18.5×24.6

一枚摺② 9 6 2 8

*芹舎・南強・蓼洲(漢詩)ら。「乙卯冬」(安政二年)。

68 化実歳旦「 ズ を剪る」・□□画、小松図

俳諧一枚摺

18.2×16.0

一枚摺② 8 9 7 4

*実雄・錦柄・錦歌ら。「乙卯歳旦」(安政二年)。

69 周防三井連歳旦「安政二卯年」

俳諧一枚摺

15.6×42.0

一枚摺② 8 4 4 7

*「橘治刀」。

70 汝星庵春興「日の影も」・霞居画、小松図

俳諧一枚摺

19.0×50.6

一枚摺② 8 2 8 3

*「安政二初春」。

71 拳一歳旦「梅さくや」□□画、梅図

俳諧一枚摺

18.2×25.2

一枚摺② 8 9 9 9

*草居・蘭操・鼎左ら。「丙辰春」(安政三年)。

72 公成ら冬興「着て居るを」

俳諧一枚摺

18.0×25.0

一枚摺② 8 3 0 8

*断簡か。有節・九起・政武・蓼洲ら。「丙辰冬」(安政三年)。

73 周防三井連歳旦「辰春興」

俳諧一枚摺

15.6×41.7

一枚摺② 8 4 1 3

*「橘治刀」(安政三年か)。

74 梅居追善(蟻兄編)「ひとり来て」・文輝画、花卉図

俳諧一枚摺(袋付)

(本紙) 19.1×16.8 (袋) 19.0×5.7

一枚摺② 8 2 8 7

*袋題「小祥忌」。「丙辰仲秋」(安政三年)。

75 蘭操歳旦「万歳の」

俳諧一枚摺

18.3×35.6

一枚摺② 8 3 8 7

*断簡か。井左・鶯宿・鼎左ら。「丙辰初春」(安政三年)。

76 曲斎編「彼岸さくら」

書袋

15.7×27.3

一枚摺② 8 2 9 3

* 曲斎編『彼岸桜』(安政四年序)。

77 玉止春興「門松や」・龍淵画、巖島神社図

俳諧一枚摺

18.2×51.0

一枚摺② 8 3 9 6

* 悠々・西馬ら。「鷗波書」。「巳の春」(安政四年か)。カスレあり。

78 □山華甲披露「指折て」・素真画、子鹿図

俳諧一枚摺

37.2×51.7

一枚摺② 8 3 6 4

* 西馬・黙池・芹舎ら。「戊午仲夏」(安政五年)。カスレあり。

79 古柏庵歳旦「数寄屋だけ」

俳諧一枚摺

18.8×25.4

一枚摺② 8 2 9 0

* 「午春」(安政五年か)。有節・梅通・雪当。

80 公成春興「元日や」・清亮画、羽根図

俳諧一枚摺

18.3×25.3

一枚摺② 8 9 5 2

* 山子・可樵ら。「午春」(安政五年か)。

81 周原連宜中還曆披露「年々に」

俳諧一枚摺

15.6×41.8

一枚摺② 9 0 0 3

* 「京橋次刀」。安政五年。

82 周防三井連歳旦・曲斎耳順賀「午春」

俳諧一枚摺

15.6×41.8

一枚摺② 8 4 4 1

*「京橋治刀」(安政五年か)。

83 其岳歳旦「うれしさの」・高雅画、雅楽図

俳諧一枚摺

37.1×51.2

一枚摺② 8 2 7 8

*「父が四十二の厄を祝ひかへて諸君より句を送られければ」。而后・梅通・鼎左・西馬ら。

安政五年以前。

84 芭蕉堂「月瀬ノ必携 梅花千株 前編」

引札・後編募句チラシ

16.7×14.1

一枚摺① 8 2 3 7

*「午十一月」(安政五年)。

85 「芭蕉堂三代発句集」

募句チラシ

17.4×12.2

一枚摺① 8 2 3 4

*「未十一月」(安政六年)。

86 鶯宿大小曆「月雪の」・春星画、羊図

俳諧一枚摺

12.6×24.3

一枚摺② 9 6 3 2

*翠江・蕉林・松坡。「未のとし」(安政六年)。

87 菊守園「申年 楓弓集 十六編」

募句チラシ

15.6×10.0

一枚摺① 8 2 4 0

*「安政未とし」(安政六年)。

88 巨桃歳旦「ゆたかなる」・霞彩画、天橋立図

俳諧一枚摺(袋付) (本紙)19.1×17.1 (袋)19.2×6.0

一枚摺② 8 3 2 9

*袋題「春のながめ」。芹舎・連梅ら。「未春」(安政六年か)。

89 公成・眠居撰「洛東祇園社／備前児島八幡宮 両社永代奉額発句合」

募句チラシ 19.2×25.5

一枚摺① 8 2 3 8

*「未正月日」(安政六年)。

90 公成・眠居撰「洛東祇園社／備前児島八幡宮 両社永代奉額発句合」

募句チラシ 19.2×25.5

一枚摺① 8 2 3 9

*「未正月日」(安政六年)。

91 三石七回忌追善(三車編)「梅にわれ」・二承画、墨に梅図

俳諧一枚摺 18.0×24.3

一枚摺② 8 3 2 4

*世外・甘古・土方・一桜ら。「己未の春」(安政六年)。

92 周防花岡連歳旦「未春」

俳諧一枚摺 15.6×41.7

一枚摺② 8 4 1 9

*「橘治刀」(安政六年か)。

93 周防三井連歳旦「安政六己未」

俳諧一枚摺 15.3×42.0

一枚摺② 8 4 1 6

*「橘治刀」(安政六年)。

94 一日庵江三評、霞居・金英催主「四季並三句合」

募句チラシ

16.1×12.8

一枚摺① 8 2 4 7

*「庚申十二月」(安政七年)。

95 都久母冬興「散り口の」・画者未詳、人物図

俳諧一枚摺(袋付) 32.7×43.2(本紙)・23.8×11.9(袋)

一枚摺② 8 3 1 4

*袋題「玉笹摺」。渭江・逸々・蛙兄ら。安政頃。

96 麥慰舎梅通・朝陽堂九起撰「打風 四十八体仏・中ノ庄 子安地藏尊 両奉額発句合」

募句チラシ

19.0×24.5

一枚摺① 8 2 4 2

*「 \sphericalangle 切午正月限不延」。安政頃。

97 土方歳旦「悠になる」・虎類犬画、破魔矢図

俳諧一枚摺(袋付)

(本紙)25.7×22.6(袋)24.6×7.7

一枚摺② 8 2 7 5

*袋題「としのたね 其七」。たゝか・其卜ら。「酉」(万延二年)。

98 卓丈・雪溪春興「山に花」・春長画、旅人図

俳諧一枚摺

37.8×13.0

一枚摺② 8 3 6 1

*旭志・美晴ら。万延頃。

99 山布留春興「鶯の」・来僊画、小松に鶴図

俳諧一枚摺

19.2×26.1

一枚摺② 8 9 7 8

*鷺石・寛路・布川・鳥仙。「戌とし」(文久二年か)。

- 100 周防山口連歳旦「文久二壬戌」
俳諧一枚摺 15.2×41.5
一枚摺② 9 0 0 0
- 101 周防徳山連歳旦「文久二壬戌」
俳諧一枚摺(二枚) (一枚目)15.0×41.5 (一枚目)15.0×41.5
一枚摺② 8 3 7 8
*元々は二枚を綴じてあったものか。
- 102 朝陽堂九起「類題発句千題集 夏季之部」
募句チラシ 15.8×9.5
一枚摺① 8 2 4 1
- 103 朝陽堂九起「類題発句千題集 夏季之部」
募句チラシ 15.8×9.5
一枚摺① 8 2 7 4
*『類題発句千題集』春之部は文久二年序。
- 104 周防楯野連歳旦「文久三癸亥のとし」
俳諧一枚摺 15.6×42.0
一枚摺② 8 4 4 4
*『類題発句千題集』春之部は文久二年序。
- 105 晴雪庵花鸚春興「門松は」・来僊画、火鉢図
俳諧一枚摺 19.3×12.9
一枚摺② 9 0 0 6
*「子の春」(文久三年か)。
- 106 必山春興「月きえて」・画者不明、布袋図
俳諧一枚摺 14.8×23.7
一枚摺② 8 4 2 4

*吾雲・可大ら。文久頃。

107 松栗夏興「拝殿を」

俳諧一枚摺

19.7×12.9

一枚摺② 9 6 2 6

*三耕・鳳郎・桂甫・停雲・林曹・石外ら。文久頃。

108 土方歳旦「鶯や」・二承画、大根に小鳥図

俳諧一枚摺

19.7×17.4

一枚摺② 8 3 0 0

*としのたね「其六」。た、か・二蝶ら。文久頃。

109 土方歳旦「日暮る、」・二承画、羽子板図

俳諧一枚摺

19.4×17.4

一枚摺② 8 9 5 3

*としのたね。「其十」。思流・由来・ふとき・石水・世外ら。文久頃。

110 松声秋興「門出ると」・文輝画、東福寺図

俳諧一枚摺

19.2×25.7

一枚摺② 8 9 9 3

*梅通・公成・九起ら。文久頃。

111 晴江歳旦「道芝や」・東山画、猿図

俳諧一枚摺

18.9×17.0

一枚摺② 8 9 8 0

*梅通・寄泉・兔山・鶯庭。文久頃。

112 如渕披露「冬つばき」・二承画、旭に鶴図

俳諧一枚摺

36.2×51.8

一枚摺② 8 3 0 9

113 *如洌が阿賀新開を築き褒賞を受けた記念。緑糸・共浮ち。文久頃。汚損あり。
波同歳旦「此こゝろ」・「二承」画、鶏図

俳諧一枚摺

18.0×13.5

一枚摺② 8331

*断簡か。文久頃。

114 梅通句集披露挨拶状「洩やすき」

摺物(書状)

16.8×36.4

一枚摺① 2806

*「寅八月」。文久頃。

115 草洲歳旦「明そむや」・画者不明、十二支図

俳諧一枚摺

17.9×24.5

一枚摺② 8981

*鼎左・巨柳ら。「丙寅画曆陰大」(慶応二年)。絵曆。

116 芭蕉堂公成「花供養 歳旦／春興 摺物」

募句チラシ

17.3×12.5

一枚摺① 8252

*幕末頃。

117 芭蕉堂公成評・播磨西坡副評「年浪春秋選」

募句チラシ

24.4×33.5

一枚摺① 8246

*幕末頃。

118 芭蕉堂公成評・播磨鳴々副評「年浪春秋選」

募句チラシ

24.6×33.8

一枚摺① 8250

*幕末頃。

119 「俳諧／狂歌 御集冊御摺物細工所 湖雲堂近江屋利助」

引札

16.6×21.2

一枚摺① 8 2 3 5

*幕末頃。

120 「風蘿堂蓬仙立机還曆輯」

募句チラシ

16.8×23.2

一枚摺① 8 2 5 3

*幕末頃。

121 朝陽堂九起「俳諧発句類題百友集 三篇」

募句チラシ

15.5×9.8

一枚摺② 9 6 3 0

*幕末頃。

122 鶯宿春興「しほ浜の」・春星画、二見浦図

俳諧一枚摺

19.2×25.6

一枚摺① 3 3 6 8

*「申のとし」。幕末頃。

123 霍翅歳日帖披露挨拶状

摺物(書状)

15.8×10.5

一枚摺① 2 6 5 6

*「御社中様」のみ墨書。幕末頃。

124 三葉夏興「肌ざわり」・吾柳画、烏帽子に高札図

俳諧一枚摺

18.6×25.5

一枚摺② 9 6 2 4

* 「池田惣連中」。幕末頃。汚損あり。

125 不明 「十月廿五日限 歳旦 歳暮」

募句チラス

16.7×8.1

一枚摺① 3 2 3 8

* 「前々之通日限二御出句可被成候遅滞再々過鹿捺御座候故其段申談候以上」。幕末頃。

126 雲外摺物披露挨拶状「朝空の」

摺物(書状)

15.2×19.9

一枚摺① 8 2 7 2

* 「卯月」、「文音所／江戸梅廻本／土佐高智中屋氏」。幕末頃。

127 越台句集披露挨拶状「沙魚つりや」

摺物(書状)

17.8×33.3

一枚摺① 2 6 6 1

* 「七月廿八日」。日付と発句二句は墨書。幕末頃。

128 何亭歳旦「蝶々や」

俳諧一枚摺

18.7×38.8

一枚摺② 8 2 8 8

* 断簡。「申のとし」。蘭舟・五葉ら。幕末頃。

129 岳松春興「鶯も」・董里画、小禽図

俳諧一枚摺

19.1×25.5

一枚摺② 8 9 8 9

* 喜水・掌山・桐斎。幕末頃。

130 葛墙春興「空よりも」・文麓画、桜図

俳諧一枚摺

19.2×25.5

一枚摺② 8 2 9 1

*幕末頃。

131 萱原信覺春興「今朝だけや」・半山画、児童図

俳諧一枚摺

19.1×23.3

一枚摺② 8 9 8 7

*断簡か。幕末頃。

132 九竹夏興「天辺翔鳥」・東二画、淀城図

俳諧一枚摺

19.0×16.8

一枚摺② 8 2 9 2

*一夢・一盃ら。幕末頃。

133 契史句集披露挨拶状「桑の実の」

摺物(書状)

17.2×45.7

一枚摺① 2 7 4 6

*「六月」、「文音所双雀庵」。幕末頃。

134 見外句集披露挨拶状「夕霧や」

俳諧一枚摺

16.7×17.9

一枚摺① 8 2 4 4

*幕末頃。

135 行笠春興「真びるや」・芳園画、凧揚図

俳諧一枚摺

19.6×26.5

一枚摺② 8 9 6 9

*馬六・央洲ら。「狩留家連」。幕末頃。

136 芝英ら秋興「夕ぐもり」・魚文画、人物図

俳諧一枚摺

19.8×25.3

一枚摺② 8 9 7 6

* 桂雨ら。幕末頃。破損あり。

137 筑志春興「杖をつく」・画者不明、面図

俳諧一枚摺

25.8×34.8

一枚摺② 8400

* 鶴沢喜鳳・豊竹呂江・竹葉連・いろは連・泉連ら。幕末頃。

138 鼎左秋興「こゝといふ」・画者不明、画題不明

俳諧一枚摺

19.3×25.4

一枚摺② 8984

* 月所・松桂ら。カスレあり。幕末頃。

139 馬尹春興「落かけた」・画者不明、花卉図

俳諧一枚摺

38.5×25.3

一枚摺② 8997

* 青雀・白玉ら。カスレあり。幕末頃。

140 梅蒼歳旦「よき便り」・秋亭画、竜宮図

俳諧一枚摺

38.4×26.0

一枚摺② 8345

* 杜鴻・鶴窓ら。幕末頃。汚損あり。

141 肥後蘇山下如意屈連歳旦「元日」

俳諧一枚摺

33.3×42.9

一枚摺② 8370

* 「京橘治刀」。幕末頃。

142 「芭蕉翁所持椿杖縮図摺物」

摺物(短冊型)

36.4×6.0

一枚摺② 9643・5

*幕末・明治頃。

143 「亡師芭蕉翁之像画杉風」

摺物(短冊型)

36.4×6.0

一枚摺② 9 6 4 3 . 6

*幕末・明治頃。

144 おり屋千賀・妹きぬ披露「接木して」・画者不明、梅に土筆図

俳諧一枚摺

18.9×25.0

一枚摺② 8 2 8 9

*幕末・明治頃。

145 菊年ら四季発句「夕立は」・楚雪画、鶏図

俳諧一枚摺

18.7×25.7

一枚摺② 8 9 6 3

*一露・二鶴・一川・柳子・弘湖ら。幕末・明治頃。

146 曲川句集披露挨拶状「松取た」

摺物(書状)

15.8×12.6

一枚摺① 8 2 7 3

*「戌春」。幕末・明治頃。

147 四雲春興「楽は此中にあり雪月花」・画者不明、瓢箪図

俳諧一枚摺

34.6×25.8

一枚摺② 8 3 5 6

*幕末・明治頃。

148 碩水春興「内くや」・文輝画、独楽回し図

俳諧一枚摺

19.3×17.0

一枚摺② 8 9 7 0

149 * 「とりの春」。桐齋・喜水ら。幕末・明治頃。
雪塙春興「わが家の」

俳諧一枚摺

16.8×21.3

一枚摺② 8 9 5 6

150 * 「春催」。棗翁・月艇ら。幕末・明治頃。
喜水春興「これからは」・有章画、椿図

俳諧一枚摺

19.0×25.4

一枚摺② 8 9 6 4

151 * 「巳の春」。掌山・玉江ら。幕末・明治頃。汚損あり。
此春園平府「類題発句 続阿羅野集」

募句チラシ

13.1×13.2

一枚摺① 8 2 4 9

* 明治頃。

Ⅲ 書狀編

書狀目録

(併号書狀の部)

| | | | | |
|---|----------------|--------|--------------|------------|
| 1 | 為山書狀 | 嵐夕宛 | 二月二日付 | 書狀 2 6 9 0 |
| 2 | 為山書狀 | 梅臣宛 | (安政五年)十一月五日付 | 書狀 2 8 9 1 |
| 3 | 一清書狀 | 梅臣宛 | 八月十六日付 | 書狀 2 6 2 5 |
| 4 | 一清書狀 | 梅臣宛 | (安政四年)正月廿四日付 | 書狀 2 8 5 3 |
| 5 | 逸淵書狀 | 梅臣宛 | 八月廿五日付 | 書狀 2 8 9 8 |
| 6 | 花下庵書狀 | 梅臣宛 | 日付欠 | 書狀 2 6 4 5 |
| | * 断簡。 | | | |
| | * 下絵入り料紙(藤の花)。 | | | |
| 7 | 瓦全書狀 | 四時堂志諺宛 | 七月二十八日 | 書狀 2 6 5 2 |
| 8 | 可大書狀 | 榎臣宛 | 十二月九日付 | 書狀 2 8 7 6 |

| | | | | |
|----|-------|-----------|--------------|------------|
| 9 | 嘉平次書狀 | 彌助宛 | 二月廿九日付 | 書狀 2 6 9 3 |
| 10 | 元日書狀 | 風絮宛 | 二月廿一日付 | 書狀 2 6 1 9 |
| 11 | 其淵書狀 | 楳臣宛 | 六月廿八日付 | 書狀 2 8 8 3 |
| 12 | 菊也書狀 | 楳臣宛 | 九月十三日付 | 書狀 2 6 8 8 |
| 13 | 其葉書狀 | 楳臣宛 | 初秋付 | 書狀 2 8 8 9 |
| 14 | 玄蛙書狀 | 宛名欠 | 五月十日付 | 書狀 2 7 5 0 |
| | *断簡か。 | | | |
| 15 | 見外書狀 | 月添宛 | 四月朔日付 | 書狀 2 9 8 1 |
| 16 | 玄武坊書狀 | 三日月庵宛 | 日付欠 | 書狀 2 8 2 8 |
| | *断簡か。 | | | |
| 17 | 弘湖書狀 | 楳臣宛 | 三月五日付 | 書狀 2 7 5 4 |
| 18 | 浩策書狀 | 柳水園宛 | 七日付 | 書狀 2 6 5 7 |
| 19 | 公成書狀 | 楳臣宛 | 八月廿四日付 | 書狀 2 6 4 2 |
| | *断簡。 | | | |
| 20 | 語外書狀 | 掃雲居宛 | 三十日付 | 書狀 2 9 6 8 |
| 21 | 姑山書狀 | 曲川宛 | (文久三年)四月廿一日付 | 書狀 2 9 2 4 |
| 22 | 五鹿書狀 | 停雲宛 | 小望日付 | 書狀 2 9 0 3 |
| 23 | 五渡書狀 | 喜水・梅下・桐齋宛 | 日付欠 | 書狀 2 9 3 8 |

*断簡。

24 三竹書状 梅臣宛

菊月廿九日

書状 2 8 1 5

25 杉堂書状 宛名欠

日付欠

書状 2 8 2 2

*断簡か(発句のみ)。

26 而后書状 宛名欠

日付欠

書状 2 8 0 2

*断簡か(発句のみ)。

27 芝石書状 風絮宛

二月十四日付

書状 2 6 3 1

*包紙(28 芝石)の本紙。

28 芝石 書状包紙

書状 2 9 9 5

*貞招から芝石、芝石から風絮(書状27 芝石書状の包紙)。

29 芝石書状 風絮宛

六月三日付

書状 2 9 1 1

30 拾山書状 柳水園宛

万延元年閏十日付

書状 2 7 9 2

31 春湖書状 宛名欠

日付欠

書状 2 8 8 0

*断簡か。

32 春水書状 翠々齋宛

十二月十六日付

書状 2 7 1 6

33 春風書状 宛名欠

日付欠

書状 2 6 6 5

34 掌山書状 宛名欠

廿一日付

書状 2 7 4 3

*模様入り料紙(波に衝)。

35 尚年書狀 世來宛 五月十二日付 書狀 2 9 2 0

*断簡。

36 松波書狀 居堂ほか十名宛 十月一日付 書狀 2 8 3 4

*ほかに亀山・利亀・柳塘・為巢・池雄・栗生・飛節・玉壺・利香(仁方連中)宛。

37 徐風庵書狀 器芳宛 卯月七日付 書狀 2 9 7 7

38 辰一庵書狀 悟一宛 霜月付 書狀 2 7 3 1

39 清香(西大寺)書狀 梅臣宛 六月十二日付 書狀 2 7 0 2

40 青□書狀 梅臣宛 神無月廿六日付 書狀 2 8 0 9

41 清民書狀 楳臣宛 林鍾八日付 書狀 2 9 3 5

42 蒼山書狀 宛名欠 如月十九日付 書狀 2 7 0 6

*断簡か。

43 蒼山書狀 楳臣宛 如月十七日付 書狀 2 8 7 3

44 棗地書狀 楳臣宛 十二月三日付 書狀 2 7 3 4

45 素屋書狀 楳臣宛 (万延元年)九月十八日付 書狀 2 8 9 5

46 泰山書狀 楳臣宛 卯月廿六日付 書狀 2 7 9 7

47 卓丈書狀 宛名欠 日付欠 書狀 2 8 3 9

*断簡か(発句のみ)。

48 太中(菅茶山)書狀 藤□□宛 五月七日 書狀 2 6 3 6

49 知風書狀 宛名欠

*断簡か(発句のみ)。

50 鳥古・三顧書狀 社中宛

51 江石書狀 宛名欠

*断簡か(発句のみ)。

52 兎山書狀 楳臣宛

53 南枝書狀 無宛名

*断簡。

54 二鷗書狀 梅臣宛

55 梅室書狀 砂年宛

56 梅通書狀 楳臣宛

57 梅通書狀 楳臣宛

58 梅夫書狀 風絮宛

59 梅裡書狀 楳臣宛

60 波同書狀 梅臣宛

61 半夢書狀 梅臣宛

62 風外書狀 梅臣宛

*断簡か(発句のみ)。

日付欠 書狀 2 7 7 9

正月付 書狀 2 8 3 1

日付欠 書狀 2 7 7 3

五月十二日付 書狀 2 8 6 3

二月十日付 書狀 2 6 4 9

九月廿八日付 書狀 2 8 6 8

七月朔日付 書狀 2 7 8 4

十月十二日付 書狀 2 7 1 8

臘月廿七日付 書狀 2 7 6 9

廿二日付 書狀 2 6 8 1

閏八月十日付 書狀 2 7 6 5

六月十日付 書狀 2 8 4 6

霜月廿七日付 書狀 2 6 7 3

日付欠 書狀 2 9 7 1

| | | | | |
|----|------|------------------------|--------|------------|
| 63 | 風絮書狀 | 宛名欠 | 日付欠 | 書狀 2 9 0 7 |
| | | *断簡か(発句のみ)。 | | |
| 64 | 武陵書狀 | 藏六宛 | 正月廿日付 | 書狀 2 8 5 8 |
| 65 | 文衣書狀 | 風絮宛 | 葉月けふ付 | 書狀 2 9 4 5 |
| 66 | 文海書狀 | 梅臣宛 | 二月十四日付 | 書狀 2 7 2 4 |
| 67 | 文海書狀 | 宛名欠 | 日付欠 | 書狀 2 7 7 6 |
| | | *断簡か(発句のみ)。 | | |
| 68 | 芳草書狀 | 梅臣宛 | 五月三日付 | 書狀 2 9 3 2 |
| 69 | 眠亭書狀 | 古峰宛 | 日付欠 | 書狀 3 2 6 6 |
| | | *断簡。左端に「夏興 西備西城社中」と刷る。 | | |
| 70 | 木海書狀 | 風絮宛 | 九日付 | 書狀 2 6 8 5 |
| 71 | 木海書狀 | 風絮宛 | 二日付 | 書狀 2 6 9 7 |
| | | *上ウ書は「白甫巖君大人」(風絮の夫)宛。 | | |
| 72 | 木海書狀 | 風絮宛 | 九月廿二日付 | 書狀 2 8 4 2 |
| 73 | 野井書狀 | 正介宛 | 九月始付 | 書狀 2 7 6 2 |
| 74 | 有節書狀 | 梅臣宛 | 八月廿七日付 | 書狀 2 8 2 5 |
| 75 | 悠平書狀 | 梅臣宛 | 正月十七日付 | 書狀 2 9 4 9 |
| 76 | 李曠書狀 | 榎臣宛 | 三月廿三日付 | 書狀 2 7 1 0 |

77 梨春書狀 宛名欠 日付欠 書狀 2 6 3 8

*断簡か(発句のみ)。

78 連梅書狀 宛名欠 日付欠 書狀 2 9 1 8

*断簡か(発句のみ)。

79 露曉書狀 松琴・春峰宛 日付欠 書狀 2 7 8 7

80 露萩書狀 梅臣宛 正月五日付 書狀 2 7 3 9

81 芦路書狀 風草・兆而・杜考宛 正月十一日付 書狀 2 9 2 2

*断簡。

82 蟻兄書狀 煤臣宛 霜月念七付 書狀 2 9 7 4

83 □故書狀 水音宛 廿九日付 書狀 2 9 9 2

*断簡か(発句のみ)。

(俗名書狀の部)

84 橋本吉次郎徳聰書狀 川口常次郎宛 正月五日付 書狀 2 9 8 5

85 三宅伊左エ門書狀 松本白甫・松本治右衛門宛 八月廿六日付 書狀 2 9 5 5

(差出人不明の部)

86 宛名欠 龜山宛 日付欠 書狀 2 9 4 0

*断簡。

IV 一枚物編

一枚物目録

- 1 以嘯 三節懷紙 「賑はしや里の煙りと初霞」など三句
一枚物① 3 1 5 3
* 「うしの歳納」。署名「竹月園以嘯」。
- 2 以嘯(竹月園) 三節懷紙 「賑はしや里の煙と初霞」など三句
一枚物② 3 2 5 8
* 「うしの歳納」。
- 3 惟足齋 三節懷紙 「ひんくくと…」など狂歌三首
一枚物① 3 0 2 7
* 「未の歳旦」。
- 4 一庵 俳文 「仏恩披謝の志願ありて」云々
一枚物① 3 0 6 6
* 末尾に発句「操ればこゝろや法の春の風」。
- 5 一空(秋月庵) 画賛 「尺雪や恵の雨も積る程」 桐溪画・梅枝に鳥図
一枚物③ 3 3 4 4
* 破損あり。
- 6 一指 発句 「山深み来て生かへる清水哉」
一枚物① 3 1 0 7・1

*署名「豊後 一指」。

7 一亭 句稿 「鎌の柄て領分わけける落葉哉」など二句
一枚物① 3 0 9 3

*書簡断簡か。

8 逸淵 色紙 「春雨の空も粟津はしぐれけり」
一枚物① 3 0 6 4

*前書「義仲寺」。

9 意藩 発句 「紫陽花や真午時迺風情たくましき」
一枚物② 3 2 0 0

*署名「一志意藩」。

10 允文・正勝・忠勝ら 三ツ物揃懐紙 「黄鳥や雪深くしる春の声」など三ツ物四組・発句一二句
一枚物② 9 6 6 7

11 鳥旭 発句 「月雪やさへても旅の花ごゝろ」
一枚物① 3 1 2 1

*前書「饞別 何調亭の吾妻行を浪花の客舎に見送り奉りて」。署名「東雲庵鳥旭」。

12 鳥谷 発句 「さゞれ石にのどけき鶴のあゆみかな」
一枚物③ 3 3 1 5

13 鳥谷 発句 「ほとゝぎす鳴樹の下を通けり」
一枚物③ 3 3 2 5

*前書「佐夜中山にて」。

14 雲山ら発句 点巻断簡 「出る路とかくるゝ鳥や朝霞」など二一句
一枚物③ 3 2 8 9

*雲山・土手坊・遊誹・梅節・玉月堂・清風庵・女郎花。

15 英泉 句稿 「みしか夜や晴てもしばし雨くさき」など三句
枚物② 3 2 0 4

*破損あり。

16 爰白ら 点卷(雜俳)断簡 「左りを指して蜂の黑夜づらつく」

一枚物① 3 1 4 5

*土黒・一流。右端に「イロハ」。

17 応宇 俳文 「いつの年にか有けむ」云々

一枚物① 3 0 3 2

*末尾に発句「幾年か道も露けし鳥の跡」。

18 花史 色紙 「雨の夜やはなしも長き花紅葉」

一枚物② 9 6 5 2

*前書「秋雨夜話」。水辺風景下絵摺物料紙。

19 可大 俳人番付(墨書)

一枚物① 3 0 4 6

*勸進元の位置(中央最下段)に可大、中央最上段に梅室の名を記す。また、右最上段には岱年・

悠々・而后・月庭・逸淵・芹舎、左最上段には由誓・一具・水竹・梅通・有節・林曹の名を記す。

20 可大 「名月の光吹なりみねの松」など五句

一枚物② 9 6 6 5

*書簡断簡か。

21 霞竹 三節懷紙 「若水や柄杓置手の艶ごゝろ」など三句

一枚物① 3 1 3 2

*「丑の歳暮」。

22 花朝女 句稿 「佐保姫や雪ある山の裾つゞき」など四句

一枚物① 3 1 3 1

*書簡断簡か。

23 柯亭 発句 「ものゝふの轍しらぬ世なり鳧」など二句

一枚物① 3 1 4 8

24 可友 句稿 「梅がゝや顔に近き心地する」など四句

一枚物① 3 0 1 7

*書簡断簡か。

25 荷雄 句稿 「風や揚酒きれてあひの宿」など六句 一枚物① 3 0 4 2

* 荷雄・尚泊・来青・松宇・停雲。

26 顔一 和歌 「はる毎に君がかざしに咲そへて千世もさかふるはなのいろかな」など三首 一枚物① 3 1 5 8

* 前書に「風絮尼の君は俳諧のみやび人におはしましけるが今年八十の賀し給ふに」云々。裏に「江戸 木海」以下、当時の俳人一七名の名前を記す。

27 寛旭 三節懐紙 「算へく待春樂し除夜の鐘」など二句 一枚物① 3 0 8 9

* 「酉の歳尾」。

28 閑齋ら発句和歌・遊外画 寄書 「夏の夜はつい更安しみねの月」など発句九句・和歌一首 一枚物③ 3 3 4 0

* 「庚寅夏五写 遊外居上」(天保元年)。閑齋・莞尔・西寮・俗年・梅室・蒼虬・鼎左・公氷・雪塙。

29 閑女 自画賛 「卯の花やしのぶ折戸のかゝはゆき」 女性図 一枚物① 3 1 1 6

30 帰一坊 発句 「一人前の浮世や背戸に簾」 一枚物① 3 1 5 7

31 淇澳 三節懐紙 「春奴山も完尔と今朝の春」など三句 一枚物① 3 0 3 0

* 「甲寅ノ聖節」(安政元年)。

32 己外坊 色紙 「見送るやかざす扇も笠のつれ」 一枚物① 3 1 1 2

* 前書「餞別」。

33 橘中庵評 抜句集 「安政四丁巳年如月上旬 二三連臨時卷」より六句 魚鳶画・風景図

34 其徳 懷紙 「あの鐘を常にも聞か秋の暮」ほか和歌・首 一枚物① 3 0 3 9

*前書「安芸国厳島明神へ参詣の折から」云々。絵半切(天王寺)風景を淡彩刷(料紙)。

35 喜遊ら 句稿断簡 「後ろ向て若く見せたる踊かな」など一四句 一枚物① 3 1 2 9

*喜遊・柳泉・未国・舟土・晴年・雪秀・魚光・花雪・如扇・喜明・五葉・志走・雨旦・青々・石遊。高点句抜書の断簡(61 細省ら 句稿断簡)のツレか。

36 貴友ら 句稿 「夜は露にまかして萩の月白し」連句九句・発句三句 一枚物② 3 2 4 2

*「良夜」番村於天真庵 歌仙満尾(九句にて「一順下略」。貴友・梧亭・如流・半輪・禹来・

芝山・留堂・鷺□・魯陰。罫紙を使用。

37 九春 発句 「世経ても尽ぬながれの苔清水」 一枚物① 3 1 0 7・2

*署名「豊後 九春」。

38 恭豊 発句 「春風やおどり来るてう駒の跡」 一枚物① 3 1 1 5

*前書「宝暦五年亥七月廿四日之夜夢想」。署名「室恭豊」。

39 芹舎 発句 「寝過した日ははつ秋の紛れけり」 一枚物① 3 1 2 0

40 芹舎 句稿 「腕さする秋は来にけり角力とり」など九句 一枚物① 3 1 7 1

*書簡断簡か。

41 琴松園 発句 「産も千代のまた初花ぞすゑたのし」 一枚物① 3 0 5 8

*前書「初産を寿きて」。

42 琴和 三節懷紙 「弓はじめ常盤の松を後口指」など三句・和歌三首
一枚物② 3 1 9 9

*「寅ノ聖節」。

43 「桂華」 和歌 「有明の月も入るさの山の端にかゝれば匂ふ朝顔の花」
一枚物① 3 1 4 7

*署名なし。

44 桂華 三節懷紙 「おそれみて草の戸明よ初日出」など三句
一枚物② 3 2 4 7

*日の出を見る人物図(肉筆)下絵あり。

45 月朝 発句 「扇だけよけても波は来ざりけり」
一枚物① 3 1 9 4

*雲母刷薄下絵料紙。

46 玄蛙 句稿 「大せつに身をかゝえたり雨の花」など五句
一枚物① 3 1 0 9

*書簡断簡か。

47 玄蛙 句稿 「古郷や雪のうもれ木見に行ん」など三句
一枚物① 3 1 1 0

*書簡断簡か。

48 玄川 発句 「春は今朝まつ花鳥をこゝろかな」(連歌)
一枚物① 3 1 1 8

*前書「歳首」。

49 元朝 発句 「明易き夜やさめぬめにぬくいめし」
一枚物① 3 1 8 8

*前書「前途之白里の公務を荷ふて」云々。

50 公成 発句 「是もまた花のかゝみよ小盞」
一枚物① 3 0 2 8

51 公成 発句 「啄木鳥のつゝき出せしか初ざくら」 一枚物② 3 2 1 4

*前書「ある禪刹にまかりしにむつかしげなる老木の花のほころび就たるを見て」。

52 公成 句稿 「はしり来て飛つく犬やうめの月」など六句 一枚物② 3 2 4 9

53 孝標・正勝・忠勝ら 世吉懐紙 「安永三年正月七日夜会 何屋」 一枚物② 9 6 6 3

54 公眠 発句 「新海苔や富士の句もある状のはし」 一枚物① 3 0 5 9

55 五英・素山 発句 「ねても居ぬ枝の鳥やおぼる月」・「翦鷹や麓はあらし峰は月」 一枚物③ 3 3 1 8

56 五升庵 俳文 「ある人にこたふること葉」 一枚物① 3 0 8 2

*末尾に発句「萩薄たふるゝまでの老が友」。

57 娛中坊 白画賛 「雲の上はありし昔の姥ざくら」 女性図 一枚物③ 3 3 2 9

*汚損あり。

58 梧亭 点印譜 「梧亭点式」 一枚物① 3 0 6 3

*十八点・十点・七点・五点・三点・二点・一点。

59 和詩 古梅園 「俗仕に」云々 一枚物① 3 1 3 8

*奥書「林半吟雅君閑庭に松竹梅を籠め和詩七律賦」。署名「七十七翁古梅園」。

60 虎友ら発句 点巻断簡 「水鳥の行筋たつや汐さかえ」など四句 一枚物③ 3 2 7 4

*全・虎友・梅節・飛々庵。

61 細省ら 句稿断簡 「人別のうちに聴たるかゝし哉」など二三句 一枚物① 3 0 6 1

*細省・錦寿・花雪・紫水・一笑・如月・泉隣・北人・幾朝女・秀巴・喜逸。高点句抜書の断簡

(35) 喜遊ら 句稿断簡」のツレ)か。

62 左城・柴籬両吟 歌仙懷紙 「草枕犬も時雨る、か夜の声」
一枚物② 3 2 6 0

*「拝吟」と前書。発句は芭蕉発句(『あら野』所収)。一〇句目まで。

63 三才ら発句・一笛斎点 「朝寒や大川形にかゝる霧」など二九句
一枚物③ 3 2 7 8

*三才・虎声・梅枝・閑谷・亀青・玉山・加我・小月・萩露・東山・山井・柳水・三寸・秋景・弄玉・樂遊・初雪・西花・蝶醉・翠竹・霞山・玉光・岑雪。

64 三千風 懷紙 「とまれとハ我ちからなき柳哉」
一枚物① 3 0 9 6

*前書「一滴万波の順風にふんでの棹さし袷の帆を揚し折ふし袖をひきさらばくの時」。

65 三朝 発句 「散りたれば涕のこる花見かな」
一枚物① 3 1 5 6

66 山布留 三節懷紙 「我身こそ我宝なれけふの春」など三句
一枚物② 3 2 4 3

*「寅春」。署名「橘雪庵 八十二翁」。

67 山布留 三節懷紙 「元日や松の位は峰に有」など三句
一枚物② 3 2 5 4

*「酉春」。署名「七十八叟 長閑齋」。

68 三眠 俳文 「梅茶老翁は長々の病ひも快復ありしが」云々。
一枚物② 3 2 3 9

*末尾に「咲く梅の香もたしか也宿の春 三眠拜」。

69 而后 句稿 「谷川の水からうすも日永哉」など五句
一枚物② 3 2 4 4

70 自在庵 自画賛 「小男鹿のかさなりふせる枯野かな 土芳」 土芳像
一枚物② 3 2 3 3

*落款「自在庵俳画印」(朱文方印)。

71 指竹 三節懷紙 「皆人の性は善なり今朝の春」など三句 一枚物① 3 1 5 4

* 「戌のとし 元旦」。署名「東江亭指竹」。

72 指竹 三節懷紙 「恩沢の満てゆたかや玉の春」など二句 一枚物① 3 1 9 1

* 「丙辰 歳旦」(安政三年)、署名「東江亭指竹」。

73 指竹 三節懷紙 「元日やみな若返る人の顔」など三句 一枚物② 3 2 1 6

* 「安政六未のとし」。署名「東江亭 指竹艸」。

74 芝童 発句 「名月やよそに見し事もおもひそえ」など二句 一枚物① 3 1 4 4

75 芝童 懷紙 「朝顔の花や明残る雲もがな」など二句 一枚物① 3 1 5 1

76 芝童ら 懷紙 「葉のうらの砂にも箔や菊の花」など四句 一枚物① 3 0 2 0

* 前書「重陽」。年記「申のとし」。末尾に「社中〔芝〕〔童〕(朱文方印)」。料紙に庇の下絵。二

榮・離洞・蓮状・芝童。

77 秋窓 色紙 「木まくらをちよとりたるすゞみかな」 一枚物② 3 2 4 1

* 左注「一□郎のうちにあるを」。銀泥雲形白ヌキ亀下絵料紙。

78 秋窓 発句 「草山を」云々 一枚物② 9 6 5 4

* 汚損あり。

79 子葉 発句 「短尺に萩大名や句談合」 一枚物① 3 0 6 9

* 署名「大高源五 子葉」。断簡か。

80 昌逸ら 兩節懷紙 「仰ぐ代を松にたとへん千々の春」以下一六句(連歌) 一枚物① 3 0 8 6

*端書「文化五年正月十一日 柳宮之御会 山何」。法眼昌逸(発句)・内大臣殿(脇)・昌惇(第三)
以下十六句(御一巡)と其阿発句二句(年の始に)「去年のくれに」を記載。

81 昌永 発句 「立かへれうら若水に老の浪」
一枚物① 3 0 9 5

*前書「歳旦」。

82 松什 発句 「をしまるゝ年はへらさず春立日」
一枚物① 3 1 5 2

*前書「年内立春」。

83 松波 句稿 「刈込だ垣の新芽や後の月」など六句
一枚物② 3 2 4 6

*書簡断簡か。

84 小栗庵 発句 「鳩の声まじりて雨のくれちかし 小栗庵」
一枚物② 3 2 0 5

85 松鱗 白画賛色紙 「植えかへし菊いや増しにかほりけり」 書帙・羽箒図
一枚物① 3 1 9 7

*前書「転宅を祝して」。

86 升六 色紙 「雑木にもふれば降也はるの雨」
一枚物① 3 1 1 3

87 如草 句稿 「裕ぞと思ふもひと日二日かな」など五句
一枚物② 3 2 1 3

*書簡断簡か。

88 如橙 白画賛 「律生ふ家の戸さしや閑古鳥」
一枚物① 3 1 6 1

*如橙は俳号必大。

89 士朗 白画賛 「きりぐす啼やいつまでうりの花」 瓜花図
一枚物③ 3 3 2 1

*破損あり。

90 士朗 白画賛 「子のよふにうゑたれ(は)こそ梅の花」 梅図
一枚物③ 3 3 4 7

*補修あり。

91 親具 発句 「別ゆく鷹や大空沖津船」
一枚物① 3 1 4 0

*左端を欠損。

92 申斎 発句 「鉢たゝき夜の衣をふるひけり」
一枚物① 3 1 6 3

93 信重 発句 「松ばやしまだ乳を吞弟かな」 など六句・付合二組
一枚物② 9 6 5 6

*端書に「元禄六年臘月 こもり江集 □屋□郎 信重」。

94 水也 付合 「□や得し是も□人の燕子花」 など一組
一枚物② 3 2 0 7

*破損あり。

95 青ら 句稿 「満汐にもちあふ花のくもり哉」 など八句
一枚物① 3 1 6 2

*青・(虫損)・臥央・若・半桂。

96 尺艾 発句 「月登る山に城見る今宵哉」
一枚物① 3 0 5 3

97 雪鮮 画賛 「落ついた顔の見えぬやみそさゝる」 文螭画・垣根
一枚物② 3 2 2 9

*「卷中秀逸」。

98 千影 色紙 「稲の香を吹や祭の膳のうへ」
一枚物① 3 0 5 2

*薄紅色料紙。スレあり。

99 洗午坊ら 三節懷紙 「世につれて老も若やく花の春」 など発句六句・連句表八句・和歌二首
一枚物② 3 2 3 7

*「弘化二年乙巳歳」。洗午坊・米寿未及・二耕・青一・川二・梅英・遊之・梅嶺・春山・文水・委積・右白坊・文字房。

100 祖郷・春岱・対山 半歌仙懷紙 「鶏頭に日やけはみえず畑の縁り」
一枚物① 3 1 6 4

*表題「俳諧一折」。末尾に「弘化二年初秋日 於対山亭興行」。

101 東斎(隣愈) 三節懷紙 「膳の数またも芽出たき雑煮かな」など三句
一枚物① 3 0 8 5

*「未元旦」。

102 東斎(隣愈) 三節懷紙 「世直しに代は静りてあら玉のとしもめてたふたつの春かな」一首ほか二句
一枚物② 3 2 1 8

*「辰歳旦」。

103 即美ら 発句・漢詩句・画寄書 「青蠅のしらぬ道あり蘭の花」ほか
一枚物① 3 1 7 3

*破損あり。

104 素圭子・稻井 付合 「さればこそ入ほど深し夏木立」以下二句
一枚物① 3 1 4 9

*前書「はし書略」。

105 素月 発句 「美しき夜を鳴ふるす蛙かな」
一枚物① 3 1 0 6

106 蘇山 発句 「啼ながら黄鳥の飛ぶすがたかな」
一枚物① 3 1 0 5

*左上部を欠損。

107 俵山 封筒 「備后尾之道 楳臣先生君 俵山」(墨書)
一枚物② 3 2 0 8

*「尾州名古屋京町通新町丁字屋善治郎俵山」(朱文印)。

108 大古 発句 「それとめのさめごゝろよしはつがらす」
一枚物① 3 0 6 8

109 大虫 自画賛 「蓬萊の松にもあるや朝□□□」
一枚物② 3 2 0 1

*破損あり。署名「大虫道人」「対梅」(白文印)。

110 岱年 画賛 「見たことは皆わするゝに不尽の山」 雄山藤天瑞画・山景図
一枚物③ 3 3 5 0

*「天瑞」(白文印)・「徳平」(白文印)を捺す。

111 岱年 発句 「手はなせはもとの影もつ芒かな」
一枚物② 3 2 6 5・5

112 卓池 自画賛 「月や日や馴てゆきかふ雲と鶴」 松図
一枚物③ 3 3 3 6

113 竹陵 発句 「長閑さや寄せては返す浦の浪」
一枚物③ 3 3 0 6

114 中守 俳文 「過にし青溪雅伯は」云々
一枚物① 3 0 7 0

*青溪十七回忌追善。末尾に発句「きくひとのなきをなくなりゆふ千どり」。

115 忠勝・元長ら 三ツ物揃懐紙 「甲午試筆連歌 会于広島満松院」 三ツ物九組
一枚物② 9 6 5 8

*安政三年。

116 聴雨 句稿 「吹廻す瀧の糸より種の風」など五句
一枚物② 3 2 4 8

117 蝶斎 色紙 「後の月三五の夜ほど雲はなし」
一枚物① 3 1 9 5

*松鶴下絵料紙。

118 潮水 発句 「頓て地にとゞく歟雨の糸ざくら 潮水」
一枚物② 3 2 2 1

119 樗堂 発句懐紙 「菜園やいかに回らぬ春の草」
一枚物② 3 2 6 3

*前書「む月半杏斎老翁の往生ありけるを悼て」。

120 樗堂 発句色紙 「片くは足が寒いか小田の鶴」
一枚物② 3 2 6 4

*緑色地菖蒲下絵料紙。傷みあり。

121 拓本 「樗堂墓」
一枚物② 3 2 6 5・6

122 対山 連句 「ひしくとゆめの戸た、く水鶏かな」以下六句

*端書「歌仙」。表六句を清書し「対山拝」と署名。

123 桃下ら撰 募句チラシ 「醒井荒神社奉燈集」(墨書)
一枚物① 3 0 4 3

*撰者、桃下・醒居・一朝・芝又。

124 等裁 発句 「人波や花のみなどの広小路」
一枚物① 3 1 4 1

*前書「上野」。

125 東水 色紙 「吹おれた薄もやはり穂に出たり」
一枚物① 3 1 1 4

126 桐栖 発句 「冬瓜になすびよ花はをみなへし」
一枚物② 3 2 5 3

*前書「求め塚にて」。

127 兔園 三節懷紙 「不二山の夢ゆめでなし初日の出」など三句
一枚物② 3 2 2 5

*「戊午歳鶏旦」(安政五年)。署名「閑月亭兔園」。寺院画(江ノ島か)絵半切を使用。汚損あり。

128 篤老 発句 「土用ぼしだれも春日の御末かな」
一枚物② 3 2 5 5

*落款「慎平」(朱文方印)。

129 土芝 発句 「千とせふる鹿もなくらむ春日山」
一枚物① 3 0 3 8

*打曼紙料紙。前書「やむごとなきみかたのいそぢの賀句」二云々。

- 130 土芝 発句 「蕪干せばそもあはれある雫かな」 など三句
一枚物② 3 2 1 5
- 131 土芝 発句 「蕪干せばそもあはれある雫哉」 など二句
一枚物② 3 2 2 0
- 132 土芝 発句 「宿ふれはちりの中より初はす 宿ふれは塵の中より初蛙」
一枚物② 3 2 3 1
- *前半は書き損じか。
- 133 土芝短冊包紙
一枚物② 9 6 6 8
- *享和三年四月に購入した極上越前短冊の包紙を「鑿水亭土芝翁遺吟短冊」の包紙として使用した
もの。
- 134 南々 句稿 「□□手で結ぶ葉□や水仙花」など五句
一枚物① 3 1 8 5
- *書簡断簡か。
- 135 二井ら 点卷断簡 「雪の日やさし引汐の色もなき」など四句
一枚物① 3 0 2 1
- *喜笑・日光・千蝶・二井。点印を捺す。(136 梅谷ら 点卷断簡)のツレ)
- 136 梅谷ら 点卷断簡 「薄着しても今月寒し春の風」など三句
一枚物① 3 0 9 4
- *梅谷・二井・鹿島。点印を捺す。(135 二井ら 点卷断簡)のツレ)
- 137 梅室 発句 「広浜や鶴たつあとのおぼろ月」
一枚物① 3 0 8 8
- 138 梅室 発句 「豊の秋ちからにはづむをどりかな」
一枚物① 3 1 9 3
- *関防印「白台」。
- 139 梅茶 俳文 「ことし本卦返りなるより嗣子如琴が促しによつて」云々
一枚物① 3 1 4 2
- *末尾に「囃されて身を高ふらん松の花」。

- 140 梅通 発句 「あら涼し命をたもつ酒の味」
一枚物① 3 1 0 0
- 141 梅通 句稿 「はぐれ来てはしる千鳥や松林」など五句
一枚物① 3 1 7 2
- * 書簡断簡か。
- 142 梅通 句稿 「出在所や梅はあら野、有来り」など五句
一枚物② 3 2 4 0
- * 書簡断簡か。
- 143 梅北 懷紙 「風もよし活きて飛ぶ鯛恵美寿講」など二句
一枚物① 3 0 4 8
- * 前書 「松井主人の恵美寿祭に」云々。
- 144 梅北 懷紙 「繁昌は音にも聞けど此宿へ」など二句
一枚物① 3 1 3 3
- * 前書 「釜の鳴りけるを祝し奉る」。
- 145 梅北 発句 「餅にさへ蓬の名ありいつくしま」
一枚物② 3 2 5 6
- * 前書 「弥生の望宮じま詣に供をくれて」。
- 146 梅北 発句懷紙 「松むしやめぐり来る日のかひもなし」
一枚物② 3 2 6 5
- * 前書 「大 尊者の七々の日を悼て」。雅楽器挿絵摺物料紙。
- 147 麦雨 懷紙 「渡し馬も糊こわ着たり今朝の秋」など三句
一枚物① 3 0 9 9
- * 前書 「初秋」。草花模様摺下絵。
- 148 白甫 両節懷紙 「孫に子にみな集りぬ弓はじめ」など三句
一枚物② 3 2 1 9
- * 前書 「古郷に六十の春を迎て」、署名 「麗々舎白甫」。
- 149 波同 発句 「千代とまでねがはぬ我も小松引」
一枚物① 3 1 1 1

- 150 巴流ほか 懷紙 「盃のうちにもちるとけふの月」など八句 一枚物① 3 0 7 4
 *琴指・少年朝駒・少年燕市・母とみ・此夕・野橋・女しな・巴流(相原若連中)。端書「午 良夜」・奥書「右月手向」。
- 151 半牛(稚之本) 発句 「蓑笠につくほど置いて惚の露」 一枚物③ 3 3 5 5
 *前書に「唐土のためしには鍛もてこがねの釜を堀」云々。
- 152 半時庵 俳論書付 「ほ句は只群を出て工案にわたるべし」云々 一枚物② 3 2 2 3
 範美 俳文 「百華園主人は梅臈宗匠にかはりて」云々 一枚物① 3 1 6 8
- 153 *末尾に「梅庵主人 範美／松とあふて名は千代までそ花の春」。 一枚物① 3 0 1 3
 風絮 発句 「御影供や何所までつゝく蟻の道」
- 154 *署名「八十八 風絮」。 一枚物① 3 0 1 3
 風絮 発句 「春風に吹れて野辺の衣かづき」
- 155 *署名「八十八 風絮」。 一枚物① 3 0 1 6
 風絮 発句 「春雨に立おくれしや沼太郎」
- 156 *署名「八十八歳 風絮」。 一枚物① 3 0 3 5
 風絮 発句 「終に行道にも露の別れかな」
- 157 *前書「友人寛三のぬし去ぞの秋身まかり給ひし」。署名「八十三歳 風絮」。 一枚物① 3 0 5 1
 風絮 発句 「紅うらのさハリごゝろや春の艸」
- 158 一枚物① 3 0 5 4 ・ 1
 一枚物① 3 0 5 4 ・ 2
- 159 一枚物① 3 0 5 4 ・ 2
 一枚物① 3 0 5 4 ・ 2

- 160 風絮 発句 「松風が吹かば又来よ友千鳥」
 *署名「八十八歳 風絮」。
 一枚物① 3 0 5 5
- 161 風絮 発句 「袖の香はけふの菖蒲の雫哉」
 *署名「八十八歳 風絮」。
 一枚物① 3 0 5 6
- 162 風絮 発句 「雪の家見たりみられつ川向ひ」
 *署名「八十六才 風絮書之」。
 一枚物① 3 0 5 7
- 163 風絮 発句 「神垣のうすさも淋し初時雨」
 *署名「八十六歳之風絮書之」。
 一枚物① 3 1 3 4
- 164 風絮 懐紙 「里人を養ふ水や梅の乳」など二句
 *前書「西の村の梅林にあそひて」。署名「八十六歳にて風絮書之」。
 一枚物① 3 1 3 7
- 165 風絮 俳文 「文月七日は二星の逢夜とて」云々
 *署名「八十八歳風絮書之」。末尾に「身をせめて身をやすくせよ稲の秋」。
 一枚物② 3 2 0 2
- 166 風絮 俳文 「花はかくはしといへども」云々
 *末尾に「冬枯やむなしくめぐる桜陰 風絮拜」。
 一枚物② 3 2 0 9
- 167 風絮 発句 「うどの香をさそふや茶やのすだれごし」
 *署名「八十八、風絮」。
 一枚物② 3 2 3 2
- 168 風絮 俳文 「芳野、花に遊ぶ人は嵐山の春におくれ」云々
 一枚物② 3 2 3 4

*末尾に「碑にふりゆく花の名残かな 八十八歳 風絮艸」。

169 風絮 発句 「御影供や袖は春野、花つくし」
一枚物② 3 2 5 0

*署名「八十八 風絮」。

170 風絮 発句 「やせ馬もつながぬ宿や卯木垣」
一枚物② 3 2 5 1

*署名「八十八歳 風絮」。

171 風絮 発句 「雲水の果はこゝらか苔の花」
一枚物② 3 2 5 2

*署名「八十八歳 風絮」。

172 「風絮」 句稿 「行と来とこゝろひとつや花に鳥」など十一句
一枚物① 3 1 3 5

*署名なし。加点(朱筆)あり。

173 風律ら 懷紙 「月雪をおもひ出て嶋又涼し」など二八句
一枚物① 3 1 2 3

*芦錐・八桂ら。表題「賀島吟」。奥書「此集也松本翁之請而諸子所賦詠其別墅賀島之景勝也」云々。

174 不及坊 三節懷紙 「喰つみや先土器に一摺ミ」
一枚物② 3 2 1 7

*「丙辰歳旦」(安政三年)。

175 富方ら 懷紙 「いつくしま…」など和歌八首・連歌発句四句
一枚物① 3 0 2 2

*前書「君燕先生いつくしま詣で給ひ」云々。富方・君燕・古泉・祝師久寛・棚守元矩・久良。

176 文之 句碑拓本 「玉川や田うた流るゝ五月雨」
一枚物③ 3 3 6 1

*「天明七年晚夏建□」。

177 文窓・二耕 付合 「熨斗昆布に海もゆかしや初硯」など一組
一枚物② 3 2 1 2

* 端書「前文略」。

178 文鯉 三節懷紙 「計りごとに手を組んで夜も明の春」など三句。

* 「壬戌歳旦」(文久二年)。署名「臨江亭文鯉」。

179 坊丸ら発句 点巻断簡 「突風の音はかはらず年の暮」など八句

* 全・坊丸・小増・雲水・大鳥・一海。

180 抱琴ら 懷紙 「小二千里進んで拜む初日かな」など九句

* 表題「奉納 香齋画 若松二本」、前書に「秋田に春を迎ひて。素山・子氏・如山・宇鱗・礎

長・月兔・蒼鷹・浪花 二鶴・同催主 抱琴」。「寅如月」。

181 蓬仙・東洲両吟 連句稿 「朝ゆふのけぶり四隣に柳かな」以下二句

182 朴志 三節懷紙 「いただいて信と味ふ雑煮かな」など三句

* 「子の歳旦」(嘉永五年)。

183 「朴志」 三節懷紙 「初日哉」など三句・和歌三首

* 「戌の歳旦」・「戌の大小」。

184 萬籟 白画賛色紙 「けふ□もの抱て来たり雪の舟」 笠図

185 萬籟 発句 「年のうちに春は来にけり膝のうへ」

* 前書「初孫まうけたる人に申送る」。

186 木玉発句・加友点 「吉書いはふまことにとしも筆字哉」など五〇句

* 打曇水辺下絵料紙。奥書に「印点七句 勢州山田般舟庵」。

一枚物③ 3 2 6 7

一枚物① 3 1 9 8

一枚物③ 3 3 3 3

一枚物① 3 0 9 0

一枚物① 3 0 4 7

一枚物① 3 0 4 5

一枚物① 3 1 9 6

一枚物② 3 2 3 6

一枚物③ 3 3 0 8

- 187 黙池 句稿 「茸狩や被かゝえし髭男」など二句 一枚物② 3 2 2 6
- 188 母里 句稿 「宮津子のはやすを聞けば齋哉」など五句 一枚物② 9 6 7 0
- 189 *署名「奉母里艸」。書簡断簡か。
- 友左坊 発句 「香をつゝむほど奥床し雪の梅 友左坊」 一枚物③ 3 3 5 3
- *前書「人の短を云ふことなかれ己が長を説くことなかれの言の葉をつらくおもふに」。絹本。
- 190 幽山点卷 百韻 「軒を遠るてんてきは是菖にあり」 一枚物③ 3 2 9 6
- *表紙に「てんてき 幽山点 御独吟」(墨書)。
- 191 遊糸 三節懷紙 「弾初の弦高し華の春」など二句 一枚物② 3 2 5 7
- *「甲寅ノ歳旦」(安政元年)。
- 192 有節 画賛 「谷間廻短伎空也不如婦」 春月女画・月下樹木図 一枚物① 3 0 7 5
- 193 有右 二節懷紙 「若水やうつろふ影の笑い貌」など二句 一枚物① 3 0 3 1
- *「嘉永四辛亥歳旦」。
- 194 有律仙ら 「枕松亭・何調亭 文台披露句文」懷紙四枚 一枚物③ 9 6 7 6
- *卷子装。文化四年一月。有律仙・風盧坊・熊把・白寿坊。
- 195 瑤雲 自画賛 「鍋一かりて裾野の冬籠」 富士山・鍋図 一枚物② 3 2 2 7
- *前書「甲州ニ春を待て」。
- 196 楽々 両節懷紙 「解にけり鴉飛かふ初日影」など二句 一枚物① 3 0 4 4
- 197 楽々 発句 「春風はよしや降日の合歡の花」など二句 一枚物① 3 1 9 2

* 罫線入り料紙。

198 楽々 色紙 「かいがねやさやかに猶も雪と花 楽々」
一枚物② 9 6 5 3

* 前書「弥生の初つかたとしく東の路におもむき給ふ人をおくりて」

199 楽々 懐紙 「西本願寺東本願寺にも樗かな」など二句
一枚物① 3 1 5 0

* 前書「庚申の初夏念三午睡の夢想」。

200 柳糸 三節懐紙 「大福や千代の□□の□□」など三句
一枚物② 3 2 3 5

* 「甲寅ノ歳旦」(安政元年)。

201 隣愈(東斎) 俳文 「誠に不過思義の道理ありて」云々
一枚物① 3 1 1 9

* 末尾に発句「因縁か涼しき秋に又逢ふも」。

202 隣愈(一東斎) 三節懐紙 「蓬菜もかくや 尾の初日の出」など三句
一枚物② 3 2 5 9

* 「嘉永五子歳祝」。署名「一東斎隣愈」。

203 老園 句稿 「鯛腐る夜風ふく也ほとゝぎす」など五句
一枚物① 3 1 1 7

* 書簡断簡か。

204 神植元鳳 詩稿 「次佐藤郁見示九日登高詩韻」・「至日」
一枚物② 3 2 6 2

* 赤字添削あり。

205 石陽湯泉津甲屋又左衛門 白画賛 「鶏もころびて砂のうへ」 蒲公英図
一枚物① 3 0 6 5

* 汚損あり。右上部(発句上五)を欠損。

206 吉田屋政兵衛 俳文断簡 「沼田なる」云々
一枚物① 3 1 8 6

* 「堺町三丁目吉田屋政兵衛」と墨書した紙片を貼る。

(無款の部)

208 207 無款 画賛 「風暮て音きくのみや竹の露」 竹図 一枚物① 3 0 2 9

無款 句稿 「辻堂にふるしきほどくしぐれ哉」など三句 一枚物① 3 1 5 5

* 書簡断簡か。

(筆者不明の部)

209 不明 冊子断簡 俳論「一 本情を動す場は」 一枚物① 3 0 1 8

* 冊子二丁分。

210 不明 発句 「ほむのりとさくら放るゝ旭かな」 一枚物① 3 0 8 4

* 「山岡高歩」(白文印)を捺す。

211 不明 点印譜 「点例」 一枚物① 3 1 0 8

* 左端を欠損。壹点・弍、・三、・五、・六、・七、。

212 不明 発句色紙 「庭前に石」云々 一枚物② 3 2 2 2

* スレあり。

213 不明 句送付に関する書付 「下嵯峨 車祈社内 落柿舎」 一枚物① 3 0 6 0

* 「京便所 松原通西洞院西入 さが飛脚届 三文字や常助 其外宗匠家何方にてもよろしく早便

は此飛脚やどへ御出し早速届申候」。

不明 併書配付先に関する書付 「尾道百韻配冊」

* 「一 三十冊 龜山梅臣へ向「下ス」云々。

一枚物①3091

V 扇面編

扇面目録

- 1 園女 発句 「いそがしや(董の絵)を摘めば(土筆の絵)」
扇面 3 3 8 7
 - 2 岳鳳 発句 「小寒しや鴨とりのけし跡の膝」
扇面 3 3 9 5
 - 3 岳輅 発句 「鶯は啼時も月は山の上」など四句
扇面 3 4 0 6
- * 士朗の句と岳輅の句を二句ずつ記す。
- 4 閑々居窓 自画賛 「老鶯や玉の音色の濼みがち」 樹木図
扇面 3 4 1 6
 - 5 観斎・淇雪 画賛 「夢の世の人間うとし散さくら」・「うつろひし華に驚く人のとし」
扇面 3 3 9 7
- * 署名「江戸 観斎」。画者不明(二人のどちらかか)。
- 6 其山(文音舎) 発句 「しら雪の花笠山□日の光」
扇面 3 3 9 6
 - 7 其白・無能発句 「うくひすにあふまでゆかむ竹の奥」 「うくひすもなくや旦のたち居より」
扇面 3 4 1 1

* 前書「七十七歳の春をむかへて」。

8 牛行 自画賛 「素湯に梅得てし主の仕業かな」 茶碗図

9 玉蘇画 大工図

10 琴 発句 「あやにしき嘸あらたえて着衣はじめ」

*前書「歳旦」。

11 琴風 発句 「柴舟のしくれしのくや□□□かけ」

*破損あり。

12 幻華 発句 「今たとは莫大ぬくし与謝の冬」

*前書「宮府客居」。

13 拾山 発句 「殊に此世を蓬菜の旦かな」

*前書「四海波静に納らせ給ひければ」。

14 少哉 発句 「日ほこりに見なくす蝶の行衛かな」

15 常山 発句 「どのやうな土にもしろき大根かな」

*前書「君子てふ題によせて」。

16 松堂(一畳居) 発句 「遊んでは柳えもどる螢かな」

17 千崖 発句 「なでしこのりむさいていの子かな」

18 仙鶴 発句 「海峯腸に秋風ぞ吹海雲賣」

19 素屋 自画賛 「裾に出てすそに入る日や不尽の山」 富士山図

20 素山 発句 「白いのは寐たらぬさまや燕子花」 「まてば来て玉の夜にする螢かな」

扇面 3 4 0 5

扇面 3 3 7 4

扇面 3 4 0 3

扇面 3 3 8 5

扇面 3 3 7 5

扇面 3 3 8 9

扇面 3 4 0 7

扇面 3 3 9 9

扇面 3 4 0 9

扇面 3 3 9 0

扇面 3 4 1 0

扇面 3 4 1 8

扇面 3 3 8 6

*署名「素山閑人」。前書「傾城の画に」、「雨後の景色何ぞ春宵一刻の價に劣るべきや」。

21 岱年 発句 「竹の子やをるころあひはをりをしむ」 扇面 3 3 8 8

22 長翠 発句 「風待の船止告る柳かな」 扇面 3 4 0 2

23 梅隠 発句 「仏檀にむしも啼けり木錢宿」 扇面 3 4 1 4

24 梅室 発句 「此ごろは昼月のある紅葉かな」 扇面 3 3 9 4

25 梅通 発句 「足つけて蛸にくはれな糺川」 扇面 3 4 0 8

*前書「わすれても波や」云々。

26 不二叟 発句 「」の影落て水すむ野川かな」 扇面 3 3 9 3

27 宝晋斎 発句 「蝉しきり帆の減る沖となりにけり」 扇面 3 4 0 0

28 孟涌九 発句 「蓬莱にきかばや伊勢の初日より」 扇面 3 4 1 3

*署名「丙寅元宵 孟涌九筆」（文化三年）。

29 茂権 発句 「曇れとは頼まぬものをミそさゞい」 扇面 3 3 9 2

30 友左坊 発句 「葉となれば葉にまた品の柳かな」 扇面 3 3 9 1

31 有節 発句 「生まれに鳥の藪守る霜夜かな」 扇面 3 4 0 4

32 不明 画賛 「月に花に□□□□汝かな」 扇面 3 3 8 4

*前書「口に人の是非をいはず」云々。汚損あり。

VI 軸物編

軸物目録

1 以哉坊 短冊 「ひとつ家の鍋ひやし置清水かな」

軸装② 3 5 4 8

2 一菁 画賛 「火事消えて橋寒むく」と戻りけり」 拳石(文々堂山人)画・鷺図

軸装① 3 4 4 0

3 九起 短冊 「黄鳥や蘇てつが庭のゆふあかり」

軸装② 3 5 2 3

4 虚白 句稿 「よい月の出て春たつゆふべかな」など五句

軸装① 3 5 0 4

*前書「新歳立春」。書簡断簡か。

5 虚白 発句 「うつばりになれと培ふ小まつかな」

軸装② 3 5 5 4

*前書「草庵の子の日は世のならはせと殊なり」。署名「煨芋虚白」。

6 琴左(五竹坊) 発句 「ひとつ家の裏や四五本ことし竹」

軸装② 3 5 0 7

7 景山 自画賛 「古池やかはづ飛こむ水の音 祖翁」ほか○句 蕉門十哲図

軸装① 3 4 3 2

*発句は芭蕉の句。署名「癸未之初夏」 景山拜書 「松花堂」(白文方印)。

8 月居 画賛 「たびねしつる道とくのしげりかな」 井特画・芭蕉像

軸装① 3 4 5 9

* 前書「二條公の台命をうけたまはりて芭蕉翁百年の忌辰に粟津の廟に納ける御詠」。署名「執筆
使月居」・「平安井徳謹写」。

9 好親 画賛 「世を持は思案も出来て二日灸」 文祥画・人物図

軸装① 3 4 2 0

10 古蟾人 自画賛 「月花を見るも心の置処」 傀儡師図

軸装② 3 5 3 1

11 五葉 短冊 「蓬生のねぎめや壁をほふはたる」・「舜はをんなじしての盛かな」

軸装① 3 4 8 4

12 若雅 発句 「綿繰るやもみぢの比の三軒家」

軸装① 3 4 2 6

13 車友 画賛 「身ひとつを守る草家の蚊遣りかな」 青谷画・百合、河骨図

軸装② 3 5 2 7

14 十方庵 自画賛 「俳諧の案山子や今に雪のみの」 芭蕉像

軸装① 3 4 6 2

* 前書「芭蕉翁像」。

15 春郷 画賛 「世の中は雪廻ほとけのこゝろかな」 千翠像

軸装② 3 5 5 1

* 署名「右千翠翁岩崎玄友居士」・「応需周陽春郷書」。

16 笑嘯庵 発句 「灰吹のおとに訝や冬籠」

軸装① 3 3 5 8

* 破損あり。

17 如水 句稿 「春かした箕も五月に思ひ出し」など五句

軸装① 3 4 7 9

* 書簡断簡か。

18 士朗 自画讚 「初鳥のおのか空問ふ夕くれや」 人物図

軸装② 3 5 1 3

19 七朗 自画讚 「梅がゝにのつと日の出る山路かな」 芭蕉像

軸装② 3 5 1 8

* 発句は芭蕉の句。

20 蟾居 発句 「月ひとつ身ひとつ人の来ぬ処」など三句 軸装② 3 5 4 4

*署名「七十二叟蟾居散人」。前書「去来叟が岩はなやこ、にもひとり月の客といへるなつかしといふべし」。

21 蒼虬 自画賛 「百草のかをるや空にほとゝぎす」 月図 軸装② 3 5 2 5

22 退歩仙 発句 「しぐるゝやさは見へざりし宵の空」 軸装② 3 5 3 5

*前書「炉辺閑座」。署名「退歩仙」「細竹廬」(朱文方印)「巒古」(白文方印)。

23 淡々 自画賛 「名月や人よりさきは水の月」 月図 軸装① 3 4 6 7

*署名「半時庵画 高寿八十宰」。

24 樗堂 発句 「雁かねの路や月夜の水明り」 軸装① 3 4 6 4

*署名「樗堂老拙」「息陰」(白文方印)。

25 樗堂 画賛 「鳴ならばつゝ立行む秋のくれ」 雪溪画・釣翁図 軸装② 3 5 1 0

26 鼎左 自画賛 「降らぬ田え退て見て居るしぐれかな」 人物図 軸装① 3 4 4 5

*署名「花屋主人」「鼎左」(朱文方印)。

27 田水ら 俳諧一枚摺 「名月や畳のうへの草まくら」 一雄画・雀の駕籠昇図 軸装② 3 5 2 1

*悠々・木長・田水ら。備後・伊予・阿波・讃岐等の連衆。

28 稻香 俳文 「幻住庵記」 軸装② 3 5 5 6

*俳文は芭蕉の文。署名「稻香謹書」。

29 梅園 発句 「こぼれんとするがさかりや女郎花」 軸装① 3 4 8 6

30 梅室 白画賛 「見得すつる壁の外面の月と花」 月図 軸装① 3 4 9 8

*前書「達広之讚」。

31 梅室 白画賛 「花のふるおとあるからにひの木笠」 笠杖図 軸装② 3 5 3 8

*前書「よし野の花を見に行には松笠をかぶること俳諧者の定儀のごとしこはかの万菊丸にはじまる」。署名「八十翁 梅室」。

32 梅室 白画賛 「から崎と矢橋を蚊屋の釣手かな」 唐崎図 軸装② 3 5 4 1

*前書「湖南夜泊」。署名「八十二 梅室老人」 [方圓齋(朱文方印)]。

33 白寿坊 書簡断簡 「年明けて白衣はしめや若菜つみ」など九句 軸装① 3 4 3 8

34 白寿坊 白画賛 「中くゝにむめもおよばす花の兄」 福寿草図 軸装① 3 4 5 6

35 白人 画賛 「石ひとつ移さぬ中に夜あけかな」 無茗画・人物図 軸装① 3 4 7 5

*前書「愚移山主人の□□□□」。署名「むさしの白人」。汚損あり。

36 百花 白画賛 「聲にあやもありて習ふか巢立鳥」 竹に雀図 軸装① 3 4 5 0

37 風葉 白画賛 「けふばかり人もとしよれ初しぐれ はせを」 芭蕉像 軸装① 3 4 4 2

*発句は芭蕉の句。署名「風葉謹書」。

38 風律 発句 「月花に唄へは行かぬ車かな」 軸装① 3 4 5 4

*前書「勤と儉とは世に属する道なり車の両輪の如し」。

39 鳳朗 白画賛 「雲雀にも貸されぬ春はあらし山」 桜図 軸装① 3 4 7 1

40 木海 画賛 「雨水を跨くや菊のはいり口」 尽江画・菊図 軸装① 3 4 3 5

41 木海 扇面 「朝夕のけぶりの親のかゝしかな」
軸装② 3 5 4 6

*前書「たかき屋の御製のありがたくて」。

42 木長 発句 「葛屋あり桃あり町の在所めく」
軸装① 3 4 8 9

43 友左坊 画賛 「あふむくもうつむくもさびしゆりの花 獅子老人」 雲屋画・三頼図
軸装① 3 4 8 1

*署名「八十六齡友左坊拜書」。

44 里風(白雪軒) 発句 「はつしぐれ猿も小蓑をほしげなり はせを」
軸装① 3 4 9 4

*発句は芭蕉の句。署名「後学 白雪軒里風拜書」。

45 立圃 俳文 「盆といへば心うかれくゝて」云々
軸装① 3 5 0 1

*文中に「夜ありきの身にそふ月や守り神」「女房の男出立や馬鹿躍」。

46 和橋 自画賛 「どうだ下戸せめて鶴ほと生て見よ」 亀図
軸装① 3 4 2 8

47 □信尼(裡涼庵) 自画賛 「京へ出てその香ふらすか八瀬の花」 大原女図
軸装① 3 4 9 1

*汚損あり。

48 □年庵□□撰 発句 「戸明れば鷺立川や初あらし」
軸装① 3 4 4 8

*奥書「奉納 あらはひ神社俳諧発句合括草」。

49 不明 自画賛 「あらたまを分てしらふやとし男」〔花押〕 鏡餅に鼠図
軸装① 3 4 2 4

VII 短冊編

短冊目録

(発句)

| | | | |
|-----------|-----------------|-----|----------|
| T0 001 | 俳諧はたつぷりあるぞ冬の艸 | 鴉山 | 旅窓ばせを忘 |
| T0 002 | 乗合の荷違へしたるしぐれかな | 垂草 | |
| T0 003 | 友かけて雪見淋しう思ひけり | 麻生 | 撰川翁をとむらひ |
| T0 004 | 壬生念仏妻の来てみる日もあらむ | イガ | |
| T0 005 | 白を曳音も静や冬の月 | 蛙方 | |
| T0 006 | 降中にかわく音ありはつしぐれ | 綾女 | |
| T2 008 | 折敷てふもと見おろすわかばかな | 安海 | |
| T0 007 | しら桃の舌輪ざしや木彫雛 | 為谷 | |
| T0 008 | あしろふて鐘も撞く也山さくら | 以哉坊 | |

T0 021 T0 019 T0 018 T3 158 T2 003 T0 017 T0 016 T0 015 T0 014 T0 013 T0 012 T0 011 T0 010 T0 009 T2 007

待よひやひとまづくるる草の宿

心なく枕につけば鳴千鳥

八点や米といふ字の筆はじめ

八点や米といふ字の筆はじめ

桐の華畦ひとすじのかけに藤

山かけにありて白むめの朝ぼらけ

真中は水のながれて氷かな

蝶に笠貸て詠て眠けり

す糸長ふ祝ひこころや雛祭

納まれる世はかくあれやなつの海

小社□奥に見へるや藤の花

此杵葉は誰かかなわ□野の弥□

日のさしてよくは見へぬと岡の梅

涼しさよ舟にちり込波の花

伊駒より夏の雨雲かかるかな

為山

為山

依山

依山

伊人

伊人

以足

一阿

一阿
齡八十六叟

一葦仙

一娥

一河

依竹

一具

一郷

一実

祝音

天保十一年といふとしの卯月九日、此加茂津に遊ぶ。去年のとは長岡の事をおもひてなごりをしもしも、今日はいと心よげに

野辺送りのさまを

長齋ぬしの楼上に宿りて

T0 049 T0 048 T0 047 T0 046 T0 045 T0 044 T2 005 T2 004 T0 043 T0 042 T2 009 T2 006 T0 041 T0 040 T0 039 T0 038

しのぎよい所でもいふあつさかな

娑婆の夢覚して見よと朝蓮

おし鳥の静さを見よ猫の恋

ふじの雲見上る坂の扇かな

□瓢月ぶらりと紅葉山

思ふより道のはかどる日永かな

墨の香の俯ゆかし白道王

散る花をよけよけ登る小鮎かな

用かまし白魚取の箕と筥

松にもたれ松はもたれて空□かな

日の入て水音寒し花の中

名の訾うそ雲井に開く扇かな

黄鵠を欺す敷庵の留守かまえ

水無月や草の明りに気の沈む

呼ば来る蛩とる手をそれにけり

すす私や無下に引切るまとの鳶

一仙

逸仙 蓮

一鳥

一瓢

一瓢

一瓢

一甫

一鳳

一鳳

一鳳

一鳳 样

一峰 样

追悼
今度伊原市鑄職の御許されをかむりたまひ首尾能御位階
も整たもふけるを賀し奉る

意藩

意藩

七十八翁

以和保

宇逸

T0 051
T0 052
T0 053
T0 054
T0 055
T0 056
T0 057
T0 058
T0 059
T2 001
T0 060
T0 061
T0 062
T0 063
T2 014
T0 064
T2 002

初雪や御手づからのすずり箱

氷室にも火を貯えて守夜かな

眼にさはるものは日くれて不二の山

竹の子の青き肌見る日なた哉

なき月のうわさに萩の散にけり

引てゆくものには見えず月の汐

蚊帳釣りて千代の句思ひ当るらめ

御忌今に尊し寒し六百年

幸にまぬがれたるか老の春

数々の野菜も祝うぞうにかな

昨日迄としはよししにけさの春

花壳のおとして行やかたつぶり

腸に残れる月の光かな

花見へて芒かりけり軒の菊

老の名に呼ぶもめでたし松の春

雲も霧もさつばり晴て小はるかな

夕空や雪吹の歇てちるさくら

鳥橋

鳥桂

鳥岬

雨齋

潮井

雨声

雨声

雨声

雨声

雨洗

七十八

雨村

鳥頂

羽調

于当

宇洛

鳥律

鳥律

追善

雲母堂主人の亡妻一周忌を聞きて

今年御忌の六百年を

白賀

追善

初老賀

T0 077 T0 076 T0 075 T2 011 T0 074 T0 073 T0 072 T1 172 T2 016 T2 013 T2 012 T0 071 T0 070 T0 069 T0 068 T0 067 T0 066 T0 065

千代かけてかはらぬ春るや鶴の声

宇林 賀

鯉買て足音高ふおもひけり

鳥六

米の賀も髓と見ゆれ早苗とり

雲貫 古米稀の賀筵に贈呈

惑わしの老とはこころ涼しけれ

雲止 拵 素信賢雅の初老を賀し奉る

いにしへのしぐれを思ふ時雨かな

雲萍

竹の春四方に歩行たまへかし

雲母堂 賀四方竹の杖を送る

小童の袂から降る木の実哉

雲和坊

花の醜さましる草に眠る蝶

雲和坊

巢にかよふ鷹の羽白し夏の山

雲和坊

庭なかへ客座またいであらひ鯉

永壺(氷壺?)

庭なかへ客座もうけてあらひ鯉

永壺(氷壺?)

隣のかこちのかしらはず桃の花

英二

万代となくやうぐひす宿の花

瑩珠

月は名のこよひも高き光かな

永川

春霞承知承知と花の上

益三

これからはせまい間がよき夜寒かな

越台

雲をおく山の上にも田植かな

越台

延た日に未だかかはらぬ余寒かな

越台

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|-----------------|-------------|-------------|---------------|---------------|---------------|------------------|--------------|--------------|---------------|-----------------|---------------|--------------|----------------|-----------------|----------------|
| T0 092 | T0 091 | T0 090 | T0 089 | T0 088 | T0 087 | T3 149 | T3 068 | T0 086 | T0 085 | T0 084 | T0 083 | T0 082 | T0 081 | T0 080 | T0 079 | T0 078 |
| 底摺て舟のみじか夜明にけり | はや露をふくむやきくの暮かげん | 木枯の日にも癖なし東山 | 郭公聞て古今の夜明かな | 嘶ゆく間に京へつく小春かな | いに風の吹て寒がる子の日哉 | 葱来し軒の小萩もか□□夜か | なりわいに五味もにぎりて今日の月 | 誹台に月をのせけり桃李園 | 行水の浅きをとあり冬の月 | 長閑さや並ふるのしに生の松 | 松の葉のちるやその根も小まつ原 | 老そめる松や千とせも君が春 | 田の水に鯉うきけり五月雨 | 酒の座を逃てかくるるふとむ哉 | 何処にてもあるものなれど梅の花 | 散る花やあだに暮せし昨日今日 |
| 鶯室 | 鶯齋 | 鶯語 | 鶯語 | 黄牛 | 円理 | 園尾 | 園女庵 | 艶序 | 筵史 | 燕子 | 筵史 | 延志 | 遠近 | 猿 | 越台 | 越台 |
| | | | | | | 七十の□翁 | | | | 中川氏の初老を祝して | 箱崎にて | 松の祝 | | | | |

T0 107 T0 106 T0 105 T0 104 T0 103 T0 102 T0 101 T2 015 T0 100 T0 099 T0 098 T0 097 T0 096 T0 095 T0 094 T0 093

ぬれ蓑に大きう光る蜚かな

鶯宿

三越路の花や雪棹処々

鶯宿

夜に入て即今白し梅花

鶯宿

はつ秋や素肌に蚊帳のこそばゆし

花の家

蝶鳥も遊べ小春の塚の前

鷗眠

室山もさくらのためのみどりかな

鶯夢

日盛りや鮎かげに出る借坐敷

鶯笠

佛を花に見するや普賢象

黄令

葛切にみな水無月のよしの山

黄嶺

月やあらんさつきつじの薄曇

大江丸

日ノ本ト申セド秋八月乃本

おしえ

入暮て出すも柴茶や梅花

琉球三子島

頬へたにめし粒つけて花見かな

乙二

棟上の餅をそれて来る若葉かな

乙也

雁なくやこころに見ゆる夜の松

乙也

美しや門は師走の菜大根

乙雄

塊翁

山家にて

木屋町に遊びて

□もとなしにしめ□□

| | | |
|--------|-----------------|----|
| T0 109 | 水にうく河図の泡もさくらかな | 可盈 |
| T0 110 | その梅の寔見たまへふたみ瀉 | 花英 |
| T0 111 | 行秋や西に山なき松浦瀉 | 佳乙 |
| T0 112 | 蟬なくや雲のはこびも雨らしき | 夏鶴 |
| T1 269 | 百年もよ所ならず見む老の春 | 雅喜 |
| T0 113 | 牛馬のふまぬ橋あり草の華 | 可久 |
| T0 114 | 砂まけばしだる庭の柳かな | 可久 |
| T0 115 | ちからかまし菌に碎け行く氷餅 | 霞喬 |
| T0 116 | 俎板のくぼみも見えて今朝の秋 | 花喬 |
| T0 117 | 此うちにあはれもこもるゆき見哉 | 花郷 |
| T0 118 | ちる花に風情もたせるあらしかな | 花暁 |
| T0 119 | 空澄やうすす山も秋のくも | 瑕玉 |
| T2 020 | 九十とや万歳までも尽ぬ春 | 花近 |
| T0 120 | 浪風もなふて開くや米の花 | 蠖子 |
| T0 121 | 月雪や積る恵みの百回忌 | 鶴舎 |

見二風子の勢州へ趣くをおくる

筑紫峰

賀を祝言て

今とし米の齢を積み給へども其健かなる事莊丈に増りて
いみじき果報を羨み羨み折から今日の佳日を祝し寿きて

万尋君再度新聞へ趣給ふ祝して

此天保内中の季冬念七日は常省尊靈の遠忘なるにぞ、幾

百とせの古より衣食住は云もさらなり何一つとして余光
にあらざれんはなし。その恩沢の広大なるは報るに物な

T0 136 T0 135 T0 134 T0 133 T0 144 T0 132 T0 131 T0 130 T0 129 T0 128 T0 127 T0 126 T0 125 T0 124 T0 123 T3 155 T0 122

をしめども雨にしほむや花あやめ
ほととぎす何処で夜明て今朝の空
あつさをばしらず青田に鳴蛙
きく咲てさむしきあきをわすれけり
一声によねんはなきぞほととぎす
五月雨や座敷は雛の造り宵
よろず代や二本三もと竹若し
きのふ見しままにもあらず枯尾花
春雨や我寢所は江にちかし
木がらしに仏の顔の閑也
ほやほやと月のいざよふ木の間哉
稲妻やあやうき人のたち処
吹送れ身にしむ風の何処迄も
梅咲や北へ北へと鶴の声
散り失せぬ松の落葉や積し恩
しら雪に埋ぬさとの一木かな
高砂のまつにあやかれよい接穂

鶴声
雀潮
鶴年
鶴年
鶴年
二世 鶴歩
鶴鳴
岳輅
岳輅
岳輅
岳輅
岳輅
岳輅
佳馨
花月
蛾山
臥山
可樹 田仲氏

悼
し。只、靈前に合爪百拝して
市竹尊雅の帰郷の船を見送りて
百拝
追福
おなじ家に久しき友なるがこたび君の勤を辞し、其他の

家の名を継なる人にはなむけして

T0 137 街道や千とせふりたる梅の咲 佳秀

T0 138 歳徳の神の灯照るや台所 佳秀

T0 139 手枕に夢か誠かほととぎす 花寿女

T0 140 帆柱の片面白き吹雪かな 井梧園評

T0 141 入梅晴や鳥は生れた朝げしき 花稍 予州へわたり船中の戯われ

T0 142 鶯の音やいそくさきところまで 鶯少

T0 143 いざ聞ん花の都の言葉土産 歌笙僊 素信雅友の帰旅を祝し侍りて

T0 145 雨の音木の葉なりけり窓の月 可大

T0 146 仰むいて通るや花にひとり笑み 可大

T0 147 行々子島のゆふ山あらはなり 可大

T0 148 今暮て夜のことごとし後の月 可大 良夜

T0 149 人をりをり月にかくるる木かけかな 可大

T0 150 朝がほや見る間ひさしきもの忘れ 可大

T0 151 風しろき師走月夜や屋ねに雪 可大

T2 025 酔ていふ□□□□団かな 可大

T0 152 行違ふ初音めづらしほととぎす 霞堞

T2 017 名月やすすき摺めば日のぬくみ 可兆

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|---------------|----------------|-----------------|------------|--------------|---------------|---------------|---------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-------------|-----------------|-----------------|--------------|
| T0 169 | T0 168 | T2 026 | T0 167 | T0 166 | T0 165 | T0 164 | T0 163 | T0 162 | T0 161 | T0 160 | T0 159 | T0 158 | T0 157 | T0 156 | T0 155 | T0 154 | T0 153 |
| 糸ゆふに交りてうつや老の浪 | 花守や群集に手をうらやまれ | 槽明り透くやいろはのあけ字□ | いとまなき身をやつしけり花の旅 | 錦する中にも松や青幣 | 霜の花月有明てしほみけり | 藻葉そよぐ潮に臨む胡蝶かな | うろたへて月見る夏の夕かな | うろたへて月見る夏の夕かな | うろたへて月見る夏のゆふべかな | うろたへて月見る夏のゆふべかな | うろたへて月見る夏のゆふべかな | うぐひすの山の端にげて遠音かな | うぐひすの山の端かけて遠音かな | 三月や蛙のつらへ雨が降 | しる人をふしみにもたぬ寒さかな | いもの葉の蓮をあざむく残暑かな | 朽ながら朽果ぬ木や梅の華 |
| 我来 | 可友 | 化仏 | 華陶 | 花天 | 花亭 | 柯亭 | 柯亭 | 柯亭 | 柯亭 | 柯亭 | 柯亭 | 柯亭 | 柯亭 | 葛三 | 葛三 | 葛三 | 華鳥仙 |

| | | | |
|--------|-----------------|------|-------|
| T0 170 | あらためて立谷松のみどり哉 | 可楽 | 賀 |
| T0 171 | あみさらす浦ははしなく霞けり | 何笠 | |
| T0 172 | うぐひすや何の樹也とあれば来る | 何笠 | |
| T0 173 | すまひ取親の為ともおもはれず | 何笠 | |
| T0 174 | 若竹やすずめよろこぶ朝ぼらけ | 雅六 | 新席の賀に |
| T0 175 | 名月やみどりにもどる苔のいろ | 閑雲 | |
| T0 176 | 何雲と見れば高根や秋の雪 | 菅雅 | |
| T0 177 | はつ夢や願ひ届きし松に鷹 | 翫月 | |
| T0 178 | 竹はまた冬の姿ぞ梅の花 | 翫月 | |
| T0 179 | 寒月や常より高き峰の松 | 寒月道人 | |
| T0 180 | 雪積や昼も戸さして藪の家 | 甘古 | |
| T0 181 | ほし飛や夜寒に寝たる家の上 | 貫乎 | |
| T0 182 | 囃されて鶏もそら音か薺の夜 | 寛古 | |
| T0 183 | しりはりてうぐひすの啼天氣かな | 閑斎 | |
| T0 184 | 秋風や病も知らぬ里童 | 貫山 | |
| T0 185 | 蓮の実の行衛や月の道すがら | 岸頂 | 捻香 |
| T0 187 | 吹あけて幹まで見せる柳かな | 閑那 | 追悼 |
| T3 157 | 菊わかな蜜にも花の薫りかな | 寒柏亭 | |

T0 200 T0 199 T2 031 T0 198 T0 197 T0 196 T0 195 T0 194 T0 193 T2 019 T0 192 T0 191 T0 190 T0 189 T2 023 T2 018 T0 188 T0 187

きり尽す跡も影ありかきつばた

完来

水はとく暮てさくらのゆきまかな

完来

墨水

芸な四月の野には鳥が臥

完来

川柳むすぶ力もなかりけり

観来

其曉浜守に

群た音して一羽なくちどりかな

寒頼

木の間からかも川見るや神な月

寒頼

干絹に猫の重石や小春椽

閑里

萍や鐘つくぼうの花になる

閑涼

夜の花を闇の夜しらぬ在所哉

完和

菊苗やかかはるふる根をありのまま

希云

賀還曆

かりかりと函の無事しるやにし肴

奇淵

初秋のしづか過たりよし田山

奇淵

柚の華の香にわけいるや八重葎

奇淵

啼てから大事の夜なり子規

奇淵

蜀魂膝のあたりの夜の景

奇淵

待宵や翌ある影をすみのぼる

奇淵

蚊遣してまはれば家の煤くさき

几乙

酒こぼし溢して桜々哉

其鶴

T2 038
T0 201
T0 202
T0 203
T2 039
T3 101
T0 204
T0 205
T0 206
T0 207
T0 208
T0 209
T0 210
T0 211
T0 212
T0 213
T0 214
T0 215

騒がしき世に引換て伊勢の春

其橋

去年の冬□の起りしもはや過てあら玉のはるをむかひて

散行や匂ひ残して梅の花

其暁

御老僧の身まかり給ひしを悔ひてよめる

裏表なき詠ある柳かな

菊翁

春風や松に音ある宵の月

菊径

石たたきいしをたたくや御祓川

菊径

老の名はまだ啞らしき若葉哉

喜久亭

湖雀拜書

戸の破に吸松風や冬の月

掬山

初霜やすべりてみたき橋の反

菊守

菊の香もからぬ柱の香り哉

菊潭

重陽の日棟あげ玉ふを祝し侍りて

雫かとおもふ花ちる若葉かな

菊年

しくものは無き此空や月と梅

菊圃

そらにきく桶屋のおとや天の川

蟻兄

たなばたやわか竹の名もけふかぎり

蟻兄

香の外に塵なし菊の夕掃除

蟻兄

ある貴族の御園にて

市たててあそぶ児やさし艸の華

蟻兄

春の夜や寝よとの鐘に眼のさめる

蟻兄

神もゆるすこのいつはりや華の雲

蟻兄

奉額の句撰に逐加の一詠を乞はれて

船一里みやげの瓜をまくらかな

蟻兄

途中

T2 037 T0 229 T0 228 T2 029 T0 227 T0 226 T0 225 T0 224 T0 223 T0 222 T2 030 T0 221 T0 220 T0 219 T0 218 T0 217 T0 216

涼しさや水の上にも流れ星

起行

下畑にさわらで栗のみのりかな

帰郷

髭がちの宿直の数よきりぎりす

喜齋

IIに澄月を見よとや夏はらへ

喜齋

季戀子のもとに舟あかりしてあつさをわする皆月半なり
ければ

醸しつとおひをなぐさめよ菊の宿

其洲

名月や仰向てのむ酒の味

其洲

翁忌やまぶたにかかるしぐれ雲

鬼笑

行はるの心さはがし杜若

其松

大よふに露ゆりこぼす芭蕉哉

帰心庵主人

踏迷ふ路の栞りや閑古鳥

喜水

薬玉や台子に釜を煮てある

喜水

菜の花や人待合すたばこの火

其睡

三日月やゆかしがらせて入かかり

其水

蟬の声朔日ひめり嬉しいか

喜水

連枷や塙に出張る菊の家

箕青

越後国加茂といふ処にて

朝露に榮しき稲の勢ひかな

其雪

もちひよてまた我□榮せず曆哉

箕仙

T0 245 T0 244 T0 243 T0 242 T0 241 T0 240 T0 239 T0 238 T0 237 T0 236 T0 235 T0 234 T0 233 T0 232 T0 231 T2 032 T0 030

初花は船でも遠しかきつばた

奇髯

身を照す月に居眠る□□□哉

橘子

昼寝しに遠々来るやかけ造り

奇童

初空の色に流るる早瀬哉

蟻道

おそき日も暮おしぞ思ふ神の場

後 祇徳

日暮里人丸の前独吟発句之時千句満尾

たまありとおもへば苔の露涼し

其風 拜

義仲寺にて

土につく八重山ふきのさかりかな

沂風

二三里もおくれて帰る夏の月

鬼仏

棒立て馬繋ぎけり大根引

三界庵

花盛月はもとより日も朧

鬼仏

ほつとした時はかりみる柳哉

九越

時鳥加茂で聞すは貴舟まで

九起

十月や雨の向ふに雪の山

九起

正月も庵は行灯ひとつ哉

九起

湖水眺望

揚ひばり不二も見おろす勢ひかな

九起

わかい妻持たる雪のあるじかな

丘高

東都へ旅立けるに贈る

折くべる薪ぬれたり朝霞

丘高

丘高

T0 258 T0 257 T2 028 T0 256 T0 255 T0 254 T0 253 T0 252 T0 251 T0 250 T0 249 T3 089 T2 027 T0 248 T0 247 T0 246

月見るとうそにも語れ網代守

九朴

夜こころのすみし頃也啼いとど

鳩眠

風のなき日は只暮る薄哉

拳一

きのふは過し昔しなりけふの月

暁鳥

□□の添てか□□水くるま

仰苦

夜の内の箒遣ひや華の春

杏坡

樹も影のおそろしげ成り夏の月

鏡棧

げに家の眼なりけり銹鯛

曲齋

雪ならで払はぬ袖のなみだ哉

玉芝

松若し枝も七十の実や花や

東雲舎

市の声聞ば世上の師走かな

玉枝

ひと口ひと日秋は紅葉に入にけり

玉屑

春風の是にもとどけ蟹の泡

玉屑

うるはしと仏も見ませ御田植

曲川

金遍に菖蒲のくせのかぎりなき

旭草

芳しき春や艸樹も元の色

居山

らるるよしをつたひ聞はべりて

堀村氏父の追善に能をいとままるるに御田の役をつとめ

巳酉端午の頃、萊洲大君の昇役を祝い侍る

T0 259
T0 260
T0 261
T0 262
T0 263
T0 264
T0 265
T0 266
T2 131
T0 267
T0 268
T0 269
T0 270
T0 271
T0 801
T0 272
T0 273

涼み台寝て居やせんとこたへけり
日東や月の歩行はしらぬ顔
跌座すればはからず月の中にあり
なつかしきもののひとつや遠霞
夜の明けは木の実ひろはん板庇
遊ぶ氣に成りて歟てふの風に飛
葉桜や内に居よとの雨が降る
芋種を干す日や門にはつ蕪
西へさす枝も三とせよ栗の花
うぐひすもとめて来鳴か滝のいと
うぐひすもとめて来鳴か滝のいと
うぐひすもとめて来鳴かたきの糸
うぐひすもとめて来て鳴か滝のいと
ふりかへるこずえや同じ紅葉時
かささぎの橋姫なれや女七夕
花咲くやはなの都は人も花
寒菊や根分もけふの手向草

魚水
虚白
虚白
御風
御風
御風
御風
魚坊
帰来
季變
季變
季變
季變
其柳
近吉
琴月
琴山

から平らかに還曆の春をむかへて
涼み
田家にあそびて
御追悼
こがくれの滝といふことを
こがくれの滝といふことを
木がくれの滝といふことを
木がくれの滝といふことを
追善

T0 283 T3 085 T3 072 T0 282 T0 281 T0 280 T0 279 T0 278 T0 277 T0 275 T3 135 T2 036 T2 035 T2 034 T2 033 T0 274

花あやめつかつか雨の降日哉

銀獅

茶の花やつづいて梅もくれる筈

芹舎

胸明て分別あふぐうちは哉

芹舎

文月や秋まだ庵のものならず

芹舎

船頭をまたせて遊ぶ小春哉

芹舎

中々に浅きもはるの野川哉

金松

皇国歌かりそだをのみ世に□しとおもふはさることながら

三日月やメにはひりし蔵の窓

琴吹

谷ふりも替るや花の宵明り

銀岱

退しほのなき梅下の宴

錦蔦

化竜風子の送別に長々しき前文有て別れとは思われじ春も豆腐焼と有るに脇して

ひとづ家を闇に聞せるきぬたかな

琴和坊

欠初る夜に寒月のまことなる

空阿

名月に三日後れてけふの月

空阿

爰までか京の言葉よかいつはた

空阿

精葉や次の小鯛長柄鯛

此君園のあるじ舟おさになりて初て□□をおくる

一声に人の気□□ほととぎす

九城

勢ひを穂にあらはしぬ稲の露

蕙逸

素雪叟改名を祝して

T0 284 寝すがたの洩れて恥かし夏の月

主我

T0 285 邯鄲の夢を欺け花の春

桂花亭

賀

T2 047 風も除てうはの空吹くさくら哉

奚花坊

T0 286 水仙や闇にも色香うしなはず

桂砂

T0 287 若竹やそのすなをさの影高し

綱斎

祝

T0 288 人馴て遠歩行する雀の子

慶子

T0 289 降雪や先考る行処

鶏洲

T0 290 低けれどうたがひもなし霍公

迎祥

T0 291 世に広ふ輝く月の初冠

慶青

T2 048 大海に輝き初て若月有

慶青

九光園主の賢息めで度前髪執玉ひしを祝す
九光園の賢息は今度御船の任を蒙り勇しき首途は幾末英
名の世に広まりぬ事を祝寿

T0 292 別れても声はわすれず友千鳥

恵天 拝

T0 293 ふねの出しあとも音もつ芒かな

桂眉

T0 294 色かえぬ松二もとや八千代まで

蕙圃

鷺洲ぬしの婚姻を祝して

T0 295 色かえぬ松二もとや八千代まで

蕙圃

鷺洲ぬしの婚姻を祝して

T0 296 直すぐに見へても廻る野梅かな

境妙

T0 297 鶏頭や散る名のたたで秋三月

蛭柳

T0 298 眼にはあを葉月もすずしきこころより

月翁

末田大人の耳順を寿て 即興

T2 115 T0 344 T0 343 T0 342 T0 341 T0 340 T2 024 T0 339 T0 338 T0 337 T0 336 T0 335 T0 334 T0 333 T0 332 T0 331 T2 052 T0 330

柳には合点させてや春の霜

見竜

春雨のひまや胡蝶の□立物

見竜

老の名を呼ば千代経む若菜かな

五寅

人日生誕の常見の翁に酴醪をのぶる

春雨やまた降てよしはれてよし

紅映

同じ影ながらめづらしけふの月

紅映

江にかかるふねのよすがや鳴水鶏

向峨

富貴をも含む牡丹の荅哉

耕月

筍や牆の破れの又ひとつ

更々

夜にでる旅の力や砧の灯

桓山

水鳥や寝もせて岸の波まくら

向山

照降もその目その日や菊の花

香取

老木ほどいろ古稀まつの茂りかな

香酔

寄松

鶴は巢に豊にこもる松の色

香水

閑居を祝

見処もなき野なりしに萩の花

公成

吹ままに明てはくれぬ秋の風

公成

朝の梅すこしは月ものこれるか

皐折

竹棚の音や扱こそはつ雲

衛太

水俣を刈や心のいたましき

衛太

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|--------------|---------------|-----------------|--------------|---------------|-------------|-----------------------|-------------|-----------------|---------------|-----------------|----------------|----------------|---------------|-------------|--------------|
| T0 356 | T0 355 | T0 354 | T0 353 | T0 352 | T3 105 | T2 043 | T3 156 | T2 041 | T0 351 | T2 046 | T0 350 | T0 349 | T0 348 | T2 040 | T0 347 | T2 114 |
| 鍛よし大地を通す芦の錐 | 長みしが有よ糸瓜は影迄も | 月の雲散らば渡らむ瀬田の橋 | 額突に泣く諸声や蟬と我 | 垣越の木と思われず夜の梅 | 君が□や積りし雪の御苑の松 | 望春塚の字よひか墨直し | 山吹は咲てもたりぬ鮒なます | 五もとの粧うれて柳かな | さながらに籠を名残りてはなち鳥 | をしは眼につい□鳥なり□桂 | たづねばや世に在すときは花の友 | 稲の香に居ごころのよき月見哉 | 雲を見て通ればまつのしぐれ哉 | ちる花に瘦せし詩巻を横へぬ | 古枯の行道あけて落葉哉 | 菓子呉る□□□くと牡丹畑 |
| 瓠山 | 虎山 | 孤杉 | 五原 | 古月道人 | 湖月 | 丘雪庵 | 孤月 | 虎溪 | 五薰 | 五月 | 梧園 押 | 古猿 | 甲嶺 | 香夢 | 好眠 | 衛太 |
| 芦鍾と改名有しを賀して | | | 三回りの御速夜御幕前に拝伏して | | | | 一盃をかたぶけし折からなますをとふべければ | 賀壮年 | | | 追悼 | 新宅賀 | 住の江にて | | | |

| | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------------|-----------------|---------------------------|-----------------|---------------|-----------------|---------------|----------------|-------------|----------------|----------------|---------------|-------------|----------------|----------------|
| T0 369 | T0 368 | T0 367 | T0 366 | T0 365 | T3 077 | T0 364 | T0 363 | T2 042 | T0 362 | T0 361 | T0 360 | T0 359 | T0 358 | T0 357 |
| とも鶴の雲に羽を伸す春日かな | から入梅に濡るるや袖の御厨子守 | 常磐木の色や千代ふる花姿 | 見るも聞も悲しき秋となりにけり | 散つつも跡の替らぬ一葉かな | ふくは□□ひが□くみゆる寝汗哉 | 若竹やみどりがす糸の雨の月 | 若竹の旭にのびまさる葉色かな | 源□も今宵は月の渡し哉 | 梅が香に迫と地名のほしげなる | 照出して又ひとはれや田うへ笠 | 老の名はまだ啞らしき若葉哉 | 十月や鳥さへ踏ぬ道の草 | なみだならぬ夕暮はなし雁の声 | いつの間に見失なひしぞ秋の蝶 |
| 娯中房 | 孤村 | 壺仙 | 吾拙 | 呉雪 | 古拙 | 古声 | 壺水 | 虎丈 | 狐城 | 伍尺 | 湖雀 | 戸雀 | 呉山 | 呉山 |
| | | | | | | | | | | | 拜書 | | | 追悼 |
| 暁鳥のぬし鶴をひろひ玉へるを寿き奉つりて | 三回忌の御忌に奉手向て | 安部氏の何がし、今、とし三五の春を迎へて日出度も元 | 悼 風光老人 | | | | 賀 | | | | 祝章 | 奉手向 | | |
| | | 服の寿を開き、その月代の栄え栄えしく、誠に此家の世 | | | | | | | | | | | | |
| | | 継の礎ならん事を祝し侍る | | | | | | | | | | | | |

T0 386 T0 385 T0 384 T0 383 T0 382 T0 381 T0 380 T0 379 T0 378 T0 377 T2 045 T0 376 T0 375 T0 374 T0 373 T0 372 T0 371 T0 370

咲満て雲も酔たる桜かな
暖や馬まで睡る札の辻
ゆつたりと咲出る雪の牡丹かな
朝々や人の見ておく塚のゆき
言の葉の残る時雨の別れかな
日は松に暮て風あり梅の花
けふも留主机に花の手紙哉
身に余る□風喰ふて夏の月
落し水寝る気の付て耳ざはり
ひやひやと奥ある花の夜明かな
山かぜや何をたよりに舞ふ雲雀
馬でゆく嫁の里辺やかきつばた
引鶴も遠に残すひかり哉
行秋や川見ゆるほど透た藪
吉日を得て薰けり冬の梅
菊の福聚汲や此日の無量海
酒持て来たと叩くや夜の雪
あかるさに思へば春の月夜也

娛中房 娛中房
五鳥 五鳥
胡天 胡天
虎道 虎道
五梅庵 五梅庵
呉風 呉風
護物 護物
護物 護物
湖芒 湖芒
五木 五木
古遊 古遊
湖由 湖由
五来 五来
吾来 吾来

荒卷完平ぬしの初冠を祝して
選川亡君子に備はへりぬ
婚姻を祝す
重陽

T0 400 T0 399 T0 398 T3 082 T3 081 T0 397 T0 396 T0 395 T0 394 T0 393 T0 392 T0 276 T0 391 T0 390 T0 389 T0 388 T0 387

落栗や旅路をひろふ杖の先

孤柳

能なしも興がる雪の二日かな

五朗

花のもともとから花の御室かな

五鹿

灯火の底にむしろやきりぎりす

五鹿

蝙蝠のかほ出すすまのすだれかな

五鹿

草きみなそよぐ夜風や虫の声

今是

今年生のはじめも竹の二葉哉

柴庵

のし昆布は末の栄や松の花

八十四翁

みやこから流るる水やけふの月

在我

袴着て風新らしき扇かな

在我

寒声の跡追ふ藪の嵐かな

祭魚

御さかりや雲うきのぼる不二廻山

在処

□やいづら山□□青し□□

采真

暮すずし杜の雫に立濡れぬ

采真

左義長や大内山の山かづら

在竹

いま揚た跡へ居るや池の鴨

蓑一

手まくらや心のうちのとしわすれ

西馬

在坂のとき、良夜さくらの宮のほとりに舟をうかめて

仁和寺にて

須磨のうら懐古

T0 401
T0 402
T0 403
T0 404
T0 405
T2 054
T0 406
T0 407
T0 408
T0 409
T0 410
T0 411
T0 412
T0 413
T2 055
T0 612
T0 414
T2 053

年玉の用意して出る泊りかな

初花や近いあたりはあとまはし

一日南持や時雨の跡の雲

小菜はみな菜になる畑の夜寒哉

牛飼にひとりへりたる楷火かな

神やめざめ硯の海の梅の風

猿曳やどうぞといふて飛小溝

大仏の顔へはらはら時雨けり

春の色世にびるむるや竹の風

酔に寝て見たしげんげの花の上

初雁や見送る峰のほのかまで

鶯の栞するなり恵方棚

蝉いづこあと先遠き草の原

月見むと夜を思ふ故に昼寝けり

踊る福の真上□□ふとき□□□

元日や上下へたてぬ膳廻り

海際は闇なり雪の山かつら

羅も浮世涼しき姿かな

西馬

塞馬

柴籬

柴籬

茶隠

茶翁

茶狂
并題

座喬

乍琴

乍琴

左琴

左琴

朔花仙

昨非

昨夢

砂彦

茶山

茶山

廻文体の名答は別紙にのせられたり

御饞別祝詞

世もむつかしと刺捨たる□□山□洲竜会を訪へば

T0 431 T0 430 T0 429 T0 428 T0 427 T0 426 T0 425 T0 424 T0 423 T2 093 T0 422 T0 421 T0 420 T0 419 T0 418 T0 417 T0 416 T0 415

立秋も早し年忌も七巡り

砂水 艸拜

藤暁居士の年回を弔ふ

曙の花にも言ふ独かな

茶静

手まくらにいつに歟なりぬ啼蚯蚓

茶静

鶯の来てぬれ羽震るへば落葉哉

茶石

末枯て塔二三重見出しけり

茶石

きくものに落てしまひぬ月の雨

茶田

松明の先に見えけりかれ尾ばな

砂文

来し秋を顔にいなごの登艸

小夜秋

またもとの□に戦ぎを□柳かな

蓑笠

耳順の賀に

手ごころや夜のうちはの裏おもて

杉芽

直切られて腹ふくらしぬ市の鯁

三海

聞毎にはつね心ぞ蜀魂

山妓

ついぬれてつい干る雨の柳かな

傘狂

雨後興

末広く采ふる花の継木哉

山境 拜

うぐひすや行幸の道の朝朗

夕之

うぐひすや行幸の道の朝朗

夕之

潔く老ても尽す若みどり

三車

臥亀太人の国杖の賀を祝して

七草や摘て戻て見てもらふ

三窓

T0
432

綻る白髪麗し冬牡丹

七十四叟

春山雅君の初老を祝して

T0
433

日のすしの一樹は別の紅葉哉

山麗

T3
142

その操ある若松の根はりかな

痣鶴

松に大夫の徳ありといふに寄せ祝し侍りて

T0
434

梅生た一と間かくして年わすれ

市喬

T0
435

年よらぬ月ひとりすむすすきかな

而曉

T0
436

蚊ばしらや水田に消るにしの橋

子琴

T0
437

秋のくれきのふこひしふおもひけり

子琴

T2
081

竹寒る氷の音や夜半の月

子琴

T0
438

雨の晴間啼ふさぎけり揚雲雀

志琴

T0
439

見えてある月を出て見る庵り哉

枝月

T0
440

時雨るやかたすみくらき窓のうち

枝月尼

T0
512

畳さはり又□き物や花筵

重頼

T0
442

乳はなした寝顔にいとふ蚊遣り哉

枝交

T2
069

乳はなした寝顔にいとふ蚊遣りかな

枝交

T0
443

手を打て蔵に冴居牡丹かな

子交

T0
444

足伸す椽や田植に垣ひと重

而后

T0
445

明かかかるみね見あげるやあじろ守

而后

T0 460 T0 459 T0 458 T0 457 T0 456 T0 455 T0 454 T2 083 T2 056 T0 453 T2 080 T0 452 T0 451 T0 450 T0 449 T0 448 T0 447 T0 446

喰物に灯のいそがれて花の宿

而后

子なき家にゆふくれ淋し鳴蚯蚓

而后

乗あげた洲にそれなりや涼み舟

而后

鶴を見てしばしまぎるる寒さかな

而后

埋火は絶ても明る夜のうれし

而后

籠るべき一夏を我は旅衣

子坤

ふみそめるとしの麓や梅の花

芝山

山ながら眼につく空をほととぎす

芝山

櫨紅葉印彫る孤家の後哉

史山

染程にかげろふ花もひとへ哉

史山

貴し秋も之は一面に艸紅葉

二承

長からん人もみるべしはつ曆

二承

花曇花の木の間へ日はもれて

紫人

黄鳥やをこりかかりし池田炭

似水

足元を菊の匂ふや朧月

史青

足元を草の匂ふや朧月

史青

三尊と御位牌並ぶ夏はな哉

市井

別れては俯隠す薄かな

只静

こたび渡月齋実名を改められしを祝ひて
木居君の選曆を祝しはべりて

賀

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|----------------|---------------|----------------|---------------|----------------|---------------|----------------|----------------|----------------|---------------|--------------|------------------|---------------|------------|------------|-------------|
| T0 473 | T2 082 | T0 472 | T0 471 | T0 470 | T0 469 | T0 468 | T0 467 | T2 075 | T3 059 | T0 466 | T0 465 | T0 464 | T0 463 | T0 462 | T0 461 | T2 057 |
| 醉ふて寝る覚悟きめたり大晦日 | 梅折て来た手をかぎす焚火かな | 搔く人におしむ人あり門の雪 | 初花や人のところについでさく | 春をまつ心ひとつに成にけり | 夕ぎりや一先づ晴て二度のくれ | 明らかに日はいりながら朧月 | 余処眼には煙りし月の野口かな | □□□□どしのねぐりや蓮の露 | ひざまづく北野の宮や梅かほる | ぼふふりの中に澄けり朝の月 | 葛水や筑波あたりに雷の音 | あさぞらを見て居れば散ひと葉かな | 宵やみに白みて寒しかつら川 | 郭公声に艶ある月夜哉 | 廓公声に艶ある月夜哉 | 先暮て月見る迄の勤かな |
| 四端 | 四端 | 四端 | 四端 | 四端 | 自然齋 | 二仙 | 北越 | 史千 | 史仙 | 而雪 | 二石 | 二石 | 紫石 | 紫石 | 紫石 | 柿赤 |

結婚満廿歳を白賀して

T0 489 T0 488 T0 487 T0 486 T0 485 T0 484 T0 483 T0 482 T0 481 T0 480 T0 479 T0 478 T0 477 T0 476 T0 475 T0 474 T2 074

初雪やかれ木に花をやるじやまで
老すがた見えぬ柳の葉ぶりかな
海山の苦を経て法の花見に歟
つねに見る雲にさはぐや初時雨
いそとせや道の跡なり霜の草
遣はれぬ扇のたまる残暑かな
今もちるやうな葉のみをもみぢかな
鐘つけばこそ暮もすれ雪のうへ
世にはこの正月ありてひめはじめ
我やどをいつ出て雪の小商人
せみ丸の琵琶にあはせよかんこ鳥
御家中は憎き踊の出立かな
長き夜や翌は枕の角とらむ
しらぬ間に萩は乱て花すすき
夜の鶴にどんだの明り届き鳥
あけぼのの空をはなれて桜かな
蟾も出て迎ふて居るや庵の月

自知
慈竹
祇白
慈竹
士方
士方
士方
士方
士方
士方
士方
士方
士方
士方
若翁
若翁
若翁
若雅
尺II
尺西
雀叟

中和園の賢母ことし六十一齡の祝筵を開かれしを賀寿し

侍りて

餞別

T0 504 T0 503 T0 502 T0 501 T0 500 T0 499 T0 498 T0 497 T0 496 T2 077 T3 094 T0 495 T0 494 T0 493 T0 492 T0 491 T0 490

糸竹の酒に寄るらん時鳥

月涼し草笛聞ゆ橋の上

枯草のふたたびかほる時雨哉

後れしは何のおもひぞ帰る雁

待宵や影ふりかへて戻る道

やせたるは老木のさまよ桜鯛

安全□地に滞りて松の花

ささげばやけふの御前に枯尾花

実^みに夫^{おとこ}よますますたかし若みどり

はつ雪や隣へばかり降て行

傘を横目の覗くしぐれ哉

月も日もめぐりきて鳴け郭公

正月は元日二日三日かな

朝の萩人ははからず地にはふ

こぼれ穂につかぬ栄耀や稲雀

はかりなき光りを花の春田かな

月うづむ草や水鶏の啼もどる

写水

車大

舎友

舎来

此雄

髭雄

集衣

十雨

秋影 書

秋瓜

周峨

秋菊

秋拳

重厚

拾山

拾山

秋水

御家督を賀し侍りて

翁忌

べし

蘇十老雅の高寿を雅するに、あふげば是もいよいよなる

追悼

T0 520 T0 519 T3 120 T0 518 T0 527 T0 517 T0 516 T0 515 T0 514 T2 085 T0 513 T0 511 T0 510 T0 509 T0 508 T0 507 T0 506 T0 505

寺の名は聞て忘ていと桜

秋水

翌日はとて夜のめも合ぬさくら哉

秋水

朝起の一葉をまたぐ戸口かな

秋村

鶯や音に踏こたふ枝の上

秋美

さし込だ月も蚊遣りに曇りけり

重名

中々にさかりは長し遅さくら

十邑

初盆やおもひ出す露涙

十邑

張り出して鉢植丈を青簾

戎話坊

袖ふるふ袖が□□散桜

寿雀

くらべ見る心やこよひ秋の月

淑

さかりなる明りはもちぬ夜の梅

夙也

はたご喰ふうちも夜ふかき蛙かな

夙也

芭蕉忌や桃と桜のかへり花

寿交

こころには何おもうてかふくと汁

寿清

錦織まつ戸に啼蜀魂

寿桃

みよしのの□□や士峰を片□□

狩門

子ふたりのこころはしらず秋のくれ

酒雄

余の世話に疎き代也菊の花

七十四叟

蘭丈香月君の家刀白の古櫛に賀し侍りて
藤曉故人の靈前に詣て

十三夜

T0 535 T0 534 T3 070 T0 533 T0 531 T0 530 T0 532 T0 529 T0 528 T0 536 T0 535 T2 086 T2 078 T0 524 T0 523 T0 522 T0 521

すす掃て常の宵より静なり

春雨斎山人

よい衆こそ事はおほけれとし忘

春湖

花鱈にほへ雑煮によし野櫛

春湖

餅花や片枝は梅にして見たき

春岬

□□□□木灰めかしたる霞哉

春香園

瀬田の眺望

寒き日といへば通るや嫁の輿

春瑣

松をすく初日の花や鶴の声

春山

老に人日から盛りや梅の花

春水

初老の賀を祝して

三つらねに三朝の落葉わかりけり

春袋

萩と成吉更とさくや山の草

春袋

砂に旭のさすしらぎくのにほひかな

春籠

花のむかし猶なつかしきわか葉かな

春坡

七十の御齡を賀しまいらせて

山伏の鼻かみ行枯野かな

春坡

咲ものにみな香はあれど梅の華

曙庵

葉に成りて常の夜明やあらし山

繞庵

風すこしみやげにもつたあつさかな

二葉

団扇にそへて

朝起や菊にもたれて夏の立

蕉雨

T0 549 T0 548 T0 547 T0 546 T3 093 T0 545 T0 544 T0 543 T0 542 T0 541 T0 540 T0 539 T0 538 T0 537 T0 536

虹のねをつき消して行ちどり哉

陰もよし栄富たる家桜

世に匂ふ心の花やさくら人

著き徳や殊更冴る月

秋風や夕日春く浪の上

若竹の延びて揃ふてそよぎけり

雨晴て雲間照すや秋の湖

山の錦を移す帆の蔭

音寂し秋も更行夜の雨

鉄鉢の米に客あり不如帰

道とへば頤でおしへる紙衣かな

日を友にして□かへす峰の松

萍や風の届かぬ岸に咲

世に稀な齡のうへを千代の春

枝や葉のすきをも見せず松の花

玉棚や昼の灯しのたよりなき

蕉雨

昌雲

常栄

笑花

樵花坊

六十一翁

松牛 拝

松牛

西来

尚郷

雲水

松均

松琴

松傾

松月

松古

松語

松後

富田家にはじめてまかりて

祝賀

こたび三夫姉揃ひ給ふを賀す

古城より湖つらを詠めて

秋雨

賀

古稀賀

此庵のつきせぬ事をかして

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|---------------|-----------------|--------------|-------------|-------------|-------------|-----------------|---------------|-----------------|--------------|---------------|--------------|-----------------|---------------|--------------|
| T0 561 | T2 070 | T0 560 | T0 559 | T0 558 | T0 557 | T0 556 | T2 079 | T2 076 | T0 555 | T2 059 | T0 554 | T0 553 | T0 552 | T0 551 | T0 550 |
| 老てなを枝葉さかへる松の色 | 秋の日や鐘さえよそへ鳴て行 | 暮おしきむかふ入日のさくらかな | 散り交る梅は残りて雪淡し | 花見ては春一春を一日哉 | 思ひ入海山ひろし雨の月 | 谷水の匂ひも深し庵の梅 | わか竹や千代もさかゆる葉の戦ぎ | 名月の子供さへ寝ぬ夜也けり | かがなべて永し楽しき目のゆとり | 万歳のしら声□きしらべ哉 | 言の葉をけふ吹寄て時雨けり | 夕かぜの草に戻るや夏の月 | 居る鳥も見えぬくもりの若葉かな | 一ト木にも日は暮かねて山桜 | 帰り咲して若がへる叟かな |
| 正青 | 少齊 | 松翠 | 嘯松仙 | 昌純 | 松什 | 条之 | 掌山 | 掌山 | 樵山 | 嘯山 | 晶山 | 松齋 | 昇齋 | 昇左 | 尚左 |

手向

石川氏の閑居の賀を奉るとて
川口土芝雅丈、こたび閑地に居を移し玉ふとききて、白
風流は窓前に来去する事を思ひやりて

幸に九旬の春をむかへ国君の御恵みをこふむる翁を賀し

T0 574 T0 573 T0 572 T2 058 T0 571 T0 570 T0 569 T0 568 T2 072 T0 567 T0 566 T0 565 T0 564 T0 563 T2 073 T0 562

八束穂は千代の齡の奏者哉

身の隙やわか葉にうつる白聞□

ひと夜ふる雨や小桶の海苔ぬるむ

曲水や流れて捨る筆のさや

枯野をもこして出て来つ土器師

窓見れば恵方でありぬ明の春

大福や去年の梅さへあたらしき

鶯や琴も互を聞やしき

風と雨毎に淋しや花の山

山眉も老たる雪のあしたかな

花は根に歸りていく世さくら人

いつくれてさくらの元の月夜かな

ちる日とて香はやらさしな花曇

山茶花や桜に戻る月の色

笛かりて吹てみにけり夕涼

世にめでて尊き八重の桜の実

湘夕

樵泉

祥然

松窓

九十

丈叟

松端

松端

掌兔

松濤

昌同

正道

松圃

松圃

松味

松夢坊

松蘿

て

本卦にかへる君を賀して

八十の御賀に剃髪仕たまへるを祝す

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-----------------|--------------|---------------|-----------------|--------------|---------------|-------------|-------------|-----------|--------------|--------------|-----------------|---------------|----------------|--------------|--------------|---------------|
| T0 590 | T0 589 | T0 588 | T0 587 | T0 506 | T0 585 | T0 584 | T0 583 | T0 582 | T0 581 | T2 071 | T0 580 | T0 579 | T0 578 | T0 577 | T0 576 | T0 575 | |
| 手をつひて月星拜む蛙哉 | 一ト葉づつちるあと淋し二葉三葉 | 月今宵野中の松をあるじ哉 | 葉にまけて唯咲に鳧枇杷の花 | 芥子さくや沖にしら帆も見えぬ朝 | 朝露や鳥も来て鳴く塚の前 | 鞠の色暮てひそかにふたつ星 | 山茶花や茶を焚家の薄煙 | 鳥の声聞や夏たつ月の前 | 山 | 落着やいざよふ月を膝の上 | きらきらと光る砂や春の風 | さみだれや十日三原の粟を減らす | いつもより清旦はやし雪の窓 | 薄すみれ濃すみれ春も暮かかる | 三度目の雪やさいはひ年忘 | 時の来て咲たる梅を白慢面 | 蠅ひとつ木馬に來たり小六月 |
| 只樂 | 子來 | 如流 | 如柳 | 如流 | 如雄 并 | 徐風庵 七夕 | 如泉 | 如水 | 如水 | 如杉 | 如圭 | 蜀花 | 如菊 | 升六 | 松朗 | 祥礼 | 松蘿 |
| | | | | | | | | 時鳥 | | 移徒賀 | | | 夜來雪 | | | | |

T0 604 T0 603 T0 602 T0 601 T0 600 T2 084 T0 599 T0 598 T0 597 T0 596 T1 268 T3 144 T0 595 T0 594 T0 593 T0 592 T0 591

さはつてもゆきが降なりおくやまか

水鳥のわれに事足るうき寐かな

日のくれぬ日はなけれども秋の暮

鶯のささ葉をあらす清水かな

鶯の篠ふりはへて高音かな

年□に□□栄ゆる□□かな

松がえに押つけとどく御代の雪

山寺に風呂のしらせや大根引

矩を喩ぬあとやふみみん道の霜

浜松やかさねん千代の若緑

秋の雨うつぶく外はなかりけり

秋の雨うつぶく外はなかりけり

血ぶくれた蛭投上げる田道かな

鶴をよぶ笛あらまほし初子の日

霧雨やぬれ毛痒がる牧の駒

羽子つくや数歴々ではてもなき

夜咄しの耳に聳る寒さかな

士朗

士朗

士朗

士朗

士朗

尽庵

真葛

深谷

信泰

信泰

新平

新平

秦羅

翠雨

翠雨

翠園

翠玉

草

豊原法師句当の官にのぼられしを祝して送る

賀

賀

追善

追善

木居翁の六十一を祝して

さる頃、選川ぬし俄に黄泉の風にさそわれ給ひしが、予

も風雅の交りなせし事どもあれば、悼みのころを

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|----------------|-------------|---------------|-------------|----------------|----------------|-------------|---------------|----------------|-------------|-----------------|-----------------|----------------|--------------|---------------|--------------|
| T0 620 | T2 044 | T0 619 | T0 618 | T0 617 | T0 616 | T0 615 | T0 614 | T0 613 | T0 611 | T0 610 | T2 169 | T0 609 | T0 608 | T0 607 | T0 606 | T0 605 |
| きじなくや藪を出て来る寺の犬 | 花の月あらしおさへてのぼり梟 | 冬枯や言葉の花の手向艸 | 頓て聞んさぞな花の旅の記を | 打水の花に暮こむ明り哉 | したしみも月雪花のあまりかな | 一ツ家の抜け出て黒し蕎麦の花 | 吉日の多き庵なり花に鳥 | 蚊遣木の尽てむしるや垣根草 | 黄鳥のこけふみおとす清水かな | 菊酒に万歳唱ふ此日かな | わすれたともおもひ出さぬ□□□ | うかれ行あしこそはゆき花野かな | 夕貌のゆふべは花にかくれけり | 朝露に心ぬれたるさくら哉 | 等閑に見し木の間より梅の花 | 夕立の高に来るや須磨明石 |
| 青峨 | 井華 八十翁 | 晴雲 | 静雨 | 静雨 | 静雨 | 井蛙 | 寸風 | 寸風 | 瑞林 | 水藍 | 水来 | 翠巴 | 翠石 | 推己 | 推己 | 水月 |

述懐

賀

祝

T0 636 T0 635 T0 634 T0 633 T0 632 T0 631 T0 630 T0 629 T0 628 T0 627 T0 626 T0 625 T2 097 T2 088 T0 624 T0 623 T0 622 T0 621

手折して猶芳しや蘭の花

盛雅

賀

夜が明てはしる処見る水鶏かな

世岐

ひきのこす小松や千代のあと備へ

成祇

炎天やしほやくはまのみだれ砂

成祇

霜させる夜々のにていず月と梅

成祇

千生の中のひとつや種瓢

成祇

ふりにたる爰が誠にしぐれかな

青牛

回芳大君ばせを忌の御句拝覽して

山茶花や開き初たる華の艶

清溪

祝

澄ほどに月をはなるる光かな

西月

菊の花御法の庭に手向哉

静香

祖翁忌

寒き日といへば通るや嫁が輿

青瑣

初雁やくらき夜空も声馴染

井左

梅さけた人からのせる渡かな

清斎

いつ迄も老せぬ色や門の松

静斎

薄綿の肌さわりよき花見哉

精斎

面白ふ笑しう暮す弥生哉

精斎

虫干をする逆しぼる袂かな

静山

追善

雨の夜のあやめもわかずほととぎす

晴山

T0 650 T0 649 T3 136 T0 648 T2 089 T0 647 T0 646 T2 096 T0 645 T0 644 T0 643 T0 642 T0 641 T0 640 T3 106 T0 639 T0 638 T0 637

北国に光もあるや氷室守
年々歳々劣らぬ菊の薫りかな
六むかしもかはらぬいろやまつの花
ただたより頼む時雨のもみぢ哉
うめの花人かげなくて又ゆかし
かりがねの爪つく程や時雨雲
火にむしの来ぬ夜となりてきりぎりす
年の花人の言葉に咲にけり
ひぐらしや純の飴屋居ざりけり
かやはらへ龜相に出たり冬の月
氷すずしむかふさかりに歩行時
行秋やおもひ捨ても夜の空
初音せぬうち鶯のおと寒し
春の鳥消□□あれと初□□
家はみな露の中にてうつ火哉
□□はふしなき中のいどみかな
きぬずれの音静かなり富貴草
積雪もさくらさくらや吉野山

晴山
静処
勢女
青扇
青池
精知
世中
世南
世南
青坡
井肩
井肩
井肩
成美
清烽
静雄
青巒

追悼

慈母の六十ひとつの春を賀し侍りて

留別

乃谷にて

T0 666 T0 665 T0 664 T2 087 T0 663 T0 662 T0 661 T0 660 T0 659 T0 658 T0 657 T0 656 T2 095 T0 655 T0 654 T0 653 T0 652 T0 651

宵寝した鳥啼らん春の月

幾むれも皆公家たちやはつ子の日

あはれさや塚の中より秋の月

おもふほど酔はぬ寝酒やなく鶴

暮て行秋や身にしむ草の雨

□□とちる雪犬もうれしける

さけ計る灯をかねてうつ砵かな

見る間小雨にぬれて鶏合

先に来て末坐にすはる月見かな

葉のちから平生みせてつはの花

ひとり前戸さし残して月見かな

帰る空持て哀や畑の雁

袖に眼をやすめる雪の広野哉

菊の香や松のくらぎに立《澄》のぼる

鶴のよはひ契りあらじや千代の春

このさまを何とかたらんふじの山

月かげとともに音すむきぬたかな

ちと道の損してきくや茶摘唄

政裡

清柳

石溪 拜

赤斎

赤斎

石芝

碩水

碩水

碩水

碩水

碩水

石堂

石堂

石蘭

世顯

是水

是水

雪塙

追善

閑居

すそ野にて

T0 667 若かりし嘶に更て盆の月
T0 668 水おとや散らぬ意地ある花ひと木
T0 669 藤躑躅山家のはるはかぎりなき
T0 670 煤掃の邪魔に成るほど老にけり
T0 671 山蟻のみちをつくるや帰り花
T0 672 山松や千代かさぬべき春の色
T3 102 滝すずししら雪ち□□□□落
T0 673 雪白し夜はほのぼのと明の山
T3 159 其匂ひに杖をふせけり菊の庵
T0 674 金の鯛上てふたたび迎ふ年
T0 675 嗚呼月と只申たる今宵かな
T0 676 ちよろちよると遊ぶ水鶏や葭の間
T0 677 いますかと思ふや炭の移る音

雪塙

あらし山にて

雪塙

雪塙

雪塙

雪鷗

節可

雪外

雪香主人

節伎

雪主

雪瘦

雪頂

雪亭

鳥が鳴くあへまのはてのくろかみやま、忘れて旅行の□

山をめぐりめぐりて只自花の主をしたひて

名古屋を過る

雪晨ぬしのはやくも百ヶ日とはなりぬ。孝子雪旦主、香

を焚蕙まふて、其いとなみいとねんごろなり。いませし

時は数奇の道にも委しくて、おしへ道びくに其こまやか

なる事、慈母の赤子を養ふが如くなりしに、けふもその

社友の人々皆閉居しぬ。僕も席末に□りて、

T0 692 T0 691 T0 690 T2 091 T2 090 T0 689 T0 688 T2 094 T0 687 T0 686 T0 685 T0 684 T0 683 T0 682 T0 681 T0 680 T0 679 T0 678

溜め池に泡ふき立る暑かな

雪童

いざよひや闇の悟りも暗てこそ

雪洞仙

角くむやあしも氷らぬ水のひま

雪洞仙

杜の花こころおぼへの葉かな

雪鷺

寄杜花

市人の塩こぼし行枯野哉

千阿

ながめある松や千とせの冬かまひ

蝉雨

大鐘の夕ぐれ告る牡丹かな

千影

仏名やほとけほとけと啼鳥

千影

塊に並ぶひとつや露の台

千隲

朝かほのはなに追るるねづみかな

千隲

萩に来て居れば薪わる戸口かな

仙翁

今消した灯に用のある月見かな

千崖

初さくら人会釈して通るとこ

千崖

鶴の鳴く岬ぬいてし初時雨

千崖

今消した灯に用のある月見かな

千崖

帷子は達者自慢ぞ着物遣り

千吟

豎横に登る道あり花の山

洗耳

時雨るるをけふの会式や芝の庵

洗耳
并

正當忌

帷子を着初て袖の浦涼し

千尺

T2 092

堪忍の姿を示す柳かな

千秋庵

□雅氏の需により地辰と字が雅号の字を合して柳汀の雅辰を贈るとて

T0 694

さらへて歟時雨の中に鳴からず

仙草

芭蕉祭

T0 695

初緑り是から千代の枝配り

仙風

T0 696

戻るさはまよわば迷へ桜狩

川鷺

T0 697

今年より猶若々しかがみ餅

千鹿

御母公の亀齡を見奉りて桃窓君へ送る

T0 698

黄鳥や逃てもまけた鳥でなし

双鳥

T2 099

行義さに紙右の音もなかりけり

双羽

T0 699

船に酔て菜の花のへり通りけり

宗隲

T0 700

あまが子の折檻すむで荻の声

蒼虬

T0 701

つけ木火を田にすてたれば啼蛙

蒼虬

T0 702

ゆりきりて並べておくや草の上

蒼虬

T0 703

松風はあくる夜に似て秋の月

蒼虬

T0 704

畑菊のほかにかき根のきくの花

蒼虬

T0 705

茶代などよけいおくべし夕もみぢ

巢居

T0 706

暮の雁おりはぐれたる声寒し

巢居

T0 707

其数を蜂もかぞへん玉椿

漱谷

六一の賀

T0 723 T0 722 T0 721 T0 720 T0 719 T0 718 T0 717 T0 716 T0 714 T0 713 T2 061 T0 712 T0 711 T2 102 T0 710 T0 709 T0 708

朝茶にもうけて嗅たや梅の花

住ぞとは烟にされて雪の家

ふかずとも蓬のやどにおのづから

鶯や水の□もさらばなけ

物影のかるく移るや春の水

鶯の入目を啼て行にけり

おろおろともものとふ門の秋蔵草

騒しき庭籠見舞ふや月朧

涼しけれ三保の曙比良の雪

君来ませさつききの復たの五月晴

蚊の声や馬盃とればはつちどり

鮎くみの中をいそがぬ筏かな

蛙みな遠音になりぬとぶ蚩

見て居れば気も長うなる枯野かな

春の野や雪あるうちの浅みどり

梅の葉のひとりこぼれて秋の暮

落た歟とおもふのが勝競馬かな

菊の香のしまりほどくや旭の廻り

草齋

艸齋

蒼山

巢人

草且

宗台

巢兆

双把

草也

爽葉窟

素屋

素屋

素屋

素屋

素屋

素屋

素屋

素外

草庵端午

わかれを送る

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------------------|-------------|--------------|---------------|---------------|--------------|---------------|-----------------|---------------|-------------|---------------|-----------------|---------------|---------------|-------------|---------------------------|----------------|
| T0 740 | T0 739 | T0 738 | T0 737 | T0 736 | T0 735 | T0 734 | T0 733 | T0 732 | T0 731 | T0 729 | T0 728 | T0 727 | T0 726 | T2 100 | T0 725 | T0 724 |
| 瑞離(籬)に ¹¹ 登る残暑かな | 冬枯もなくて尊き流かな | 花の野やいづこを艸の刈処 | 里もくれ野も暮山の梅しろし | 門ぐちは綱やいかりや春の月 | 雪どけや清水流るる柳かげ | 跡もどりして鐘きくや花の中 | 千代の春を目出たふここに明初て | 孝に寝ぬ夜の賜かほととぎす | 仰山な泊り支度や花の宿 | 拾ふても笑はれはせぬ一葉哉 | ほのぼのと初音を明のほととぎす | 菊の香の流したふて山路かな | 貝はりは松で有りけり春の風 | 下京の夕日は永し稲に蝶 | 楽しからん松にみどりの恵みとは | 大雪や灯のもるかどに立どまる |
| 素白 | 素長 | 素碩 | 素芯 | 素芯 | 素芯 | 素芯 | 素信 | 素信 | 楚雀 | 素山 | 素行 | 素月 | 素兄 | 素兄 | 友松亭 | 祖郷 |
| | | | | | | 上野 | 米庄君の転宅を祝して | | | | | | | 鼠禁 拜 | 河村何がし婚礼の目出たき世に尽さることを祝し侍りて | |

T0 753 T0 752 T0 751 T0 750 T0 749 T0 748 T2 107 T0 747 T0 746 T0 745 T0 744 T2 101 T2 098 T0 743 T0 742 T0 730 T0 741

うつせみの巨燧蒲団や猫の恋

もの拾ふ気はなかりけりけふの月

天ぎかる日南は早し梅の花

朝の間や嶺で逢し初松魚

ひとからげかつらぎ山の雪の柴

昇りつく迄はすすめや花の山

若返り又一巡り花車

けそうする人にしばしばはるのかぜ

たれやらかほゐのねがひも盆の内

無太郎の席をのがれてほととぎす

むら菰むらこの葉末をつたふ火たる哉

散もみぢ一葉は渦をのがれけり

しばらくは潮にのりけり玉あられ

花を折力や人におとりたき

耳よけてまくらおきけり時鳥

須磨寺を歩行て居るや閑古鳥

草履では行れぬ道や鷓鴣つばきの声

楚白坊

素風

素風

素明

曾良

疎蕾

六十八翁

狙栗

素良

素良

素良

岱阿

袋一

岱一

岱一

岱一

岱雨

大萇

鎌倉拝読大事なれば

神谷氏ことし本卦の序をむかへ玉ふを賀し奉りて

| | | | | |
|----|-----|------------------|----|---------|
| T2 | 105 | 鹿の□を見すてて戻る秋のくれ | 大雅 | |
| T0 | 754 | すがたあらば萍に似ん春の風 | 大箎 | |
| T0 | 755 | 大夏や雨美しき嵐山 | 大箎 | |
| T2 | 106 | 我や沸し□しみやさびしうつる影 | 大箎 | |
| T2 | 104 | 寝をしみてくつろぐ庵やはつ椀 | 大箎 | |
| T0 | 756 | 下駄の緒のぬけて鳴立小橋かな | 対山 | |
| T0 | 757 | 研あげたやうな光りや冬の月 | 対山 | |
| T2 | 109 | おきたりとはいささか見えず松の霜 | 対山 | 古郷を過る折り |
| T0 | 758 | 花盛松のみどりも立にけり | 対山 | |
| T0 | 759 | 若水のちからもどすやはね瓶 | 偕車 | |
| T0 | 760 | 水海の波別帰る雪解哉 | 偕車 | |
| T0 | 761 | かばかりの夜はふたつなし月の秋 | 退住 | |
| T0 | 762 | はつ雪の鶏もたぬ家もなし | 泰昌 | |
| T0 | 763 | 馬合羽夕立三粒ひろげたり | 泰昌 | |
| T0 | 764 | 梅の夜をわすれぬこゑやもる蛙 | 泰昌 | |
| T0 | 765 | よき道の海にも出来て御代の春 | 帶泉 | 歳旦 |
| | | 出歩行の人の上より年の行 | | 午尾 |
| | | 朝夕を持分ぶりや梅柳 | | 春興 |

T0 785 T0 784 T0 783 T0 782 T2 110 T0 781 T0 780 T0 779 T0 778 T0 777 T0 776 T0 775 T0 774 T0 773 T0 772 T0 771 T0 770 T0 769

花とわが間にきゆる月夜哉

対竹

ほとゝぎすよい機嫌なり七八声

岱年

ころびこむあられを庵のふくはうち

岱年

むかふにも見て居る人やあきの暮

岱年

遠鹿のこゑをあれ消す鼠かな

岱年

菊買ふて気のおさまりぬ盆の市

岱年

水垢の手にまふれるや蟬の声

岱年

明る夜をいたたく花の木の間かな

岱年

陽炎は見るべきものの司かな

岱年

藪うらに箒の音や月とうめ

岱年

湖の春やどちらへくれて行

帯梅

水仙や葉も冬しらぬ深緑

大必

けふもけふも只白雪の在処かな

大必

白菊にをくは添る竹はな行し

太阜

鶯やうすみどりなるひがし山

太阜

足代にからくまれしも若葉かな

大夢

松を親とたのめちよへむ老の冬

確嶺

麦はたに子を育つるか雨の雉子

拿雲

喜知子のちゝ君の七十の賀に

T2 118
T0 817
T0 816
T0 815
T0 814
T0 813
T0 812
T0 811
T0 810
T0 809
T0 808
T0 807
T0 806
T0 805
T0 804
T0 803

かすむにも方角はあり朝と晩
駕籠脇に肴屋つれし雪見かな
竹の子や盗めと札も建られず
うの華や里はづかしの夜の道
浮世ともしらで樵るや秋の暮
養父入にみるや在所の歌かるた
見に往ん時雨の中のひがし山
漬梅の色香ほめつつ土用干
さみだれや風道白くくれて行
世話しいも遊ぶ用意ぞ春隣
枝炭や昔しおもへば鳥の宿
いかめしや角ありと振かたつぶり
たどり来て日かげをたのむ茂りかな
暖になりたる塚の落葉かな
木殺風の明きる間を風のおと

竹烟
竹烟
竹烟
竹翁
竹香
竹処
竹窓
竹窓
竹道
竹道
ちくほ
竹有
竹遊
竹雄
こしの
竹里
竹里

樵夫

天満宮奉納の句合に

世の禍福は身の幸不幸ならん。けふや三芝雅君の恙なき

暗れ□□を祝侍りて

T0 831 T0 830 T3 137 T0 829 T0 828 T0 827 T0 826 T0 825 T0 824 T3 109 T0 823 T0 822 T0 821 T2 117 T2 103 T0 820 T0 819 T0 818

あつき日や唯薄雲の寄る所

竹里 梓

はづかしい顔も秋とて紅葉かな

竹里 梓

空相の功あるものや鳥おとし

竹里房

古池の苔葉見えぬ春の水

竹老

忘れなよ心の仏さとののはは

智道

庭内に来ぬところある時雨かな

知風

稲妻もからすの声にわかれけり

ちよ

みつけたり蔵の間の三日の月

聴雨

初鶴に頭をする神の白州哉

聴雨

蚊遣火やくくり分たる縄すだれ

朝伍

此浦の平家へ鳴の看経かな

朝伍

虫の音もそれ程瘦て後の月

蝶後

ちるはなにかけわたしたるすだれかな

長齋

どのはなのちるともみへずちりにけり

長齋

ぬるみし歟静に見へる池の浪

蝶左坊

□□うつして咲くや□□

長左坊

墨染の世を又逃る紙衣哉

兆而

松の声遠きを里の小春かな

超室

はじめての御面会にてん書なきにはちいりてければ

是心□之仏之意併信一半行を詠める

翁忌

遊蓮池

T0 851 T0 850 T0 849 T0 845 T0 844 T0 843 T0 842 T0 841 T0 840 T0 839 T0 838 T0 837 T0 836 T0 835 T3 088 T0 834 T0 833 T0 832

蜻蛉や何おもひ出て引返し

長秋庵

梅さくや山と山との間の駅

潮水

むし籠や清き有馬の竹細工

長水

連翹の幹からたはむすずめかな

釣石

稲妻や撞楼も見えて杉の間

長瓢坊

としどしや濡てうれしきはつしぐれ

長米

ぼうふりや昔は誰が水かがみ

蝶夢

雪帯し松や齢も千歳ふり

蔦雄

白露のこぼれそへけり関伽の水

楮亭

ひとり蚊帳あまりに早き夕かな

樗堂

一日の薺若し花の朝

樗堂

何よりや冬の雨ふる梅柳

樗堂

花ざかり散より外はなかりけり

樗堂

山さくら静にうつる琵琶かな

樗堂

浮雲やまた降ゆきのすこしづつ

樗堂

大坂やひとのうへ行ほとゝきず

樗道人

笈士や爰をしばしの桜人

千代道

傘のさせぬ麓やかんこ鳥

樗来

あらし山に遊びて

T0 862 T0 861 T0 860 T0 859 T0 858 T0 857 T0 856 T0 855 T0 854 T0 853 T2 113 T2 112 T0 852 T0 848 T0 847 T0 846 T2 116

仮橋を懸たればちる柳かな
夏の月松より出ぬはや更ぬ
花ながら下葉いろづく小萩かな
道ばたに鶏も来て居る田うゑ哉
道ばたに鶏もきて居る田植哉
過行も声のうちなりほととぎす
過ゆくも声のうちなりほととぎす
寒からぬ家の花なり福寿草
木に添ふて延あがりたる鬼見哉
折て待しゆび壺本の花見哉
歌こそは嘉永にくだれ梅の華
かねの生る木も買あてん年の市
しぐるるや水とりひとつ浮直す
まだ寒き山に入り梅の月
黄鳥や早瀬を前に身のかるき
海を見てもどれば霞む戸口かな
見えながら声はるか也月の人
見る文のしぐれぬはなし花屋裏

椿二
椿堂
椿堂
椿堂
椿堂
椿堂
椿堂
津奈女
セイホ
鼎湖
鼎左
鼎左
鼎左
鼎左
鼎左
鼎左
鼎左
鼎左
鼎左

白庵の桜

元日

T0 876 T0 875 T0 874 T0 873 T2 126 T0 872 T0 871 T0 870 T0 869 T0 868 T0 867 T0 866 T2 125 T2 124 T0 865 T0 864 T0 863

今うつたあみの魚貫ふ月見かな

鼎左

酒の香はきのふに凝て蓮の花

鼎左

川かみは木々の雫や春の水

鼎左

にしきぎの雁□□らむ寒さかな

鼎左

見え出して日の暮行や雪の山

鼎左

匂ふ旭をまづいただきて雪の松

貞松庵

ふぶきともみるとき花の日ぐれ哉

丁知

杖のいるほどに咲たる牡丹かな

汀哉

たつ鳴の雫や石もうがつべき

貞瓊

五月雨や星をはなる雲低き

汀柳

中程に高ひ処ある枯野哉

笛三

月ひとりのせて芦間の捨小舟

天阿

一盃のをはよりはやく丸一年

田翁 梓

ちよつと出た留守の様子や起り炭

田禾

雁鳴や天氣の直るかゞり船

田禾

古酒買て来るや使の聞ちがひ

田禾

釣瓶から水の無心や藤の花

田禾

去年のけふはいせにて遊び、今としは爰にて例の雑話を
かたり侍る

正祖古流生花三十六世の家元を承継して

川土主人初老を祝して

T0 893 T0 891 T0 890 T2 122 T0 889 T0 888 T0 887 T0 886 T2 119 T0 885 T0 884 T0 883 T0 882 T0 881 T0 879 T0 878 T0 877

献立の中にもはいる清水哉

田禾

けふといふけふひらきけり福寿草

天遊

木の股のこぼれ種にもはるべ哉

天来

閑古鳥山辺は麦の秋の風

東鳥

若がへる老木もありて梅の花

東鳥

人のぞく知恵のおかしや雀の子

東鳥

入梅やおのづとしめる醤油蔵

東鳥

佛は雪の仏を拝みけり

東鳥
拜

追善

□□□細き樹もあり氷室山

桃雨

ひさかたの都はさぞな華の春

桃芽

いそがしき包丁先やみそさざゐ

東鶴

八十伝ひとつ指おれ八百の春

藤暁

賀

花見ると言はぬばかりの往来かな

桃兮

庫表ともに□□敷ぞ小夜しぐれ

更新軒

かはらぬやくくるる夜毎に啼いとど

道国

こよひおもしろき事の有と聞て

こころなくゆく人は往て中もみぢ

桃左

こころある雲やしぐるるけふのそら

等栽

こころある雲やしぐるるけふのそら

桐枝

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------|---------------|-------------|-------------|---------------|----------------|-----------------|----------------|-----------------|---------------|---------------|-------------|--------------|---------------|--------------|------------|---------------|
| T0 910 | T0 909 | T0 908 | T0 907 | T0 906 | T0 905 | T0 904 | T0 903 | T0 902 | T0 901 | T0 900 | T0 899 | T0 898 | T0 897 | T0 896 | T0 895 | T0 894 |
| 三日月のこのうへならば池のうへ | 種さ種さの花の手向や魂祭り | 朧八を此折からの速夜哉 | 一廻り秋の紫雲を登る空 | 世の上や柳見て居る朝ごころ | 垣も薄焚くもすすきの野守かな | ひげ剃らぬことはりいふや後の月 | ゆふだちの草樹のみかは人にま | 山家まで春めく海苔のにほひかな | 花のさく山とはみへず閑古鳥 | 桶の輪を削るうしろや桃の花 | 出現も夜の間の曠か雪仏 | 名月や紙燭持せて切きざみ | 灯籠の売れて荷作るわかば哉 | 湯手豆の売や松葉や升の市 | 月代や一先花も寝た雫 | どちらなど付た二本やさし柳 |
| 桐栖 | 桃水 | 東吹 | 東梢 | 桃春 | 桃秋 | 桃秋 | 棹舟 | 東樹 | 東樹 | 東樹 | 冬之房 | 桃室 | 桃室 | 桃室 | 桃室 | 桃室 |

別齋を寿

流形大居士好給ふ道に寄一句を悼

五十年詳忌も臙月に当りければ

中華園の霊前に数多の御花賑々敷追福を嘗み有るに拙き

一章を呈す

T2 121
T0 925
T0 924
T0 923
T0 922
T0 921
T0 920
T0 919
T0 918
T0 917
T2 128
T0 916
T0 915
T0 914
T0 913
T0 912
T0 911
T2 199

款冬の露気の花のかこち顔なるや
啼かぬだけ蝶は風情を尽しけり
豊さや暮に五月雨のわすらるる
舞ふ鶴もおなじ齡ぞ松の花
物毎の落つく秋よ四十雀
秋の水濁らぬまでの手向かな
初蟬やかきあげてある海の泥
夏の夜の直□き□に明にけり
おく深く見上る華の林かな
鬼灯や寝のたらぬ子の笑ひ顔
なには江や柴ふく風も春のもの
世やすし齡に古稀花咲て
稲妻のひけば月也鷺の峰
さし鯖や箸は当ねどひと備へ
月ほむる人見処や鉢たたき
亭主からはおり脱けり夷講
有も啞ないもうそとし露のおと
風流や□もやはり初しぐれ

桃青
榻雪
桃竹
桃長
橙年
藤泊
桃甫
東洋
桃来
塘里
沼竜巾
兔園
と岐古
と岐古
と岐古
と岐古
と岐古
と岐古

銘酒のよく売るは雨の日有
追善
香月則貞翁の八十一の齡を寿奉りて
中和園主の太婦人七十の賀を祝し興す
追悼
出入の繁きは家のとみ 輩傍の多きは其身のほまれ
言葉は古く心はあたらしくといふ古人の教にすぎりて

T0 926
T0 927
T0 928
T2 127
T0 929
T0 930
T1 452
T0 931
T0 932
T0 933
T0 934
T0 935
T0 936
T0 937
T0 969
T2 134
T2 135
T2 138

松風の隣隔つる寒かな

徳静

酔ざめに塩茶の味やむめの花

独醒

何人歟笛携へて春の山

得蕪

君が道あじわえばこそ寒の魚

篤民

将門が鹵にあひかねし粽かな

篤老

絵に見たる人もつみけり磯わかな

篤老

咲けしの一重に浅し蟹が垣

杜鴻

板の間の氷やいつのこぼれ水

吐香

かすみくむ月のさかづき幾千代ぞ

〔土芝〕

ものふの輝しらぬ世なりけり

〔土芝〕

ぬり屑にまた霜を《の》置菜の葉哉

〔土芝〕

闇の夜に横たはりけりなつの山

〔土芝〕

折捨て凋も花の最中哉

〔土芝〕

草の戸のゆふ暮あかき寒さ哉

〔土芝〕

むつの花過てこそはつはなさくら

〔土芝〕

月影に開ひてふゆの梅のはな

〔土芝〕

うるたへて(以下なし)

〔土芝〕

六月や早薺の朝な朝な

〔土芝〕

魯堂西伯に道味魚をおくりて

人日いつくしまにて

片羽君のむそちを賀し奉りて

冬枯のころを

児玉氏耳順の賀に木原何がしの霈に應じて

道高禪師の半野を分ち給ふ寛封長老を賀し侍りて

| | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|------------------|---------------|---------------|------------------|------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|------------|------------|-----------|------------|
| T0 944 | T0 943 | T0 942 | T0 941 | T0 940 | T0 939 | T0 880 | T2 132 | T2 129 | T0 938 | T2 146 | T2 142 | T2 141 | T2 140 | T2 139 |
| うぐひすの片羽ぬらして初音哉 | うぐひすのかた羽ぬらして初音かな | うぐひすのよぎし嵐に初音哉 | うぐひすのよぎし嵐に初音哉 | あり明てうれしきさくらふたところ | あまつ雁はねにひかりを得ていぬる | 蜂ぬれてはひわたる也石の上 | 春ふかく□ふき芹の根ざし哉 | うろたへて月見る夏の夕かな | うろたへて月見る夏の夕かな | 月澄て人のこころの夏はらへ | 水遠し菰の中より初蛙 | 水遠し菰の中より初蛙 | 宿ふりて花にめで□ | 六月や早蕨の朝な朝な |
| 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 〔土芝〕 | | | 〔土芝〕 | 〔土芝〕 |

夜泊

賀

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------|-----------------|----------------|----------------|-----------------|------------------|-----------------|-----------------|----------------|---------------|-----------------|--------------------|---------------|------------------|------------------|----------------|
| T0 960 | T0 959 | T0 958 | T0 957 | T0 956 | T0 955 | T0 954 | T0 953 | T0 952 | T0 951 | T0 950 | T0 949 | T0 948 | T0 947 | T0 946 | T0 945 |
| これもまた老せぬいろやさくら鯛 | これもまた老せぬいろやさくら鯛 | かほに雪つけて鳴なり朝からす | かほに雪つけて鳴なり朝からす | かぜ絶てただ海つらのおぼろかな | かすみくむ月のさかづきいく千代ぞ | おりすててしほむも花の最中かな | おりすててしほむもはなの最中哉 | おもひ入みちのくふかき柳かな | うろたへて月見る夏の夕かな | うろたへて月見る夏のゆふべかな | うつらうつらするもさくらのながめかな | うぐひすや有明そめし月に鳴 | うぐひすや雪ならでむつのはなに鳴 | うぐひすや雪ならでむつのはなに鳴 | うぐひすやあり明そめし月に啼 |
| 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 |

長月翁の六十賀を寿きて
長月翁六十の賀を寿て

遊行柳といふころを

丹羽君のむそぢを賀し奉りて

早春三日無量山眺望

叔父松君古稀の賀に我里に隣る味潟の海に浮てふいをを
贈りて寿奉る

叔父松君古稀の賀に我里に隣る味潟の海に浮てふいをを
贈りて寿奉る

T0 961 そのひかりここになにはの芦の月 土芝
 T0 962 たこふねや月花《雪》の海にうかめるか 土芝
 T0 963 つえとなりてわれも千とせの春に逢ん 土芝
 T0 964 つれづれに紫陽花を引おこしけり 土芝
 T0 965 ながき夜の明るここ地や初さくら 土芝
 T0 966 はなる香や天満のみか地にもみつ 土芝
 T0 967 ふなばたをたたひてなくやかんこ鳥 土芝
 T0 968 ぼつりぼつり咲や夏野の草の花 土芝
 T0 970 むつの花過てこそ初花さくら 土芝
 T0 971 むらさきの若葉もさすがさくらなり 土芝
 T0 972 もののふの輝しらぬ世なりけり 土芝
 T0 973 ゆふがほや月のうつればゆるぎ出し 土芝
 T0 974 ゆふさくら夜をも思ひはすてねども 土芝
 T0 975 よいやみに光りさすなる柳かな 土芝
 T0 976 われ見ずば月なほ澄む家さくら 土芝
 T0 977 をし鳥に思ひぞ出る八重さくら 土芝
 T0 978 雨いかに遠山さくらはれわたる 土芝
 T0 979 雨いかに遠山さくら晴わたる 土芝

はかなき七とせのむかしかたりを聞て追善のころを
 蛸舟といへるものに題して

たらちねの八十の賀に遍昭がよめるしろがねにもあらず

法榮

野渡無人舟自横

留別

眺望

T0 995 T0 994 T0 993 T0 992 T0 991 T0 990 T0 989 T0 988 T0 987 T0 986 T0 985 T0 984 T0 983 T0 982 T0 981 T0 980

雨こよいこころの月をうつし見る

土芝

雨鶯の呼しも雪となりに鳥

土芝

雲沈みうめ浮く見えて雨の暮

土芝

梅を分雨しのぐ袖寒からず

雨中釋林にあそぶ三句

霧ににる梅見る人や結跏趺坐

西福寺にて

雲沈みうめ浮と見えて雨の昏

土芝

雨中釋林

何となく都にちかし田うへぶり

土芝

夏雲の別むとしてはうち曇る

土芝

留別のころを

花ふめば三寸ばかり窪たまり

土芝

花十日闇にかからで散に鳥

土芝

我からと思ふ夜もある時雨哉

土芝

時々庵の別をなげきて

我庵にわがまだしらぬ草もゆる

土芝

不知為不知

閑呼鳥けふをしのぶの艸になく

土芝

橋に糞のこしけりほととぎす

土芝

橋に糞残しけりほととぎす

土芝

暁の月明に春くれぬ

土芝

暁の月明に春昏ぬ

土芝

月ありとおもふばかりぞ夕かすみ

土芝

巖島遙拝

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|---------------|-------------|--------------|---------------|--------------|-------------|-----------------|----------------|-----------------|----------------|----------------|------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| T1 011 | T1 010 | T1 009 | T1 008 | T1 007 | T1 006 | T1 005 | T1 004 | T1 003 | T1 002 | T1 001 | T1 000 | T0 999 | T0 998 | T0 997 | T0 996 |
| 春の日や土の底よりけぶり立 | 宿ふれば塵の中より初からす | 秋風や山夕やけで吹起る | 秋風や山夕やけで吹おこる | 秋のくれ石を放てうたひけり | 秋かぜや山夕やけで吹起る | 時鳥来鳴松あり鳥梅も有 | 時雨にもをかされやすきこころ哉 | 山松にとどまるものか花こころ | 篋ちまきともすればまた旅こころ | 此しぐれ降もまさ木のかつら哉 | 行は雲かゆかぬははなか遠の山 | 勾玉や竹玉涼し幾千年 | 月のさそふはなかくすりか雲に飛 | 月のさそふはなかくすりか雲に飛 | 月のさそふはなかくすりか雲に飛 |
| 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 上芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 |

瑤明のぬし耳順の賀に春月映花といふ題にて
瑤明のぬし耳順の賀に春月映花といふこころを
瑤明のぬし耳順の賀に春月映花といふこころを
数の玉を得し子泉の主のもとめに応じて

芭蕉忌

よし野はつ瀬の花にうかれ都の友に難波津の別をしみも
いはずさつきははじめわが庵に帰りて

菅公の聖霊を予が境内に官遷し奉り歡喜の涙袂につつま
て

醉石亭にて

雨後

T1 012

初明に灯はふつと吹けしぬ

土芝

閑屋

T1 013

宵闇に光さすなる柳哉

土芝

T1 014

人近く馴るともなくて鯛うかぶ

土芝

味かた

T1 015

水かくれの艸あらはれて初もみぢ

土芝

T1 016

世々かほるそのはなの種花のたね

土芝

此門のもつ翁もあまりいとせ《そぢ》の忌とて今は七世の後の主ねもごろにいとなまるるをかつ仰ぎかつふして

T1 017

世々かほるその花の種はなのたね

土芝

此門のもつ翁もあまりいとせの忌とて今は七世の後の主じねもごろにいとなまるるをかつ仰ぎかつふして

T1 018

世々かほるその花の種はなのたね

土芝

此門のもつ翁もあまりいとせの忌とて今は七世の後の主じねもごろにいとなまるるをかつ仰ぎかつふして

T1 019

世々にかほるそのはなの種花のたね

土芝

此門のもつ翁もあまりいとせの忌とて今は七世の後の主ねもごろにいとなまるるをかつ仰ぎかつふして

T1 020

世々にかほるそのはなの種はなのたね

土芝

此門のもつ翁もあまりいとせの忌とて今は七世の後のあるじねもごろにいとなまるるをかつ仰ぎかつふして

T1 021

折捨てて凋も花の最中哉

土芝

T1 022

千よのいろは清く和らぐそらにこそ

土芝

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|----------------|--------------|-------------|--------------|-------------|----------------|-----------------|-----------------|--------------|---------------|---------------|----------------|---------------|-------------|----------------|---------------|--------------|
| T1 039 | T1 038 | T1 037 | T1 036 | T1 035 | T1 034 | T1 033 | T1 032 | T1 031 | T1 030 | T1 029 | T1 028 | T1 027 | T1 026 | T1 025 | T1 024 | T1 023 | |
| 摘に出て最一雨まつ五加木哉 | 摘に出て最一雨まつ五加木かな | 竹の子は都のたつみ乾かな | 竹の雨筈を撲ひびきかな | 竹の雨筈を撲つひびきかな | 竹の雨筈をうつひびき哉 | 竹の雨たけの子をうつひびき哉 | 竹の雨たけの子をうつひびきかな | 地に落てざくろみだるるあらし哉 | 藻葉そよぐ潮に臨む胡蝶哉 | 藻葉そよぐ潮にのぞむ胡蝶哉 | 藻葉そよぐ潮にのぞむ胡蝶哉 | 藻葉そよぐ潮にのぞむ胡蝶かな | 草の戸のゆふ暮あかき寒さ哉 | 秋風や山夕やけで吹起る | 早苗採その手の皺をなげきつつ | 草の戸のゆふ暮あかき寒かな | 選層にまた霜の置菜の葉哉 |
| 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | |
| | | | | | | 雨日探題 | 雨中荷月亭探題 | | 江行 | | | 江行 | 冬枯のころを | | | | |

T1 040 冬すずし更行法の灯のひかり

土芝

桂谷山にこもりていむこと授りはべりける時

T1 041 日最中を山里人の納涼哉

土芝

T1 042 梅の月ふたつにわかち見るべからず

土芝

T1 043 梅を分雨しのぐ袖寒からず

土芝

T1 044 風さはぐ木々の中より初さくら

土芝

T1 045 風さはぐ木々の中より初さくら

土芝

T1 046 風ふけばにほふもおかしくさのもち

土芝

T1 047 風ふけば顔をそぶけてかの子哉

土芝

草餅

T1 048 風ふけば顔をそぶけて鹿の子哉

土芝

T1 049 風折のいつひつきてもものはな

土芝

T1 050 蓬菜もかくやうかめる緑樹影

土芝

水樹多佳趣といえる和歌題に寄て早川君の七十を寿し奉る

T1 051 霧かかる梅見る人や結跏趺坐

土芝

西福寺にて

T1 052 明の千どり三つの小島に別れ鳴

土芝

予州へわたる舟中吟

T1 053 柳をりてひつぱりあひぬ里わらは

土芝

T1 054 夕さくら夜をもおもひは捨ねども

土芝

T1 055 立からの花に鳴よるいとどかな

土芝

T1 056 立からの花に鳴よるいとど哉

土芝

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|----------------|-------------|---------------|-----------------|-----------------|-----------|-------------|----------------|---------------|---------------|-----------------|---------------|-----------|--------------|-------------|----------------|
| T1 065 | T1 064 | T1 063 | T1 062 | T2 147 | T2 145 | T2 144 | T2 143 | T2 137 | T2 136 | T2 133 | T2 130 | T1 061 | T1 060 | T1 059 | T1 058 | T1 057 |
| 名月や人なき島に人の声 | 未だ伸る幹の構えやうめ家内喜 | 新宅の松をはしらや梅柳 | 梅が香を袖にうけばや節悦ひ | 千代ふけしこがねはなさく宿の春 | むつの花過てこそはつはなさくら | 筍の五尺伸鳧霧の中 | 竹の雨筍を撲ひびきかな | むつのはな過てこそ初花さくら | 蜂ぬれてはひわたる也石の上 | 左せしな玉のうらはの春の風 | もみぢ焚く庵のそとにも散みだる | 簀かさも桃をとてのよそひ也 | 箏の五尺伸鳧霧の中 | 老せしな玉のうらは春の風 | 露草や山の上まで咲登り | 立からの華に鳴寄るいとどかな |
| 斗仙 | 兎石 | 登世 | とせ | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 | 土芝 |

賀

雨中清月亭探題

上巳の日雨けぶりければ

賀

児玉氏耳順の賀に木原何がしの需に應じて

雨日清月亭探題

児玉氏耳順の賀に木原何がしの需に應じて

松径の主耳順の賀庭開かれける日、後園に咲いづる黄金

梅といえるはなをめでて

柳瀬御主人の古稀と同御令室の還暦の寿賀を併祝ひて

T1 077 T1 076 T1 075 T1 074 T1 073 T1 072 T1 071 T1 070 T1 069 T1 068 T1 067 T2 161 T2 160 T3 092 T2 123 T0 108 T1 066 T2 120

名月も価のやすしもどり馬

斗麦

雪の降夜はよながらに春の月

吐鳳

帯たけは男にまけて夕すずみ

女外海

濡亀はゆふべの露がはつしぐれ

兔六

芦も音なき夜まことのしぐれかな

奈屋

白雨の程よくやんで踊かな

南□

おかしい□器量異也継ぎ□

南□

ふた本の千代のはじめや今歳竹

南峨

人とへば門迄菊の香の走る

南谷

福寿草短かきは其悴哉

南水

西え来れば東ゆかしきほたるかな

南蘇

鶯の啼^な処くらき四月かな

南楠

降つづけ晴ればはなのとんと咲く

南浜

はればれと藪うぐるすの初音かな

南明

葉柳の下にからびし鱗かな

南明

此はるは夢にもしたし花に鳥

南菜

今植た田水つめたし松の陰

南菜

見てみせて嬉しかりけりきくの花

年風

千坡の閑居を訪う

賀

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|--------------|---------------|---------------|-----------------|--------------------|----------------|-------------|--------------|---------------|-----------------|---------------|---------------|----------------|---------------|----------------------|
| T1 089 | T2 158 | T2 157 | T1 088 | T1 087 | T2 148 | T1 086 | T1 085 | T1 084 | T1 083 | T1 082 | T1 081 | T1 080 | T1 079 | T3 129 | T1 078 |
| 蝕のあとひるまぬ月の光かな | 雪どけの清水汲たる柳かけ | もくれ 山の梅しろし | 諫鼓啼て淋しみ増すや此回向 | もの提て日半路もどるやよひかな | も 見やほ とぬきき小懐 | 風すぢにある水尾杭や鮎のたつ | 寿をたまちし松の一本哉 | 翁忌やはれきる空に忘れ雨 | ずんぶりと日も落込や花の雪 | 葉を分てゆつくりひらく牡丹かな | かほりてし茗荷の花や草の種 | からみてや春待ふりの松の蔦 | 花くれて葉は忘れたる紫苑かな | 細 笑面麗かんつばき | 水の音や谷の軒端の秋の雨 |
| 八十翁 | 〔梅室〕 | 〔梅室〕 | 梅扨 | 梅左 | 梅左 | 梅左 | 梅香 | 梅戸 扨 | 梅溪 | 梅曦 | 梅季 | 梅岳 | 梅佃 | 七十七 寒椿 | 法橋 能円 高野山下三谷にて |
| | | | | | | | 還曆の賀を祝して | | | 燿髮敷 | | 祝 | | | |

T1
090

むら雲を見せては待す子規

梅室
八十二

T1
091

親に似て月につつたつ鹿子かな

梅室
八十四

T1
092

おしあふて横もゆれるしげりかな

梅室

T1
093

をれかねてあはれのさめる木槿かな

梅室

T1
094

一羽づつ宙にきえけり帰る雁

梅室

T1
095

海苔の香や障子にうつる僧ふたり

梅室

T1
096

広椽にかけうつしけりほととぎす

梅室

T1
097

今日見れば掃除してある野梅かな

梅室

T1
098

秋の来て竹はわが世と戦きける

梅室

T1
099

灯台のもとを照らすや後の月

梅室

T1
100

鼻にまで墨をつけけり冬籠

梅室

T1
101

蓮の香や遠しちかしと敷くむしろ

梅室

T2
159

手をうてばむれたつ梅のにほひかな

梅室

T1
104

最一声遠音にもがな時鳥

鶯声斎

咲けば散る花と思へど名残哉

梅寿
拜

春水翁を名残りて

| | | | |
|--------|------------------|-----|--------------|
| T1 105 | 春の水後と濁さじと流れけり | 鶯声齋 | 春水翁追悼 |
| T1 102 | 春の水流れ終るや法の海 | 梅寿 | |
| T1 106 | 寺ありと木魚に知るや霧の海 | 梅如 | |
| T1 103 | 送り火や一里うごく裸馬 | 梅心 | |
| T1 107 | ひとつだけうつる小池やふたつ星 | 楳臣 | |
| T1 108 | くれ近しあし曳の山をとし木こり | 霖清 | |
| T1 109 | 磯涼し汲は爰らぞ備后酒 | 霖清 | 土芝令逸の花室にまかりて |
| T1 110 | 菜の花に朧の残る夜明かな | 霖清 | |
| T1 111 | 澄々て少く思ふや秋の月 | 梅石 | |
| T1 112 | 明ぼのの月より高しきりの花 | 梅石 | |
| T1 113 | 焚うち匂ひのかはる落葉哉 | 梅窓 | |
| T1 114 | 剪迷ふうちに日のさすはちすかな | 梅窓 | |
| T1 115 | 見る度になかよき鴛鴦のみさほかな | 梅窓 | |
| T1 116 | 無太良に似たる姿や初時雨 | 梅太 | |
| T2 163 | 棕櫚藪の中に椿の盛哉 | 梅太 | |
| T1 117 | 法問の上を行也時鳥 | 梅太 | |
| T1 118 | 浦ちかき里や真砂に落つばき | 梅通 | |
| | 吸がらのすぐにもきえず露の原 | 梅通 | |

氏のみなみと言ふ文字を句の頭におきて祝しはべる

T1 131 冬の賀にはるまでたして梅椿

T1 130 冴し月も入りてはかなし松の窓

T2 164 閑室の風雅うらやむ結月哉

T1 129 明てまた夜を引谷の紅葉かな

T1 128 掃うちの座敷またるる寒さかな

T1 127 千代も越えん齡めでたし松の花

T1 126 染る秋も白ふんどしの角力哉

T1 125 仏名の唱へ遙し松の声

T1 124 そよそよと東風の吹なり麦の上

T1 123 めらめらと貝がら踏や松の陰

T1 122 いつとても逃つらするやみそさざゐ

T1 121 郭公山の帯雲動き鳧

T2 149 声もせでけさはみだれぬ庭の萩

T1 120 手を組て霞む場もあり筏さし

T1 119 汐はまにちるは高根の木のはかな

梅通 梅通 梅通 梅童 梅夫 梅仏 梅圃 梅北 梅明 梅里 梅裡 梅裡 梅隣

帶香舎 梅呂 馬尹

須磨にて

五十年の忌に

祝

庄木や□□とやらんの大木にして凡そ丈余の丸さなりけり。□鳳盆入遊びし時の□ならんか。そはだ短き□にけづりて聊の□迄添□り侍る

追善

悟一ぬしの老母におくる

T1 144 晴てさへ五月の夜なり月の暈
 T1 143 いろかえぬ音づれうれし松の風
 T2 152 此世をばつる直ざりの旅路哉
 T1 142 下駄はいて行処ある枯のかな
 T1 141 松に藤ねぶたきかねの聞へけり
 T1 140 世に関をとられて老の鶴瘦哉
 T1 139 芭蕉忌やしろきは翁霜の塚
 T1 138 朔日の雨うれしかれ燕子花
 T2 162 □のなき蓮の竹有秋の水
 T2 154 甘酒のうれやむ頃や梅の花
 T1 137 江のゆふ日鶯啼て居にけり
 T1 136 雪だるまよごれてからが哀なり
 T1 135 若がへるみどりはつきず松の花
 T1 134 老木にも笑味を含し睦月かな
 T1 133 此春や老の名のつく宿の松
 T1 132 長閑さや山そのままにうつる海

馬權
 白鳥
 白羽
 白鷗
 白其
 白二
 麦士
 白俗
 麦太
 白頭
 二世 白頭
 白年
 白峰
 七十八翁
 巴山
 巴山
 巴山

和木雅君の父、久しく病のところに世をおくられしけるは
 むなしくこの代の道をはこばせらるる心をはべる
 山中の君、予が草庵をとひ給ふことのうれしくて

| | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------------|----------------|-------------------|--------------|---------------|---------------|----------------|----------------|---------------|-----------------|------------------|--------------|-----------------|---------------|---------------|
| T1 149 | T1 148 | T2 156 | T1 318 | T1 317 | T1 316 | T1 315 | T1 147 | T1 314 | T1 313 | T1 307 | T3 071 | T2 153 | T1 146 | T1 145 |
| つれづれやひとつづつ蚊の訪ひに来る | このけしき画に眺へて月見かな | ほととぎす夜さりてけふは□つならず | 草山に陽炎ほこる四月かな | 若竹の峰にこころを持せけり | 若菜野に残れとおもふ年の雪 | ほととぎす横をりふせる山越て | おくやまや月の出である夜の雪 | 浦の戸や彼岸の旭さしのぼる | ほととぎすみるより啼て木に隠る | おちおちてただよふあゆのしほ路哉 | 穂のぬけた草のなり秋の月 | 見比□すむかし見に鳧はつしぐれ | 小山田や昼の鹿追ふ雨あがり | 約束のほふきもて来ぬ今朝秋 |
| 波同 | 波同 | 八千房 | 八千房 | 八千房 | 八千房 | 八千房 | 八千房 | 七十四叟 | 八千房 | 七十二叟 | 八雲 | 巴水 | 巴水 | 巴洲 |

□の□□けるに申書る
 夜わの寢覚に初音のおとづれ侍る。はからずこのかち□

さる画師と対潮楼にあそぶ

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|-------------|---------------|----------------|---------------|----------------|---------------|--------------|---------------|--------------|---------------|--------------|---------------|----------------|----------------|---------------|---------------|------------|
| T1 162 | T2 150 | T2 151 | T2 184 | T3 061 | T1 161 | T1 160 | T1 159 | T1 158 | T1 157 | T1 156 | T1 155 | T1 154 | T2 155 | T1 153 | T1 152 | T1 151 | T1 150 |
| 雪の夜の心すさびや灰せせり | 元日や親子の中も窮み哉 | 見おさめと老の語るや花の前 | □ながらしたふ犬ぶし付て来る | 神無月もみぢもしらぬ常は哉 | 降行やほさりほさりとくれの雪 | 怒濤かむ日は稀とかや小六月 | 鉾杉に神代もかくやはつ鳥 | 鳥友の来ては居なぢむ若葉哉 | 住人の日頃も見たし梅の花 | 扱ふを見てさへ暑し麦のから | 雌に顔を見らるるほろろ哉 | まつがえの序かわれに秋の風 | おいおい千株になりぬ梅ばやし | 咲までは重げに見えて百合の花 | 万歳の袖あまりけり松のひま | 輝てのきの夜あけに不二の山 | 雨水に漣たてて初月夜 |
| 万和 | 万里 | 万里 | 万菜 | 万代 | 半窓 | 半仙 | 万丈 | 万丈 | 万古 | 半湖 | 万愚 | 万外 | 伴鷗 | 馬老 | はま藻 | 波同 | 波同 |

緑苔君の三ノ賀を祝して

歳日

T1 163 簑笠にへたへたとつく桜かな

T1 164 万和 轡角

T1 165 さらへ耳千里も聞ゆ砧かな 轡角

藤原氏、こたびきぬたといふうたいをひらかれけるを祝して

T1 166 掃除火にあたつて行やはち叩 眉年

T1 167 夏の月松にふかれに出たりけり 百賀

T1 168 さくら見やかかる短かき日も有に 百丈

花見よと招かれて

T2 177 ことのなき日はよけ撫る火桶かな 百成

T1 169 踏ば萩ふめば萩也夜の庭 百仙

T1 170 有が中にも一ツ屋へ燕哉 百朶

T1 171 はるの夜や灯にそむけたる人の顔 百年

T2 165 それぞれにやなぎあづかれ晦の夜 白夜

T1 173 さびしそな我見かけてや羯鼓鳥 瓢齋

T1 174 友なきはおののしあわせほととぎす 瓢水

T1 175 夕さくら筏仕舞ふて陸を去ぬ 漂水

T1 176 蓮咲や小倉の茶屋の人ばかり 武一

T1 177 青桐の夜るは邪摩なり夏の月 風阿房

T1 178 八十翁

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|--------------|---------------|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|--------------|-------------|-------------|---------------|--------------|-------------|-------------|-----------------|----|
| T1 193 | T1 192 | T1 191 | T1 190 | T1 189 | T1 188 | T1 187 | T1 186 | T1 185 | T1 184 | T1 183 | T1 182 | T2 166 | T1 181 | T1 180 | T1 179 | |
| 捨はてた身をもたせ置火燧哉 | ※ 軒に宿かる草むしの風 | 七草や一つ摘むでは人に見せ | 山松や影を扇に置いて見む | 白雲を追ふてまわるや初嵐 | むしの声夥しくも静なり | 高砂や波の花さく松涼し | 月涼し霜ふむ様な磯伝ひ | 谷いくつ咲埋みたる桜かな | 春雨や更て涙の種おろし | 十かへりの花の籠や水車 | 断木鳥の柱へ来たり今朝の雪 | つと入や又ふ喧嘩を貰て□ | 眠藏に括り枕と湯婆かな | 八十島や浪も万代風ふ春 | とし男つまづくものをほめにけり | |
| 風律 | 風律 | 風律 | 風律 | 風竹 | 風臺 | 楓城 | 楓城 | 風寿坊 | 風紫 | 風紫 | 風翅 | 風香 | 風香 | 風香 | 風外 | 楓陰 |

井すみ婦女子の八十年の賀を祝しまゐらせて

題

端書略す

端書略す

百とせと安々経給ひける高砂の松城翁が高齡を祝し侍りて

吸江山にて

T1 208 T1 207 T1 206 T1 205 T1 204 T1 203 T1 202 T1 201 T1 200 T1 199 T1 198 T1 197 T1 196 T1 195 T1 194

庭樹へも煙の余る蚊遣り哉
うき魚の周章てしづむ時雨哉
活けて遊ぶ榮耀に撰らん花菖蒲
其跡は草の戦きや雉子の声
浅からぬ心や雪の道になを
いく秋を鶴に契るや千代見草
籠のむし捨て聞けりきりぎりす
奉る御馳走はなし鹿の声
鶯やそふ啼たとて倦でなし
道々の雉子に旅めく日和哉
初午や蠢き出る紙蚕
竹植て月見る僧のひとりかな
星合や君在ぬ夜の蔦かづら
身の隙やわか葉にうつる自決天
接木してたつ日をもどく心かな

風廬坊 風廬坊 風廬坊 風廬坊 上 六九庵 風話坊 舞鶴仙 不及坊 不狂 布国 不二 扶州 普雪 撫泉 撫泉

さふぶ湯にもはぐれて旅の宵寝哉と吟じすてし去年には
事かはりて此佳節には
山陰の主君、予が帰杖を待かねしとて玉章をたづさえ訪
ひ給ふを、謝し奉らんと
星翁君の古櫛を買して

| | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|--------------|---------------|--------------|----------------|-----------|----------------|----------------|----------------|---------------|---------------|----------------|-------------|-------------|---------------|
| T1 220 | T1 219 | T2 175 | T1 218 | T1 217 | T1 216 | T1 215 | T1 214 | T1 213 | T1 212 | T3 069 | T1 211 | T1 210 | T2 178 | T1 209 |
| 朝顔や編戸の内は普門品 | 迂りたる雪に際だつ竹の色 | 長閑さや猶いさましき笠の曠 | 陸の夜にまさる静や雪の海 | 名月やひと夜さかげを膝のうへ | 峰暮天花爾声有嵐山 | 濡釜にそよかけさすわか葉かな | 見らるるにつかれてちるや夕桜 | むかふ日の砂より暑し波のてり | はつ花や人の油断を咲はしり | 一笑ひ聞くにへりゆく夜永哉 | つぶりから足のさきまで夏の月 | 動ては吹雪と成や花の雲 | 明月や七で取ほど砂の□ | 紙鳶あぐる空や海にも遊び雲 |
| 文之 | 文佐 | 文江 | 文海 | 文海 | 文海 | 文海 | 文海 | 文海 | 文海 | 蚊一 | 武陵 | 芙蓉 并 | 不文 | 松亭 |
| | | | | | | | | | | | | | | 布珀 |

如月廿七日あらし山にて

麗吹亭の君は勤功によつて旧冬昇進せられ、猶また東武へ発脚し給ふにぞ、其首途を見おくりて折からの天□に
寄替祝興し奉りて

竹内氏何某初冠ありしを祝し侍る

T2
176

世に薰る其老の名や新茶時

暁月庵

T1
221

雑水も蕨も煮るや手取鍋

文酒

T1
222

植かえし土にふとるや松の花

文酒

T1
223

花咲ぬ木にも用あり釣ほし菜

文水

T1
224

鶴の声きく《菊》にも寒き額かな

文泉

百祥 可仲大雅君の写章の有かたさを

T1
225

芳き名はうづもれず苔の花

文莊

泉岳寺義士の墓前

T1
226

稲船やけふは娘の手に曳れ

文蘇坊

T1
227

野こころの動き出しけり齋の日

文甫

T1
228

寒くとも膾切る日ぞはつ給

文鳳

T1
229

寺廻門かりて飯喰ふ桜かな

米蔭

T1
230

秋の夜や世はさまざまの高笑

平角

T1
231

立嶋の中に宿ひくちまたかな

米牛

T1
232

行春や遊びまとひし雨幾日

萍江

T1
233

山茶花や咲と散とに小一月

碧海

T1
234

欠々てわづかに月のちどり哉

豊阿

T1
235

水草のうへにも露の夜明かな

蓬宇

T2
170

月に雲秋の□こそたのみなれ

抱義

□□主人、ことし初老の御厄を祝寿し奉りて

常磐園ぬしの新七を賀して

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------|----------------|-------------|--------------|----------------|-------------|-----------------|-------------|------------------|----------------|--------------|--------------|----------------|--------------|----------------|-----------------|----------------|
| T1 252 | T1 251 | T1 250 | T1 249 | T1 248 | T1 247 | T1 246 | T1 245 | T1 244 | T1 243 | T1 242 | T1 241 | T1 240 | T1 239 | T1 238 | T1 237 | T1 236 |
| うき草にそれとばかりをよべの雪 | おのが影さすとはしらで草の暁 | よき家や表は小春裏は菊 | 茶の花や翦鷹捜す鞭にちり | 見る毎に変わる風情や不二の山 | わたし呼嫗の声の寒かな | 冬と名のついてぬくらし十日ほど | 雲霧や今宵晴ての後の月 | 三千とせのはなの名によれ園のぬし | 寒からぬ旭のかがやきや冬の山 | 若竹のころはれなり明の露 | 柴籬も折焚家としぐれけり | ははき木もたのみ少なき枯野哉 | 友はぐれして啐寒し花の中 | 冬がれやかうも見おとる野の錦 | 欠るまでひと夜かすまぬ月もなし | くろむほど霞む朝日や家根の霜 |
| 木海 | 鳳朗 | 芳林 | 蓬里 | 蓬萊山人 | 鳳沖 | 芳草 | 邦清 | 芳水 | 鳳翔 | 蓬室 | 鳳山 | 鳳山 | 豊丘 | 抱義 | 抱儀 | 抱儀 |
| | | 鶯江詞兄の転宅を賀して | | | | | | 賀 | 祝 | | | | 追悼 | | | |

T2 174 T1 263 T1 262 T1 261 T2 173 T1 260 T2 172 T1 259 T1 258 T1 257 T1 256 T2 171 T1 255 T1 254 T1 264 T1 253

立菊や掃除済ての物かたり

留守の戸におろしおきけり炭俵

旅の身は枯野の露をいのち哉

いひたては寺へと老の雪見哉

雲の訳開るきてを安居かな

常なれば往来たえるぞ除夜の雪

世にすたるものこそなけれ茨の花

しらみゆくいそやちる梅ちるまつば

窓明て相驚きやしかと我

脱捨し山の霞や更衣

田の主も鴉もおかずしぐれけり

うの華はなやには濡ながら山の上

ひとくべにするや寝ごろのかやり草

牛の子の敷寝にしたる野ぎくかな

蟹が家のなさけにちどりきく夜かな

八十三才

保泉

浦商

木海

木海

北至

朴斎

北正

木長

木天

北年

北年

北明

北年

春樹軒

北隣

卜隣

浦春

八十三才

保泉

浦商

長途之喙

雲陽今市なる霞漢君の許に宿る。頓てあしたの別れにの

ぞんで

T1 265 旅せずば聞かじ夜明のほととぎす

凡二

T1 266 我ばかりみるとおもふやひるの月

凡鳥

T1 267 ときはなるまつふみこして梅の花

卷女

賀

T2 183 大原や枯残りたる父な子

ますみ

T1 270 田の鷺の落ついて居る暑哉

まつ女

T1 271 望むべき事も止みけり魂祭り

万年 拜

T1 272 庵の夜のたしかにあげてうめの花

漫々

T1 273 みじか夜や眼の覚たれば鳩の声

み木雄

T1 274 ふりし世にふえて不断の蛙哉

未成 拜祝

ふか川のふる池に生たる海苔のふと手に入りてありしを
けふの御会に祝すもふう流の徳になん

T1 275 掃まけて一葉の庭と成にけり

三千雄

T1 276 永き日や湊の長か大居なし

みち彦

T1 277 家ふたつ戸の口見えて秋の山

みち彦

T2 181 建仁寺の垣ねですずむ子規

みち彦

T1 278 鹿のなくあとや屋ねもる雨雫

三千平 萩

T1 279 檀特の華やさとの始かな

三千平 拜 追善

T1 280 ほととぎすがたは声にひかれ行

三平

T1 293 T1 292 T2 167 T0 346 T0 345 T1 291 T1 290 T1 289 T1 288 T1 287 T2 180 T1 286 T1 285 T1 284 T1 283 T1 282 T1 281

磯の香を野に吹あけて春の風

若かへる松の常磐に目たちけり

万代を色にも見せて草の餅

あきの夜のちよをひとよや神の松

乳母が里つはなになじむ娘かな

見て居ば艸にながる清水かな

□□□□□寒き声耕春風□

披き田に神代の形の案山子哉

大屋根や春のくさひく笠の人

鳥の踏までは若菜のはしひとつ

木がらしの中に尖て雁の声

夕顔の華のあたりはくれにけり

木に添ふて延あがりたる鬼見哉

ひろいほど雁も刈田に落穂かな

年内やひらくばかりの楳かほる

ひとつ家にあらねどさびし春の雨

産土の糶薫るやことし米

三津平

郊外雜興

三津平

耳順賀

三津平

古稀を奉祝て

未得

峰

岷山

露萩園

眠鹿

夢外

無角

無荒

無腸

三代日越路太夫

無味堂

網峰

セイホ

網峰

木居 梓

□氏若主人の御役中つか□候を賀して

黙居

七十八年

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|-------------------|------------------|---------------|-------------|-------------|----------------|----------------|-----------------|----------------|-----------------|--------------|----------------|----------------|----------------|-------------|-----------------|--------------|
| T1 309 | T1 308 | T1 306 | T1 305 | T1 304 | T1 303 | T1 302 | T1 301 | T2 182 | T1 300 | T1 299 | T1 298 | T1 297 | T1 296 | T0 441 | T1 295 | T1 294 | |
| | さびしさに出ぬけても見るもみぢかな | 気まかせに遠く出たればはつさくら | 我のみと朝がけすれど花に鳥 | 名月や我影坊の別れまで | 杖の鳩何処迄飛や春の風 | 隠れてもかくさぬ梅の匂ひかな | しらぬもの一人もなしふじの山 | 雪散やをりをりを春のあともどり | 鳴乞やあともつづかで□ひとつ | 浪よけのかきをちからやけしの花 | 隣から咲ひうつすや初子日 | 花のちるにや蓮はに入るこころ | けふとても松葉降なりきくの宿 | あけぼのの珍しければ桐ひと葉 | 摘添よ稀なる年の初若菜 | 夜すがらやおりるさまなき雁の声 | 早乙女の髪より清し洗ひ苗 |
| | 野鶴 | 野屋 | 茂良 | 物外 | 物外 | 物外 | 物外 | もする | 茂権 | 茂権 | 茂権 | 茂権 | 茂権 | 茂彦 | 黙池 | 黙池 | 黙二 |

祝

占稀の賀を祝し侍りて

T1 328 T1 327 T1 326 T1 325 T1 324 T1 323 T2 196 T1 322 T1 321 T1 320 T1 319 T1 312 T3 108 T1 311 T1 310

ひとつづつあらはれてくる蛍哉
眼をとちてこころ遊ばす花見かな
声□□人□□□枯野哉
道々を案じた雨や嘯にきく
畦くずす子にも用有田植かな
ひるからは台処にあり福寿草
蓋に異名をつけて冬籠
老をせく功力や菊の大般若
騎ながら馬に草飼ふ春匠かな
旅へ出し心のうごく小春かな
茶の花や葉には色々名のわれて
いつからも先を千とせや松の花
ここに鹿の寝跡のこさむ恋の杜
梅茂り桃実をむすぶ不老門
雪の日や海の方より昏て行

野鶴 野鶴 嵐山行
野鶴 野鶴
薬丘
野井
九上歳
野夫 書 軸
野楊
也籟
友鶴 寄菊祝
有光
当九十歳
友左坊
友左坊
遊糸 高砂の松にて
友之
友之
七十四歳
有時老人

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|---------------|-------------|-------------|--------------|----------------|---------------|-----------------|----------------|---------------|---------------|----------------|-------|----------------|---------------|--------------|
| T1 | T1 | T1 | T1 | T1 | T1 | T1 | T1 | T1 | T1 | T1 | T2 | T2 | T1 | T1 | T1 |
| 342 | 341 | 340 | 339 | 338 | 337 | 336 | 335 | 334 | 333 | 332 | 198 | 197 | 331 | 330 | 329 |
| 押水にもげて来にけり菱の花 | 日のさせば底に影あり水馬虫 | 筍のかた荷に軽し戻し傘 | 早蕨や古炭竈の崩れより | 長生は里より山ぞきくの花 | 重啼するや日の出のほととぎす | 枝踏ぬまでに分入る萩見かな | 山に火は夜ごとに見せてさつき雨 | 鴨川もかみはまたげて花すすき | 音ほどは水も急がず華あかり | 雨ひと日人を静めて華さかり | 木曾殿と背中あはせの寒さかな | (摺短冊) | 花に出てはなに人間のあふぎ哉 | 葉は花を忘れてはふや葛の蔓 | 見しままの外に味なし心太 |
| 遊峰 | 有斐 | 由池 | 遊仙 | 有節 | 有節 | 有節 | 有節 | 有節 | 有節 | 有節 | 五仲 | 有節 | 由誓 | 由誓 | 有時叟 |

拜書 無名庵にやどりて亡師芭蕉翁之像幽杉風有牽幕

T1 358 T1 357 T1 356 T2 192 T1 355 T1 354 T1 353 T1 352 T1 351 T1 350 T1 349 T1 348 T1 347 T1 346 T1 345 T1 344 T1 343

ゆふ月に後ろ向たるかかしかな

見送れば残る烟や春の海

新玉の春も重荷や老の上

茶の花やかうも咲野に人も居ず

日ぐらしや泊り幽に見る籠

覗く度立日に見える瓢かな

待宵の空に先だつなみだ哉

みきずんとふとる木ぶりや繁栄門

雪誘ふ空歟とろりとむら曇

草麦や地をすりすりに風起る

ききやふがただ大事なれ時鳥

稚子のひとり飯喰ふ秋の暮

さもあらば親の名かたれ花の兄

早乙女やまたれぬものは歌ばかり

折もよきけふの手向や水仙花

眼のさめる富士より高し雲の峰

軒に宿かる草むしの風

ひるがほも風の花也いらこ崎

遊夢

有友

悠々

悠々

悠々

悠々

有来

勇楽

有両

有隣

鷹園

米丸

来山

来山

頼石

雷同

風律

来和

送別

七十八のとしをむかへて

此秋は無二なる友を失ひ心のやるせなくらしけるに
祝還曆

追福

風律子に初て会して

T1 359
T2 190

網提て秋のすがたや舟の人
西に月は落て殊更寒かな

樂山
松風亭

羅月 □ 样

辛夷齋柱老君の、みとせあまり□前より御病床に□ろし

たまへりし□一たびみまくりたまふしと□□雲州へ□□

きて

T1 360

滝ほどに水ひたれなり梅の花

羅城

T1 361

家土産に幾千代菊の句哉

羅浮

上垣大人の宝盃に題して

T1 362

二里来れば二里ほど先よ雲のみね

羅風

T2 193

松山のすそやはらり女郎花

卯角

T2 193

松山のすそやはらり女郎花

卯角

T1 363

市人よ鯁くふ命うれ買む

嵐柱

T1 364

山ひめの老をよそおふ小春かな

嵐更

T1 365

振わけに上戸の顔も紅葉かな

蘭香

T1 366

あぶなげに搜るほそみや枯尾花

蘭香 样

T0 767

竹の露寝鳥を越て登けり

蘭更 門人帯川書

T1 367

おしまれてちりにし花の一周忌

蘭芝

追悼

T1 368

真すぐに杉の林の月見哉

嵐二

T1 369

水澄て十日余りや蟬の声

蘭丈

T1 384 T1 383 T1 382 T1 381 T1 380 T1 379 T1 374 T1 378 T1 377 T1 376 T1 375 T1 373 T1 372 T1 371 T1 370 T0 798

人とめて我よく寝たり夜半の秋
菓子呉る隣はなくと牡丹畑
水儂を刈や心のいたましき
はつ空や闇をつらぬく不尽の山
白萩のうつむきながら夜明哉
花一木葎の宿のおこり哉
名月やみるめも深きわたの底
あきらめて居ても聞たし鴛の声
ながきうへまた長かれとおもふ春
しづかさや露縫ひ留る糸桜
いつまでも香こそほすれ蘭の華
仮初の屠蘇がたねなり三日酔
水仙やとなり近き咲処
雪の夜や囃ひ乳に更て男泣
秋たつや柱に摺れる槌の音
花の世にせふとて降るか春の雨

鸞太 鸞太 鸞太 鸞太
藍堂 藍堂 藍堂 藍堂 藍堂 藍堂 藍堂 藍堂 藍堂 藍堂 藍堂 藍堂 藍堂 藍堂 藍堂 藍堂 藍堂
蘭圃 蘭圃 蘭圃 蘭圃 蘭圃 蘭圃 蘭圃 蘭圃 蘭圃 蘭圃 蘭圃 蘭圃 蘭圃 蘭圃 蘭圃 蘭圃 蘭圃
嵐峰 嵐峰 嵐峰 嵐峰 嵐峰 嵐峰 嵐峰 嵐峰 嵐峰 嵐峰 嵐峰 嵐峰 嵐峰 嵐峰 嵐峰 嵐峰 嵐峰
卯鳳 卯鳳 卯鳳 卯鳳 卯鳳 卯鳳 卯鳳 卯鳳 卯鳳 卯鳳 卯鳳 卯鳳 卯鳳 卯鳳 卯鳳 卯鳳 卯鳳
嵐里 嵐里 嵐里 嵐里 嵐里 嵐里 嵐里 嵐里 嵐里 嵐里 嵐里 嵐里 嵐里 嵐里 嵐里 嵐里 嵐里
蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵
蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵 蘭陵
不知火行脚 不知火行脚 不知火行脚 不知火行脚 不知火行脚 不知火行脚 不知火行脚 不知火行脚 不知火行脚 不知火行脚 不知火行脚 不知火行脚 不知火行脚 不知火行脚 不知火行脚 不知火行脚 不知火行脚
里采 里采 里采 里采 里采 里采 里采 里采 里采 里采 里采 里采 里采 里采 里采 里采 里采
李曉 李曉 李曉 李曉 李曉 李曉 李曉 李曉 李曉 李曉 李曉 李曉 李曉 李曉 李曉 李曉 李曉
追悼 追善 追善 追善 追善 追善 追善 追善 追善 追善 追善 追善 追善 追善 追善 追善 追善
選川居士追悼 年賀

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------------|------------------|-------------|---------------|---------------|------------|--------------|----------------|-----------------|----------------|---------------|-----------------|--------------|----------------|----------------|-----------|----------------|--------------|
| T1 400 | T1 397 | T1 399 | T1 398 | T1 396 | T1 395 | T1 394 | T1 393 | T1 392 | T1 391 | T1 390 | T1 389 | T1 388 | T1 387 | T1 386 | T3 146 | T1 432 | T1 385 |
| 置露のうら表なき光りかな | はつ蚊帳やひと夜ふた夜の旅ごころ | 水澄や友移りして蝶が飛 | すずしさや折々はねる池の魚 | 七夕やいつを九十九の歌読む | 啼て又雨かと欺す蛙哉 | ほし飯や油断に殖す俄か雨 | 雁鳴くや海に入るる村人知らず | 故郷おもふ人はあるまじけふの月 | 松たかきすをくふ鶴の羽をと哉 | 蝉啼や今朝降ふとおもひしに | はしは今朝わたり初やほととぎす | 石が子を生は啞らし苔の花 | いかにかく腕細しや野辺かすむ | これを見よ蘿の小窓に足れる春 | 筍の五尺伸鳧霧の中 | 御代の春粟をはさまる人はなし | 塚の雪人の道見るあしの跡 |
| 柳舎 拜 | 柳後園 | 竜嶽 | 竜岳 | 里有 | 俚豊 | 梨風 | 里風 | 里竹庵 | 里仙 | 里夕 | 李曠 | 李蹊 | 六轡 | 六轡 | 六藏 | 六藏 | 六合 |
| | | | | | | | | | 賀 | | | | | 草庵歳旦 | 雨日荷月亭探題 | 早春穀日 | |

T1 413 T1 412 T3 075 T1 411 T2 194 T2 185 T1 410 T1 409 T1 408 T1 407 T2 186 T1 406 T1 405 T1 404 T1 403 T1 402 T1 401

しかられて馬のまたぐや炭俵
名残る笠まねき添るや花薄

流芝
八十四齡

二日から月も影あり窓の梅

柳水

めざむるやかすみに北の海のをと

竜石

御鳥喰飯の幣もいたたく花のはる

柳雪

苦撫る雲をはかりにほととぎす

柳塘

御仏供我がたけに□つなぎけり

竜尾

菊の香は咲し半や気の葉

立圃

月影や宿にかはらぬいきみ玉

立圃

炭焼の軒にも松の一樹かな

柳浦

こたゆるや鐘の声より霜の声

流芳

み□かみき□一声うめの花

流芳

山にそふけぶりも秋のすがたかな

流芳

萩も老芒も老て野菊哉

慮

杜若咲地もあるか□□□□

糧山

葉桜やむざとふまれぬ苔の色

蓼村

葉桜やむざとふまれぬ苔の色

蓼村

はたとせにしてふるさとに帰る

伊岐・つしま、御鳥食飯の難有、飲んで

川さき品川をすぐるもうれしくて

翁忌

山寺にあそびて

山寺にあそびて

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|-----------|----------------|-----------------|------------------|--------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|----------------|----------------|--------------|--------------|
| T1 424 | T3 134 | T1 423 | T1 422 | T1 421 | T1 420 | T2 195 | T2 187 | T1 419 | T1 418 | T2 189 | T1 417 | T2 188 | T1 416 | T1 415 | T3 074 | T1 414 |
| 行秋のくせなればとて別れかな | 暫と思ど雁の別かな | けふの日を待て咲けりはぎの花 | いろも香もその寒梅のすこやかさ | このてりに紅のさめぬよ野なでしこ | 掃よせる音まで柿の落葉哉 | 峰つくる雲の根らしや沖の石 | 梅やなぎ柳は空にかくれけり | 着飾て来てくらがりの躍かな | 御土産にするぞ二見の秋の暮 | 着飾て来てくらがりの躍かな | 人こころ清める梅の薫りかな | 跡じさりもてば物見る牡丹かな | 遠山をしたしむ雪のあしたかな | 月に見てかぞへの秋の最中かな | 苗代や次□を作こ□わかせ | 咲のこる花も手がらよ藪椿 |
| 連蛾 | 樗蟬 | 靈虫 | 靈虫 | 犁春 | 犁春 | 犁春 | 犁春 | 砺山 | 砺山 | 砺山 | 林坡 | 林曹 | 臨湖 | 了珀 | 亮坡 | 両巴 |

けふははからずも御席へ召れし事に有がたきに
蘇□を祝して

二見にわかれ行秋ぞと祖翁の吟をおもひ出して浪打際に
ぬかづき奉りて

平産を寿て
帰国を祝て

T1 440 T1 439 T1 438 T1 437 T0 892 T1 436 T1 435 T1 434 T1 433 T1 431 T1 430 T1 429 T1 428 T1 427 T1 426 T1 425

枝系らぶ梅やことしの欲はじめ

三日月に出能き空也若楓

又あともちるかとのぞく一葉哉

霞む野もうへは晴てか揚雲雀

てふ鳥に明放したる折戸かな

鶯や村雨軒の朝茶時

三日月を一里見て行冬野哉

糸はつたやぶに届くや鹿の声

二つ三つ茶碗の施主や岩清水

桐の木その陰寒し秋の雨

春風に吹のこされし命かな

西山に日は照りながら時雨けり

老の身や花を樂世を通る

あらしより下行鳴の羽音かな

御式あと拝むも幸や日の初め

待まつて都の華を家土産に

蓮乗

蛭堂

連梅

連和房

路角

芦橋

鹿泉

廬岨

廬岨

路月

露光

廬山

七十四翁

露水

芦水

露翠

潮花園

芦船

窓前

追善

やがて本服するを祝して

中和園老母の本山参りの首途を祝し侍る

T2
168

待まつて都の華を家土産に

潮花園

中和園老母の本山参りの首途を祝し侍る

T1
442

若草の針や捨弧縫ふて出る

芦滴

路方

旧友センセン君、黄川の客となり給へる事のはかなさ、

名残惜しき。身の上と思へば凄し枯尾花と申されしもか

かるうらにや有けん

選川ぬしのたま棚にむかひて

T1
443

灯籠や油さしても見えぬ顔

路方

T1
444

見えぬ日の照るや枯野のひとつ家

呂鳳

T1
445

浅茅生にひとつ吹るる蛍かな

鷺眠

T1
446

わか水はものいひよきはじめかな

和堂

T1
447

行先やしる人ありてとしくるる

和堂

T1
448

寒菊やおもひもよらぬ藪の裏

和風

T1
449

十月や壁除て寝る夜着の袖

和楽

(作者未詳・難読作者)

T1
450

花の月あらしおさへてのぼり梟

八十二翁

□華

T3
058

花の月あらしおさへてのぼり梟

八十二翁

□華

T2 010 水鳥のけあぐる池や月くらき

小栗庵評

T2 021 鹿の音や明の嵐に遠ざかり

花洞仙撰

T2 022 松が枝に風のとどまる枯野哉

花洞仙撰

T2 060 おふた子の乳房に泣や大根引

草香園評

T2 111 世を捨てた氣に障る七夕

拾活 千尋点 むかしおば思ひ出して居るばかり

T2 179 苗代や桜いりこむ南のかど

物阿坊撰

T1 451 遊び場を撰ぶ氣はなしけふの月

T1 453 焚火退く眠くらみや鳴くちどり

T1 454 分別の爰にこそあれ花に風

T1 455 最合井に誰か汲上ん一葉かな

T3 001 おもかげのあらめて見るや稲光り

T3 002 朝顔や夜な夜なもろふ乳の遠さ

T3 003 うぐひすや鳴てしまへば霜寒し

T3 004 萩に来て居れば薪わる戸口かな

T3 005 白雨の程よくやむで踊かな

T3 006 麦蒔はしまひぬ時雨風の音

T3 007 めぐり来るや七とせぶりの梅雨曇

先師の慈愛をおもひ出せば、一期の愁涙爰に止る時なし

T3 025 T3 024 T3 023 T3 022 T3 021 T3 020 T3 019 T3 018 T3 017 T3 016 T3 015 T3 014 T3 013 T3 012 T3 011 T3 010 T3 009 T3 008

鳴立や月影ゆれる沢の水

杖を突松や一人若みどり

花の名を四方にちらすやあらし山

杖すててをさなきふりや小松引

雲やけのうは走りする花野哉

きらきらと光る砂や春の風

ほたるにぞありけりまつのくらき夜に

日ぐるるや花のあたりのたたき鉦

鳴たつや添水の落たあたりより

世の師走ながめて居るよ松の鶴

風も除てうはの空吹くさくら哉

川千鳥啼や山焼一夜前

聞毎にはつ音心ぞ蜀魂

花の宵しらべる鏡ふくろかな

いろはえて月も愛るや竹の秋

元朝やさむいかほせぬ尉とうは

小社に波うちかけし藤の花

仇に名の広ふ立野や女郎花

賀

花に頃、嵐山にてよめる

還曆を祝して

賀

草庵に春をむかへて

T3 042 T3 041 T3 040 T3 039 T3 038 T3 037 T3 036 T3 035 T3 034 T3 033 T3 032 T3 031 T3 030 T3 029 T3 028 T3 027 T3 026

夏の月蚊遣のけぶりやり過し
其落葉かきてこころの手向哉
おくやまや月の出である夜の雪
やや有て梅にかかりぬ峰の月
炎天を行はたか子と岡のまつ
朝がほや露より咲てつゆよりも
名月のつい手に拜む旭哉
花に出て見にかへられよ梅の旅
暑日や寝ても喘のやまぬ犬
鶴のよほひ契りあたしや千代の春
九十とや万歳までも宿の春
近う来た音引かへすしぐれ哉
夕月やすすき掴めば日のぬくみ
夕空や雪吹は歇てちるさくら
日も暖き咲く寒菊の手向かな
川狩や叱られそふな所まで
大海に輝き初て若月は

送別

賀

御 周忌追福

足痛の身にておして御日見なす事を恥じて

九光園の賢息は今度御船の任を蒙り、勇しき首途は幾木

英名の世に広りぬ事を祝す

T3 065 T3 062 T3 060 T3 057 T3 056 T3 055 T3 054 T3 053 T3 052 T3 051 T3 050 T3 049 T3 048 T3 047 T3 046 T3 045 T3 044 T3 043

こがらしや柵の尾に寄る天狗達
どれどもに捨る枝なきわか葉哉
咲はつの花におどろくさくらかな
滴せむ男鹿の角に降るしぐれ
日あたりを雲の通るや瓜の花
水にこそたよるべき世を火取むし
高砂のはると見る日や松二木
君がため八千とせさかへん玉椿
さくらからそろそろ扇ひらきけり
春近ふ見えて起けり雪の竹
最合井に誰か汲上ん一葉かな
焚火退く眼くらみや鳴くちどり
遊び場を撰ぶ気はないけふの月
分別の爰にこそあれ花に風
咲けしの一重に浅し蟹が垣
神もめでたまわんみきも葡萄哉
山高み□□□□つづに風やふく
活かれこ人に薰れよ園の梅

母上の古希の賀、御二方を祝し奉りて

楚桂大人の六十の賀を祝ふて

ある友の病給ふを問ふて

T3 107 T3 104 T3 100 T3 099 T3 098 T3 097 T3 096 T3 095 T3 091 T3 090 T3 087 T3 086 T3 084 T3 083 T3 080 T3 079 T3 078 T3 076

我々ときかれぬわらいや

初やよごむ雪あし

春風やひとしき

出すかほゆふべ哉

よしほ宵のほにや月の山

年々の朝新らしやけふの月

春に鳥きかぬ朝ありが花

雪高くやの山

植替て能きのふくや福寿艸

杖と初時雨

待宵のまだとおもひし

此先のいく十かへりぞ若みどり

若竹を過てふらばや松明し

三千とせのぬ桃の花

我行を踏て過るや雪の鷺

うら町や菊の芸ふく秋の風

斧をければ我影に飛いとどかな

日も暗き咲く寒菊の手向かな

一王庵？

不易流行を論じて

加祿給りしを祝して

寢水？

樗堂？

如女

葉

洗

月 拵

一周忌追福

T3 110 福いりの数もつもりて八十の春

T3 111 より添へば初てすずし竹柱

T3 112 月に日に□そへつ若緑

T3 113 影□□のななつに近き土筆哉

T3 114 朝顔や隣りから聞く花の数

T3 115 私□弱のなの□冬の友

T3 116 吉相の□る□邪摩なり夏の月

T3 117 竹原もなべて□□□□

T3 118 若竹の光りやつゆもみづみづし

T3 119 杖□を聞けば来たり南花

T3 121 今朝ちりし□□りに弛しほととぎす

T3 122 □への□□□□郭公

T3 123 裸子としばし添寝や蚊屋の月

T3 124 雁風呂のともしに廻□□□□

T3 125 遙拝□□□□老て枯野かな

T3 126 蓬萊や鶴舞の里の初霞

□もにも□するの時、栄家無常の定給ふ。是平生の厚德成べし

八十一 叟

□□

有材？

〔土方〕

七十七 翁

T3
127

照月やいづれの宿に五百年

よし□すとも宿□ならましとある公の御影をおもひ出て
そなへ奉る

T3
128

わくらは葉のはなのま□□□

T3
130

□□□□と行ぬ春の雪

方庵？

T3
131

野良露に宵□や更てけふの月

御□

T3
132

八十□□

T3
133

桶の輪のひとりはねけり秋の魚

T3
138

冬枯やふねの座替る砂の音

凶岡齋？

T3
140

霜登し夜のおもはくを鳴く雉か

□柚

T3
141

いざのふてつきて給はれ葛かつら

喜□

鳥居全御母公還曆と□□□

T3
143

明るる夜に□□はれる芙蓉哉

T3
147

撫てみる机の馴や秋のくれ

定々齋？ 扨

千吟君の身まかりたまふに

T3
148

君がため引や子の日の小松哉

緑□

雪中子日

T3
150

頭巾寒し□□□□

野梅？

T3
151

さびしさをしをりやさかの山桜

月□

T3
152

夜に入ればよるの詠を□□□□

T3
153

夏海の入日直りて社かな

滝氏

T3 154 □をの松に靈あり朝か□

T3 160 □君とて齡ひをひくやその小松

T3 161 □しら梅は舜子の知らぬ花見哉

T3 162 □によきによきと冬を隣るやひら三上

T3 163 □思ひきや庭も籬も夕時雨

T3 164 □□□□郭公

T3 165 □草鞋すててうめ散る家の艸履買

T3 166 □武島も眠る姿や沖の春

T3 167 □なつ袖に匂ひはさめよ笑ひ茸

□俊

□水

花連

千代尼？

(五文字崩れ・川柳・笠付など)

T4 001 師匠の恩なり恥を雪ひだ

T4 002 御祭り大きい六十余州へ響く

正宗の太刀、明珍の甲は鍛鎌十路盤とかわる時となり、上下ちりぢりなる中にも、朝暮月花に膝を組し九光園の主は旧知の方へ此条あるを見離し、誰とも頓て其跡をしとふものから別離の惜気にむねにささみていわずしがごとくの名残を惜む事とはなりぬ

T4 003 御用の桃燈旅人片寄

T4 004 旅人イみハツ橋問わるる

T4 005 頬ふくらかし仏供喰た猫庭へ蹴る

T4 006 涼しい松影越掛る座もやつたり

T4 007 霜がれせる戸棚からねづはしる

T4 008 二三度手に取り割茶碗継でみる

T4 009 瘦めが付て来梭の篠音よい

T4 010 平付で喰うおさん世に出た

T4 011 囀る鳥居つた風に灸が散る

T4 012 八重桜片肌ぬいだ袖重ひ

T4 013 糠で磨く顔聞る十能考える泉水

T4 014 啼出す轡舟人衆が湯に見える

T4 015 江戸ツ子はらいの式朱ほかりやう

T4 016 江戸子はらいの式朱ほかりやう

T4 017 くぐみ入来た三味こふ声もありやドギまぎす

T4 018 あきもつかず匂重荷おはれた

T4 019 剥身売とうとう四文押出す

T4 020 善せふかな守み名の禰宜でやかましい

T4 有丈さんほうじや小兒罪無ひ
 038
 T4 涼しい茶屋策を揃し机亭
 037
 T4 咲立牡丹ああゆふ暮のちげなるい
 036
 T4 着替る羽織連の金やせつき切る
 035
 T4 涼しい茶屋顧た唯天窓出す
 034
 T4 打気な妓啞喰た貌赤しとる
 033
 T4 花に紛れて暖めた金子蒔
 032
 T4 しはしはしみ込塩浜汐うつ
 031
 T4 染みだれきつていやな居統勤とる
 029
 T4 洒落な客妓唄ひつぶれた声有味い
 028
 T4 始ル浅知の蠟燭□金が後
 027
 T4 おもしろおかしい壬生祭にぎはふ
 026
 T4 サア大騒ぎしやサア大豆打たれる
 025
 T4 垢ぬけのした唄はなへ出とつて縞くたく
 024
 T4 坂じゆんじゆんに萩撫て行
 023
 T4 中々気丈夫言訳しつかり
 022
 T4 二タ親よろこぶ老人息子元服
 021
 T4 色気付ゆつてもらつた髪いろう

T4 039 鬼すむ山なり晦日かくらんだ

T4 040 啼て来る蛇精進おとす時計見る

T4 041 寝に飽て秋海棠のせはちはち

T4 042 晒手拭石壇二段ツツ上る

T4 043 おそろしゆなつて来夕立風連れ

T4 044 ようよう山見へ股根撫でらる

T4 045 喰飽肴ウトウトとしてハイ起る

T4 046 千代口千代口水一里こぬのに草鞋喰ふ

T4 047 派手娘つい手元まで烏来る

(俳人の和歌)

T5 003 春日野の飛火の野守いく人に

野べをゆづりて若葉接せし 夷臣

T5 008 書院えもいやしみはなく聞へけり

七草はやすまな板の音 臥亀 七草

T5 001 風わたる松の下庵世はなれて

ひとりすずしき夕暮の空 瓦全 樹陰納涼

T5 002 あらたまの年に珍らし日の簾の

ひかる山見ゆ外国の空

直温

新年山

T5 006

何ごととおもひさだむるかたもなく

秋のゆふべをながめかるなり

池雄

秋夕

T5 009

さみだれのかきくらし降袖の海の

ひけ間もなみにものを社おもへ

〔土芝〕

T5 004

かもめるかうらにはよきで老の浪

みづの小島のちどりきくくてふ

みづのふしまの舟中吹とて見にけるに鷗の鳥の早々とい

ふもこのあたりならむと思ふに

T5 005

かきくらし雪はふれどしかすかに

こころのかよふみちはまどはず

一句を過て識船濁直つといふ郷に対してわれはうたの真

ごころふつとしらねどわが心の真を述のみ

(その他)

T6 001

(絵のみ)

二承

T6 002

(短冊包紙)木曾名産

T6 003

(短冊包紙)御短冊墨流

越前府中鳥子屋治左衛門

VIII その他

(凡例)

一、「その他」における記載事項は、画題(あるいは、画題とするにふさわしいもの。資料中に記されているもののみ)・発句(資料中に記されている場合)・画師名(資料中に記されているもののみ)を採録した。

- U09 U08 U07 U06 U05 U04 U03 U02 U01
- 松本幸四郎、市川高麗蔵 口上「色よ香よなにはともあれ江戸の梅 錦升」〔国貞画〕
- 駒沢次郎左衛門 中村歌十郎 「菜の花に九羽の油匂ひけり」
- 猿廻し与治郎 坂東寿太郎「柳より三筋も足らず糸桜 巖獅」(歌川貞芳画)
- 沢村国太郎「ぬるるまで水にあたりの柳かな 多美国」(国広画)
- 助高屋高助《噂止院高賀俳翁信士》「辞世 寒菊や恵みつたなき法の庭」
- 紀ノ長谷雄 二代目市川蝦十郎「腰まげて御鼻願ふかざり海老 新升」(海老兼画)
- 名滝尽 王子稻荷之滝 市村羽左衛門「夕涼やあふぎしれかし滝のきわ 家橘」(七十八歳 豊国画)
- 因幡薬師益狂言大当 鎮西八郎 谷村楯八「遠近にその声ひびくきぬたかな 東籬」(応需 長秀画)
- 芸州宮島大芝居にて大当り大当り 赤根半七 坂東重太郎「御目みへの有がたきに猶御ひるきを希奉り

U25 U24 U23 U22 U21 U20 U19 U18 U17 U16 U15 U14 U13 U12 U11 U10

候て うれしくも朝日をがむや春の旅 岩子」(浪花 国広画)

安ノ平兵衛「花の香に風薫けり蜜柑畑 水心亭柳雨」(応需 豊国画)

婦久徳金の成木「寒梅やむろに匂ひのあまる程 有田屋定喜智」(広重画)

婦久徳金の成木「寒梅やむろに匂ひのあまる程 有田屋定喜智」(広重画)

五げん集風俗くらべ「鐘かけてしかも盛のさくらかな 其角」(溪斎英泉画)

名妓三十六佳撰 八ツはしの話(応需 豊国画)

古今名妓□ 万治高尾「寒風にもろくもくづる紅葉かな」

大日本六十余州之内 山城 小野小町「玉だれははつ旭ののぞく緋の袴 東岡」

「桑の葉のこずへに藤の盛かな 有松」(錦朝楼芳虎画)

見立五華句合之内「朝夕の人もめづらしけふの春 西翁 宗因」(一猛斎 芳虎画)

風流発句合(広貞)

東都名所 真乳山上より猿若町を見図「人の気も動くやうなり春□□ 立亭京楽」(広重画)

江戸名所 目黒不動「滝に耳洗ふてきかんほととぎす 篤志」(広重画)

「草臥て宿かるころやふじの華」(広重筆)

東海道名所 品川 御殿山(広重画)

「おし鳥の別れの見たり朝嵐」(広重筆)

古今張交尽「おととひはみえざりけるを春の山 太郎彦」(故郷薫 すみれ咲く花のゆかりに一夜ねむ
あれてむかしのやどはなけれど)「葉ごしらへするうちさきぬかきつばた 唯草」

U43 U42 U41 U40 U39 U38 U37 U36 U35 U34 U33 U32 U31 U30 U29 U28 U27 U26

古今書画手鑑「染かねて我とひきさく芭蕉かな 蓼太」

「ながれこむ背戸山風や花ながら 溶々」

「泥亀に有明すむや花芙蓉」

「三番叟栗鼠のふむなり葡萄だな」(歌麿)

名句合「稲妻やきのふは東けふは西」(芳虎画)

五月 ゆふだち(一鵬斎芳藤画)

新古書画合「ほととぎすすこし寝ようか起ようか 日人」

江戸名所 高輪卅六夜「稲妻によつてからしてまはる舟」

「毛のはへた尻を和尚は餅につき」(国芳画)

「久松のおやじ油をとり行」(広重戯筆)

「薬種やのすす取人は三番そふ」(国綱画)

「仁田には穴まで見せる咲夜ひめ」(国宗画)

おそめ久松「しひの実もまだ初物とおそめいい」(芳員画)

お駒才三「いう人にもつてくれなとお駒いい」(芳員画)

東海道名所 小田原海浜魚網〔広重画〕

東海道名所 箱根湯治場、白糸ノ滝、堂ヶ島湯宿〔広重画〕

東海道名所 塔之沢湯場〔広重画〕

東海道名所 箱根高嶺、明樊山、駒ヶ嶽、冠ヶ嶽〔広重画〕

U46 U45 U44

東海道名所 箱根二子山〔広重画〕

東海道名所 富士沼の冬ノ景〔広重画〕

東海道名所 大磯鳴立沢、西行庵〔広重画〕

類題発句三体集 302・303
類題発句集 54・55・56・57・58・59
類題発句百川集 312・313
類題発句方円集 351
類題発句真葛集 285
類題真砂集 164
類題柳の露 638
累葉集 343

ろ

露川責 441

わ

輪かさり 355

苔葉光 346

和漢文操 426

わらかふし 172

- 本朝文鑑 425
 ま
 松落葉集 40・41
 まつのはれ 362
 まとあかり 304
 み
 みつあかり 332
 水の音 443
 道のしをり 77
 道のとり草 398
 みとせ栗 163
 三年振集 212
 美濃 564
 三万椿 66
 眠寤集 17
 眠寤集和語対類 18
 む
 無極篇 26
 め
 (名家発句)一掬集 282・283
 (名家)発句五千題 353
 名所方角集 60・61
 めくるなかれ 170・171
 も
 藻屑集 161
 望月孤月追善集 270
 桃の首途 427
 や
 矢上連抜句集 406
 八雲御抄 1
 柳多留〔呉陵軒可有編〕 620・621
 柳多留〔風松編、菅子補〕 624
 やまかつら〔玄蛙編〕 139・140
 やまかつら〔筵史編〕
 141・142・143・144
 山廻寿集 273
 ゆ
 ゆきあかり 356
 ゆきおれ集 215
 雪の戸集 246
 雪華集 257
 雪人集 199
 雪のわかれ 220
 雪仏集 300
 夢のあした 157
 よ
 四町集 207
 齡の華 198
 ら
 藍川集 221
 り
 立机集 260
 流憩堂評月次句合 592
 流行百家発句集 344
 (流行発句)花楓一調 278
 流行発句集 217
 両食集 211
 る
 類題折句集 625
 類題彩花集 314
 類題詞花発句集
 315・316・317・318・319・320
 類題花筏集 287
 類題発句小雨集 352

はつくさ集 232
八千集 132
花供養〔廬元坊編〕 27
花供養〔蘭更編〕 82・83
花供養〔蒼虬編〕 85
花供養〔九起編〕 86・87・88
花供養集〔芭蕉堂編〕 84
花供養集〔公成編〕 89
花せんふ 247
花のあまり 572
花の井集 376・377
花市会〔花屋庵編〕 134
花市会〔奇淵編〕 135
花市会〔花屋裏編〕 136・137・138
花の栄 236
花の下蔭 156
花の藝集抜句 263
華の手向 322
はなひ草 456
華ひより 297
花紅葉集 382
はまひさし 110
はるのをと 91
春の水 381
はわけの風 395
ひ
肥後清正公大奉納写 642
ひさこ苗 90
ひとつくり 259
一葉塚集 167
雲雀塚集 202
日和虹 364

枇杷園七部集 181・182
枇杷園類題発句集 180
ふ
富貴集 337
福井 571
藤の首途 428
ふたのこゑ 438
芙蓉文集 429
ふるさと草 251
文化一三年歳旦 558
文化十年歳旦 555
文久千三百題 372
文久六百題 370
ほ
方円俳諧集 410・411
防州 582
芳新集 290・291・292・293
傘扇会 70
(奉納)四季発句合 587
奉納拔萃 593
蓬萊集 361
北筑太宰府 561
反故供養 124
発願文註釈 424
発句五千題 353
発句集 396
発句新葉集 206
(発句)花の井集 376・377
発句万題集 238
発句名家集 222
発句類聚 114 ; 115・116
穂長集 366

- 俳諧手桃灯 512・513
 俳諧手爾於葉 3
 俳諧年月草 307
 俳諧七草 452
 俳諧の写 590
 俳諧のほ句 595
 (俳諧)法の近道 264
 俳諧之連哥二百韻 409
 俳諧春の田 453
 俳諧秘伝ちか道集 442
 俳諧百一集 39
 俳諧百家類題集 341
 俳諧二見貝 484・485・486
 俳諧夫木集 272
 (俳諧)文久千三百題 372
 俳諧発願文 423
 俳諧発句古今撰 183
 (俳諧発句)新五子稿 98・99
 (俳諧発句)新題葉集 226・227・228
 (俳諧発句)続大洋集 277
 俳諧発句題叢 168・169
 俳諧発句題葉集 94・95
 (俳諧発句)はつくさ集 232
 (俳諧)発句名家集 222
 俳諧曲尺 473
 俳かい漫画 261
 俳諧道乃使 448
 俳諧山分衣 507
 俳諧寄垣諸抄大成 458
 (俳諧)流行発句集 217
 俳家古今墨蹟 11
 梅室家集 390・391・392
 梅室附合集 405
 俳人肖像画句集 7
 俳人百家撰 10
 俳席両面鑑 13
 梅通俳文 439
 (俳風)たねふくへ 636
 俳風柳多留〔呉陵軒可有編〕
 620・621
 俳風柳多留〔文日編〕 622
 俳風柳多留〔文化九年序刊〕 623
 白山下〔玄武坊ほか〕 522・528・529
 白山下〔東武駒谷〕
 535・536・542・545
 白山下〔東武吉見連〕 532・534・541
 白山下〔武州千駄〕 540
 白山下〔下総久能連〕 531・539・550
 白山下〔下総佐倉弥勒〕
 533・537・538
 白山下〔下総白井〕 549
 白山下〔甲陽郡内小浪連〕 530
 白山下〔梧下庵〕 544
 白山下〔富士前連〕 546
 白山下〔鍛冶橋連〕 547
 白山下〔遊林舎文鳥ほか〕 548
 白山下〔江戸中期刊〕 552
 泊船集 21
 芭蕉翁附合集評注 404
 芭蕉翁俳諧集 399
 芭蕉句選 386
 芭蕉袖草紙 401・402・403
 移芭蕉辞 421
 はすの露 365

- 俳諧既望筭 67
 (俳諧)一陽 23
 俳諧一葉集 186・187
 俳諧一切経 37
 (俳諧)一茶発句集 397
 俳諧今七部集 230・231
 俳諧牛の角文字 645
 俳諧をだまき 459・460
 俳諧をだまき綱目大成
 461・462・463・464・465・466
 (俳諧)嘉永五百題(発句集)
 309・310・311
 (俳諧)笥の水 591
 (俳諧)花実発句集 208
 俳諧画譜集 14
 (俳諧)奇淵七部集 122・123
 (俳諧)季引席用集 509
 (俳諧)近世五百題(集) 339・340
 (俳諧)近世六百題 324
 俳諧草むすび 24
 俳諧臈 628
 (俳諧)慶応六百題 374・375
 俳諧恋のしをり 508
 俳諧古今句鑑 64・65
 俳諧古今抄 470・471・472
 俳諧古集之弁 447
 (俳諧)故人五百題 71・72・73・74
 俳諧故人続五百題 194・195
 (俳諧)今人五百題〔東溟輯、千輅校〕
 239・240
 (俳諧)今人五百題〔為山編〕
 242・243
 (俳諧)今人題林集 286
 俳諧歳時記 497・498・499・500
 俳諧歳時記花草 501・502
 俳諧早苗集 301
 俳諧寂葉 449・450・451
 俳諧四季部類大成
 479・480・481・482・483
 俳諧四国集 233
 俳諧七部集 44・45・46・47・48・
 49・50・51・52・53
 俳諧十家類題集 96・97
 俳諧十二律 218
 俳諧十万発句集 214
 (俳諧正風)題林発句集 325・326
 俳諧師走囊 36
 俳諧新曠野集 177
 俳諧新古今 295
 俳諧新五百題 160
 俳諧人名録6
 俳諧葦艸集 147
 俳諧千題集 190
 俳諧川柳 618
 俳諧袖かがみ 496
 (俳諧)題英発句集 335
 俳諧田毎の日(俳諧田ごとの日)
 103・104
 俳諧蓼の花 189
 (はいかい)玉のひかり 244
 俳諧重宝摺火打 457
 俳諧通俗誌 468・469
 俳諧つくし集 43
 俳諧附合小かゝみ 474

追善陽炎集 130・131

追善残花集 153

(追善)ちる花集 201

(追善)月の別 112

(追善)雪仏集 300

(追悼)南無仏 216

箏の伊達集 31

塚のおもかげ 151

月次混題句合 588

月の別 112

つきゆみ集(つき弓集)

279・280・281

附合双玉集 407

つたふかせ 155

苔の寿 580

露しくれ 250

て

貞瑠選諸家評高点句集 589

点取歌仙 594

点取帖〔水月点〕 596

点取帖〔橘庵点〕 597・598

点取帖〔浩々園点〕 599

点取帖〔長月庵点〕 600

点取帖〔大黒庵点〕 601

点取帖〔月夜庵点〕

602・603・604・605

点取帖〔残夢楼点〕 606

点取帖〔井眉庵点〕 607

点取帖〔些庵点〕 608

点取帖〔梅庵点〕 609・610

点取帖〔向晴庵点〕 611

点取帖〔点者未詳〕 612・613

天満宮正月月浪 274

と

桃家花月稿 584

桃家春帖 574

東西集〔雪簾編〕 347

東西集〔碩水編〕 348・349・350

桐序千句 413

東都〔安永六年刊〕 525

東都〔安永一〇年刊〕 543

十かえり 188

十かえりの花 133

常盤樹 145

篤老園白撰句帖初編誹文之部 434

年毎集(どしこと集) 223・224・225

としなみしふ 258

年浪春秋選 371

な

夏の首途 100

夏日五歌僊 38

浪花五百題(浪華五百題集) 333・334

何を種 342

南無仏 216

ね

寝覚月 380

合歡雨 166

ねむの家吟草 205

ねむのやものかたり 176

の

法の近道 264

は

俳諧あすならふ 475・476・477・478

(俳諧)安政五百題 369

- 神事行灯 634・635
 人日の賀筵 323
 (新成復古日夜重宝)俳席両面鑑 13
 新撰発句集 331
 新題葉集 226・227・228
 新花兎 336
 新編歌俳百人撰 9
 新編俳諧文集 435
 新虚栗集 63
 新藻屑集 173
 新類題発句集 80・81
 す
 (粹家必読)珍々叢書 644
 すかみの 298
 澗海苔集 306
 硯のいかた 28
 せ
 清哦集 329
 青棠芳余 213
 青陽帖〔文化九年刊〕 554
 青陽帖〔文化十一年刊〕 556
 青陽帖〔文政三年刊〕 559
 青陽帖〔文政八年刊〕 573
 青陽帖〔天保五年刊〕 575
 (節用)木の葉かご 510・511
 そ
 蒼虬翁俳諧集 414・415・416
 蒼虬発句集 394
 (増補改正)俳諧歳時記栗草 501・502
 (増補)四季部類大全
 514・515・516・517
 (増補掌中)蒼虬発句集 394
 続安達太良根 30
 続今人五百題 241
 続七部集 106・107・108・109
 続大洋集 277
 続俳家奇人談 4・5
 袖の風集 75
 その行脚 33
 其袋集 150
 た
 題英発句集 335
 対塔庵蒼虬句集 393
 田井邑大明神奉納句・植月椿木林大明
 神奉納句 640
 題林発句集 325・326
 (題分発句)掬集 383
 たけうま 419
 たたひくさ 113
 たたひとつ 255
 たねふくへ 636
 旅のひとつ 254
 たま川 345
 たまくしけ集 184
 玉のひかり 244
 手向草 271
 手向水 102
 ち
 茶の実 200
 散はな 92
 ちる花集 201
 珍々叢書 644
 つ
 追善 235

- 歳旦帖〔西肥多久〕 565
 歳旦帖〔西肥佐嘉〕 565
 歳旦帖〔南越福城内〕 565
 歳旦帖〔西濃沢田連〕 565
 歳旦帖留 565
 西肥〔佐嘉城東連〕 567
 西肥〔佐嘉連〕 568
 佐倉〔下総佐倉弥勒連〕 526
 佐倉〔下総佐倉婦人連〕 527
 桜のゆるし 68
 冴月集 78
 雑書 16
 雑誹楽卷翁評 641
 里の春 79
 五月雨集 185
 さむしろ 360
 さるみの 19
 山東日記 363
 し
 四時行〔箕山編〕 358
 四時行〔相応軒編〕 359
 自詠闇燭弁 454
 詞花集 152
 詞花類題発句集 321
 (四季詞寄いろは分)俳諧曲尺 473
 四季混雑集 412
 (四季詞林)こしあふき(腰扇)
 491・492・493・494・495
 四季の華 294
 四季部類(大成)
 479・480・481・482・483
 四季部類大全 514・515・516・517
 四季発句合 587
 (四季発句)詞花集 152
 四季発句控 265
 (四季発句)類題花筏集 287
 四季類題集 154
 四季類題真砂集 165
 時雨会〔仙風編〕 128
 時雨会〔閑斎編〕 210
 しつほく題 42
 紙魚日記 430
 下総 520
 十三興 62
 十丈園筆記 266
 十二日行 69
 周府 579
 朱白集 32
 春興亀廻尾山 576・577
 春帖集〔麻中編〕 560
 春帖集〔互融坊ほか〕 563
 春牒〔弘化四年刊〕 583
 春牒〔嘉永二年刊〕 585
 掌中新五百題 388
 掌中麦林舎乙由発句集 388
 蕉門通鑑 455
 蕉門俳諧類題集 262
 諸九尾句集 387
 除元 518
 諸国翁撰記 12
 諸州百富士 614
 士朗七部集 126・127
 士朗続七部集 174・175
 新五子稿 98・99

- 季引席用集 509
 紀陽 521
 教訓柳樽 637
 京蕎麦 248
 晚台七部集 196
 享和三年歳旦 553
 (季寄註解)改正月令博物筌
 503・504・505・506
 去来抄 440
 きりひとは 357
 近世五百題(集) 339・340
 近世俳諧十家類題集 296
 近世六百題 324
 (近来風体)俳諧夢の花 189
 金蘭集 121
 く
 句兄弟 20
 くさ摘 117・118・119・120
 草の蔓 146
 草結び 330
 雲けふり 192
 け
 慶応六百題 374・375
 径回花日記 125
 (桂花園半百忌)追善 235
 月下稿 284
 月華篇 29
 源意千句 2
 こ
 口状→露川責
 (合類)誹諧奇垣諸抄大成 458
 (古今俳諧)四季類題集 154
 (古今俳諧)四季類題真砂集 165
 古今俳諧明題集 34・35
 腰扇(こしあふき)
 491・492・493・494・495
 越のやま桜 373
 小柴垣 626・627
 故人五百題 71・72・73・74
 滑稽発句類題集 630・631・632・633
 梧亭句叢 389
 このとき集 299
 木の葉かご 510・511
 このはな集 328
 こほれうめ 367
 今人五百題〔東溟輯、千輅校〕
 239・240
 今人五百題〔為山編〕 242・243
 今人千題発句集 327
 今人題林集 286
 今人付合集 408
 今人発句集 234
 今人名家類題句集 308
 金毘羅社永代奉納 646
 さ
 綵燕神仙少□□ 159
 西国七部集→奇淵七部集
 歳旦〔下総連中〕 523
 歳旦〔東武四谷連中〕 524
 歳旦〔六合編〕 551
 歳旦集 578
 歳旦帖〔宝曆三年刊〕 519
 歳旦帖〔文政五年刊〕 566
 歳旦帖〔江戸後期刊〕 581

いなつか 197

いなはやま 178

今様類題集 253

伊予すだれ 305

いはひ草 203

う

萍日記 436

雨後行 437

鶉衣 433

卯辰巳午集 385

梅香炉 101

梅のあした 557

梅のしるへ 191

雲煙集 249

え

画口合瓢之蔓 643

越後〔中之島連〕 569

越後〔新潟二七庵連〕 570

越後関 562

(越陽)福井 571

燕都枝折 619

絵本御伽種 647

お

おひさらへ 256

青梅集 379

起起集 368

おくのほそ道 422

乙二七部集 219

男さうし 162

尾華うつし 93

をりそへ集 276

か

開晴 384

改正月令博物筥 503・504・505・506

槐窓俳諧集 417

海内千家集 204

改板をたまき 467

嘉永五百題(発句集) 309・310・311

かえるとし 193

かかみ草 149

柿表紙 22

笥の水 591

香語山集 237

かさしくさ 111

(笠附)小柴垣 626・627

笠の露集 269

花実集附録 209

華実年浪草 487・488・489・490

花実発句集 208

賀嶋毘沙門殿奉額 15

風のかをり 639

雅奏 158

筐の柳 338

かつしか五哥仙 420

かと遊び 354

歌俳百人撰 8

花楓一調 278

冠付虫目鏡 629

かれの会 179

き

奇淵七部集 122・123

きさらき集 229

如月田 25

下垣内文庫目録「書冊編」書名索引

凡 例

- 一、書名は、標目として掲げられているものだけでなく、*以下の注記事項中に記載されているものも適宜拾った。
- 一、配列は読みの五十音順とし、その所在を書名の頭に付した通し番号によって示した。
- 一、踊り字「ゝ」「々」は、それぞれ開いて表記した。
- 一、冠称等が存する場合は、その部分を()に括って掲出し、冠称からでも、またそれを除いた部分からでも検索できるように重出させた。
- 一、書名と異なる一般名称が存する場合は、適宜立項したうえで「→」(見ヨ項目)を立てた。
- 一、索引作成者による補記には〔 〕を付した。
- 一、本索引は畑中さやか(奈良女子大学大学院生)が作成した。

あ

- | | |
|--------------|-------------------------|
| 青簾 617 | 一陽 23 |
| 芦浪集 288 | (名家発句)一掬集 282・283 |
| 芦の芽立集 289 | (題分発句)一掬集 383 |
| あしまふね 418 | 一茶発句集 397 |
| あらいそ集 378 | 佚題絵俳書〔霞彩画、江戸後期刊〕 615 |
| 安政五百題 369 | 佚題絵俳書〔江戸後期刊〕 616 |
| 安政三年歳旦 586 | 佚題俳書〔江戸後期写〕 267 |
| い | 佚題俳書〔百茶編カ〕 268 |
| いほのいぬ 105 | 佚題俳書〔桃五編〕 275 |
| 鳳巾の晴 431・432 | 佚題俳書〔江戸中期刊〕 400 |
| 池のむかし 76 | 佚題俳論書〔享和元年写〕 444 |
| いさなとり 129 | 佚題俳論書〔山李坊序〕 445 |
| 出雲三五十員 245 | 佚題俳論書〔江戸後期写〕 446 |
| いたひさし 148 | 暇のはれ 252 |

尾道大学附属図書館

Shimoguchi
下垣内文庫目録

A Catalog of the Shimogouchi Collection of Japanese
Rare Books in Onomichi University Library

二〇一〇(平成二二)年三月二日 印刷
二〇一〇(平成二二)年三月二日 発行
(二〇〇九年度尾道大学学長裁量特別研究費による)

編集

下垣内文庫研究会 ©

発行

〔市立〕尾道大学

〒七二二一八五〇六

尾道市久山田町一六〇〇

Ⅲ〇八四八―三二一八三二一(代)

印刷・製本

(有)メディアアーツ

〒七二二一〇〇一四

尾道市新浜一―一―二二

Ⅲ〇八四八―三二一四二二四

調査・執筆・編集

下垣内文庫研究会

伊藤善隆(いとう よしたか)

湘北短期大学准教授

金子俊之(かねことしゆき)

早稲田大学非常勤講師

神作研一(かんさくけんいち)

金城学院大学教授

佐藤勝明(さとうかつあき)

和洋女子大学教授

藤沢毅(ふじさわたくし)

尾道大学教授

協力(索引作成)

畑中さやか(はたなかさやか)

奈良女子大学(院)

